

紀要

沖縄埋文研究 2



論考

- 下田原式土器の分類と編年試案 ······ 岸本 義彦 (1)
泉と小川
-先史沖縄島の居住地選択- ······ 安里 翠淳 (13)
ジュゴン骨に関する出土資料の集成(暫定) ······ 盛本 勲 (23)
首里グスク出土の武具資料の一考察 ······ 山本 正昭・上里 隆史 (43)

報告

- 本土系瓦質土器の産地についての補論
-北部九州の瓦質土器と比較して- ······ 濑戸 哲也 (65)
清朝錢について ······ 知念 隆博 (73)
南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査
-海洋採集遺物からみた海上交通- ······ 宮城 弘樹・片桐 千亞紀・新垣 力・比嘉 尚輝 (81)
東京大学総合研究博物館所蔵の鳥居龍藏関係遺物について
-出自不明の中国陶磁に関する若干の考察- ······ 片桐 千亞紀・新垣 力 (109)
八重山諸島波照間島採集の狹刃形石斧 ······ 安里 翠淳・本田 昭正 (115)
琉球諸島考古学文献散歩(2) ······ 安里 翠淳 (121)
糸満市字兼城在橋川腹門中塁内発見の礫石経 ······ 長嶺 均 (129)



2004年
沖縄県立埋蔵文化財センター



写真1 発掘された2号窯



写真2 県庁行政棟発掘調査現場近景



写真3 ④の刻印を有する埴（首里城跡出土）

湧田古窯跡群（わくたこようあとぐん）

湧田古窯跡群は、那覇市泉崎1・2丁目及び壺川の一部に展開した琉球における一大窯業跡である。これまでの調査で、当該古窯跡群は、瓦窯、施釉陶器窯、無釉焼結陶器窯が分化して所在していたことが判っている。

写真1は、泉崎1丁目に所在する沖縄県庁行政棟舎建設に伴い、他の窯業関連の遺構とともに検出された16C紀後半～17C前半頃に位置づけられる瓦窯である。窯の構造及び形態は、同時代の九州島や本州島などで一般的な地下式有段登窯（窯窓）とは異なり、半地下水式構造の單室の平窯で、天井部は常設しない鍛頭型である。さらに、焚き口と燃焼室は約1.4mの段差を有していることも大きな相違である。故・熊海堂南京大學教授の研究によると、同タイプの窯は中国南部には見られず、北京周辺にしか分布していないことから、明王朝から直接、工人などを派遣して作瓦に充たらせたであろう、と解する。

そして、当該瓦窯跡からは④の刻印を有した軒丸瓦が出土しているが、同様の刻印を有した埴が首里城跡でも出土している（写真3）。琉球王府は、瓦奉行所を設置して瓦の製作に充たらせていることが『球陽』などの文献資料から知られるが、湧田古窯跡が王府直轄の官窯の一つであったことを証左となる貴重な資料である。

(盛本 熊)



写真 1 遺跡遠景



写真 2 曾畠式土器

渡具知東原遺跡（とぐちあがりばるいせき）

渡具知東原遺跡は、中頭郡読谷村字渡具知の比謝川河口近くの低地（標高約3m）に立地する縄文時代前期の遺跡である。1975～1977年にかけて調査が行われ、層序は最も多いところで11枚が確認されている。遺構は検出されていないが、曾畠式土器・条痕文土器・室川下層式土器の包含層が確認され、その下層の砂礫層より爪形文土器（東原式土器・ヤブチ式土器）が検出された。東原式土器は当遺跡が標識遺跡となり設定された。また、曾畠式土器に伴って磨製石斧、チャート製品等、爪形文土器に伴って刃部磨製石斧、イノシシ骨製錐状製品等が出土している。

放射性炭素年代測定値は最下層の試料では 6670 ± 140 Y.B.P.の値が得られた。そのことから、調査前には3500～4000年前までしか遡ることができなかった沖縄の新石器時代が、さらに3000年以上遡ることになった。

沖縄県と九州の縄文時代の関係を明らかにするうえで貴重な資料となった曾畠式土器をはじめ、爪形文土器の検出など、縄文時代早期・前期に相当することが明らかになり、学史的にも重要な遺跡である。

（知念隆博）



写真 3 石斧

沖縄埋文研究

第2号

目 次

巻頭カラー図版

湧田古窯跡群

渡具知東原遺跡

論考

下田原式土器の分類と編年試案	岸本 義彦	1
泉と小川		
－先史沖縄島の居住地選択－	安里 嗣淳	13
ジュゴン骨に関する出土資料の集成(暫定)	盛本 純	23
首里グスク出土の武具資料の一考察	山本 正昭・上里 隆史	43

報告

本土系瓦質土器の产地についての補論		
－北部九州の瓦質土器と比較して－	瀬戸 哲也	65
清朝錢について	知念 隆博	73
南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査		
－海洋採集遺物からみた海上交通－	宮城 弘樹・片桐 千亜紀・新垣 力・比嘉 尚輝	81
東京大学総合研究博物館所蔵の鳥居龍藏関係遺物について		
－出自不明の中国陶磁に関する若干の考察－	片桐 千亜紀・新垣 力	109
八重山諸島波照間島採集の狹刃形石斧	安里 嗣淳・本田 昭正	115
琉球諸島考古学文献散歩(2)	安里 嗣淳	121
糸満市字兼城在樋川腹門中墓内発見の礫石経	長嶺 均	129

下田原式土器の分類と編年試案

New Classification and Chronology of Shimotabaru Type Pottery

岸本 義彦

KISHIMOTO Yoshihiko

ABSTRACT: The classification of Shimotabaru type pottery of the Neolithic Southern Ryukyu(Miyako and Yaeyama islands)period has been proposed several times. However, the insufficient number of the specimen and their limited distribution have prevented a deeper understanding of the type. A new, decoration-based scheme of classification is presented here, revealing the chronological development of the pottery. The overall trend is that the decoration changed from linear pattern to dotted pattern, and later, all such markings gradually disappeared.

はじめに

南琉球新石器時代を代表する下田原式土器については、先島地域（宮古諸島・八重山諸島）最古の土器であることがわかっているだけで、その起源や土器の性格など詳細なことは長年不明のままであった。ところが、1978年に発掘調査が行われた石垣島の大田原遺跡の調査成果により、従来の早稲田編年を覆す重要な発見があった。それは隣接する神田貝塚との時期的前後関係が層序により明らかにされたことである。すなわち、早稲田編年の第一期に属し、古いと考えられていた無土器遺跡の神田貝塚が、第二期に属する大田原遺跡より上位にあり、第一期と第二期が編年上逆転したことである。そのことは、これまで定説になっていた早稲田編年の見直しが余儀なくされると同時に、先島地域の考古学研究の転換期ともなったのである。

また、1983年から3ヶ年継続事業で行われた波照間島の下田原貝塚と無土器遺跡の大泊浜貝塚でも層序の前後関係が確認され、これによって第一期と第二期の逆転がゆるぎないものになった。さらに、1991年の多良間島添道遺跡における下田原式土器の発見は、これまで確認されていなかった宮古諸島にも下田原式土器文化が波及していたことを物語る画期的なものとなった。1995年に発掘調査が行われた石垣島のビュウツカ遺跡においては、従来知られていなかったタイプの土器が下層から検出され、下田原式土器のプロトタイプになる可能性がある貴重な発見となった。

このように、下田原式土器に関する新知見が相次ぎ、該土器の様相がより詳しくわかるようになってきた。ここでは、これまでの調査研究を踏まえ、下田原式土器の分類と編年を試みることにする。

なお、下田原式土器の出土が確認されている遺跡は、管見の及ぶ限り図1に示した14箇所が知られている。遺跡数が少ない感もあるが、今後の調査如何によっては遺跡も増加する可能性がある。

下田原式土器の調査研究小史

下田原式土器に関する調査研究は、1954年3月に金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文らによって行われた波照間島下田原貝塚の発掘調査を嚆矢とする（金関ほか1955）。その時にこれまで八重山地域で知られていなかった土器が検出された。翌1955年には多和田真淳によって西表島の仲間第二貝塚の調査が行われ、下田原貝塚のものと同様の土器を探取し、1956年に該土器を「仲間第二式土器」と型式設定している（多和田1956）。

1958年には早稲田大学八重山学術調査團による総合調査が実施され、考古班は多和田真淳の協力の

もとに、石垣島、西表島、波照間島、黒島の数遺跡の発掘調査及び地表踏査を行った。その調査には前述の下田原貝塚や仲間第二貝塚も含まれ、土器資料が追加されると同時に、調査の成果を踏まえて、調査団による八重山の考古学的編年が確立された(西村正衡ほか1960)。いわゆる早稲田編年と称されるもので、文化様相の相違で四期に区分されている。第一期は土器を伴わず、石器や貝殻などが出土する時期で、仲間第一貝塚が属し、八重山では最も古い時期に位置づけている。第二期は厚手の土器と石器・貝器等を有する時期で、代表的な遺跡として下田原貝塚や仲間第二貝塚をあげている。第三期は外耳土器を主体に輸入陶磁器や鉄製品等を伴う時期で、山西原貝塚や平山西貝塚など多くの遺跡が属する。第四期はハナレ系(バナリ焼)土器や輸入陶磁器等を伴う比較的新しい時期で、大原貝塚や川平貝塚などに代表される。

1969年には沖縄の考古学研究を進めていたR.J.PEARSONによって一連の厚手の土器を「Shimotabar Type」と称された(PEARSON1969)。また、1972年には下田原貝塚の調査者でもある国分直一によって「下田原式土器」と型式設定が行われている(国分1972)。さらに、1977年には大濱永亘・新田重清・安里進により名蔵の北側に位置するフーネ遺跡から見つかった土器に「赤色土器」という名称が与えられた。フーネ遺跡の土器に爪形文などを施したものがあり、これまで無文土器と考えられていた該土器に有文資料も含まれることが判明した(大濱ほか1977)。大濱永亘は石垣島や西表島などから採集した土器のタイプや文様の有無によって次の四型式に分類している(大濱1998)。

①無文土器一下田原式土器

②有文土器 爪形文—フーネ式土器、指頭圧痕文—平地原式土器、沈線文—仲間第二式土器

このように、これまでに様々な名称が与えられてきたが、学史的には多和田真淳が最初に唱えた「仲間第二式土器」を該土器の型式名とすることが妥当であると考えられる。ただ、戦後最初に行われた下田原貝塚の発掘調査が沖縄考古学研究に多大な貢献を成し遂げたことにより、下田原貝塚の名称を冠した「下田原式土器」という型式名が採用されるようになり、現在では広く使われている。

1978年、沖縄県教育委員会による石垣市名蔵の大田原遺跡・神田貝塚発掘調査において、これまでの早稲田編年を覆す画期的な新事実が確認された(金武ほか1980)。すなわち、下田原式土器を伴う大田原遺跡(台地上)と、その下方の砂丘地に形成された無土器の神田貝塚の層序が重複した地点(37ライン)が確認され、前者の遺物包含層が後者の遺物包含層よりも下位に位置することが認められた。そのことから、これまでの早稲田編年の第一期(無土器)と第二期(下田原式土器)が時間的に逆転することが判明した。



図1 下田原式土器出土遺跡の分布

この事実は、1983年から3ヶ年継続事業で発掘調査が実施された波照間島の下田原貝塚と大泊浜貝塚でも同様に確認され、八重山新石器時代の編年修正が余儀なくされた（金武ほか1986）。

これらの調査成果をもとに、調査担当者であった金武正紀は新しい編年試案を発表した（金武ほか1991・1994）。また、シャコガイ製貝斧を軸に先島とフィリピンの先史時代文化の関連性を調査研究している安里嗣淳も独自の編年試案を発表している（安里1993）。さらに、高宮廣衛（高宮1996）や大濱永亘（大濱1999）、當眞嗣一（當眞1976）らも独自の編年案を発表している。

下田原式土器の出土する遺跡は八重山地域でしか確認されていなかったが、1991年の多良間村遺跡詳細分布調査において、下田原式土器を伴う遺跡（多良間添道遺跡）が発見され、その文化が宮古地域にも伝播していたことが実証された（岸本1993）。

1995年には、石垣市教育委員会が行ったピュウツタ遺跡の発掘調査により、従来の下田原式土器より古いタイプと思われるラフで太い線文を施した土器が検出され、該土器の起源を考えるうえで一石を投じると同時に、先島の文化源流を究明するうえで重要な発見となった（島袋ほか1997）。

下田原式土器の概念と分類

下田原式土器の一般的な概念について、これまでの資料からみると、図2に示したように、器形は口縁が若干窄まり、胴下半部が膨らむ鉢形をなす。底部は立ち上がり部分の角がとれた丸底的な平底をなし、安定した底部となっている。口唇の形状は丸状ないし舌状を呈するものと平坦になるものがある。文様を有する資料はそれほど多くないが、爪形押紋と沈線文が基本になっている。口縁付近には対になる把手（牛角状・円筒状・円錐状）を貼付するのが特徴で、なかには横耳状の把手を貼付したものもある。器壁は相対的に厚く、底部では3cmを超し、胴部でも2cm内外ある。まれに6~7mmの薄手の土器もある。色調は赤褐色を呈するものが主体をなし、胎土に粗粒石英や長石が多く含まれている。器面はほとんどがナデ調整である。

下田原式土器の分類については、これまでに金武正紀らが大別・細別を試みている。金武は大田原遺跡の調査報告書のなかで、4000個余りの土器破片が得られたが、全体形がうかがえないことから、文様や把手、混入物、焼成、色調などの諸特徴で大きく4類に分類し、さらに口縁部の形態で細分している（金武ほか1980）。

下田原式I類土器は、器壁厚が1.5~3.0cmと分厚く、石英、長石などの粗い混入物が非常に多く、器面に露出してザラザラする。焼成も脆弱で暗褐色及び赤褐色を呈する。幅広の爪形押紋を横位に施す

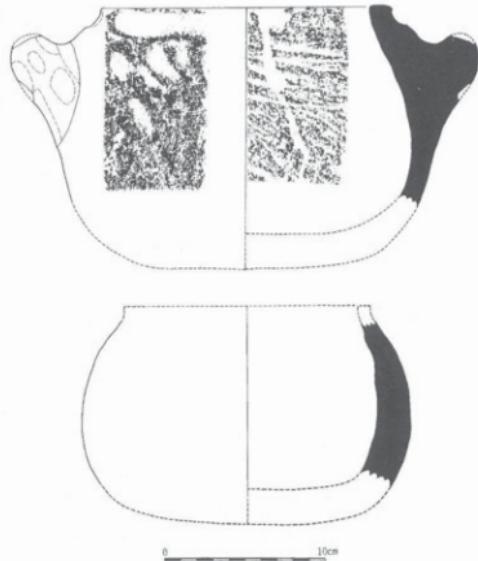


図2 下田原式土器（下田原貝塚）

が、わずかに縫位の施紋もみられる。把手は円柱状の大きなものが特徴的である。口縁部の形態でさらに2種に細分できる。

下田原式Ⅱ類土器は、器壁厚が1.0～2.0cmの厚手であるが、Ⅰ類土器に比べて若干薄い感じである。直径2mm以下の石英や砂粒を含むが、量的には少ない。焼成はⅠ類土器より良く、器色は赤褐色を呈するものが圧倒的に多い。紋様は爪形押紋のほかに、単籠による押引紋がある。把手は牛角状のものが特徴的である。口縁部の形態でさらに4種に細分できる。

下田原式Ⅲ類土器は、器壁厚が0.5～1.0cmの薄手土器で、直径1.5mm以下の石英や砂粒を多く含む。焼成はやや脆弱で、小型の鉢形土器と考えられる。紋様は細沈線紋が多く、ほかに爪形押紋、刺突紋、連点紋などがみられる。口縁部の形態でさらに3種に細分できる。

下田原式Ⅳ類土器は、器壁厚が0.5～1.0cmの薄手土器で、直径1.5mm以下の細粒の石英や砂粒などをわずかに含む。焼成は良好で器面調整も良い。4類のなかでは最も硬質である。紋様は細沈線紋がみられる。Ⅲ類と同様に小型の鉢形土器になると考えられる。口縁部の形態でさらに2種に細分できる。

以上のように分類を試みているが、それが時期差によるものなのか、セット関係なのかは現段階では判然としないということである。

また、金武は下田原貝塚の発掘調査報告書のなかで以下のような土器分類を試みている（金武ほか1986）。下田原式土器の基本的な器形は、丸底に近い平底で、胴部が脹らみ、胴部から口縁部へと内彎し、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢である。土器の大きさにバリエーションがあり、口径が10cm前後の小型のものから、25cm前後の大型のものまでみられるところで、器壁の厚さに主眼をおいて、その違いで大きく2群に分類している。すなわち、器壁厚が11mm以上の厚手土器をA群、10mm以下の薄手土器をB群としている。

さらに、口縁部の形態に着目し、次の3類に分類している。

第Ⅰ類（内彎口縁）は、口縁部が内側に大きく彎曲するもので、口縁先端が尖り気味になっている。頸部は無く、「無頸の内彎形口縁」をなす。

第Ⅱ類（外反口縁）は、口唇が平坦に成形され、口唇内端が内側へ延びず、口唇部の内端、外端とも僅かに外反する。短い頸部が認められ、「有頸の外反形口縁」をなす。

第Ⅲ類（直口口縁）は、口縁部先端が丸味をもつ口縁で、基本的には内彎も外反もしない直口形の口縁である。頸部は無く、「無頸の直口形口縁」をなす。

上記の分類により、A群土器とB群土器の出土量を比較した場合、前者が90%と圧倒的多数を占め、下田原式土器の主体をなしていることがうかがえる。また、B群土器は直径10cm前後の小型土器になるものと考えられ、A群土器とB群土器の違いは土器の大きさの違いで、いわゆる機能が異なっているということがいえる。

また、口縁形態で分類した土器の出土状況は、第Ⅰ類a・bと第Ⅱ類c・dはほとんど第Ⅳ層および第Ⅲ層からの出土で、第Ⅱ類c・dと第Ⅲ類は第Ⅲ層と第Ⅱ層から出土している。そのことから両者に若干の時間差を見ることができるが、ここでは問題提起にとどめると結論づけている。

阿利直治・後仲筋正徳は1980・81年に発掘調査が行われた大田原遺跡の報告書で、金武正紀が行った分類基準とは異なる分類を以下のとおり行っている（阿利ほか1982）。

器形はいずれも口縁部が全体的に内傾する内湾形を示し、口縁部の形状で3類に分け、さらに2～3種に細分している。

Ⅰ類は、口唇を平坦に成形したもので、さらに口唇部直下に凹線を施すもの、凹線を施さないもの、

口縁が内面側に突き出るもの3種に細分できる。

Ⅱ類は、口縁部上端外面から口唇部にかけて丸みを帯びるもの。

Ⅲ類は、口唇部の幅が狭くなるもので、先端が丸みを帯びるものと、口唇部が尖り気味で、口唇直下に四線を施すものの2種に細分できる。なお、分類結果については何ら触れていない。

島袋綾野は石垣市ビュウツタ遺跡の調査報告書のなかで、下田原式土器を次のように分類を試み、考察を述べている（島袋ほか1997）。

口縁部の形態に着目し、3類に分け、さらに細分を試みている。基本的には下田原貝塚の分類基準を踏襲しているが、ビュウツタ遺跡では第Ⅲ類をa・bタイプに細分している。

第Ⅰ類は、口縁部先端が尖り気味で内側へ延びる内湾形をなす。口唇部直下に指ナデによるくぼみの有無で2種に細分している。

第Ⅱ類は、口唇部が平坦に成形され、口縁部が僅かに外反し、頸部に指ナデによるくぼみを有する外反形をなす。口縁部の形状でさらに4種に細分している。

第Ⅲ類は、口縁部が内湾も外反もしない直口形をなし、口唇部先端が丸味を帯びるものと尖り気味になるものの2種に細分している。

分類別の出土状況等については特に分析などは行っていないが、表1からすると、Ⅲ層、V層ともに第Ⅰ類と第Ⅲ類の出土が多く、両者には時間差がないように思われる。また、第Ⅱ類はV層からの出土がなく、第Ⅰ類と第Ⅲ類に比べて時間的に下るものと考えることができる。

表1 ビュウツタ遺跡・出土土器類別出土状況

類別 層序	第Ⅰ類		第Ⅱ類				第Ⅲ類		計
	a	b	a	b	c	d	a	b	
表土・攪乱	4	4	2	2	0	0	3	0	15
Ⅲ層	12	4	3	0	1	1	8	3	32
V層	4	0	0	0	0	0	8	2	14
計	20	8	5	2	1	1	19	5	61

（島袋綾野作成 1997）

また、他の遺跡に比べて有紋土器の出土が目立ち、紋様の形態にもバリエーションがみられる。島袋はV層から出土した太沈線紋土器に注目し、下田原式土器の範疇に入るものとしながら、Ⅲ層から出土している爪形紋土器よりも古手の様相を呈していることを述べている。ただ、初めての出土例であり、比較資料がないことから、問題提起にとどめている。

以上、下田原式土器の分類等について、これまでの報告を概観してきた。出土土器の大半が小破片で、器形のうかがえる資料に乏しいことから口縁部の形状や器壁の厚さ等によって分類していることはいたしかたないことであるが、今後の資料の増加に伴って新たな分類概念が確立できると思われる。

下田原式土器の分類試案

下田原式土器の分類は、これまで口縁部の形状や器壁の厚さなどに基準を設けて行っているが、ここでは紋様形態に主眼を置き、他の要素を組み合わせて分類を試みることにする。

下田原式土器のなかでは有紋資料は少なく、これまで確認されているものでも破片にして僅か70点余の数量である。大田原遺跡やビュウツタ遺跡などで出土しているこれら有紋土器の名称は以下のよ

うになっている。

○大田原遺跡（沖縄県教育委員会による発掘調査）

- ・爪形押紋、押印紋、円形押付紋、細沈線紋、刺突紋、連点紋

○大田原遺跡（石垣市教育委員会による発掘調査）

- ・爪形文、沈線文

○ピュウツタ遺跡

- ・爪形紋、刺突紋、太沈線紋、細沈線紋、短沈線紋

○仲間第二貝塚

- ・爪形文、沈線文、山形押型文

○フーネ遺跡

- ・爪形文

○多良間添道遺跡

- ・爪形文、沈線文、点刻文

○下田原貝塚

- ・細沈線紋

以上のように、紋様形態の違いによって様々な名称がつけられているが、基本的には爪形紋と沈線紋、刺突紋の要素から成り立っており、それらの組み合わせでバリエーションが増えている。これらの紋様要素について詳しくみると、次のようになる。

◇爪形紋—器面に爪を連続で押しつけて施紋したもので、横位、縦位、斜位に展開し、さらにこれらを組み合わせたものもある。紋様の幅や施紋の深さに差違がみられ、施紋具（指？）の違いによるものと思われる。

◇沈線紋—器面に先端の尖ったものや棒状の工具により施紋したもので、沈線の幅の違いで太沈線と細沈線に分けられる。沈線紋の方向は爪形紋と同様に横、縦、斜めがある。ピュウツタ遺跡のV層から出土した太沈線紋は従来の下田原式土器にはみられなかった紋様で、古式を帯びていると考えられる。

◇刺突紋—器面に棒状工具を突き刺して施紋したもので、口唇部に施す例もある。点刻紋や連点紋なども基本的にはこのグループに含まれる。

また、これらの紋様の施紋方法をみると、点紋系と線紋系に大別できる。爪形紋と刺突紋は爪もしくは施紋具を用いて器面に突き刺しては離しながら連続して施紋する点紋系に属する。それに対して、沈線紋は器面を施紋具でなぞって線を引いたもので、線紋系に含まれる。

このような紋様は、器面調整の際の条痕、擦痕、指頭押圧などの紋様とは異なり、意図して施紋したもので、いわゆる意匠紋である。紋様構成が縦、横、斜めと直線的な構成に終始し、縄文土器などにみられる円構成や渦紋などの複雑な紋様がなく、極めてシンプルなものとなっている。

以上、紋様要素などを勘案して下田原式土器を下記のように分類基準を定め、分類を試みた。

I 群土器—線紋系土器（棒状の施紋具で器面をなぞって線紋を施したもの）

第1類土器—幅広線紋土器

- ・幅1mm以上の線紋を縦位、斜位に施したもの。

第2類土器—細沈線紋土器

- ・幅1mm以下の沈線を縦位、斜位に施したもの。

II 群土器—点紋系土器（爪や棒状の施紋具で器面を突き刺して点紋を施したもの）

第3類土器—爪形紋土器

- ・爪により連続で突き刺し、縦位、横位、斜位の方向に施したもの。

第4類土器—刺突紋土器

- ・棒状の施紋具により連続で突き刺し、縦位、横位、斜位の方向に施したもの、従来の点刻紋、連点紋なども含む。

基本的には上記の2群、4類に分類できるが、線紋と点紋を組み合わせた資料もあり、それらは主となる紋様の類に含めた。

先述した各遺跡の有紋土器をこの分類にあてはめると以下のようになる。

第1類土器—太沈線紋（ビュウツタ）

第2類土器—細沈線紋（大田原・下田原・ビュウツタ）、短沈線紋（ビュウツタ）、沈線文（大田原・仲間第二・多良間添道）

第3類土器—爪形押紋（大田原）、爪形紋（ビュウツタ）、爪形文（大田原・仲間第二・多良間添道）

第4類土器—円形押付紋（大田原）、刺突紋（大田原・ビュウツタ）、連点紋（大田原）、点刻文（多良間添道）

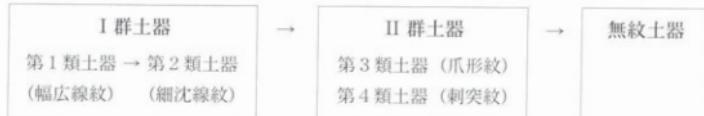
下田原式土器の編年試案

以上、下田原式土器の紋様要素などに焦点をあてて2群の大別と4類の細別を試みた。これらの紋様要素は時間差による違いなのか、同時期におけるバリエーションなのか意見が分かれるところであるが、ここでは時間差によるものと推察し、各遺跡での出土状況などを考慮して編年を試みることにする。

まず、紋様の違いが時間差によるものと考えた要因は、ビュウツタ遺跡での出土状況と他の遺物、特に貝製品・骨製品の出土頻度が遺跡によって異なることからである。ビュウツタ遺跡での出土状況を詳しくみると、無遺物の白砂層を間層として上下に遺物包含層が確かめられた。上層をⅢ層、下層をV層としており、いずれもプライマリーな文化層で、それぞれの層から特徴的な土器が得られている。図3に示したもので、Ⅲ層から刺突紋や爪形紋などの点紋系が出土し、V層から太沈線紋や細沈線紋などの線紋系が出土している。これらの出土状況から点紋系土器より線紋系土器が時間的に古くなることがうかがえる。特にV層の太沈線紋土器はビュウツタ遺跡において初めて見つかったもので、下田原式土器のプロトタイプになることが考えられ、ここではビュウツタタイプとして捉えることにする。今後の類例資料の追加を待って新たな型式設定が可能と思われる。

以上のように、下田原式土器の紋様の変遷から先述した類別の時間的な流れをみると、I群土器からII群土器へという図式がみられ、さらにI群土器のなかでは第1類土器（幅広線紋土器）から第2類土器（細沈線紋土器）への推移が考えられる。II群土器の第3類土器（爪形紋土器）と第4類土器（刺突紋土器）は時間的な前後関係について判然としない。また、細沈線紋と刺突紋や爪形紋を組み合わせている紋様構成の土器も確認されており、I群土器とII群土器の中間型式になると考えられる。これらを分かりやすくすると、下記のようになる。

また、遺跡間で時間的な前後関係をみると、現時点ではビュウツタ遺跡V層が最も古く位置づけら



れ、次いで大田原遺跡・仲間第二貝塚→多良間添道遺跡・ビュウツタ遺跡Ⅲ層→フーネ遺跡→下田原貝塚というような流れが考えられる。

ここで下田原式土器の垂直分布と水平分布について考えてみたい。垂直分布としたものは下田原式土器の時間的スパンのことである。これまで年代測定値からおよそ3,500年前に位置づけられているが、時期的上限と下限がよくわかっていない。ようするに下田原式土器の存続期間が不明である。また、南方（例えば台湾やフィリピンなど）での類例資料が確認されてなく、比較検討もできない状態では既成の資料を詳細に分析する方法に頼らざるを得ない状況となっている。

水平分布としたものは下田原式土器の空間的な広がりを示す。現時点では八重山諸島の石垣島と西表島に集中する傾向にあるが、宮古諸島の多良間島でも確認されていることから、今後の調査如何によって先島諸島全体に広がりを見せる可能性がある。また、下田原式土器の存続期間を考えると、その期間のなかでほぼ同じ時期（同時併存）の遺跡がどのような分布をなしているかを確認することによって、下田原式土器の時間的な拡散を把握することが可能である。

おわりに

以上、下田原式土器の分類と編年について試案を述べたが、数量的に限られた資料を扱って試みた不安は拭えない。ただ、これまで紋様に焦点をあてて土器分類を行った事例がなく、その点では新たな視点での分類及び編年試案は今後の下田原式土器研究に一石を投じるものと思われる。

問題が山積している下田原式土器について、今後とも調査研究を進めていくうえで多方面からのアプローチが必要となってくる。今回は第一段階として紋様による分類・編年を試みてみた。このことは下田原式土器の紋様要素の違いは時間差によるものであるという前提のもとに行ったものであり、これから調査研究によって修正される可能性もある。大方のご批判を願う次第である。

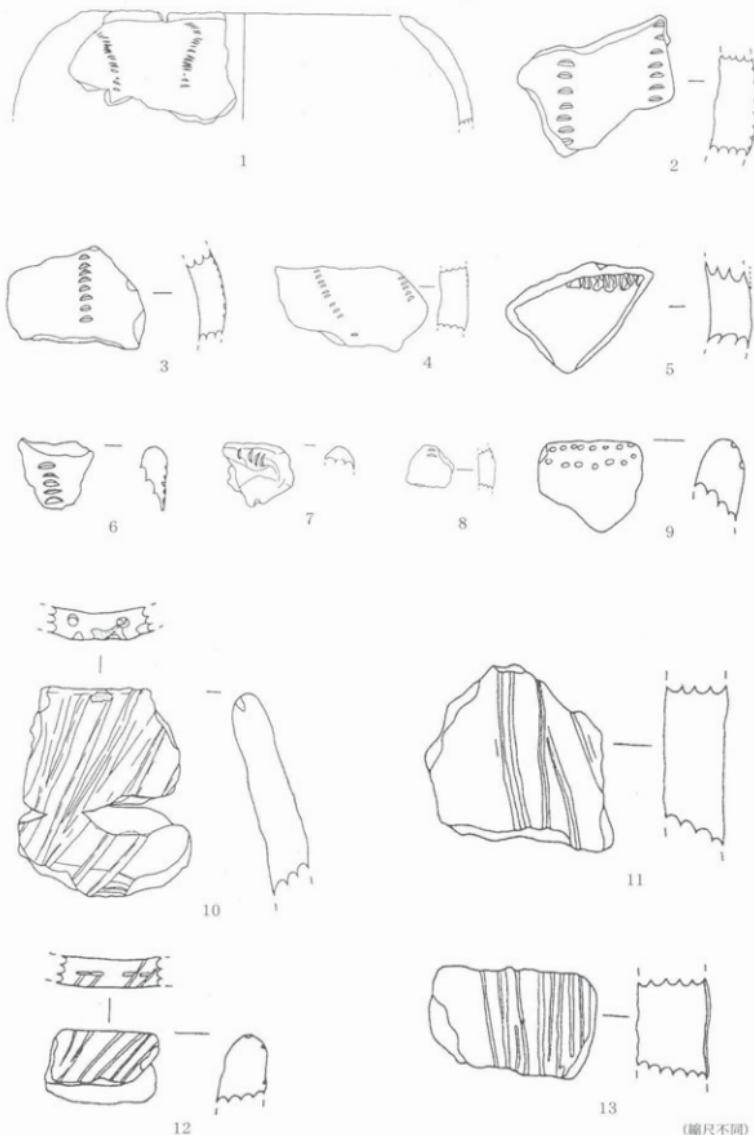
なお、石垣市史編集課の島袋綾野さんには資料の提供などご協力をいただいた。末尾ながら記して感謝を申しあげる次第である。

（きしもと よしひこ：調査課 主任専門員）

【参考文献】

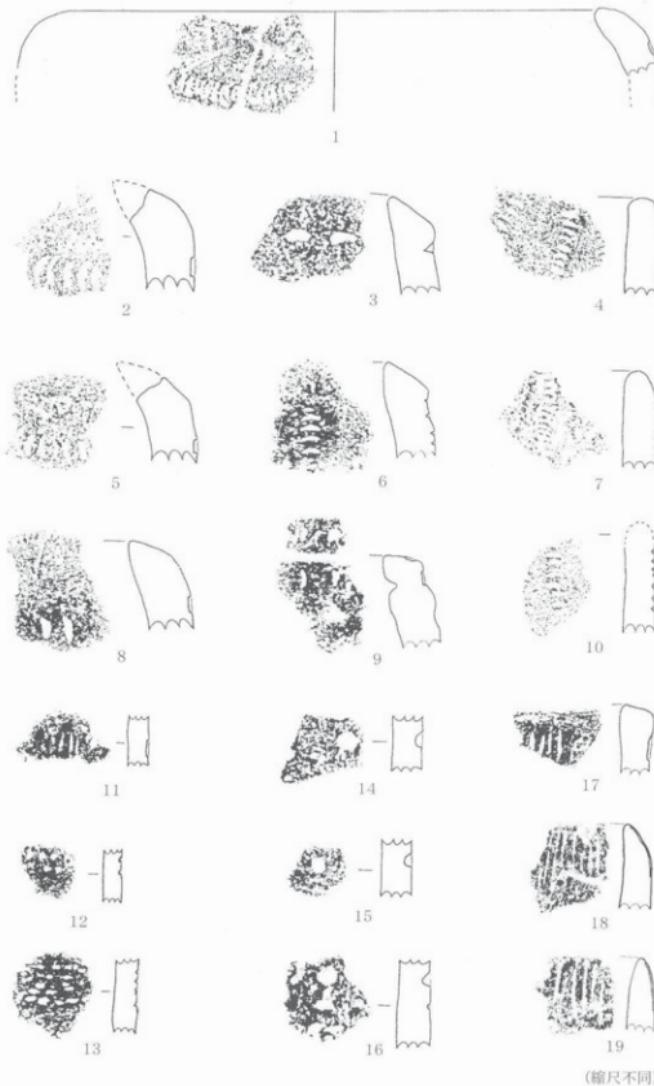
- 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文 1946 「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告』人文科学篇9号
- 多和田真淳 1956 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
- 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚 1960 「八重山の考古学」『沖縄・八重山』早稲田大学八重山学術調査団
- R.J.PEARSON 1969 "The sequence in the Sakishima Islands Archaeology of The Ryukyu Islands" UNIVERSITY OF HAWAII PRESS
- 国分直一 1972 『南島先史時代の研究』慶友社
- 當眞嗣一 1976 當眞嗣一「八重山の遺跡とその文化」『八重山文化』第4号 八重山文化研究会
- 大濱永亘・新田重清・安里進 1977 「フーネ遺跡発見の土器によせて」 沖縄タイムス 12月20日～23日朝刊
- 沖縄タイムス社
- 大濱永亘 1999 『八重山の考古学』先島文化研究所
- 金武正紀ほか 1980 「石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告—大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡—」沖縄県文化財調査報告書第30集 沖縄県教育委員会

- 阿利直治ほか 1982 「大田原遺跡—沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書一」 石垣市文化財調査報告書第4号 石垣市教育委員会
- 金武正紀ほか 1986 「下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告一」 沖縄県文化財調査報告書第74集 沖縄県教育委員会
- 金武正紀 1991 「先島の時代区分」『琉球史フォーラム』 名護市教育委員会
- 金武正紀 1994 「土器→無土器→土器—八重山考古学編年試案一」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 安里嗣淳 1993 「南琉球の原始世界—シャコガイ製貝斧とフィリピン—」『海洋文化論』 凱風社
- 岸本義彦 1993 「多良間村の遺跡—村内遺跡詳細分布調査報告一」 多良間村文化財調査報告書第10集 多良間村教育委員会
- 岸本義彦 1996a 「多良間添道遺跡—発掘調査報告一」 多良間村文化財調査報告書第11集 多良間村教育委員会
- 岸本義彦 1996b 「南琉球の下田原式土器とその遺跡」『史料編集室紀要』第21号 沖縄県立図書館史料編集室
- 高宮廣衛 1996 「南島考古雑録（Ⅱ）」『沖縄国際大学文学部紀要社会篇』第20巻第2号 沖縄国際大学文学部
- 島袋綾野 1997 「名蔵貝塚ほか発掘調査報告—名蔵貝塚・ピュウツタ遺跡発掘調査報告書一」 石垣市文化財発掘調査報告書第22号 石垣市教育委員会



表面採集及び表土層の爪形紋（1～5）
Ⅲ層出土：爪形紋（6～8） 刺突紋（9）
Ⅴ層出土：太沈線紋（10・11） 細沈線紋（12・13）
(縮尺不同)

図3 ビュウツタ遺跡の有紋土器



(縮尺不同)

図4 大田原遺跡の有紋土器

爪形押紋 (1~10) 短波線紋 (11) 刺突紋 (12)

連点紋 (13) 丸形押紋 (14~16) 沈線紋 (17~19)



(縮尺不同)

図5 各遺跡の有紋土器
大田原遺跡（1～6） 下田原貝塚（7） 多良間添道遺跡（8～10）
仲間第二貝塚（11～18） フーネ遺跡（19～21）

泉と小川

—先史沖縄島の居住地選択—

Springs and Streams : Criteria for Selecting Habitation Sites in the Prehistoric Okinawa Island

安里 嗣淳

ASATO Shijun

ABSTRACT: Prehistoric sites in the Okinawa island tend to concentrate either on sand dunes or coastal terraces. The principal criterion for selecting such habitation sites was their proximity to the sea, inasmuch as subsistence at that time was dependent mainly upon lagoon resources.

The physical environment of these sites also shows another important factor, access to a supply of fresh water. Prehistoric Okinawa people utilized two types of water sources, spring and streams. The former is concentrated in the central and southern part of Okinawa Island, and the latter is more common in the northern district of same. Such distribution occurs due to the geological nature of each area. The former is characterized by a limestone terrace over the impermeable Shimajiri layer, and the latter is characterized by high cliffs and deep valleys along the coastline.

序

沖縄諸島の先史人たちがその居住地を選択するにあたって、日常生活に不可欠な飲料水が確保できる水源に近い場所であることは重要な条件のひとつであったと考えられる。これはきわめてあたりまえのことで、今さら論ずるほどのことでもない、というのが私たちの「常識」であろう。そのような常識の故か、少なくない数の発掘調査報告書には、その遺跡の地理的環境または自然環境の項などにおいて、水源についての詳しい記述や地図への湧水地点などの位置表示がないものもある。地形図は必ず付されているので、小川あるいは小溪流については特に説明がなくてもその存在はほぼ推定できる。しかし、湧水地点の場合は存在していても記述されないと地図からは判断できない。当時の生活史を復元するには、発掘地域の遺構や遺物だけでなく遺跡をとりまく環境のひとつである水源、すなわち生活用水をどこに求めていたかという情報も重要である。発掘調査報告書等でそれについてあまり詳しく触れないのは、あまりにも当たり前すぎる所以簡単に記述したか、あるいは近くに水源があったことは確実だろうから、特に扱うこともないだろうということかも知れない。本稿はその当たり前のことを再確認するだけのことなので、中・高校生の自由研究程度の域を出るものではないが、各居住地（ほぼ遺跡付近）に伴うとみられる水源が、居住地選定との関係で総体として見るとどういうことが言えるのかを考えてみたい。

いくつかの遺跡と水源との関係を概観すると、水源地に近いことは必ずしも居住地選定の最優先順位とは限らないようにも見える。生活用水は日常の暮らしに欠かせないので、ある程度の距離の範囲に水源地があることは重要な条件だが、「湯水のように」ふんだんに水が使える直近の場所である必要もないのではないか。居住地の選定は地形など他の条件の方が、水源の「近さ」よりも優先するのではないかということが想定できそうである。居住地と水源とはどのような関係にあるのか、その選定にあたっての優先の度合はどの程度のものか、沖縄島の北部と中部の先史時代主要遺跡について概観しながら検討してみたい。

1. 水源の種類

ここでいう水源とは飲料水を主とするので淡水に限られる。沖縄諸島の水源は地上を流れる淡水すなわち川と、地下から湧き出している泉がある。泉から湧き出た水は流れとなって、小川や小渓流につながることが多い。池などの大きな水溜まりはほとんどない。あるいは居住地（遺跡）に天水溜池の窪みなどの設備があったかも知れないが、確認された例はない。

川はある程度の流れの幅をもつものと、山や丘の斜面の小さな谷筋を流れてくるものがある。小川の概念はあいまいだが、ここでは便宜上幅約1m以上の流れをもつものを小川とし、それ以下を小渓流と呼称することとする。また、県管理の二級河川は小川とは言い難いので、河川と称する。水源としての泉は、その泉だけが源で居住地（遺跡）がその近くに存在する場合は泉とする。主な水源は泉であるがその湧水が流れとなり、さらに周囲の表層水も集めて小川となって居住地（遺跡）が湧水地点よりも近い場合は小川を水源とする。

2. 沖縄島先史時代遺跡周辺の水源

できれば琉球諸島全域について扱うことが望ましいのだが、諸般の事情によりここでは沖縄島の北部と中部の遺跡について検討する。

2-1 北部地域の地形と水源

北部地域は山地が多く、急峻な斜面が海岸近くにまでせり出している。ところどころで海岸陸地が湾入して入江になっており、そこには大小の砂丘地が形成され、その後背地の山の谷間から流れてくる小川が河口となって海に注いでいる。北部の山地海岸はほとんどそのような地形である。入江の砂地には必ず小川が注ぎ込んでおり、北部の東西海岸地帯入江の飲料水は豊富である。また、とくに入江や海浜でなくとも、海岸に迫る山の斜面の小さな谷筋から小渓流が流れ出していることもよくある。

北部地域でも本部半島の北側（今帰仁村）や西北側（旧上本部村）には石灰岩とその風化土壌の台地・丘陵が広がり、中部地域の石灰岩台地・丘陵と似たような地形になっている。

2-2 中部地域の地形と水源

中部地域の北側（石川市南側、読谷村東側、沖縄市北側）には北部地域の脊梁部山地からつながる名護層や国頭礫層などの山地があつて北部の地形に類似しているが、その他の多くの地域は石灰岩とその風化土壌の台地や丘陵が海岸から内陸部まで段丘地形をなしている。

その石灰岩層の下にはクチャと呼ばれる泥灰岩（島尻層）が基盤となっていることが多いが、ところによっては上層の石灰岩丘が浸食によって消え、クチャの風化土壌であるジャーガル（粘土）が地表に露出した台地を形成している地域もある。

沖縄市東部から、北中城村、中城村、西原町にかけての中城湾岸地帯はクチャ・ジャーガルの露頭が卓越する地形である。ニーピ（細粒砂岩）も分布している。またこの地域は東海岸側が断層のように崖をなしていて、海岸低地で粘土質ジャーガル土壌の小さな平野を形成している。崖下の東海岸側には、恒常的な流れとしての小川や小渓流はほとんどない。泉もほとんどない。さらにこの断層崖の上端から地形は西寄りにゆるやかに低くなり、嘉手納町、北谷町、宜野湾市などの中部地域西海岸に至る。したがって、この地域の小川はすべて東端に水源を発しながらも反対側の西海岸へと流れている。同じ東海岸でもクチャを基盤とし、上層に石灰岩丘陵が載る勝連半島には泉が多い。

海岸には大小の砂丘が多く形成されているが、西海岸の多くは後背地に石灰岩段丘地形を控えていることから、その小崖下すなわち海岸付近に泉が湧き出ている所がよく見られる。石灰岩台地が広い範囲に展開していることから、北部と比べると泉はかなり多い。河川や小川は具志川市の天願川が西

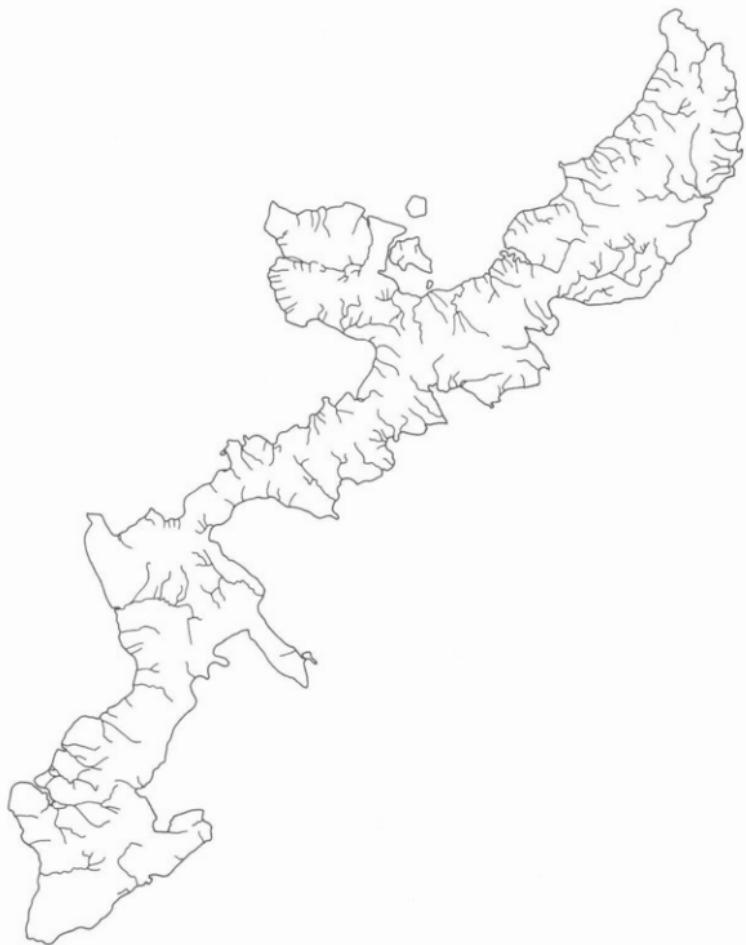


図1 沖縄島の川の分布
「沖縄県の河川・砂防・海岸管内図」(沖縄県発行2003)より調製

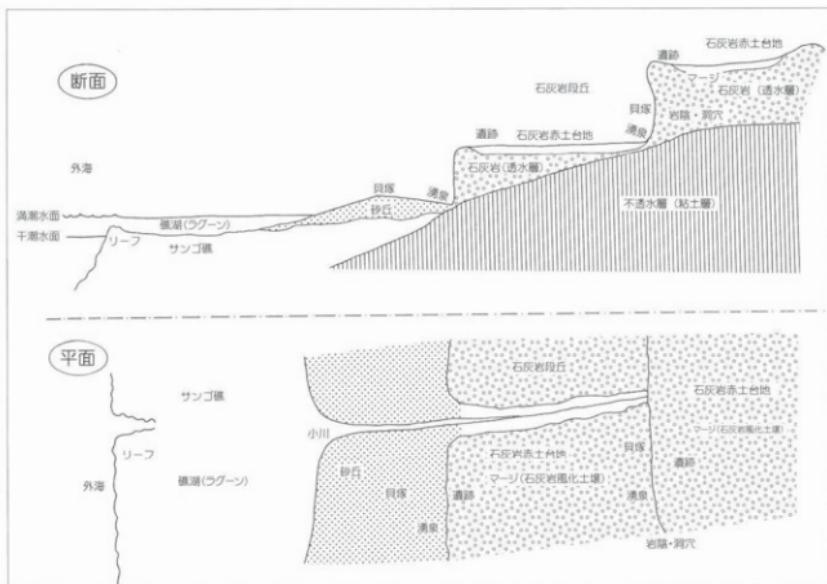


図2. 沖縄島中・南部の石灰岩地帯の湧水と地形の概念図

から東へ流れているほかは、比謝川、大道（野国）川、白比川、普天間川、牧港川、小湾川などが西海岸へ注いでいる。北部のような海岸に迫る山地斜面の谷筋地形はきわめて少なく、小溪流は中部北側でわずかに見られるだけである。

沖縄島には「樋川（ヒーヤー）」、「湧川（ワクガ）」と称される水源が主に石灰岩地帯に分布する。その一部は小川や溪流水を堰き止めたり、浅い地下水脈を掘り下けたりしたものもあるが、ほとんどは自然湧水口に人工的な構造物を築いて取水の便を図ったものである。村落の生活用水として長期にわたり利用されてきたものであるが、おそらく先史時代以来の自然湧水で、グスク時代から近世にかけて整備されたものであろう。長嶺操氏は琉球諸島の井戸を調査してその体系をまとめたが、同氏の著作によっても沖縄島の中南部に氏の分類に言う「樋川」や「方形石組井戸」（その多くは湧水）が多く分布し、北部にはかなり少ないと明らかである（長嶺操1998）。

2-3 湧水の仕組み

上述したように、沖縄島では主に石灰岩地帯に湧水が多く分布する。これは石灰岩が吸水性に富み、地下水をよく浸透させ、あるいは貯えるからである。しかし、それだけでは湧水にならない。その地下水が石灰岩の下層にある島尻層（クチャ）に至ると、この層は不透水層であることからささらに下層へは浸透できず、流れは境界面から横方向に向きを変える。そしてその境界断面である崖下や低地などから泉として湧き出すのである。この不透水層が下層に存在しない場合は、豊富な石灰岩地帯であっても湧水には乏しい。例えば北部の瀬底島はほとんどが石灰岩からできているが、陸地の高さに別の不透水層がないため、地下水はさらに海面下のレベルにまで浸透してしまい、陸地で泉になることはない。

2-4 他の地域の地形と水源

沖縄諸島の他の地域も、大雑把にいえば北部的か中部的地形のどちらかであるといえる。例えば沖縄島南部はクチャ、ジャーガルが若干卓越するものの中部とだいたい似たような石灰岩とその風化土壌（マージ）の台地や丘陵であり、伊平屋、久米島の一部。慶良間諸島などは北部と似て急峻な山地が海岸に迫る地形である。要するに沖縄諸島の地形は大雑把にいえば山地系と石灰岩台地系があり、海岸にはいずれの地形の場合も砂丘地が多く存在するという立地である。したがって、不十分ではあるが、沖縄島北部と中部を扱うことで、概ね沖縄諸島全体の傾向は把握できると考えられる。

2-5 遺跡と水源の種類

以下、沖縄島北部と中部の主な先史時代遺跡と現在確認できる水源の状況を概観する。もちろんあくまでも現在の地形および水源の状況であり、先史人の活動期においてもまったく同様の地形環境であったとは限らない。とくに近代以降の人間の諸活動（開発等）によって、かつての小川や湧水が枯れたり改変されたりしている所もある。そのような制約はあるものの、現在の地形環境からでも、どのような水源であったかについての傾向は把握できるものと考える。居住地（遺跡）と水源との関係を次のように分類し、それぞれ該当する遺跡を列挙する。できれば各遺跡の時期を明らかにするのが望ましいが、発掘された時期幅の明確な遺跡が少ないと本稿では遺跡の立地ではなく水源との関係を考察するのが目的であることから、時期は明示しない。また、遺跡が単なる一時的な野営（キャンプ）地なのか、居住地なのか、未発掘遺跡の場合には判断が困難なこともある。

また、遺跡の形成地点は必ずしも居住地とは限らないが、概ねその付近であろうと推定する。実際には例えば読谷村渡具知東原遺跡や嘉手納町の野国貝塚B地点などの貝塚時代早期（爪形文土器期）の遺跡は、流入堆積の可能性もあり、そこが直接の居住地かどうかの判断が難しい。また、貝塚時代前期の伊波・荻堂式土器文化期の貝塚は崖下にあり、居住地は崖上台地と推定されてはいるものの、住居跡の発見例に乏しい。

A. 海浜または海岸小丘に居住し、後背地の谷間から流れる小川や後背斜面の小溪流を利用して いたとみられる遺跡

北部地域

国頭村	宇佐浜B貝塚、宇佐浜遺跡、奥第一・第二貝塚、奥第三・第四貝塚、伊地遺物散布地、佐手貝塚、国頭田名貝塚、安波貝塚、辺土名兼久貝塚
-----	---

東村	東村伊是名貝塚
----	---------

大宜味村	喜如嘉貝塚
------	-------

今帰仁村	不明
------	----

本部町	兼久原貝塚、浜元サチビン遺跡、山川港原遺跡、
-----	------------------------

名護市	名護貝塚、溝原貝塚、部瀬名貝塚、久志貝塚
-----	----------------------

宜野座村	不明
------	----

恩納村	伊武部貝塚、熱田貝塚、熱田第二貝塚、仲泊貝塚群、久良波貝塚
-----	-------------------------------

中部地域

読谷村	渡具知東原遺跡、長浜貝塚（？）
-----	-----------------

嘉手納町	嘉手納貝塚、野国貝塚、野国貝塚B地点、
------	---------------------

石川市	不明
-----	----

具志川市	宇堅貝塚、苦増原（部分的鍋底地形による集水域の小川、泉もあり）
------	---------------------------------

与那城町	不明、小川や小溪流がほとんどない
------	------------------

勝連町	不明。小川や小渓流がほとんどない
沖縄市	不明。比謝川の上流にあたるが、その各支流の元は泉である
北谷町	不明
北中城村	不明。先史遺跡がほとんど分布していない。
中城村	不明。
宜野湾市	不明。
浦添市	牧港貝塚、浦添貝塚、(ただし、両遺跡とも湧水の可能性のある地形環境)
西原町	不明

B 灰岩台地縁辺付近や海浜に居住し、付近から湧き出る泉を利用したとみられる遺跡

北部地域

国頭村	不明
東村	不明
大宜味村	不明
今帰仁村	渡喜仁浜原遺跡、兼次貝塚、
本部町	具志堅貝塚、知場塚原遺跡、備瀬貝塚、屋比久原遺跡(?)
名護市	不明、大堂原遺跡(?)
宜野座村	前原遺跡
恩納村	不明

中部地域

読谷村	連道原貝塚、木綿原遺跡、赤インコ遺跡、吹出原遺跡(伝承のみ)、浜屋原貝塚群、大道原遺跡、中川原貝塚、大久保原遺跡、
嘉手納町	不明
石川市	伊波貝塚、石川貝塚、古我地原貝塚
具志川市	アカジヤンガー貝塚、地荒原遺跡、上江州貝塚、大田貝塚、苦增原遺跡(小川も)
与那城町	シヌグ堂遺跡、高嶺遺跡、
勝連町	平敷屋トウバル遺跡、平安名貝塚、幸地原遺跡、津堅貝塚(島の反対側に湧水)、浜貝塚、
沖縄市	明道遺跡、仲宗根貝塚、室川貝塚、馬上原遺跡、八重島貝塚、知花遺跡
北谷町	砂辺サーク原遺跡、伊礼原B遺跡
北中城村	不明(先史遺跡未発見)
中城村	旗立山遺跡
宜野湾市	大山貝塚、喜友名貝塚、大山水賀志原遺跡、真喜名志富盛原遺跡、安座間原第一・第二遺跡、宇地泊兼久遺跡、
浦添市	不明。石灰岩台地多く、湧水の可能性あるが、遺跡との関連は不明。
西原町	不明(先史遺跡きわめて少ない)

3. 沖縄島中・北部地域の先史遺跡と水源との関係の特徴

以上見てきたように、沖縄島中・北部はその地形的特徴から山地水脈を源とする北部の小川・小溪流水系と石灰岩台地地下水を源とする中部の湧水系に分けられる。もちろんこれは大雑把な系統であり、いずれの地域にも小川や湧水は存在する。先史遺跡を残した人々は、北部地域においては主に

海岸入江の砂丘地に居住し、そこに後背地から流れてくる小川や小溪流の水を生活用水として利用していた。中部地域においては、主に石灰岩台地の地下から湧き出てくる泉の水を生活用水として利用していた。しかし、北部でも本部半島北部や北西部の石灰岩台地では中部と同じような水利用であり、中部の一部海浜遺跡では北部の小川利用と同じであった。

3-1 居住地選定の最優先条件ではない水源

いずれの地域においても生活用水は日常生活に不可欠であったことは確実であるが、砂丘遺跡を除いては居住地（ほぼ遺跡形成地付近）の多くは、必ずしも水源のすぐ隣に形成されてはいないことも指摘できる。非砂丘地における居住地はほとんどが石灰岩台地（あるいは丘）の縁辺部一帯の微高地であり、湧水はその崖下や離れた低地にあることが多いのが事実である。主な遺跡は次のとおりである。

北部地域 長根原遺跡、渡喜仁浜原貝塚、知塙原遺跡、屋比久原遺跡（？）。

中部地域 吹出原遺跡、赤インコ遺跡、知花遺跡、仲宗根貝塚、明道遺跡、馬上原遺跡、古我地原貝塚、伊計仲原遺跡、宮城島シヌグ堂遺跡、高嶺遺跡、地荒原遺跡、喜友名遺跡。

居住地の選定にあたって水利用の利便性を最優先したのであれば、かれらは台地の上ではなく、もっと水源に近い崖下の泉付近に居住したことであろう。台地上に住み、毎日の飲料水を崖下に求めるための昇降の労働は比較的難儀なことである。にもかかわらず、かれらは敢えて小高い台地、丘陵上に居住していた。「序」で想定したように、水源は必要不可欠ではあるが、それへの近さよりも台地の上や微高地という地形であることが、居住地選定にあたっての優先度が高かったことを示している。それは周囲がよく見渡せるという安全性や、崖下に比べて明るく湿気が少ないという快適性を求めての選定であろうと推定される。それを満たした上で、それに次ぐ条件が水源に近いことであったと考えられる。それは、台地、微高地であっても中央部にはほとんど居住地（遺跡）は分布していないこと、非砂丘系の遺跡の多くは崖下の泉を控えた台地縁辺部に形成されていることによる。

3-2 沖縄島北部海岸地帯の先史遺跡の少なさ

山地に富む北部地域の東海岸側には小川や小溪流が多い。ほとんどの海岸地域は飲料水に不自由しない環境である。ところが、先史遺跡はきわめてわずかである。また、分布する遺跡の規模もかなり小さく、人口的にもわずかで時間的にも短期間の居住であったと見られる。このことからも、水源が豊富であればそこに人々が居住するということではないことを示している。おそらく山地の急峻な斜面が海岸まで迫り、低平地は小さな入江に小砂丘が存在するだけであり、加えて広大なサンゴ礁湖に乏しいこと、石材入手などのための外部世界との連絡が困難なこと等人の生活活動への支障が多いことが、先史人の居住地としての魅力を欠いていたものと考えられる。北部西海岸でも、似たような地形のある大宜味村、国頭村地域の海岸は同様に遺跡が少なく、あっても小規模である。比較的規模の大きな安定した遺跡（居住地）が見られるのは大宜味村の喜如嘉貝塚や国頭村のカヤウチパンタ遺跡だけで、そこは比較的広い砂丘低地あるいは石灰岩台地があり、前面の海は広いサンゴ礁湖が控えている。

3-3 中部中城湾岸地帯の先史遺跡の少なさ

一方、中部東側の中城湾岸地帯も先史遺跡がきわめて少ない。2-2で述べたように、この地域は島尻層（クチャ）が卓越し、石灰岩台地に乏しく、湧水はほとんどない。また、湾岸沿いに断層崖が連なり、そこから西海岸へ向けて地形はしだいに低くなることから、小川は湾岸地帯にはほとんど形成されない。先史遺跡は石灰岩丘陵地形で湧水に富む勝連半島側に分布するだけで、他の湾岸地帯は皆無といつてもよい。さきに先史人の居住地選択は水源が最優先順位の条件ではないと述べたが、それ



図3. 沖縄島の「樋川（ヒージャー）」と「方形石組井戸」の分布
すべてではないが、これらの多くの水源は湧水である
長嶺操原図（1998, p. I・IV）より調製

に次ぐ条件ではある。したがって、降雨以外にまったく水源がないというのも居住地としての条件を欠いているといえる。

沖縄貝塚時代の早期末から中期にかけて、沖縄市や北中城の石灰岩台地には先史人たちが居住していた。その後、海洋への適応を強めていく後期になると、沖縄諸島のほとんどの地域で先史人々は海浜砂丘に居住するようになる。ところがこの後期の遺跡が勝連半島を除く中城湾岸地帯の砂丘にはまったく存在しないのである。前面の海の貝や魚の食糧資源はけっして貧弱ではない。室川貝塚や荻堂貝塚から出土する貝や魚はこの湾岸海域から入手している。それにもかかわらず貝塚時代後期の人々が中城湾岸地帯の砂丘に居住しなかったのは、水源が存在しなかつたことも重要な理由であったと考えられる。先述したように水源は直近でなくてもよいが、中城湾岸地帯はあまりにも水源が遠く不便すぎるというのが当時の先史人々の認識であったのだろうか。同じ中城湾岸でも勝連半島では居住地（遺跡）が集中しているのは、石灰岩丘陵下に湧き出す泉が多いことも選択の一条件であったからだと考えられるのである。

結

先史時代において、日常生活で不可欠な水（主に飲料水）が自然状態で得られる泉や小川は、居住地の近くにあるのが望ましいことは常識であるが、沖縄島中・北部の具体的な居住地選定と水源との関係においてもこのことを再確認できた。しかし、一方では水源が豊富であるにもかかわらず遺跡の分布に乏しい、すなわち先史人々がほとんど居住しなかった地域もある。あるいは湧水利用の場合にも直近ではなく、一般に崖下あるいは窪地、低地にある湧水地点を避けて、上方の台地縁辺に居住している。これらのことから、水源があること、あるいは水源により近いことは居住地選定の最優先順位の条件ではなく、地形等別の優先すべき条件に次ぐものであったことも指摘できる。

このような事実から、居住地の選定において水源地を確保するというのは生活活動の方法のひとつにすぎず、実際にはもっと大きな適応戦略としての地域選定があり、それをふまえたうえで生活用水の確保も条件にして地点を選定したのではないだろうか。例えば、安里進氏は浦添市、宜野湾市南部すなわち旧浦添地域の海岸砂丘に展開する大小約20の沖縄貝塚時代後期の砂丘遺跡は、前面の海のサンゴ礁湖（ラグーン）。背後に石灰岩台地が広がる地域に群をなして分布する「浦添群」ともいるべきものとして括ってとらえている。そして大規模遺跡は拠点的な集落で、小規模遺跡は枝集落であろうとし、礁湖を単位とした群を構成する各遺跡（集落）は礁湖内での漁労の協業を軸にした共同体を形成していたと推定している（安里進1991, p6-8）。具体的な範囲の括り方の当否は別として、この捉え方や視点はきわめて重要である。砂丘遺跡が形成された後期の時代には、海洋への適応がこれまでで最も高い位置に達し、前面のサンゴ礁湖を主な生業の場とした生活活動が営まれていたことは、すでに明らかにされていることである。したがって、後期の時代にはサンゴ礁湖という生業の場を確保できる位置に居住することが重要であり、それを満たした上で水源の近くを条件としたものと考えられる。

このことからすると、中部の中城湾岸地域において後期の遺跡がほとんど分布していないことは、必ずしも水源の有無や遠近ではなく、海洋が生業の場としての魅力に乏しかったことも一因として考慮すべきだということになるのだろうか。しかし、中城湾の場合は生業の場としても遠浅の海であり、特に資源が乏しいということはいえない。事実、同じ湾に面している勝連半島先端の広大な砂丘遺跡平敷屋トウバル遺跡は海洋資源を豊富に利用したことを示している。この湾岸ではやはり水源の問題がもつとも大きな要因として働いたものと考えられる。北部東海岸の場合は、広大なサンゴ礁湖に乏

しく、狭い礁湖に外海の荒波が押し寄せる地形は先史時代人を遠ざけたといえる。

同じように、後期に限らずその以前の繩文時代並行期においても、生業や安全、域内交易など水源以外の諸条件も含めての居住地選定がなされたものと考えるべきであろう。すでに繰り返し述べたように、水源に近いことは最優先順位の条件ではなく、それに次ぐ条件である。すなわち、生活活動・生業活動を主として展開する「地域」を総合的な条件から選定し、次にその地域内において安全、利便性（交通・交易等）、衛生（快適性）などを条件とした「地点」を選定したものと考えられる。この地点選定にあたって二次的に選定されるのが水源である。

(あさと しじゅん：所長)

引用・参考文献

安里嗣淳 1992 「先史沖縄諸島人の交通」『史料編集室紀要』第17号、沖縄県立図書館史料編集室。

注 この拙稿で「居住地選択の第一の条件は具体的には水源であり」と述べているが、論考の内容は本稿と基本的に同じであり、「第一」は最優先順位という意味ではなく、「重要な」という意味に理解されたい。

安里 進 1991 「第Ⅱ章 位置と環境」『嘉門貝塚A』、p6-8、浦添市教育委員会

長嶺 操 1998 『琉球の水の文化誌』、沖縄村落史研究所、沖印社

嵩元政秀・安里嗣淳 1993 『日本の古代遺跡47 沖縄』、保育社

沖縄県教育委員会 1977 『沖縄県の遺跡分布』

沖縄県土木建築部河川課 2003 『沖縄県の河川・砂防・海岸管内図』『おきなわの川と海』

国頭村教育委員会 1987 『国頭村の遺跡—詳細分布調査報告』

本部町教育委員会 1991 『本部町の遺跡—詳細分布調査報告書』

名護市教育委員会 1982 『名護市の遺跡2』一分布調査報告』

宜野座村教育委員会 1981 『宜野座村乃文化財（1）—遺跡分布調査報告書』

金武町教育委員会 1990 『金武町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告』

石川市教育委員会 1986 『石川市の遺跡』

与那城村教育委員会 1988 『与那城村の遺跡—詳細分布調査報告書』

勝連町教育委員会 1993 『勝連町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告』

北谷町教育委員会 1994 『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書』

沖縄市教育委員会 2002 『沖縄市の遺跡—第2次分布調査報告書』

中城村の遺跡 1992 『中城村の遺跡—詳細分布調査報告書』

宜野湾市教育委員会 1989 『土に埋もれた宜野湾』

浦添市教育委員会 1990 『浦添市文化財悉皆調査報告書』

※ 発掘の実施された遺跡についてはそれぞれ発掘調査報告書がある。沖縄島中・北部の当該文献を掲載するとかなりのページになるので、本稿の参考にはしたが掲載は省略した。

(私事ではあるが、本稿は娘：泉の大学卒業にあたり、その名に因んで記した考古随想である)

ジュゴン骨に関する出土資料の集成（暫定）

Preliminary Survey of Excavated Dugong Bones

盛本 勲

MORIMOTO Isao

ABSTRACT: Together with the Ryukyu wild boar and sea turtle, the dugong has long been utilized in the Ryukyu archipelago as a food resource and also as a raw material for various bone tools. Therefore, it is important to investigate the relation between Ryukyu people and the dugong.

The excavated specimens of dugong bone are compiled here in order to chart the chronology and distribution of its use. The data shows that dugong bones were found as food debris in sites spanning from the Early Jomon until the premodern periods, but the worked bones were made and used only from the Late Jomon to the *Gusuku* period.

1. はじめに

人魚伝説のモデルで知られるジュゴンは、1955（昭和30）年に琉球政府指定の天然記念物となり、1972（昭和47）年の沖縄県の本土復帰に伴って、国指定天然記念物に指定変えされた貴重な哺乳動物である。

だが、近年の乱獲等により、琉球列島近海においては現在ではごく稀に定住あるいは漂流、迷行例が報じられるのみで、その棲息域はさらに南海へ下がるとともに、絶滅の危機に瀕している国際保護動物でもある。

ジュゴンは、島嶼形矮小亜種のリュウキュウイノシシやウミガメ類などとともに、琉球列島の縄文時代以降の動物食の重要なウエイトを占めていたらしく、多くの貝塚や遺跡から遺存骨が出土している¹⁾。出土資料等からして、食料として重要であったばかりでなく、多種多様な骨製品の素材としても使用され、無駄なく有効に利用されたことが伺える。とりわけ、太く湾曲の弱い肋骨は（写真1）、その形状と海綿質が堅固であるという特性から、多用されており、九州島や本州島などにおける鹿角と同レベルほどの利用価値を有していたものと考える。

また、琉球王国時代には、ジュゴンの肉を国王へ献上していたことが『中山伝信録』²⁾などの文献史料から伺える。このため、八重山諸島の新城島では、ジュゴンの肉が御用物として賦課せられていたとともに^{3)~5)}、琉球列島各地で安産の炒菜として、妊婦に好んで食されていたことが伝えられている。

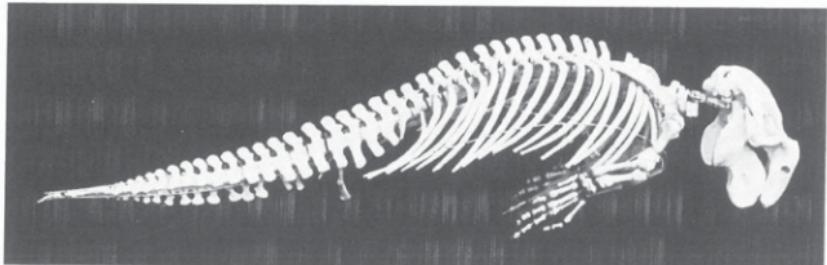


写真1 ジュゴンの骨格標本（琉球大学総合資料館風樹館蔵、川島由次氏提供）



図1 ジュゴン骨等出土分布図（全体図）

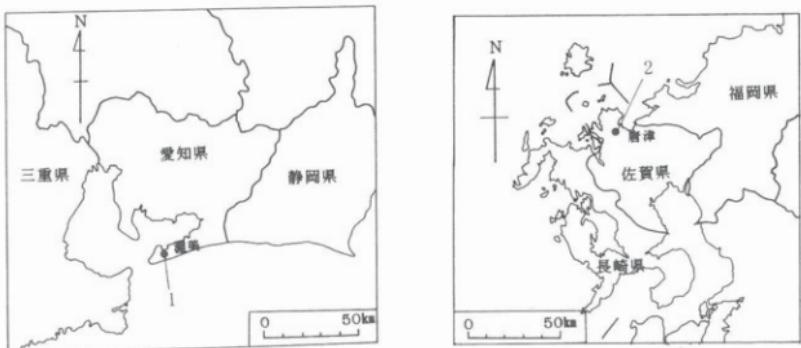


図2 ジュゴン骨等出土分布図・1 (九州島・本州島)



図3 ジュゴン骨等出土分布図・2（奄美諸島）

このように、ジュゴンは動物性淡白源として琉球列島の縄文時代から近年に至るまで、重要であたばかりでなく、縄文～グスク時代において骨製品の素材としても重用された利用価値の高い動物であった。

よって、ジュゴンと琉球列島の人びとの関わりを明らかにすることは重要なことである。

本研究は、動物考古学研究の基礎となる遺存骨と製品の集成、さらには出土時期および空間的出土状況の把握を第一の目的に、文献資料や古考等からの聞き取り調査をもとに、その捕獲方法などを明らかにすることを第二の目的に、琉球列島の先史時代以降の各時代におけるジュゴンのウエイトを明らかにすることが第三の目的であるが、紙幅等の都合上、小稿では第一の目的である遺存骨とその利用骨製品を集成し、その時期および時間的出土状況の把握を行い、第二および第三の目的については別稿にて論じたい。

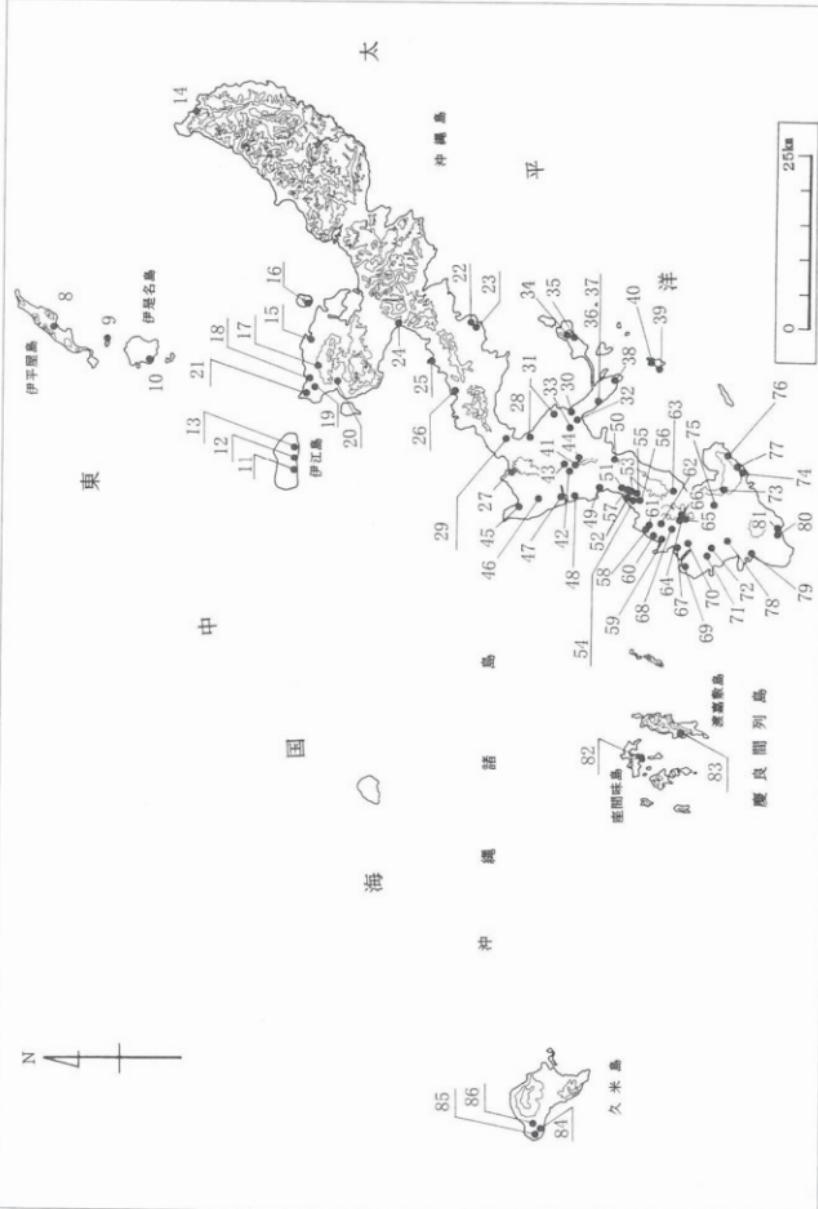


図4 ジュゴン骨等出土分布図・3 (沖縄諸島)

N



中

国

海

東

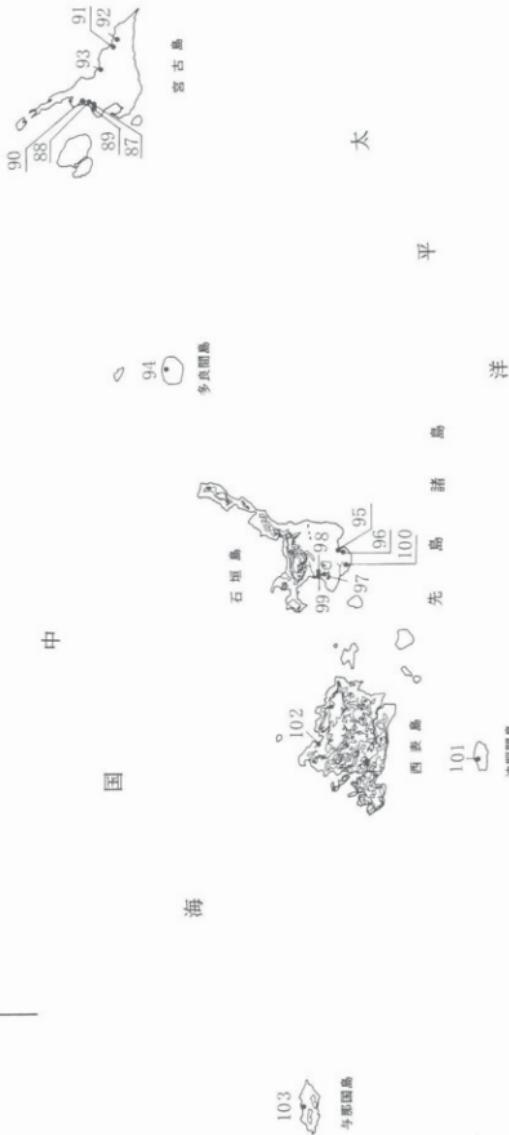


図5 ジュゴン骨等出土分布図・4 (宮古・八重山諸島)

2. ジュゴンの生態・分布・特徴等

ジュゴン(*Dugong dugon* D.L.S.Muller,1976)は、海牛目(Sirenia)ジュゴン科(Dugongdae)に属する草食性の哺乳動物である。漢字では儒艮を充て、奄美・沖縄地域ではザン、ザンヌイヨ、ザンヌイオ、アカンガイユ^{⑥)}、宮古諸島ではヨナタマ、ヨナイタマ、新城島ではザヌ、西表島ではザノ、琉球王府公用語ではケーバと称されていたようである。

主な分布は、インド洋から太平洋の熱帯から亜熱帯海域で、西方は紅海のアカバ湾で、東方では奄美大島が北限にあたるもの、日本列島近海では黒潮に乗って、愛知県下あたりまでの漂流や迷行例がある。

江崎(1935)によれば、「昔は屋久島でも採れ（三國名勝図会、卷五）、又奄美大島あたりでも採れた（鹿児島縣植物調査、第一輯、p170.）日本での例外的な記録としては、宮城縣油津付近でも漁れたことがあるらしい。」との報告があることから、先史時代においては奄美諸島（恵原1973）からトカラ列島、さらには薩南諸島あたりでも採捕できたとともに、黒潮暖流に乗り、九州島や四国島、本州島にも漂流や迷行例がある可能性が高い。

このことは、愛知県渥美郡渥美町保美貝塚（大山1944・酒詰1961）や佐賀県唐津市菜畠遺跡（渡辺1982）などの出土例からも首肯できる。

その生態は、珊瑚礁の発達した沿岸性の強い浅海に棲息し、アジモやアマモ等の海藻の頭花植物やマングローブ類などの多肉質の葉を主食とする。索餌は、夕方から早朝にかけて行うようである。

概して、外的にに対する防御手段が無いうえ、遊泳速度も遅いことから、先史時代人の捕獲技術でも比較的容易に捕獲できたであろう、ことは想像に難くない。

体形は紡錘形をなし、一見クジラに似るが、前肢は鰭となり、背鰭はなく、尾鰭はクジラ同様、半月状を呈す。口部に特徴を有し、上唇が厚く、上方に延びて円盤状をなし、太い感覚毛（胴毛）が密生する。また、上唇の上方には一対の外鼻孔が開口しているが、耳朶はない。

体色は青みがかった灰色を呈し、全身に細かい毛がまばらに生えている。一産一子を産み、妊娠期間12ヶ月で、雌は子を抱き、水上に頭を出して哺乳する。体長は成獣で3mを測り、体重は300～400kg程に達する。寿命は、50歳位と比較的長寿の動物である（宮城1980、西脇1984）。

3. 出土資料の集成

管見の限り、これまで日本列島内でジュゴン骨利用の製品あるいは製作途上品、さらには食料残滓などとしての動物遺存体を含めて、ジュゴン骨を出土した遺跡は本州島1、九州島1、奄美諸島地域5、沖縄諸島地域79、宮古諸島地域8、八重山諸島地域9の計103遺跡以上が知られている。これらのジュゴン骨の出土資料について、次の要領で集成作業を行った。

なお、本集成作業は、環境省が発された2002（平成14）年度ジュゴンと藻場の広域的調査の研究成果（環境省2003）に報告したものをベースとしている。

- ①これまでに刊行された発掘調査報告書等を中心にジュゴン骨の出土に関する文献資料を調査
- ②出土したジュゴン骨の部位について、解剖学的名称と骨製品の情報を整理

これらは暫定的な集成で、沖縄県下についてはほぼ網羅しているものの、鹿児島県下に属する奄美諸島地域については多少の遺漏があるものと思われる。これらについては、漸次追補していくたいと考える。

さらに、食料残滓としての集成からも窺えるように、個々の遺跡出土の動物遺体の報告を見ても、海獣骨などと曖昧な記述が見られ、正確な同定が行われていない例が少なくないとともに、利用製品

についても正確な種同定がなされてはいないものも少なくない。これらについては、実見を基本に、掲載写真や実測図などから筆者の同定により判断したものも若干含まれていることを記しておきたい。

表1からも判るように、部位別に見た場合、食料残滓としての出土骨及び製品としての利用部位で最も多いのが肋骨で、他部位については断片的にしか知られていない、とりわけ、四肢骨等については多くなく、勝連町平敷屋トウバル遺跡などで出土している状況である。しかし、頭蓋骨などが全く出土していないわけではないことから、北條輝幸が指摘するように「珍重の余り、骨の髓まで食用に

表1 ジュゴン骨および骨利用製品集成一覧（暫定）

() 内の数字は点数

番号	遺跡名	時期	出土骨（点数等）	製品（利用部品等）	文献
1	愛知県渥美町保美貝塚	縄文後～晩期	部位等詳細不明	—	大山1944、酒詰1961
2	佐賀県唐津市榮畠遺跡	縄文晩末	肋骨頭(1)	—	渡辺1982
3	鹿児島県笠利町あやまる第2貝塚	弥生前末～古墳	肋骨片：(10)焼かれて化石状をなす	—	池澤他1984
4	鹿児島県笠利町泉川	奈良～平安時代相当	L肋骨片(3箇所で折れている)、頭蓋骨の一部(2)	—	立神編1986
5	鹿児島県伊仙町大田布貝塚	縄文晚期	—	乗飾品(2)	吉水・宮田編1984
6	鹿児島県加名町神野貝塚	縄文後期	—	ヘラ状製品(1)：肋骨利用、有孔装身具：肋骨利用、肋骨製品(複数具か呪具か)：肋骨利用、骨鍬(1)：肋骨利用、管状製品(1)：肋骨利用、用途不明(1)：肋骨利用	高宮他1983a b、87
7	鹿児島県与論町上城遺跡	縄文晩期末	—	かんざし(1)、乗飾品(1)	堂达編1990
8	伊平屋村久里原貝塚	縄文前末、後～晩期	頭椎(椎弓：1)、椎体：1)、胸椎(椎弓高：1、棘突起：1)、肋骨(13)、上頸骨片(L：1)、切歯片(1)、横骨突起片(1)、下頸骨片(体：2、核：2)、肩甲骨(頭部R：1、棘上窩：2)、上腕骨(L：p：1)、横骨(p：1、s：3、d：1)、尺管(s：4)、指趾骨(4)	—	岸本他1981
9	伊是名村貝志川島遺跡群岩立地区	縄文後・晩期	—	腹状骨製品(海獣骨?)	安里他1979a
10	伊是名村伊是名貝塚	縄文後期	—	骨製品(1)：肋骨？利用、骨鍬(1)：肋骨利用	安里1970、沖縄県伊是名貝塚学術調査団2002
11	伊江村ナガラ原西貝塚	弥生前末～中	尾椎、第7：9肋骨(L)、肋骨(R) 点数不明	刺状骨製品(1)	安里他1979b
12	伊江村貝志原貝塚	縄文前末、後、晩、弥生	肋骨片(2)	—	友寄・高宮1968、安里他1985b、岸本他1997
13	伊江村阿良貝塚	弥生中～後	胸骨片(1)？	骨針(2)	安里他1983
14	国頭村宇佐浜B貝塚	弥生中～後	肋骨片(1)	—	岸本他1989
15	今帰仁村波喜仁原貝塚	縄文後～晩前、後前～後	肋骨片(完：1、破：10)、椎骨(完：1、破：3)、中手骨(3)、肩甲骨片(8)、不明(5)	—	新田他1977
16	今帰仁村古宇利原遺跡	縄文後期	ジュゴン(歯?)	—	上原他1983a
17	今帰仁村今帰仁城跡	グスク	部位・数量不明	—	金武・宮里編1983
18	本部町貝志原貝塚	縄文後、弥生前～後	肋骨片(30)、肩甲骨(L：1)	骨製品(1)	岸本他1986
19	本部町知場塚原遺跡	縄文晩	頭蓋片(2)、肋骨近位部(1)、肋骨片(7)	—	岸本他1988
20	本部町屋比久原遺跡	縄文後～晩期	—	蝶形骨製品(2)：肋骨利用	盛本覚編
21	本部町瀬瀬貝塚	弥生前～中	後頭類(1)、肩甲骨(R：1)、肋骨片(1)	—	島他1986

22	宜野座村松田遺跡	近世	肩甲骨(1)	—	森本編1986
23	宜野座村前原遺跡	縄文後期	R頸骨(1), L上腕骨(1), 肋骨片(12), R上腕骨片(1), R橈骨(1), 韓突起(1), 部位不明(22)	—	知名編1999
24	名護市名護貝塚	弥生後～グスク	肋骨片(1)	—	松川他1985
25	名護市那瀬名貝塚	弥生後～古墳	R第16肋骨片(1), R第18肋骨片(1), 頭頂骨片(1)	—	岸本利枝他 1996
26	恩納村伊武部貝塚	縄文後・晚期	—	肋骨製未製品	上原他1983b
27	恩納村久良波貝塚	弥生後～グスク	1992: 肩甲骨(R: L, 不: 1), 肋骨片(4), 不明(3)	—	上原他1992, 長崎・大城他 1994
28	石川市吉古知原貝塚	縄文後・晩	頭蓋骨片(11), 肋骨片(20), 不明(9)→本文編 肩甲骨(R), 上腕骨(R), 尺骨が橈骨→図版編	かんざし(3), 繊状製品(5), 骨輪(5)(5), 骨輪(5)	島袋他1987
29	石川市伊波貝塚	縄文後	肋骨片 来点数不明	—	大山1920
30	具志川市アガジャヤン ガーベ塚	弥生中～後	肋骨片(40)	—	金武他1980a
31	具志川市宇堅貝塚	弥生中	不明(2)	—	金武他1980a
32	具志川市地荒原遺跡	縄文後～晩	頭蓋片(R: 2, L: 4, 不: 14), 韓突起(12), 肋骨 片(90), 肩甲骨(L: 1, 不: 1), 上腕骨(L: 3), 橫 骨(L: 1)	骨輪(8)	大城他1986
33	具志川市地荒原貝塚	縄文後～晩	頭骨片(2), 韶骨側頭突起(1), 頭椎(2), 腰椎(8), 韓突起(1), 肋骨片(70), 不明(6), 破(12)	骨輪(15), ヘラ状製品(1), 骨製品(3), 海獣(2), 骨製 管状製品(1)	多和田他1962, 大城他1986, 岸本編1979
34	与那城町シヌグ堂遺 跡	縄文後～晩	肋骨片(26), 椎体(3), 肋骨片(9), 不明(34)	骨輪(12), ヘラ状製品(1), 未製品(2)	金武他1985
35	与那城町高嶺遺跡	縄文後～晩	頭蓋骨片(R: 1), 下顎骨片(R: 1), 肋骨(p: 4, 破: 50), 胸椎片(1), 椎体片(1), 韩突起(1), 白衛 (1), 破片(13)	サメ歯模造品(1), かんざ し(1), 骨輪(6), ヘラ状製 品(2), 未製品(2)	金城他1989
36	勝連町勝連城跡南貝塚	奈良～室町	頭骨(1), 側頭骨(1), 後頭頸(1), 韩突起(7), 肋骨 (3), 上腕骨(4), 下顎骨(1), 齒(2), 椎骨(2), 椎体 (4), 破片	麻糬牌形製品(1)	安里他1984 a
37	勝連町勝連城跡二の 丸跡	グスク	肩甲骨(1), 韶骨側頭突起(1)	骨輪(12): 肋骨利用, 刀物 痕のある破片(6): 鮫などが 肋骨? 利用	安里他1984 a
38	勝連町平敷屋トウバ ル遺跡	縄文後～晩, 弥生中 ～後,	頭蓋骨: 完存(R: 1, L: 1), 破片(R: 37, L: 41, 不明: 1), 肋骨(R: 128, L: 198, 不明: 742), 肩甲骨: 完存(R: 1), 肩甲骨片(R: 9, L: 9), 上 顎骨片(R: 1, L: 3), 下顎骨片(R: 7, L: 9), 椎体 (R: 3, L: 7, 不明: 154), 上腕骨片(R: 2, L: 1), 橫骨: 完存(L: 1), 橫骨幼(2), 尺骨: 完存 (R: 1), 尺骨片(R: 3, L: 2), 手骨(R: 1, L: 1)	骨輪(1), 有孔製品(未製品) (2), 用途不明木舟(5)	島袋他1996
39	勝連町津堅島津堅第 二貝塚	弥生中～後	部位及び数量不明	—	上原他1993
40	勝連町津堅島キガ浜 貝塚	縄文後～飛鳥	—	骨輪(海獣骨X1), 海獣骨 製品(1), 螺形骨製品: 肋骨 利用(4): 下顎骨利用(1)	金武他1978
41	沖縄市仲宗根貝塚	縄文後～晩	下顎骨(1)	—	萬元他1980
42	沖縄市室川貝塚	縄文後～晩	部位及び数量不明	獸形骨製品(4): 肋骨利用, 芸身貝(1), 骨製品(14), かんざし状製品を含む肋 骨製品(8)	高宮他1984, "79a,"79b, "80,"80,"82, "81, 比嘉他1997
43	沖縄市知花遺跡	縄文後～晩期	下顎骨(開節突起)(R: 1), 肋骨片(6), 上腕骨: s (L: 2), 長骨片(1)	骨輪(1)	安里他1986
44	沖縄市越來グスク	グスク	肋骨片(2)	—	宮城他1988

45	諫谷村吹出原遺跡	縄文後～晩、グスク	肋骨片(2)	蝶形骨製品(2)：下頸骨利用	仲宗根他1990 大城他1994
46	嘉手納町屋良貝塚	グスク	肋骨片(1)	—	
47	嘉手納町嘉手納貝塚	縄文後・晩期	肋骨片(10)	蝶形骨製品(1)：下頸骨利用	新田・鶴元1960, 島袋編1995 岸本他1984
48	嘉手納町野国貝塚群 日地点	縄文前期	肩甲骨(R: 1), 指骨片(点数不明)	—	中村編1989
49	北谷町伊礼原B遺跡	縄文前～後	—	骨製品(海獣)	松村1919
50	北中城村浜堂貝塚	縄文後	肋骨片(1)	—	島袋他1992
51	宜野湾市安仁屋トヨ ンヤマ遺跡	グスク～近世	肋骨片(1)	—	堀屋編1998a,
52	宜野湾市伊佐原第1 一遺跡	グスク	上腕骨遠位端片1, ジュゴン? 不明骨片 1	—	高尾編2001
53	宜野湾市喜友名貝塚・ 喜友名グスク	縄文後・晩期, グスク	肋骨(4), 輪突起(1), 不明片(1)	ヘラ状骨製品(1)：肋骨利用	比嘉編1999
54	宜野湾市真志喜安座 間原第一遺跡	縄文後～晩期	—	蝶形骨製品(1)：下頸骨利 用, 肋骨製重飾品(1)	糸星他1989, 金子2000
55	宜野湾市真志喜富盛 原第二遺跡	グスク～近世	肋骨(1)	—	堀屋編1998b
56	宜野湾市大山貝塚	縄文後	—	かんざし(2)：肋骨？利用	賀川・多和田 1959
57	宜野湾市喜友名山川 原第5遺跡	縄文後・晩期	—	蝶形骨製品(1)：肋骨利用	堀屋編1984
58	浦添市城間遺跡	縄文後・晩期, 弥生 後～古墳?	—	肋骨製品(1)	松川他1992
59	浦添市城間古墓群	縄文前・晩期, 古 墳?, グスク, 近世	—	蝶形骨類(2)	松川編1990
60	浦添市嘉門貝塚A地 区	弥生後, グスク	肋骨片(1), 上顎骨(幼: L: 1)	—	松川編1991
61	浦添市嘉門貝塚B地区	縄文中, 後, 弥生前・ 中	下顎骨(R: 1, L: 1), 肋骨片(4), 不明(2)	—	松川編1993
62	浦添市城舎添貝塚	縄文後	上腕骨(1)	—	北條1976,*91
63	西原町我謝遺跡	縄文後・グスク	肋骨(1)：個人住宅, 肋骨片(5)：分譲住宅地造 成	—	大城編 1983a+b
64	那覇市首里城跡	グスク	欽会門・久慶門内側地区：頭蓋骨(1), 離体(1), 椎體(2), 肋骨(2), 中手・中足骨(1), 右腋門 地区：頭蓋骨(2), 上顎骨, 切歯(1), 離体(1), 肩 甲骨(1)	未製品(1)：肋骨利用・管理 用道路地区	当・真・上原編 1988・盛本他 2001・西路編 2001, 片桐他2003
65	那覇市天界寺跡	グスク	肋骨片(1) (報告 I), 前頭骨・頸骨突起(L: 1)・ 衛(1), 胸椎(1), 環椎(1), 輪突起(1), 肋骨(1) (報 告 II))	—	島袋編2001・ 2002
66	那覇市首里崎山古墓群	近世	肋骨片(1)	—	島他2001
67	那覇市錦町原遺跡	グスク	下顎骨(1), 肋骨片(4)	—	金武他1997
68	那覇市崎崎川貝塚	縄文後	—	蝶形骨製品(1)：下顎骨利用	島田1932
69	那覇市ガジャンビラ 丘陵遺跡	縄文晚, 古墳?, グ スク	部位および点数不明	—	大田他1983
70	那覇市渾田古窓跡	グスク～近世	肋骨片(1)：行政棟地区, 肋骨片(1)：地下駐車場地 区	肋骨利用製品：議会棟地区	島袋編1993,* 95,*99
71	豊見城市宜保アガリ ヌ御嶽	グスク～近世	—	肋骨利用製品(1)	与那瀬編2003

72	豊見城市渡嘉敷後原遺跡群	グスク～近世	部位及び数量不明	—	与那嶺編1997
73	五城村糸数城跡	グスク	—	ヘラ状製品(1)	西平他1991
74	五城村百名第二貝塚	縄文後	肋骨片　※点数不明	—	安里他1981
75	大里村福島遺跡	グスク	部位及び数量不明	骨擦(1)	当真編1983
76	知念村下上原貝塚	縄文後・晚	肋骨片(1)	—	大城他1994
77	知念村熱田原貝塚	縄文後	臼齒(1)　他に部位等の同定可能な骨はない	—	大城他2002
78	糸満市波板古崎遺跡	グスク	肋骨片(1)	—	金城他1990
79	糸満市真栄田貝塚	縄文後・晚、古墳？	部位および点数不明	—	湖城他1996
80	糸満市字米須貝塚	縄文前、弥生前～後？	肋骨片　※点数不明	—	湖城他1985
81	糸満市大度貝塚	縄文後・晚、弥生中？	※部位不明(1)×第2次調査試掘穴2：Ⅲ層出土	ジュゴン骨加工品(1)：第2次調査試掘穴3出土	湖城・大城編2003
82	座間味村古座間味貝塚	縄文後～晚、弥生前？	I区：部位不明(1), II区：部位不明(72), III区：部位不明(9)	未製品(肋骨利用)：III区	岸本他1982
83	渡嘉敷村阿波連浦貝塚	縄文晩～弥生前？	肋骨片(5)	—	高宮他1999
84	久米島町清水貝塚	弥生後～古墳？	上顎枝(1)、下顎枝(1)、離歯(1)、蝶骨(1)、頸骨突起(1)、第一頸椎(1)、椎体(2)、肋骨(尺：2, L：6, 不明：9)、上腕骨(L：1)(1)、第一頸椎(1)、椎体(2)、肋骨(尺：2, L：6, 不明：	—	盛本編1989
85	久米島町大原貝塚群A地点	縄文後・晚期	部位不明(13)	ポイント状製品	當真他1980
86	久米島町ヤッチャノガマ・カンジン原古墓群	近世	肋骨片(1)：12区面I～II	—	西堀編2001
87	平良市尻並遺跡	グスク～近世	—	切裁痕のある破片(1)	羽方編2003
88	平良市保里遺跡	グスク	部位及び数量不明	骨擦(1)、他	砂辺編1999
89	平良市住屋遺跡	グスク	部位及び数量不明	骨擦・骨錐・骨製かんざし・骨製ヘラ・用途不明製品	砂辺編1992
90	平良市尻川遺跡	グスク	—	骨擦(2)	砂辺・宮城編2003
91	城辺町浦底遺跡	新石器時代後期	部位及び数量不明	骨擦(1)	S.Asato1990
92	城辺町アラフ遺跡	新石器時代後期	肋骨(L・尺不明)	—	江上・馬潤編2003
93	城辺町長底遺跡	新石器時代後期	肋骨片(2)、四肢骨片(1)、椎骨片(1)、不明(1)	—	安里他1984b
94	多良間村白竜貝塚	グスク	—	ヘラ状製品(1)：肋骨利用	大城他1990
95	石垣市カンドウ原遺跡	グスク	部位不明(少量)	尖頭状製品(3)	大城・金城・島袋編1984
96	石垣市フルスト原遺跡	グスク	部位数量不明	—	石堂・当真編1977
97	石垣市名藏貝塚群	新石器時代後期	肋骨片(3)	—	島袋他1985
98	石垣市大田原遺跡	新石器時代前期	肋骨片(29)、椎骨(1)	—	金武他1980b
99	石垣市神田貝塚	新石器時代後期	犬齒(1)、肋骨片(3)	—	金武他1980b
100	石垣市山原貝塚	グスク	—	ヤヌ頭状製品(4)	後中筋・岸本編1983
101	竹富町下田原貝塚	新石器時代前期	椎体片(2)、肋骨片(16)、部位不明(4)	—	金武・金城編1986
102	竹富町船浦スラ所跡	近世	肋骨？(1)	—	金城編1991
103	与那国町トゥグラ浜遺跡	新石器時代後期	上腕骨(1)、基節骨(1)、椎体(1)	—	安里編1985a

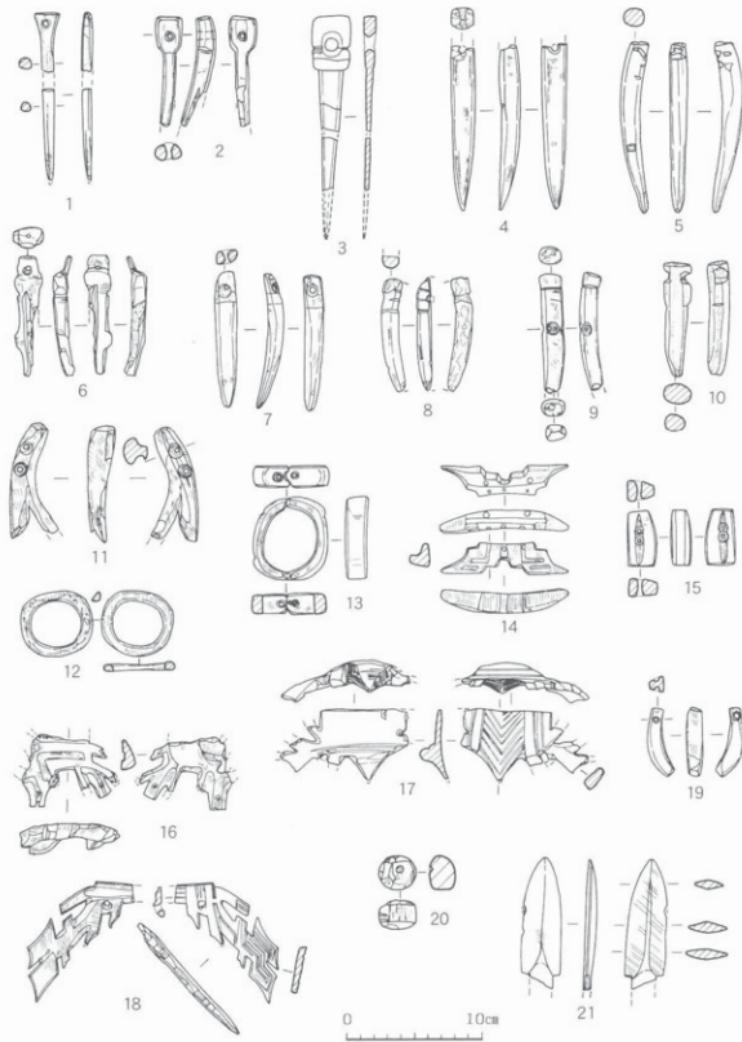


図6 主なジュゴン骨製品・1 1. (阿良貝塚), 2. かんざし (古我地原貝塚), 3. かんざし (大山貝塚), 4 - 5. 骨錐 (シヌグ堂遺跡), 6 - 11 - 16. 室川貝塚 (獣形装身具), 7. 大原貝塚群 (有孔製品), 8. シヌグ堂遺跡 (骨針), 9. 古我地原貝塚 (棒状製品), 10. (室川貝塚), 12. (具志川島遺跡群岩立地区), 13. 骨輪 (古我地原貝塚), 14. 螺形骨器 (室川貝塚), 15. 札状製品 (古我地原貝塚), 17・18: 螺形骨器 (吹出原遺跡), 19・20. 有孔製品 (平敷屋トウバル遺跡), 21. 剣状製品 (ナガラ原西貝塚)

されて縄文時代の遺跡には残されなかつたと考えられる」(北條1991)という見解には賛同しがたい。

筆者は、拙稿でも指摘したが(盛本1996)、確かに北條が指摘するように、琉球列島の貝塚や遺跡出土の獸骨で最も多いのはリュウキュウイノシシであり、それに比すればジュゴン骨の量は少なく、かつまた碎片が多いのは事実である。しかし、本集成で明らかになつたように、103遺跡と決して少なくない遺跡より出土しているとともに1.はじめにでも記したように、海面質が緻密質である骨の特性から、肋骨をはじめ、頬骨、指骨など、多くの部位が骨製品の素材として利用されているということも考慮すべきであろう。

なお、これらの出土状態は、遺物包含層中より食料残滓としての貝類や魚類、あるいはリュウキュウイノシシなどの他の獸類遺存体などと併出しているのがほとんどであるが、近世古墓出土例の那霸市首里崎山古墓群では7号墓蔵骨器NO.1からの出土がある(島編2001)。動物供養という側面から興味を有する資料である。

4. 若干の考察

さて、これらの地理的分布を見ると、本州島の愛知県下、九州島の佐賀県下において各1遺跡づつの報告例が知られているが、圧倒的主体を占めるのは棲息分布の北限に近い琉球列島である。

琉球列島を見た場合、鹿児島県下に属する奄美諸島地域では、笠利町あやまる第2貝塚を北限とし、

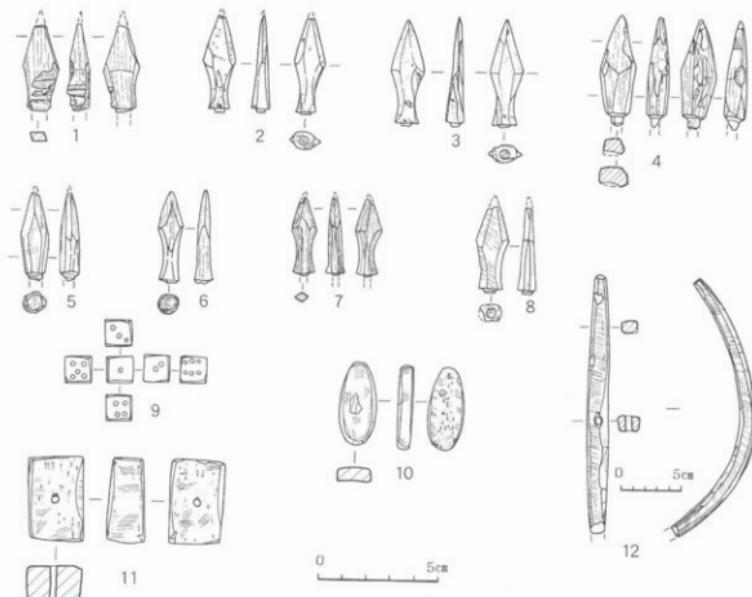


図7 主なジュゴン骨製品・2 1~8. 骨fragment (勝連城跡: 南及び北貝塚・二の郭・三の郭), 9・10. 基 (勝連城跡: 北貝塚, 二の郭及び三の郭), 11. 麻雀牌形製品 (勝連城跡: 南貝塚), 12. 弓状製品 (宜保アガリヌ御嶽遺跡)

南端の与論町上城遺跡の5遺跡のみで、圧倒的主体を占めているのは沖縄県下である。

このことは、沖縄近海がジュゴンの棲息分布の中心である亜熱帯～熱帯に位置若しくは近く、奄美諸島地域はその北限域にあたることからも首肯できる。本州島の愛知県下、九州島の佐賀県下における出土例は、北上する黒潮に乗って迷行した例であろう。2で記したように、同様な例は近年において宮城県下まで知られる。

沖縄県下を見た場合、沖縄諸島地域が79遺跡、宮古諸島地域が8遺跡、八重山諸島地域が9遺跡と沖縄諸島地域が圧倒的多数を占めている。この資料からする限り、より棲息分布に近い宮古・八重山諸島地域に少ないとになっているが、その要因としては大きく下記の2点が考えられる。

1. 宮古・八重山諸島地域は、沖縄諸島地域に比して、発掘調査件数が少ないとともに、調査規模が狭小である。
2. 動物考古学の基礎資料となる動物遺存体に対する力点の弱さなどから生じる資料の末報告および正確な種同定がなされていない。

沖縄諸島地域を見た場合、最北端に位置する国頭村宇佐浜B貝塚から南西端の久米島町清水貝塚および大原貝塚群A地点、東端の与那城町宮城島シヌグ堂遺跡および高嶺遺跡と東の太平洋地域あるいは西の東中国海地域を問わず、ほぼ全域において分布していることが判る。

次に、時期的な出土状況についてであるが、各時代における各期ごとの詳細な量的変遷などは明らかにすることができなかったが、大略として、食料残滓としての最古例は沖縄諸島地域の前Ⅱ期（縄文前期併行）の嘉手納町野国貝塚群B地点例（岸本他1984）を初出とし、以後近世までの遺跡で連続と出土している（表2）。

しかし、肋骨や頬骨、あるいは指骨などを利用した骨製品の出現は若干後出し、沖縄諸島地域の前Ⅳ期（縄文後期併行）になると、貝製品やイノシシなどを含めた他種の利用製品などの出現と相俟つて、肋骨を主体とした製品が登場するとともに、同期後半から後続する前V期（縄文晚期併行）前半頃にはその種類やバリエーションのども拡大する傾向が見られる。とりわけ、当該期を代表するものとして、琉球列島にしか見られない蝶形や獸形骨製品（図5:16~18）の使用素材も肋骨や頬骨である（島袋1991・金子2000）。から

表2 ジュゴンの食料残滓および骨製品の時期的変遷

旧石器時代	縄文時代					弥生～奈良時代		グスク時代	近世		
	草創期	早期	前期	中期	後期	併行期					
食料残滓											
骨 製 品											

次期の沖縄後期（弥生～平安前期併行）になると、多少の減少傾向を示すが、弥生時代併行期に伊江村ナガラ原西貝塚例などに見られるように（安里他1979a）、当該期の九州弥生時代においても入手困難であった銅劍を模したと思われる劍状製品などの質感や強靱性などを必要とする製品に使用されていたことが窺える。

なお、宮古・八重山地域の南琉球圏でも、最古に位置づけられている新石器時代前期に属する竹富町下田原貝塚以降、近世に至る各時代にわたっての出土が見られる。

そして、グスク時代になると、沖縄諸島地域から宮古・八重山諸島地域の沖縄県下のほぼ全域で、

尖頭状製品、骨鐵、骨製鐵、ヤス頭状製品などと報告されている鉄鐵を模したと推される肋骨利用の有茎の製品が出土する（図6:1~8）。これは、入手が容易でない貴重な鉄素材をウシの脛骨などとともに、骨に材質置換した鐵写しであろう。

本集成作業を行うにあたって手を煩わせた大城勝江、上原園子、城間千鶴子、比嘉優子、浜元春江、外間瞳、藤田奈緒美に銘記して深謝の意を表する。

なお、本調査研究は（財）高梨学術奨励基金より、1997（平成9）年度に筆者に与えられた調査・研究助成「ジュゴン骨の基礎的研究」の成果の一部を含んでいることを謝意を込めて銘記する。

（もりもと　いさお：調査課長）

＜註＞

- 1) 管見の限り、琉球列島に南接する台湾でも東南海上に位置する火燒島（現名：録島）の油子湖遺跡で幼獣の犬歯を利用した垂飾状製品の出土例が知られている（鹿野1946）。
- 2) 徐葆光『中山傳信錄』下（沖縄県立図書館編1977）

「〔海馬〕馬首魚身無レ鱗肉如レ豕ノ頬難シレ得ル者ハ進ムレ王ニ」

意訳：〔ジュゴン〕頭は馬で、体は魚であるが、鱗はない。肉は豚のようで、なかなか手に入らない。手に入ると、まず国王に進む（原田1999）。

他に『元治元年支那冊封使來諸記』下巻に「三段宮碗四一 海馬 為心頭 小エヒ」とあり。

また、戸部良熙『大島筆記』の「諸産物大様」に「一 海馬 珍しき物也。丸さのまわり五尺計。長さ二間計。鱗なく大なる鱗もなし。頭は馬の如し。絲滿と云所にて取たるを、潮平子見たる由云えり。皮付の所を乾物にして國王え獻する由也。薩摩にても殊外調寶する事也。爰許にて云海馬も有り、たつのをとしごとも云。安産の呪にすると云へり。夫とは大に違へり」（下線筆者）（比嘉・新里解題1968）。

- 3) 新川 明、1987：人魚と島びとのロマン、『新南島風土記』、pp99~104、朝日新聞社、東京。
- 4) 三木 健、1987：無人の島に人が帰るとき、Coralway、10、pp31~32、南西航空、那覇。
- 5) 高良倉吉、1982：人魚と王様—知られざる沖縄の歴史・9ー、青い海、12巻第3号(111号)、pp122~125、青い海出版社、那覇。
- 6) 高良1969によれば、ジュゴンの泣き声が赤ちゃんの鳴き声に似ていることからアカンガイユ（赤ん坊魚）と称されたという。

＜参考文献＞

- 江崎梯三、1935：八重山遊記－4－（ザンノ魚）、ドルメン、第4巻第4号、pp305~311、岡書店、東京。
恵原義盛、1973：十 ユリモン（寄り物）、『奄美生活誌』、pp302、木耳社、東京。
沖縄県立図書館・編、1977：徐葆光『中山傳信錄』、下、巻6、（郷土史講座テキスト冊封使録集十一）、pp230、沖縄県立図書館、那覇。
大山 柏、1944：第一編総合 第二章食料 第五節動物質食料 三哺乳類 十一特殊哺乳類 註 16 『基礎史前学』、pp359・363~364、弘文社、東京。
鹿野忠雄、1946：三〇 火燒島における先史學的豫察、『東南亞細亞民族學先史學研究』、第一巻、pp398~424、矢島書房、東京、pp418に「八、歯牙製品 恐らく儒艮幼獣の犬歯と思はれるもの（直良信夫氏の示教による）の基部に小孔を穿ち、身飾品として懸垂したと思はれるものが一個出土している」との記載がある。
金子浩昌、1984：海牛目 ジュゴン、考古学シリーズ#『貝塚と獸骨の知識 人と動物のかかわり』、pp148~149、東京美術、東京。
——、2000：「蝶形骨器」の素材について、高宮廣衛先生古稀記念論文集刊行会編『琉球・東アジアの人と文化（上巻）高宮廣衛先生古稀記念論文集』、pp47~54、同刊行会。

- 環境省, 2003: 平成14年度 ジュゴンと藻場の広域的調査報告書, (財)自然環境研究センター, 東京.
- 酒詰伸男, 1961:『日本縄文石器時代食料総説』, pp117, 土曜会, 京都.
- 高良鉄夫, 1969:六海の珍獣・ジュゴン(人魚),『琉球の自然と風物(特殊動物を探る)』, pp30~35, 琉球文教図書, 那覇.
- 西脇昌治, 1984: ジュゴンの話, 今西錦司・戸川幸夫・中西悟峯監修『全集 日本動物誌 30』, pp 5~52, 講談社, 東京.
- 原田禹雄, 1999:『徐葆光 中山傳信錄 新訳注版』, pp.538, 榎樹書林, 宜野湾.
- 比嘉春潮・新里恵二解題, 1968: 戸部良熙 大島筆記 上, 宮本常一・原口虎雄・比嘉春潮編『日本庶民生活史料集成 第一巻 探検・紀行・地誌(南島篇)』, pp359~360, 三一書房, 東京.
- 宮城信之, 1980: 8-ジュゴンとクジラ, 木崎甲子郎編『琉球の自然史』, pp157~166, 築地書館, 東京.
- 盛本 熊, 1986: ジュゴンの調理および食法, 考古学ジャーナル, NO409, pp 2~5, ニューサイエンス社, 東京.
- , 2000: 骨角製品からみた奄美・沖縄地域の交流史, 古代文化, 第52巻3号, pp44(172)~49(177), (財)古代學協会, 京都.
- 【集成(暫定)に関する発掘調査報告書等一覧】
- 安里嗣淳・他, 1979a : 志見川島遺跡群-岩立地区埋葬構造の調査- 第三次発掘調査報告書, 伊是名村文化財調査報告書8集, 伊是名村教育委員会, 沖縄県伊是名村.
- , 1979b: 伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書-概報篇 自然遺物篇-, 伊江村文化財調査報告第8集, 伊江村教育委員会, 沖縄県伊江村.
- , 1979: 伊是名貝塚緊急発掘調査報告書, 伊是名村文化財調査報告書第4集, 伊是名村教育委員会, 沖縄県伊是名村.
- ・他, 1981: 沖縄県玉城村百名第二貝塚の試掘調査, 沖縄県文化財調査報告書第38集, 沖縄県教育委員会, 那覇.
- ・他, 1983: 伊江島阿良貝塚発掘調査報告書, 沖縄県文化財調査報告書第48集, 沖縄県教育委員会, 那覇.
- ・他, 1984a: 勝連城跡-南貝塚および二の丸北地点の発掘調査-, 勝連町の文化財第6集, 勝連町教育委員会, 沖縄県勝連町.
- ・他, 1984b: 宮古島城辺町 長間底遺跡発掘調査報告, 沖縄文化財調査報告書第56集, 沖縄県教育委員会, 那覇.
- ・他, 1985a : 与那国島トゥグル浜遺跡-与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告, 沖縄県文化財調査報告書第66集, 沖縄県教育委員会, 那覇.
- ・他, 1985b : 伊江島具志原貝塚の概要, 沖縄県文化財調査報告書第61集, 沖縄県教育委員会, 那覇.
- ・他, 1986: 知花遺跡-沖縄自動車道(石川~那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書-, 沖縄県文化財調査報告書第77集, 沖縄県教育委員会, 那覇.
- Shijun ASATO, 1990: THE URASOKO SITE A Sketch of the Excavation in Photographs, The Gusukube Town Board of Excavation, Okinawa, Japan.
- 後中筋正徳・岸本義彦, 1983: 山原貝塚発掘調査概要, 石垣市教育委員会, 石垣.
- 池畠耕一・他, 1984: あやまる第2貝塚, 笠利町文化財調査報告NO.7, 笠利町教育委員会, 鹿児島県笠利町.
- 石堂徳一・当真嗣一・編, 1977: フルスト原遺跡, 石垣市文化財調査報告書第1集, 石垣市教育委員会, 石垣.
- 上原 静・他, 1983a: 古宇利原遺跡発掘調査報告書, 今歸仁村文化財調査報告書第8集, 今歸仁村教育委員会, 沖縄県今帰仁村.
- ・他, 1983b, : 伊武部貝塚発掘調査報告書 国道58号拡幅工事に伴う緊急発掘調査-遺構・石器・貝製品・

- 貝殻編-, 沖縄県文化財調査報告書第51集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1992: 久良波貝塚, 沖縄県文化財調査報告書第108集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1993: 勝連町の遺跡-遺跡詳細分布調査報告書-, 勝連町の文化財第17集, 沖縄県勝連町。
- 江上幹幸・馬瀬和雄・編, 2003: アラフ遺跡調査研究 I-沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告書-, アラフ遺跡調査団。
- 大田宏好・他, 1983: ガジャンビラ丘陵遺跡-ガジャンビラ丘陵遺跡発掘調査報告書-, 那覇市文化財調査報告書第7集, 那覇市教育委員会, 那覇。
- 大城秀子・他, 1994: 下上原貝塚-個人住宅建設に係る緊急発掘調査-, 知念村文化財調査報告書第6集, 知念村教育委員会, 沖縄県知念村。
- 大城秀子・他, 2002: 热田原貝塚発掘調査報告書, 知念村文化財調査報告書第10集, 知念村教育委員会, 沖縄県知念村。
- 大城慧・金城亀信・島袋春美・編, 1984: カンドウ原遺跡-灌・排水工事に係る緊急発掘調査-, 沖縄県文化財調査報告書第58集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- 大城慧・編, 1983a: 我謝遺跡-個人住建設に伴う緊急発掘調査-, 西原町文化財調査報告書第4集, 西原町教育委員会, 沖縄県西原町。
- ・編, 1983b: 我謝遺跡-分譲宅地造成に係る緊急発掘調査-, 西原町文化財調査報告書第5集, 西原町教育委員会, 沖縄県西原町。
- 大城慧・大城剛・他, 1986: 地荒原貝塚-個人住宅建設に係る発掘調査報告-, 具志川市教育委員会, 具志川。
- ・他, 1986: 地荒原遺跡-県道10号改良工事に伴う発掘調査報告-, 沖縄県文化財調査報告書第75集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1990: ぐすぐ グスク分布調査報告書(Ⅱ)-宮古諸島-, 沖縄県文化財調査報告書第94集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1994: 屋良グスク-屋良城跡公園整備計画に伴う範囲確認調査-, 嘉手納町文化財調査報告書第1集, 嘉手納町教育委員会, 沖縄県嘉手納町。
- 大山柏, 1920:『琉球伊波貝塚発掘報告』, 斎藤忠監修・解説, 1982:復刻 日本考古学文献集成<2>, 第一書房, 東京。
- , 1944: 第一編総合 第二章食料 第五節動物質食料 三哺乳類 十一特殊哺乳類, 註16, 『基礎史前学』, pp359~364, 弘文社, 東京。
- 沖縄県伊是名貝塚学術調査団, 2002: 伊是名貝塚-沖縄県伊是名貝塚の調査と研究-, 索誠社出版, 東京。
- 賀川光夫・多和田真淳, 1959: 沖縄県宜野湾市大山貝塚調査概要, 沖縄県教育委員会監修, 1978:『沖縄文化財報告1956~1962』, pp151~167, 那覇出版社, 那覇。
- 片桐千垂紀・他, 2003: 首里城跡-右披門及び周辺地区発掘調査報告書-, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集, 沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄県西原町。
- 岸本義彦・編, 1979: 地荒原遺跡-苦增原遺跡-具志川市文化財調査報告書第3集, 具志川市教育委員会, 具志川。
- ・他, 1981: 久里原貝塚範囲確認調査報告書, 伊平屋村文化財調査報告書第1集, 伊平屋村教育委員会, 沖縄県伊平屋村。
- ・他, 1982: 古座間味貝塚-範囲確認調査報告書-, 沖縄県文化財調査報告書第43集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1984: 野国-野国貝塚群B地点発掘調査報告-, 沖縄県文化財調査報告書第57集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1986: 具志堅貝塚発掘調査報告, 本部町文化財調査報告書第3集, 本部町教育委員会, 沖縄県本部町。

- ・他, 1988 : 知場貝塚遺跡-発掘調査報告-, 本部町文化財調査報告書第5集, 本部町教育委員会, 沖縄県本部町。
- ・他, 1989 : 宇佐浜遺跡発掘調査報告, 沖縄県文化財調査報告書第93集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1997 : 伊江島・具志原貝塚発掘調査報告, 沖縄県文化財調査報告書第130集, 沖縄県教育委員会, 那覇, 岸本利枝・他, 1996 : 部瀬名貝塚-ブセナリゾート開発に伴う緊急発掘調査報告書-, 名護市教育委員会, 名護。
- 金武正紀・他, 1978 : 津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書, 沖縄県文化財調査報告書第17集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1980a : 宇堅貝塚群, アカジャンガ-貝塚発掘調査報告, 具志川市教育委員会, 具志川。
- ・他, 1980b : 石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告 大田原遺跡 神田貝塚 ヤマバレー遺跡 附編 平地原遺跡表面採集遺物, 沖縄県文化財調査報告書第30集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1985 : シヌグ堂遺跡-第1・2・3次発掘調査報告-, 沖縄県文化財調査報告書第67集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1997 : 銘苅原遺跡-那覇新都心土地地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳ-, 那覇市文化財調査報告書第35集, 那覇市教育委員会, 那覇市。
- 金武正紀・宮里末廣・編, 1983 : 今歸仁城跡発掘調査報告 I, 今歸仁村文化財調査報告書第9集, 今歸仁村教育委員会, 沖縄県今歸仁村
- 金武正紀・金城亀信・編, 1986 : 下田原貝塚・大泊浜貝塚-第1・2・3次発掘調査報告-, 沖縄県文化財調査報告書第74集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- 金城亀信・他, 1989 : 宮城島遺跡分布調査報告 1.宮城島の遺跡 2.高嶺遺跡, 沖縄県文化財調査報告書第92集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・他, 1990 : 阿波根古島遺跡-那覇・糸満道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告-, 沖縄県文化財調査報告書第96集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- 金城亀信・編, 1991 : 西表島船浦スラ所跡-港湾施設用地工事等に伴う発掘調査-, 沖縄県文化財調査報告書第101集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- 湖城 清・他, 1985 : 米須貝塚-範囲確認調査報告書-, 糸満市文化財調査報告書第5集, 糸満市教育委員会, 糸満。
- ・他, 1996 : 真栄里貝塚ほか発掘調査報告, 糸満市文化財調査報告書第12集, 糸満市教育委員会, 糸満。
- 湖城 清・大城一成・編, 2003 : 大度貝塚ほか発掘調査報告, 糸満市文化財調査報告書第19集, 糸満市教育委員会, 糸満。
- 呉屋義勝・編, 1984 : 喜友名遺跡群, 宜野湾市文化財調査報告書第5集, 宜野湾市教育委員会, 宜野湾。
- ・他, 1989 : 安座間原第1遺跡, 日本考古学年報 1987年度, 日本考古学協会, 東京。
- ・編, 1998a : 伊佐前原第-・第二遺跡-キャンプ瑞慶麿基地内の陸軍貯油施設送油管整備工事に係る緊急発掘調査報告書-, 宜野湾市文化財調査報告書第28集, 宜野湾市教育委員会, 宜野湾。
- ・編, 1998b : 都市計画街路大謝名・真志喜線建設工事関係埋蔵文化財発掘調査概要-真志喜富盛原第二遺跡・真志喜藏当原遺跡-, 宜野湾市文化財調査報告書第27集, 宜野湾市教育委員会, 宜野湾。
- 酒詰仲男, 1961 :『日本縄文石器時代食料総説』, pp117, 土曜会, 京都。
- 島田貞彦, 1932 : 沖縄県崎樋川貝塚, 歴史と地理, 第30卷第5号, pp398~410, 京都大学, 京都。
- 島 弘・他, 1986 : 備瀬貝塚-下水道工事に伴う緊急発掘調査報告-, 本部町文化財調査報告書第4集, 本部町教育委員会, 沖縄県本部町。
- ・他, 2001 : 首里崎山古墓群-首里崎山公園事業に伴う緊急発掘調査報告-, 那覇市文化財調査報告書第47集, 那覇市教育委員会, 那覇。
- 島袋 洋・他, 1985 : 名蔵貝塚群発掘調査報告書-県道改良工事に伴う緊急発掘調査-, 沖縄県文化財調査報告書第64

- 集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・他、1987：石川市古く知原貝塚-沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)-、沖縄県文化財調査報告書第84集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・他、1992：安仁屋トゥンヤマ遺跡-下級下仕官隊舎建設に伴う緊急発掘調査報告-、沖縄県文化財調査報告書第105集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・編、1993：湧田古窯跡(Ⅰ)-県庁舎行政棟建設に係る発掘調査-、沖縄県文化財調査報告書第111集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・編、1995：湧田古窯跡(Ⅱ)-県庁舎議会棟建設に係る発掘調査-、沖縄県文化財調査報告書第121集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・他、1996：平敷屋トウバル遺跡-ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書-、沖縄県文化財調査報告書第125集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・編、1995：嘉手納町の遺跡-詳細分布調査-、嘉手納町文化財調査報告書第2集、嘉手納町教育委員会、沖縄県嘉手納町。
- ・編、1999：湧田古窯跡(Ⅳ)-県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査-、沖縄県文化財調査報告書第136集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・編、2001：天界寺跡(Ⅰ)-首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急調査-、沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集、沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄県西原町。
- 島袋春美、1991：いわゆる「蝶形骨製品」について、南島考古、N011、pp 1～20、沖縄考古学会、那覇。
- 砂辺和正・編、1992：住屋遺跡-平良市新庁舎建設に伴う記録保存の為の緊急発掘調査概報、平良市文化財調査報告書第2集、平良市教育委員会、平良。
- ・編、1999：保里遺跡(旧県立厚生園跡地) 県営団地建設に伴う緊急発掘調査概報、平良市文化財調査報告書第3集、平良市教育委員会、平良。
- 高宮廣衛・他、1979a：室川貝塚範囲確認調査報告書、沖縄市文化財調査報告書第1集、沖縄市教育委員会、沖縄市。
- ・他、1979b：室川貝塚-第3～4次発掘調査概報-、沖国大考古、第3号、沖縄国際大学文学部考古学研究室、宜野湾。
- ・他、1980：室川貝塚-第2～4次発掘調査概報-、沖国大考古、第4号、沖縄国際大学文学部考古学研究室、宜野湾。
- ・他、1981：室川貝塚-第3～5次発掘調査概報-、沖国大考古、第5号、沖縄国際大学文学部考古学研究室、宜野湾。
- ・他、1982：室川貝塚-第4次発掘調査概報-、沖国大考古、第6号、沖縄国際大学文学部考古学研究室、宜野湾。
- ・他、1985a：沖永良部島神野貝塚発掘調査(その1)-Aトレanche-、沖国大考古、第7号、沖縄国際大学文学部考古学研究室、宜野湾。
- ・他、1985b：沖永良部島神野貝塚発掘調査(その2)-Bトレanche-、沖国大考古、第8号、沖縄国際大学文学部考古学研究室、宜野湾。
- ・他、1987：沖永良部島神野貝塚発掘調査(その3)、沖国大考古、第9号、沖縄国際大学考古学研究室、宜野湾。
- ・他、1999：渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告、沖国大考古、第12号、沖縄国際大学文学部考古学研究室。

宜野湾

- 嵩元政秀・他, 1980 : 仲宗根貝塚-第一・第二次発掘調査報告概報-, 沖縄県文化財調査報告書第33集。沖縄県教育委員会, 那覇。
- 立神次郎・編, 1986 : 新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書 泉川遺跡, 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(39), 鹿児島県教育委員会, 鹿児島。
- 多和田淳淳・他, 1962 : 地荒原貝塚発掘報告, 沖縄県教育委員会監修, 1978:『沖縄文化財調査報告1956~1962』, pp351~362, 那覇出版社, 那覇。
- 知名定順・編, 1999 : 前原遺跡-県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書-, 宜野座村乃文化財14集。宜野座村教育委員会, 沖縄県宜野座村。
- 当真嗣一・他, 1980 : 大原-久米島大原貝塚群発掘調査報告-, 沖縄県文化財調査報告書第32集。沖縄県教育委員会, 那覇。
- ・編, 1983 : 稲福遺跡発掘調査報告書 (上御願地区)。沖縄県文化財調査報告書50集。沖縄県教育委員会, 那覇。
- 当真嗣一・上原靜・編, 1988 : 首里城跡-歎会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる造構調査-, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- 當銘清乃・編, 2001 : 伊佐前原第一遺跡-宜野湾北中城線 (伊佐~普天間) 道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書 (Ⅲ), 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集。沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄県西原町, 堂込秀人・編, 1990 : 上城跡 上城遺跡-県営畑地帯総合土地改良事業(真正地区)に伴う埋蔵文化財確認調査報告書, 与論町埋蔵文化財発掘調査報告書(1), 与論町教育委員会, 鹿児島県与論町。
- 友寄英一郎・高宮廣衡, 1968 : 伊江島具志原貝塚, 琉球大学法文学部紀要, 社会編, 第12号, pp37~76, 琉球大学法文学部, 那覇。
- 中村 愿・編, 1989 : 伊礼原B遺跡-旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査, 北谷町文化財調査報告書第8集, 北谷町教育委員会, 沖縄県北谷町。
- 仲宗根求・他, 1990 : 沖縄県読谷村長浜 吹出原遺跡-個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報告書-, 読谷村文化財調査報告書第9集, 読谷村教育委員会, 沖縄県読谷村。
- 長嶺均・大城慧・他, 1994 : エンナ村久良波貝塚-県道6号線改良工事に係る緊急発掘調査報告書-, 沖縄県文化財調査報告書第116集, 沖縄県教育委員会, 那覇。
- 西銘 章・編, 2001 : 首里城跡-下之御庭・用物座・瑞泉門・漏刻門・廣福門・木曳門跡発掘調査報告書-, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集。沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄県西原町。
- ・編, 2001 : ヤッチノガマ・カンジン原古墓群-県営かんがい排水事業 (かんじん地区) に係る埋蔵文化財調査報告書-, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集。沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄県西原町。
- 西平 剛・他, 1991 : 国指定史跡-糸数城跡-発掘調査報告書I-, 玉城村文化財調査報告書第1集。玉城村教育委員会, 沖縄県玉城村。
- 新田重清・嵩元政秀, 1960 : 嘉手納貝塚発掘調査報告書, 沖縄県教育委員会監修, 1978:『沖縄文化財調査報告1956~1962』, pp184~207, 那覇出版社, 那覇。
- 新田重清・他, 1977 : 渡喜仁浜原貝塚調査報告書 [1], 今帰仁村文化財報告書第1集。今帰仁村教育委員会, 沖縄県今帰仁村。
- 羽方 誠・編, 2003 : 戸並遺跡-那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査-, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第15集。沖縄県立埋蔵文化財センター, 沖縄県西原町。
- 比嘉賀盛・他, 1997 : 室川貝塚-沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書-, 沖縄市文化財調査報

- 告書第20集、沖縄市教育委員会、沖縄。
- 比嘉 聰・編、1999：喜友名貝塚・喜友名グスク-宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書（Ⅰ）-、沖縄県文化財調査報告書第134集、沖縄県教育委員会、那覇。
- 北條輝幸、1976：沖縄本島浦添貝塚出土のジュゴン(*Dugong dugon*)の上腕骨の同定と解剖学的ならびに人類学的考察、人類学雑誌、vol84-NO2、pp139～146、日本人類学会、東京。
- 、1991：沖縄浦添貝塚発掘のジュゴンの上腕骨の意義、『交流の考古学』三島格会長古稀記念号、pp234～240、肥後考古学会、熊本。
- 松川 章・他、1985：名護貝塚-県道116号線側溝改修工事に伴う緊急発掘調査報告書-、沖縄県文化財調査報告書第63集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・他、1990：城間古墓群-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書-、浦添市文化財調査報告書、浦添市教育委員会、浦添。
- ・編、1991：嘉門貝塚A-牧港補給基地開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ-、浦添市文化財調査報告書第18集、浦添市教育委員会、浦添。
- ・編、1992：城間遺跡-牧港補給地区開発工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ-、浦添市文化財調査報告書第19集、浦添市教育委員会、浦添。
- ・編、1993：嘉門貝塚B-牧港補給基地開発工事に伴う緊急発掘調査報告書Ⅳ-、浦添市文化財調査報告書第21集、浦添市教育委員会、浦添。
- 松村 聰、1919：『琉球荻堂貝塚』、斎藤忠監修・解説、1983：復刻 日本考古学文献集成<4>、第一書房、東京。
- 宮城利旭・他、1988：越來城-個人住宅建設に伴う記録保存調査及び範囲確認調査報告書-、沖縄市文化財調査報告書第11集、沖縄市教育委員会、沖縄。
- 宮城ゆりか・砂辺和正・編、2003：尻川遺跡-個人住宅建設予定に伴う緊急発掘調査報告書-、平良市文化財調査報告書第5集、平良市教育委員会、平良。
- 盛木 敦・編、1986：沖縄県宜野座村松田遺跡-一般国道329号改良工事に伴う緊急調査-、沖縄県文化財調査報告書第76集、沖縄県教育委員会、那覇。
- ・編、1989：久米島具志川村清水貝塚発掘調査報告書、具志川村文化財調査報告書第1集、具志川村教育委員会、沖縄県具志川村。
- ・他、2001：首里城跡-管理用道路地区発掘調査報告書-、沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集、沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄県西原町。
- 吉永正文・宮田栄二・編、1984：犬布田貝塚、伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)、伊仙町教育委員会、鹿児島県伊仙町。
- 与那嶼豊・編、1997：渡嘉敷後原遺跡群-老人保健施設（とよみ健康長寿の杜）建設工事に伴う緊急発掘調査報告-、豊見城村文化財調査報告書第5集、豊見城村教育委員会、沖縄県豊見城村。
- ・編、2003：宜保アガリヌ御獄-宜保土地区画整理事業埋蔵文化財調査業務-、豊見城市文化財調査報告書第6集、豊見城村教育委員会、沖縄県豊見城村。
- 渡辺 誠、1982：動物遺体1・哺乳類、『菜畑遺跡-佐賀県唐津市における初期稻作遺跡の調査-分析・考察編-』、pp309～419、唐津市教育委員会、唐津。

首里グスク出土の武具資料の一考察

Arms and Armor Excavated in Shuri *Gusuku*

山本 正昭・上里 隆史

YAMAMOTO Masaaki・UEZATO Takashi

ABSTRACT: The arms and armor excavated in Shuri *Gusuku* demonstrate that it was a castle with defensive function. Large numbers and considerable varieties of these artifacts were found from the sites including Shicyano una, Yomotsuza, Zuisen-mon, Rokoku-mon, Kofuku-mon and Kobiki-mon, as shown in the site reports. This paper focuses on the material found in Shimono Oniwa site and compares it with the arms and armor appearing in historic archives. As a result, it is understood that the material from Okinawa has some similarity to that of medieval-era Japan. Further study may shed additional light on their production and value.

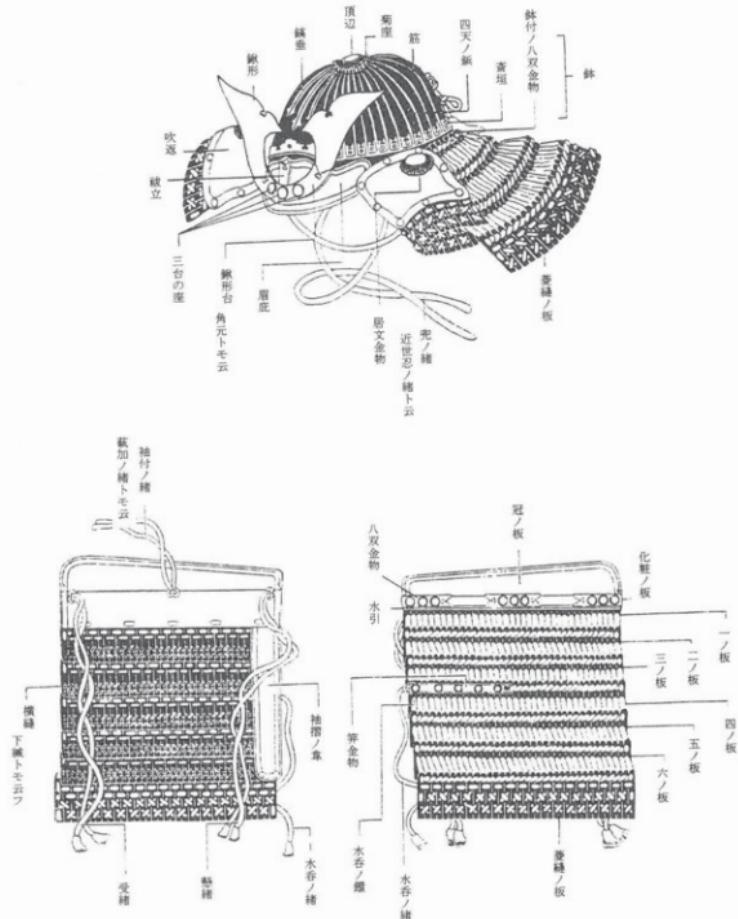
1. はじめに

首里グスク（註1）が機能し始めるのは過去の発掘調査成果から概ね14世紀代からと報告されている（註2）。この14世紀という時期は琉球列島各地にグスクと呼ばれる城館が林立し始める時期で、首里グスクもそれらの一つとして成立した遺跡である。14世紀代における首里グスクの様子を窺うことのできる史料は皆無で、発掘調査による考古学的成果に依る処が大きい。現在も漸次調査が進められており、今後においてこの時期の首里グスクの様相が解明されていくものと思われる。15世紀に入ると中山の中心が浦添グスクから首里グスクへと移されると共に、このことを契機にグスクの大規模化が進展していったと想定される。それは一つの国家としての体裁を整えるために進展していくものであると共に、当時における勢力、権力争いに耐え得る城郭としての首里グスクが機能要請されていたことの現れであると言える。首里グスクそのものは戦前まで残存していたが、その基本形が創造されたのは歴史的背景を踏まえれば防御的機能を要請した14～16世紀頃になるものと思われる。本稿ではその一端を解説していくために首里グスクの防御的機能を遺物からの側面で把握していくことを主な目的として論を進めていく。

防御的機能を最も端的に示す遺物として武具資料が掲げられる。首里グスクからは多種多様な武具資料が出土しており、これまで確認された総数は300点を下らない。また、それらは他のグスクから出土するそれには見られないほどの量と質を有しており、沖縄本島における武具資料を検証していく上で無視できない資料的価値を有している。

とりわけ廣福門、木曳門、用物座、下之御庭の各地区からは総数221個体の武具資料が確認されていることは注目に値する（表1）。これらの一部は既に、当センター刊行した「首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第3集(2001年刊行、以下『報告書』)において、残存度の高い資料を優先に、22点報告した。しかし紙数の都合で本来報告されるべき資料の報告までは叶わず、それらから遺漏したものも多くあった。また、報告後においてX線透過撮影を行った結果、錫で覆われ不鮮明であった文様の状況を明確に窺うことができた資料も一部見られた。

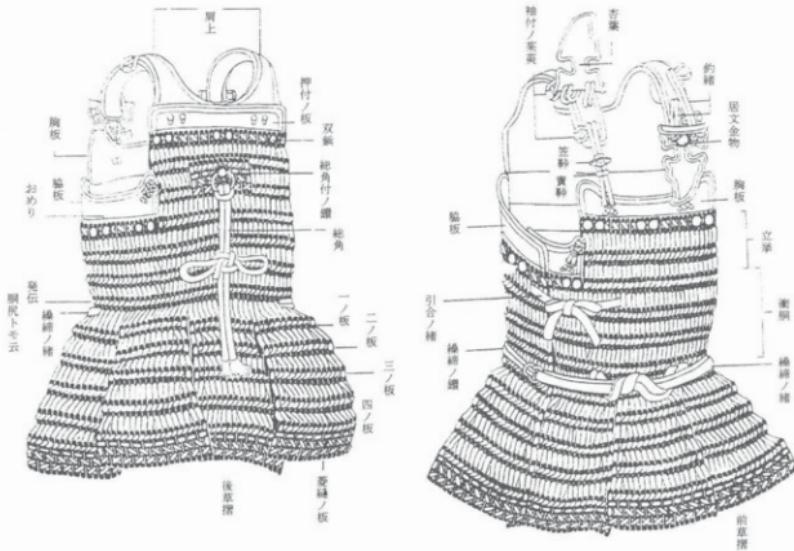
首里グスク出土の武具資料は文献資料においても確認することができ、それらの様相を垣間見ることができる。最も古いものでは15世紀の同時代史料に散見され、グスク時代における争いの様相を知



参考1兜・大袖の各部名称 (『新訂増補故実叢書 武装図説』明治図書出版1954に加筆)

る証左となることは言を待たない。

このように考古資料と文献資料の両資料から検討できる数少ない遺物として武具は位置付けることができる。よって本稿の前半部分においては、首里グスク廣福門、木曳門、用物座、下之御庭各地区出土の武具資料で遺漏した資料並びに報告書刊行後、新たに判明した成果について触れていき、そして後半部においては文献資料から窺うことができる首里グスク内で使用された武具資料について取り上げ、それらから読み取ることのできる武具資料の実相に迫っていきたい。



参考2 胴丸の各部名称（『新訂増補故実叢書 武装図説』明治図書出版 1954に加筆）

2. 下之御庭、木曳門、用物座、廣福門地区出土の武具資料

表1 首里城跡各地区出土武具リスト							
	廣福門	木曳門	用物座	下之庭	漏刻門	表探	計
鎧		2	1	1			4
切羽		2		1			3
銅彈		9	7	2			18
小札	6	24	11	12		4	57
鎖			1	1			2
兜前立	2	1	2				5
鎖形			1	1			2
八双金物	5	23	5	1		3	37
笠鞆		5	1	3			9
賣鞆	1	2	1		1		5
覆輪	3	20	7	9		2	41
環座	1			1			2
切子頭	1	1					2
茱萸金具		2		3			5
鉢	1	10	4	6			21
座金	1	5		2			8
計	21	106	41	43	1	9	221

表1 首里城跡各地区出土武具リスト

	廣福門	木曳門	用物座	下之庭	漏刻門	表採	計
鐸		2	1	1			4
切羽		2		1			3
銅彈		9	7	2			18
小札	6	24	11	12		4	57
鎖			1	1			2
兜前立	2	1	2				5
鎖形			1	1			2
八双金物	5	23	5	1		3	37
笠鞋		5	1	3			9
賣鞋	1	2	1		1		5
覆輪	3	20	7	9		2	41
環座	1			1			2
切子鎖	1	1					2
茱萸金具		2		3			5
鉢	1	10	4	6			21
座金	1	5		2			8
計	21	106	41	43	1	9	221

八双金物（図版2－1～11）

本資料は計37点確認されており、ここでは報告書から遺漏した10点を取り上げていきたい。法量並びに各寸法に関しては表2に示した通りである。全長を窺うことのできる資料は3点見られ、58cmと66cmがある。幅は最狭のもので1.6cm、最広のもので2.1cmと斑があるが概ね1.7～1.9cmの間に収まる。おそらくある一定の規格に則てつくられた金具であると思われる（註3）。



図版1 八双金物断面

既報告の資料では両端が魚尾状になるものと片側のみがそれであるものとに分類することができる。前者は1点、後者は8点確認されている。片側のみ魚尾状となるものは胸板の下方端部に取り付くものであり、両側共に魚尾状となるものは胸板の下方中央に取り付く。文様に関しても無文のものと有文のものがある。無文のものには鍍金がなされているものが見られる。有文のものは陽刻、則ち地彫りで蔓草若しくは唐草状の文様が描かれるもの（図版2－1, 3, 5, 7）がある。特に8は蔓草の茎の幅が一定ではなく、線にやや硬さが見られる点や、葉も角張った表現であることから日本本土には見られない琉球独自の表現方法と想定される。一方で線刻で描かれた草花文と魚々子で構成されるものも見られる（図版2－2, 4, 5, 6）。2は菊葉文、4は花文、5は枝菊文、6は梅樹文が線刻され、その線刻も毛彫りと蹴り彫りが見られる（註4）。しかし、その判別は明確ではない。前者は15世紀から16世紀前半にかけて見られる文様で、後者は16世紀代から見られる文様である（久保2002）。他には、1は鉢がそのまま残っており、八双金物に留めるために鉢の先は二股に割れているのが窺える（図版1）。

小札（図版2－12～15 図版3－16～28 図版4－29）

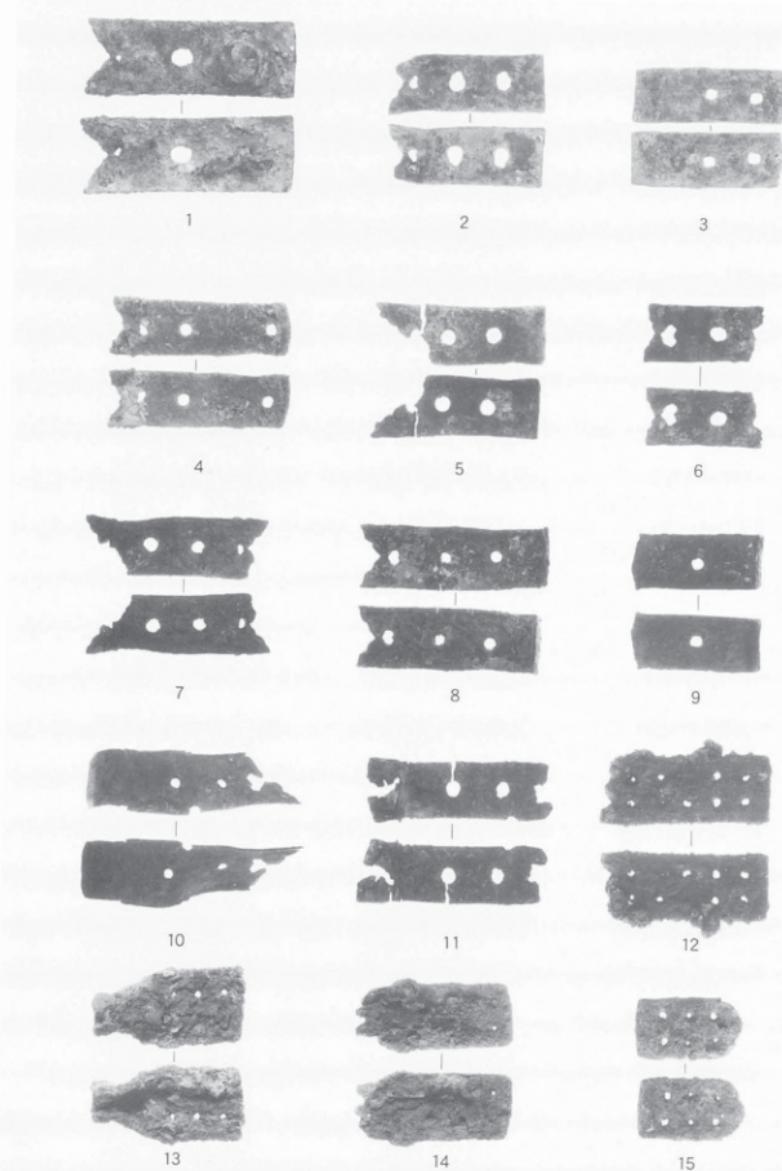
本資料は計57点確認されており、ここでは報告書から遺漏した18点を取り上げていきたい。小札の形態は本小札、伊予札、板札の3形態に大別することができる（註5）。札頭が二山状となるものは4点、斜位となるものは11点確認されている。孔が2列で並ぶ二目の小札は50点、孔が3列で並ぶ三目の小札は2点確認されている。これらの形態を見る限りでは本小札は札頭が斜位のものと三目札の計13点。伊予札は札頭が二山状のもの計4点が主に見られる。とりわけ三目札は沖縄県内において浦添グスク、勝連グスクに次いで3例目であり、全国的に見ても出土例は少なく、伝世品としては猿投神社の櫻島威大鎧をはじめとする大鎧に多く見られる（金山1999）。規格は様々で、最も札幅が広いものは28cmで狭いものは1cmとなっており、平均値は2cmとなっている。鉢がそのまま残るものも一点（図版3－26）見られる。

笠鞆（図版4－30～37）

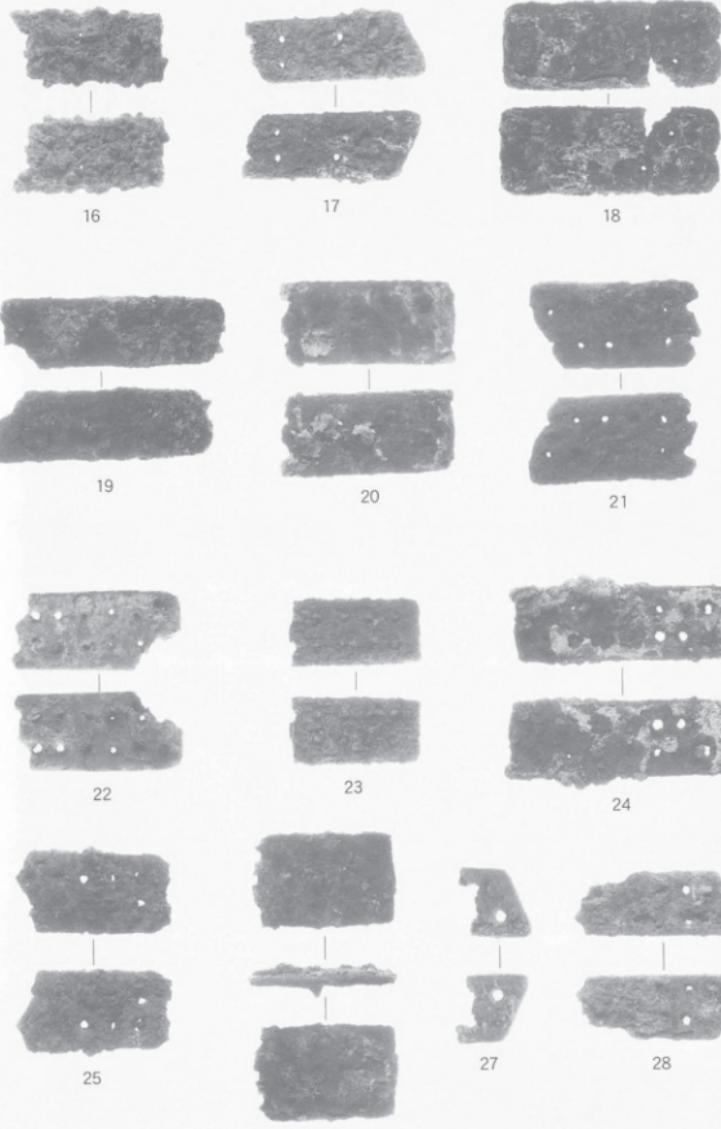
本資料は計9点確認されており、ここでは報告書から遺漏した8点を取り上げていきたい。笠鞆は肩等にかける高紐を懸け留めるための金属製の板状の部品である。全て完形資料で、表4を見る限りではそれぞれの資料における長さ、幅、厚みが同一であると言ったものは無く、規格に関しては様々であると言える。形態は継断面形が弓形状に湾曲しているものと直線状になるものとが見られる。金箔が残存する資料も2点見られることから鍍金がなされるという手の込んだつくりの武具があったことがこれらの資料から窺い知ることができる。

茱萸金具（図版4－38）

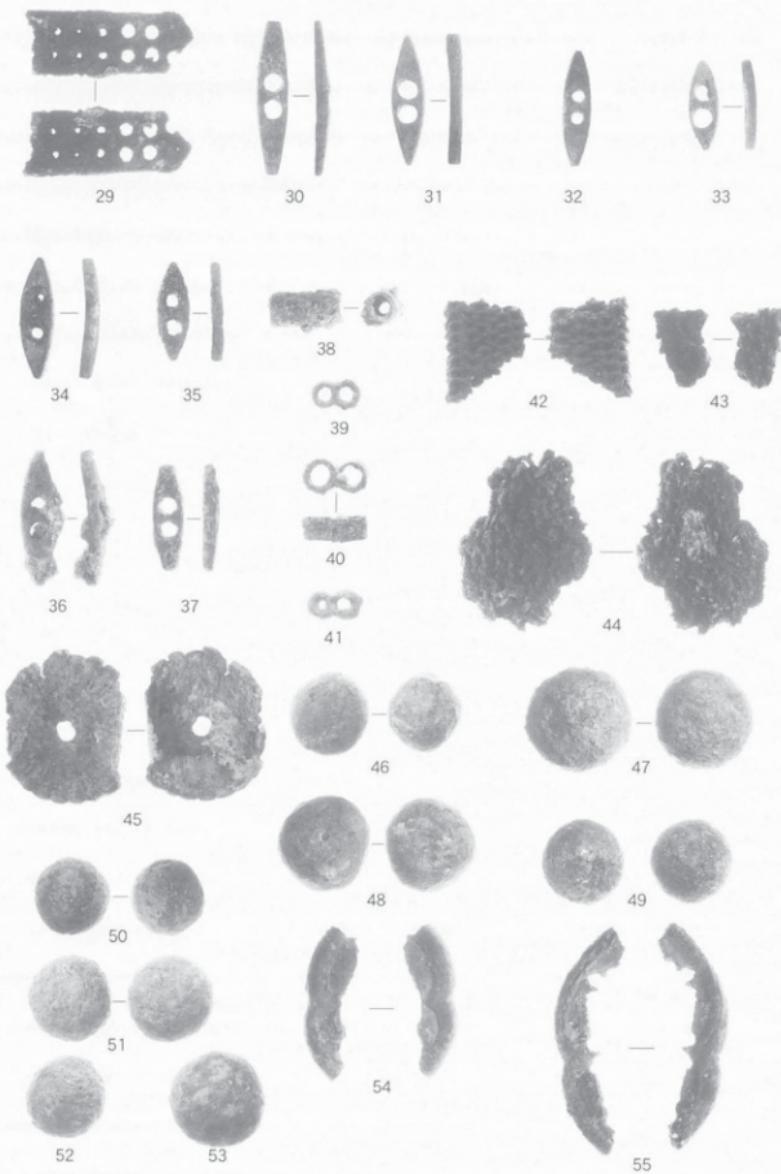
本資料は計5点確認されており、ここでは報告書から遺漏した完形資料1点を取り上げていきたい。茱萸金具は、袖の緒を結ぶための金具で筒状を呈する。断面形が楕円形状に歪んだ資料が多く見られ、



图版2 八双金物（1~11）小札（12~15）



図版3 小札 (16~28)



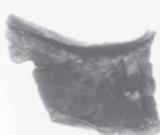
図版4 小札(29) 笠鞋(30~37) 茄黃金具(38) 貴賛(39~41) 鎖(42~44) 環座(45) 銅彈(46~53) 鍔(54,55)



56



57



58



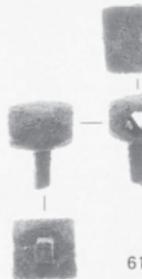
59



60



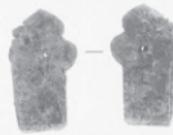
62



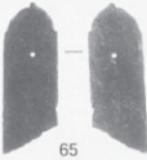
61



63



64



65

図版5 切羽(56,57) 前立台座(58,59) 環(60) 切子頭(61) 鋸形の一部(62,63) 前立飾りの一部か(64,65)

その規格も様々である。

責鉤（図版4-40,41）

本資料は計5点確認されており、ここでは報告書から遺漏した3点を取り上げていきたい。8の字状の金具で胸板部分に留められ、肩にかける高紐と胸板とを結びつける。厚みは5~6mmの比較的薄いつくりのものと、円筒形状のものを2つ繋ぎ合わせたような比較的、厚いつくりのものが見られる。

鎖（図版4-42~44）

本資料は計4点確認されており、ここでは3点取り上げていきたい。組み方が明確なものは2点見られる。42は無数の輪が確認されるが、鍛化し塊となり、馬蹄状に両端が接着する。44は鍛化が進行しており、所々に石灰分が付着している。黒化し、全体が接着した状態だが、一部に輪の繋がりを明瞭に確認できる。両資料共に1つの輪に4つの輪が組まれ、丸輪のみ縦横に繋ぐ八重鎖である。一つの環の直径は概ね4mmとなっている。兜の後ろに付属する鎖輪（しころ）の可能性も考えられるが明確ではない。首里グスク正殿から出土している鎖は兜の後部に付く鎖であった可能性が高く（金山1999）、当該資料に関してもその可能性を否定できない。

座金具（図版4-45）

本資料は計8点確認されており、ここでは報告書から遺漏した1点を取り上げていきたい。菊を象っており、鍛化がのため不明瞭であるが花弁状の文様を施す。表面と見られる面全体に鍍金がなされている。武具資料では大鎧の背後に付ける板を総角付板と呼称しており、それの中央よりやや上部に総角付環と呼ばれる座環を附する。当該資料はその座の部分と想定でき、その年代は大振りの菊花刻座から平安時代後期（11~12世紀）に相当する。武具以外に、調度品に取り付く金具の可能性も考えられる。

銅弾（図版4-46~53）

本資料は計18点確認されており、ここでは報告書から遺漏した3点を取り上げていきたい。全て完形資料で最も径が小さいものは1.4cm、最も径が大きいものは2.8cmとその大きさに関しては区々である。総ての資料はほぼ真円形を呈し、1点のみ面取りがなされる（図版4-48）。用途に関しては火器の弾の可能性が考えられるが、現段階では詳細については不明である。

鈸（図版4-54,55）

本資料は計4点確認されており、ここでは報告書から遺漏した2点を取り上げていきたい。総ての資料が小片で全形を窺えるものは無い。外輪の形状から透かしが入った木瓜形と想定されるものが1点確認されている（図版4-54, 55）。他は先のものと類似した小片資料が1点見られるのみである。

切羽（図版5-56,57）

本資料は計3点確認されており、ここでは2点を取り上げていきたい。切羽は刀の鈸の両側に入れ鈸を固定する金具である。2点は外輪から木瓜形と見られ、中央には楔形の孔が開けられている。但し、今回報告する切羽は短刀の鈸とする可能性も挙げができるので、その用途に関しては厳

密に比定することはできない。

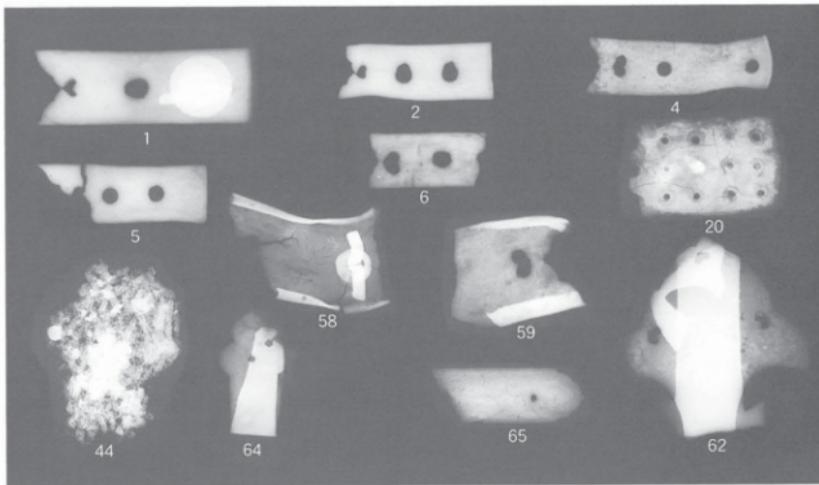
その他の想定される武具資料

上記以外に板状製品と前立て台座が2点づつ（図版5-6263）、前立て飾りの一部と思われる金具（図版5-6465）切り子頭（図版5-61）、環（図版5-60）が各1点確認されている。何れも完形品ではなく鋸化が進行している。板状製品は当初、鍔形の一部と考えたが、従来には無い形状であることから再考した結果、久保智康氏から調度品の金具であるとのご教示を得た。全体を蹴り彫りで蕨手の蓮唐草を描き、その表現方法は平安から鎌倉期（10～13世紀頃）にかけての宝相華に見られる表現に近似する。蹴彫りは先に紹介した八双金物と比べて明瞭であり、沖縄県内で出土している飾り金具の中では最も古い様相を示している。また、一部に唐草の輪郭を魚々子で縁取る表現方法は日本本土では見られないことから琉球独自の表現方法と想定される。武具資料ではないが参考までに掲げておく。

前立て台座は急なカーブを有している（図版5-58）ことからおそらく室町時代（14世紀後半から16世紀）に比定することができる（笠間1997）。線刻で花文が描かれ、毛彫りと蹴り彫りが見られる。しかし、その判別は明確ではない。環は武具資料では水呑の環若しくは総角付の環が考えられる。但し、調度品でも環は多用されることから必ずしも武具資料に限定されることは限らない。前立て飾りの一部については図版5-62が鍔形の一部と思われる。X線透過の結果、3枚が溶着していることが確認できた（図版6）。

3. 小括

足早に各武具資料を概観していくが、一遺跡内においてこのように大量の武具資料が出土するのは希有な例であると言える。加えて、これらの資料で年代が判明するものは概ね中世相当期であることもまた注目されるところである。



図版6 武具資料X線透過写真

これだけの量の武具資料がまとめて出土した例は首里グスク内では南殿、北殿跡が知られている（矢沢、上原1998）。出土遺物は小札、八双金物、鍔形、笠鉢、責鉢、切羽、座金具、前立て台座、環、鍔、銅弾があり、その種類や各遺物の特徴は本報告資料と大差ない。但し、前立て台座に関しては南殿、北殿跡出土のものは近世段階に限られるといった特徴が見られる。今回の調査区とは距離的に隣接している場所であり、両地区から出土した遺物の中には同一武具の部品となる蓋然性が高い資料も含まれる。

ここで報告書及び今回報告した八双金物、前立て台座の残存状況が良好な資料についてX線透過撮影を行った。結果、肉眼では判別できない文様を確認することができ、中でも魚々子の打ち方にいくつかのパターンが見られたので紹介する。まず最も多かった魚々子の打ち方は、①横位、若しくは模様の輪郭に沿うといった規則的に打つ方法で、魚々子同士が切り合わないパターンである（図版2-8、4）。次に、②魚々子同士の切り合いか見られ、やや規則性に乏しいパターン（図版2-5、2）が続いている。少数ではあるが、③全く規則性が見られないもの（報告書掲載資料 第87図9）、④かなりまばらに打たれるもの（報告書掲載資料 第87図11.13）が見られる。

本報告資料以外に、覆輪と考えられる断面形がU字形となる棒状の金属製品が41点確認された。うち報告書では1点報告している。報告書から遺漏した資料には鍍金されているものもあり、武具の覆輪と考えれば今回報告した武具資料の種類と量に見合うだけのものはあると言える。実際、首里グスク内に所蔵されていた武具の実数は明らかではないが、先の南殿、北殿跡から出土した遺物を加えるとそれらの種類と量からある程度の武具の数がグスク内に存在していたものと想定される。文献資料でもその一端を窺い知ることができ、次章において詳しく触れていく。今回報告した資料の大半が少なくとも中世相当期、すなわち沖縄本島各地で争いが展開されたグスク時代に比定されることからこれらの資料における歴史的意義は大きいと言える。

他方で、本報告資料が琉球で製作されたものか、日本本土で製作されたものかが今後における研究の課題として掲げができる。武具資料に関しては首里グスク内においては京の内地区から鍛冶場跡が確認されている（金武1996）ことから、グスク内で製作された可能性を指摘することができる。しかし、主として銭貨が火を受けて変形ないしは碎片化している状況であるという報告で、武具資料が一括で確認されているというわけではない。よって首里グスク内の鍛冶場で武具が製作されていたという直接的な結び付きを窺うことはできないものの、武具を製作することができる一定の条件を満たしていたことは言える。今後、日本各地域で製作されたと考えられる武具資料との比較、検討を進めていく必要があることは言を待たない（註6）。

4. 文献史料からみた首里グスクの武具

15世紀頃の首里グスクにおける武具の使用状況は、『朝鮮王朝実録』など信頼性の高い文献史料から窺い知ることができる。これらの史料は1462～1479年のほぼ同時期の史料として一括して考察でき、また首里グスクから発掘された資料の形態（中世相当期）とも対応している。つまり沖縄における武具を15世紀前後のほぼ限定された時期と「首里グスク」という特定された場所で、考古遺物と文献史料の双方から比較考察することができる貴重な例といえる。本章は首里グスクで使用されていた武具について文献史料の側から分析を行い、その特徴を明らかにしたい。

15世紀における首里グスクの状況は高良倉吉氏によって若干の考察がされている（高良1996）。それによると、首里グスクは外城・中城・内城の三重構成となっており、内城は板葺きで朱色に塗装された二層三階の正殿が立地し、それを取り巻く回廊式の建物があり、広場空間（御庭）を形成して

いた。中城には日本産の甲冑を身につけた軍士が控え、外城には倉庫・厩があつたという。では首里グスクを警備していた軍士の軍装を詳しくみてみよう。なお、武具が使用されていた状況も知るために、首里グスクと軍士に関連する史料を合わせて掲げておく。

【史料A】『朝鮮世祖実録』八年（1462）二月辛巳条（註7）

- ①王城は凡そ三重にして、外城に倉庫及び厩有り。中城には待衛軍二百余、これに居る。内城は二の三層閣有り。大概、勤政殿の如し。
- ②一、軍士、軍士百余を以て領と為し、更日、達直す。然れども其の原数、則ち未だ悉知し易からず。但だ軍装・甲冑、本朝と異なる無し。鉄を以て片を作り、其の薄きこと紙の如くにして甲領に附して護頸の様の如くす。又、鉄を以て人面を作り、面上に着け、形は仮面の如し。環刀、楯、本朝と異なる無し。但だ鉄を以て四枝の刃を為り、其の形は屈曲し、木の二丈許りなるを以て柄を作りて之に用い、其の俗これを拘と謂う。遠處の罪人を斬するの兵なり。
- ③一、火筒、其の大小、及び体制は一に本国の制の如し。
- ④一、弓矢、桑木を以て弓を為り、苧を以て絃を為る。矢は則ち本朝の磨箭の如し。或いは竹を以て鏃を為る者有り。
- ※【史料A】は1456年、梁成らが濟州島から出発。久米島に漂着し沖縄島へ移送された際の首里グスクについての見聞記録である。当時の琉球国王は尚泰久。護佐丸・阿麻和利の乱（1458）の2年前である。①王城は三重で外城に倉庫・厩があり、中城には200名前後の軍隊が警備に当たっている。内城には2、3層ばかりの閣があり、朝鮮の勤政殿のようである。②軍士は約100名が日をかえて交代で宿直する。軍装・甲冑は朝鮮のものと変わらない。紙のように薄い鉄片で構成されたものを兜の襟に付け、首筋を守るようになっている。鉄で作られた仮面のようなものを顔に着けている。環刀、楯も朝鮮のものと変わらない。4つの刃に刀身が屈曲し長さ2丈の柄の武器があり、これを「拘」といって遠所の罪人を斬るための武器である。③火筒は大きさ、形状ともに朝鮮のものと同じようなものである。④弓矢は桑の木で弓を作り、絃は苧でつくる。矢は朝鮮の磨箭のようだが、鏃は竹でつくるものもある。

【史料B】『朝鮮世祖実録』八年（1462）二月癸巳条（註8）

- ①弓箭、甲冑、刀劍の制を問うに、答えて曰く、「其の形制は日本に一如す。」
- ②王宮は乾清殿と曰い、三層有り。正門は紫宸と曰い、城三重有り。（中略）闕内は常に軍士無く、只城外に於て軍士が日を更めて宿す。
- ③講武の事を問うに、答えて曰く「一年に一度軍を徵す。臨時に特に王族一人に命じて武を講ず。王は親しく行わす。」

※【史料B】は1462年、朝鮮への漂着民送還の際に、琉球国王使の普須古らが琉球の風俗や状況を朝鮮王朝側に説明したものである。当時の琉球国王は尚徳。①弓矢、甲冑、刀劍の形は日本と同一のものである。②王宮は「乾清殿」といい三層であり、正門は「紫宸」といい城は三重である。軍士は城内におらず、城外に交代で宿直している③年に1度、軍隊を徵集し、王族1人に命じて閱兵式を行っている。だが王は自ら行わない。

【史料C】『朝鮮世祖実録』八年（1462）二月辛巳条（註9）

- ①一、城は三重有り、皆、石築にて城高は我が國の都城の如くにして稍高し、城門も亦、我が國の如し。
- ②一、国王は二層の閣に居る。（中略）廊廻は周回連接し、間数は知悉する能わず、軍士、焉に留宿す。朝会及び罪囚鞫問の時、軍士は甲を着けて侍衛し、又、面甲を着くこと仮面の形の如く、鉄を以て両角を作り、状は鹿角の如し、沃するに金銀を以てす、鉄を以て行轅を作り其の両脚を束す。
- ③一、旧宮は居する所の宮城の南に在り、其の層閣・城郭の制度は、常居の宮と同じ、時時往来し。（中略）国王の行く時は、侍衛軍約三百余、皆、甲を着け騎馬す、執る所の兵は、或いは弓矢、或いは槍、或いは劍、或いは形の鉤の如き者有り。
- ④一、其の俗は、常に大小二刀を佩し、飲食起居、身より離さず、刀形は本国の環刀に同じ。

※【史料C】は1462年、琉球へ漂着した朝鮮全羅道の人、肖得誠の漂流記である。当時の国王は尚徳。①城は三重で石積み、城壁や城門は朝鮮の都城のようである。②国王は2層の閣に住み、回廊式の建物が連結している。軍士はここに宿直する。朝会と罪人の尋問の際には、軍士は鎧を着用して護衛する。また、顔には仮面のような面甲をし、鹿の角のような2つの鉄の角をつけていて、それは金銀で塗られている。鉄の脚絆を両脚に巻く。③旧王宮は首里グスクの南にあり、殿舎や城郭は首里グスクと同じである。国王は時々往来しており、外出する際には約300人の軍が護衛し、皆鎧を着け馬に乗り、弓矢、槍、剣や鉤の形をした武器を持つ。④大小の刀を常時帯刀し、刀形は朝鮮の環刀と同じである。

【史料D】『朝鮮成宗実録』十年（1479）六月乙未条（註10）

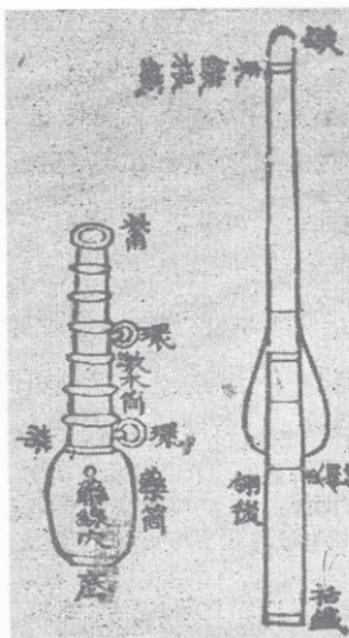
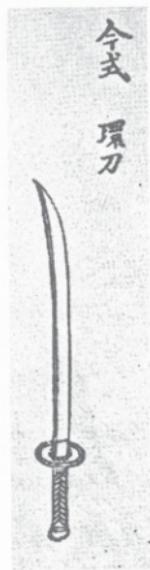
- ①俺等、適々国王の母の出遊し漆輦に乗るを見る。四面簾を垂る。昇く者、二十人に幾し、皆、白苧衣を着、帛を以て首を裹む。軍士、長剣を持ち弓矢を佩き前後を擁衛す。百余人に幾し、双角・双太平轂を吹き火砲を放つ。
- ②一、弓矢・斧鉈・刀剣・鏃子・鎌・錘・甲冑有り、甲は或いは鉄を用い或は皮を用う。
- ③一、軍士は鉄を以て脛を裹む、或いは皮を用い漆を着すること行轂の如し。

※【史料D】は1477年、朝鮮濟州島から漂着した金非衣らが沖縄本島を見聞した際の記録である。尚真が幼少で国王に即位した直後である。①王母（尚真王の母）は四面に簾の垂れた漆の輦に乗り、20人近くが担いでいる。皆、白い苧の衣服を着て布（鉢巻）で頭を包んでいる。行列の前後には100人の軍士が弓矢と長剣を持って護衛している。双角・双太平轂を吹いて、火砲を放つ。②弓矢・斧・刀剣・鎧・鎗・甲冑がある。甲は鉄や革でできている。③軍士はすねを鉄で包み、あるいは漆を塗った革を用いる。それは脚絆のようである。

以上の史料から首里グスクで使用されていたとみられる武具の特徴をあげる。

攻撃具

まず武器（攻撃具）について、刀剣は史料から詳しい形狀は知ることはできないが、刀剣をはじめとして琉球の武器は日本のものと同一（【史料B】①）という一方で、朝鮮の「環刀」と同じ（【史料A】②）との報告もある。両報告ともほぼ同時期（1462、1456年）であるが、前者は琉球国使節である普須古らの説明で、自國事情に通じていることから【史料B】①の信頼性が高いといえる。1479年の



〈中央〉 図1 「武芸図譜通志」中の環刀（陸軍士官学校韓国軍事研究室編 1968）
〈左〉 図2 『国朝五礼序例』中の長剣（右） 図3 『国朝五礼序例』中の將軍火筒

の見聞録では琉球人は大小の刀を常時帯刀しており（【史料C】④）、日本武士のような風習を確認できる。首里グスクの発掘調査からも日本刀の部品とみられる切羽や鈎などが出土するのみで（註11）朝鮮様式とみられる刀剣類は現時点では未確認である。15世紀の朝鮮では様々な刀剣を「環刀」と呼んでいたようだが、朝鮮王朝は日朝貿易や帰順した倭寇などから多くの倭刀を移入していた（宇田川1993）ので、朝鮮の漂着民は琉球にある日本式の刀剣を、あるいは「環刀」と認識したかもしれない。ちなみに成祖朝期（1776～1800年）に編纂された『武芸図譜通志』には「環刀」が描かれている（図1、陸軍士官学校韓国軍事研究室編1968、宇田川1993）。

矛（ほこ）などの長柄武器は、「槍」（【史料C】③）や「長剣」（【史料D】①）と表現されている。形状はここからは窺えないが、「槍」は矛や槍、「長剣」は長い柄に屈曲した刀身を受けた形式の武器で、おそらく長刀（なぎなた）のような武器だと思われる。1473年（成宗5）に編纂された朝鮮の史料『国朝五礼儀序例』卷四「兵器圖說」には「長劍」が描かれている（図2）。

「形の鉤（かぎ）の如き」武器（【史料C】③）もあり、これは文字通りカギの形をした刀を持つ武器だろう。考えられる武器として日本の武器で薙鎌、中国の武器では戈のようなものか、鉤鎌刀などが挙げられる。

また「拘」という特徴的な武器もあり、長さ2丈の木の柄に屈曲した鉄製の4つの刃をつけた兵器だという（【史料A】③）。多刃武器であることがわかる。柄の長さが2丈というが（註6）、これは誤

りであろうか。長大な柄でもって「遠処の罪人を斬する」武器だったとみられる。「拘」が「捕らえる、おさえる」との意味を持ち、またその形状から、斬る機能はないが熊手のような捕獲用の武器も考えられる。いずれにせよ今後の解明が待たれる。

弓は桑の木で、弦は苧で製作し、矢は朝鮮の磨箭のよう竹製の鏃もあった（【史料A】④）。弓は木製の弓だと考えられる。『歴代宝案』によると、1509年に尚真が安南へ「桑木弓四張」を送っている（註13）。この時期の朝鮮王朝の主要な弓は牛角を主材に竹と桑木から製作した合成弓（角弓）で中国の伝統的な様式の武器であった（宇田川1993）。琉球の弓は牛角を使用していないので朝鮮のものとは違った様式であったようだ。

なお他の史料をみると、16世紀の冊封使・陳侃の『使琉球錄』には、「弓は積長くして握擔の如く、射るには則ち地に樹てて、両手にて之を彌す。矢は二百歩許に至るべし」（註14）とあって、琉球の弓が長大なものであり、世界最大級の長さを特徴とした日本様式の弓であったことが窺えるし、1605年に日本僧の袋中が著した『琉球往来』には琉球の弓が「重藤・漆籠・縷裏之弓、五百張」（註15）と、日本式の弓であったことが明らかである。

鏃については、朝鮮の磨箭に似ていて竹製もあるという。磨箭について詳細はわからないが、磨かれた鏃を装着した矢か、首里グスクからは鉄や骨製の鏃の出土例があるが竹製の鏃は例がない。

火器兵器は、「火筒」（【史料A】③）と「火砲」（【史料D】①）があった。「火筒」は朝鮮のもの（図3）と同一であるという。火縄銃伝来（1543年）以前の中国式火砲「手銃（銃筒、ハンドキャノン）」だと考えられる（上里2000）。1479年の尚真王母の行列で放たれた「火砲」は礼砲として使用されている。現在、沖縄県内には礼砲として使用された4点の手銃形式の火器が現存している（當眞1994）が、「火砲」もこの形式であっただろう。

さらに首里グスクからは2センチ前後の同サイズの銅製弾が数十点、出土している。用途は不明だが、史料から首里グスクに火器兵器が存在したのは確実であり、銅弾が火器の弾丸である可能性を考えることはできる。

斧・鎗・鎗（【史料D】②）は武器ではなく、工具・農具だと考えられる。

防御具

次に防御具について、鎧は「甲冑」（【史料A】②、【史料B】①、【史料D】②）や「甲」（【史料C】②、③）と表現されているが、いくつかの特徴がある。

まず鎧は鉄と革で作られている（【史料D】②）こと、薄い鉄片を組み合わせ首を防御する（【史料B】②）ものは兜に付属する栴（しころ）であるのは間違いない。鉄片とは小札であろう。小札は首里グスクから多数発見されており、出土遺物とも対応する内容である。なお中世期日本の鎧は牛革製の小札も多く用い、鉄製小札と交ぜて鎧を作り、小札には防腐・防錆のため漆を塗っていた（山岸・宮崎1997）。また特徴的な武具に人面型の面具がある（【史料A】②、【史料C】②）。面具は鉄製で仮面のような形状をしているという。面具は中国・朝鮮では一般的ではなく、管見の限りでは確認できない。だが面具によって顔面を防御する武具は日本には存在する。半首（はつぶり）と半頬（頬当ともいう）、目の下頬などである。半首は鉄板でもって額・頬などを防御する面具で平安から鎌倉期にかけて流行し、半頬は顔面の頬から頸にかけての下部分を保護する面具で、南北朝期頃には使用されている。室町後期になると目の下頬といって半頬に鼻をつける形式が流行する（図4）。面具には金銅の歯をつけたり、髭を植えたり様々な相貌の人面のように細工し、一般に敵に畏怖感を与える威嚇的な相貌が多かった（笹間1997、山岸・宮崎1997）。

目の下頬の名所

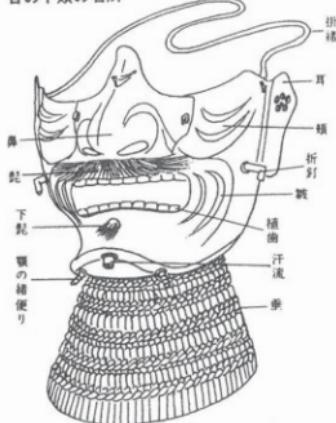


図4 目の下頬（笠間1997）



図版7 目の下頬（貫前神社所蔵 山岸・宮崎1997）

1606年に冊封使として来流した夏子陽の『使琉球録』には「武士の、面に銅の鬼貌を蒙り、身に漆甲を服し、而して腰に刀を佩びる者數十輩あり」(註16)とあり、琉球の武士が顔面に銅製の鬼のような面を装着しているのがわかる。これも日本の面具有の特徴をよく示している。以上から史料中の面具有が日本の武具である可能性は非常に高い。

さらに兜には金銀で塗られた鹿の角のような2つの鉄の角をつけるとあるが（【史料C】②）、これは兜の装飾具である鍔形である。鍔形は日本兜の独特な形式であり、とくに農具の鍔あるいは鹿の角を象った装飾具から発展し形式化していったもの（山岸・宮崎1997）。この史料は鍔形の特徴を見事に表現しているといえよう。脚の防御具については、鉄あるいは漆を塗った革を用いた脚絆のような防御具がある（【史料C】②、【史料D】③）。これは脛当であろう。形式の詳細は不明であるが、日本の脛当は鉄製や煉革製で塗塗りのものも存在しており（笠間1997）、日本式の可能性がある。

楯も存在するようだが（【史料A】②）、形状や材質は不明。『おもろさうし』には「牛綾楯」という楯がみえるが（註17）、これは牛の皮革でつくられた楯だと思われる。木製の楯や中国の藤牌なども存在した可能性があるが、史料がないため断定することはできない。楯とみられる遺物の出土もこれまで確認されていない。

5. 小括

文献史料から15世紀頃の首里グスクにおける武具について考察してきた。その結果、明らかに日本様式の武器・武具である特徴が兜や面具にみられた。刀剣や弓矢に関しては日本式武器の可能性が考えられる。また中国伝来と考えられる火器兵器も確認できた。

甲冑に関しては鉄・革製の小札から構成され、漆を塗った革の脛当もあった。

沖縄県内出土の小札は中世の日本本土と同様のもので、琉球の鎧は日本の中世期に使用されていた胴丸・腹巻と同形式であったとされている（金山1999）。ただし甲冑の飾り金具には本土とは異なる文様表現や彫金技法が見られ、日本と同形式の甲冑を琉球で製作していたようだ（久保2002）。

1462年の『朝鮮世祖実録』には「凡そ牛馬の皮は、皆官に納めて甲を造る」(註18)とあり、鎧の材料となる皮革を王府に納入り甲冑を製作していたことがわかる。また『おもろさうし』には「金冑 げらへて（作って）」「赤つ鉄（刀剣） げらへて」(註19)と謡われている。文献史料からも琉球国内で独自に兵器生産を行っていたのは、ほぼ確実だと考えることができる。

一方で竹製の鎌やカギ形武器、多刃武器、楯などの形式不明の武具も見られた。これらは出土例もなく、実態の解明は今後の課題である。

なお、首里グスク内にあった武具の数量については正確な数は不明だが、国王やグスクを護衛する軍が数百名存在し、「侍衛軍約三百余、皆甲を着け騎馬す」([史料C]③)とあるように、相当の数量があったと推定される。ちなみに『琉球往来』には三司官クラスの官人が「弓五百張、銃大小二百挺、甲冑三百領」(註20)を保有すると記されている。また15、16世紀にはヤマトの足利将軍や島津氏から琉球国王へ太刀や鎧が贈られている(註21)。これらの贈答品は国王の宝物として首里グスク内に保管されていたであろう。

兵器が所蔵された場所は不明だが、三重郭構成となっていた首里グスクの「外城に倉庫及び厩有り」([史料A]①)のことなので、あるいはこの「外城」部分の倉庫に所蔵されていたかもしれない。以上の文献史料の検討による結果は、首里グスクの出土遺物と全てが一致したわけではないが、発掘調査の成果を裏付ける内容もあり、比較考察の有効性が確認できたと思う。今後次々と出てくる武具資料の発掘調査結果についても、同時に関連の文献史料を検討し比較考察を行っていく必要があるだろう。

6. 総括

以上、下之御庭、木曳門、用物座、廣福門地区出土の武具資料を紹介し、それに併せて首里グスク内におけるそれらの実体に迫ってみた。その結果、中世期日本に見られる鎧の形態と類似し、更には贈答品としての価値を有していたことが窺われた。又、中国や朝鮮で見ることのできる武器について使用していた記載は見られるものの、出土遺物としては確認されていないのが今後の検討課題と言える。今回は武具資料がまとまって確認されたことを受けて、文献史料からも焦点を当ててみたが、首里グスクにおける発掘調査が継続中である今日において、更なる新資料の発見が期待される。出土資料がそのまま文献に見られる資料と即、整合することはできないが実際に多くの武具資料が出土していることから、当時における武威の実相を少し垣間見ることができたと考えられる。

言うまでもないが報告した資料は氷山の一角であり、未報告分や今後確認される資料を併せると膨大な数に上る。上記で触れたようにこれら武具資料が文献史料と照合するがある程度、可能であることからもその資料の価値は高いと言える。広く金属製品として見た場合においても、その用途や保管体制そして生産体制や技術面の問題と検証していく分野の広がりは多岐に渡る。加えて琉球列島の一地城において展開した小国家の実態を垣間見ていく格好の材料となるものと考えられる。

(やまもと　まさあき：調査課 専門員)
(うえざと　たかし：早稲田大学大学院文学研究科)

註釈

- (註1) 現在、琉球列島に分布する個々のグスクの名称は色々である。首里グスクや勝連グスクのように大規模なグスクについては「首里城跡」「勝連城跡」といった名称が付されているが「グスク」と「城跡」の表記について厳密な定義付けは成されていない。「城跡」と表記する以上、防御的性格を有するグスクと有しないグスクとの大別していく必要がある。本稿においては首里グスクの防御的性格を考えていく一過程であると考え、あえて「城跡」という表記は避け、「グスク」との名称を使用した。なお、「首里グスク」の表記については仲松弥秀が「かつて『首里城』と呼称する人は居なかった。『首里城』と呼称するようになったのは数十年前からであって、今でも古者は『首里グスク』といっている」(仲松1973)と述べている。一方で1554年造「やらさもりくすくの碑」では「より（首里）御城」という呼称の例がある。
- (註2) 首里グスク正殿跡の調査によると14世紀代の基壇遺構が検出されている（富眞 上原1987）
- (註3) 「報告書」で報告している八双金物に関しても幅が1.7~1.9cmの中におさまる。両側が魚尾状になるものが3点、片側のみ魚尾状になるもの2点報告しており、前者の長さは5.1, 4.9, 5.7cmがあり、後者は2点共に5.7cmである。これらから今回、報告した資料もあわせて考えると八双金物に関してはある程度の規格があったものと想定することができる。
- (註4) 毛彫り：先の尖った型で素地に連續的に細線を彫り進める技法。蹴彫り：先が直線上の型を素地に打ち込み、その楔形の打痕の連続を見せる技法（京都国立博物館2003）。
- (註5) 本小札：威しを容易にするため左頭部を斜めに削ぎ、札の半分を重ねる。伊予札：本小札を簡略化し、札の端をわずかに重ねる。札頭の形状により、制作年代、呼称が異なる。板札：革製の板状の上部を、本小札、伊予札の各頭部に似せて刻み代用するもの（金山1999）。
- (註6) 久保智康氏は武具資料に関して菊花文透彫金具以外は菊花文、櫻樹文、桐文の表現が日本本土のものと微妙に異なることから琉球製品として位置付けている（久保2002）。
- (註7) 和田久徳・高瀬恭子・内田晶子・真喜志瑠子「李朝実録の琉球国史料（訳注）」（三）『南島史学』第38号 1991
- (註8) 和田久徳・高瀬恭子「李朝実録の琉球国史料（訳注）」（四）『南島史学』第39号 1992
- (註9) 前掲（註7）
- (註10) 和田久徳・吹抜悠子・真喜志瑠子・高瀬恭子「李朝実録の琉球国史料（訳注）」（六）『南島史学』第44号 1994
- (註11) ただし首里グスク（旧琉球大学法文学部ビル東側付近）から1点のみ直刀・諸刃の剣が発見されている（『沖縄タイムス』『琉球新報』1967年5月17日）。切先部分10センチほどに赤い漆が塗られており、祭祀用だとみられている（池宮1987）。
- (註12) 朝鮮王朝には黄鍾尺・周尺・營造尺・布帛尺など様々な尺度が存在し（各尺約20~40cm）、その制度は複雑だったために、史料中の単位がどれに該当するのか不明である（新井1992）を参照。ちなみに明の1尺は31.1cm、1丈（10尺）は3.11mである。
- (註13) 与儀1995、『歴代宝案』訳注本第2冊 沖縄県教育委員会 1997
- (註14) 『那霸市史』資料篇第1巻3 1977
- (註15) 横山重編『琉球神道記・弁蓮社袋中集』角川書店 1970
- (註16) 前掲（註14）
- (註17) 外間守善・西郷信綱『日本思想体系18 おもうさうし』岩波書店 1972
- (註18) 前掲（註7）
- (註19) 前掲（註17）

(註20) 前掲(註15)

(註21) 例えば室町中後期の御内書の書札を記した文例には、足利將軍から琉球國の世の主への贈答品が「たち（太刀）一ふり（振）こかね（黄金）」「よろい（鎧）一りやう（領）くそくあさきと（具足浅葱糸）」と記されており（柳原紀光編『砂巣』卷四），1556年には島津貴久から琉球へ「太刀一腰、悉以黄金具」「鎧一領、紫紅糸三種段々糸」甲一翅、同毛鍔形」が贈られている（『旧記雜錄 後編』卷一）。

参考文献

- 新井 宏 「朝鮮の尺度変遷について」『朝鮮史研究会論文集』第30号 朝鮮史研究会 1992
- 池宮正治 「武装する神女」『おもろさうし精華抄』ひるぎ社 1987
- 上里隆史 「琉球の火器について」『沖縄文化』第91号 沖縄文化協会 2000
- 宇田川武久 『東アジア兵器交流史の研究』吉川弘文館 1993
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 「首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・灌刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書一」「沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書」第3集 2001
- 金山順雄 「グスク出土の小札について」『南島考古』第18号 沖縄考古学会 1999
- 金武正紀 「沖縄『津・泊・宿 中世都市研究』3 新人物往来社 1996
- 京都国立博物館編 「金工の製作技法」『特別展覧会 金色の飾り』 2003
- 久保智康 「飾り金具」『日本の美術』第437号 至文堂 2002
- 笠間良彦 『図録 日本の甲冑武具事典』柏書房 1997
- 高良倉吉 「琉球王国成立期の首里城に関する覚書」『前近代における南西諸島と九州—その関係史的研究』 多賀出版 1996
- 當眞嗣一 「火矢について」『南島考古』第14号 沖縄考古学会 1994
- 當眞嗣一 上原靜 「首里城正殿の調査」『文化課紀要』第4号 沖縄県教育委員会 1987
- 仲松弥秀 「再『グスク』考」『南島考古』第3号 沖縄考古学会 1973
- 山岸素夫・宮崎眞澄 『日本甲冑の基礎知識』文宝堂 1997
- 矢沢秀雄、上原 静 「南殿跡・北殿跡出土の金属製品」『首里城跡 御庭・奉神門跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会 1998
- 与儀達憲 「グスク時代の武器・武具について」『考古学ジャーナル』397 ニューサイエンス社 1995
- 陸軍士官学校韓國軍事研究室編 『韓國軍制史 近世前期編』韓国陸軍本部 1968

表2 八双金物

計測番号	図版番号	出土地	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	残存量(g)	残存度(%)
1	1	廣福門	-	18	1.6	4.7	10.9	100
2	2	木曳門	-	18	1.4	5.8	7.8	100
3	3	木曳門	-	17	1.7	3.5	7.4	90
4	4	木曳門	-	17	1.3	3.4	6.6	100
5	5	用物座	-	19	1.1	4.6	7.3	50
6	6	用物座	-	18	1.1	5.1	3.4	50
7	7	下之御庭	57.5	19	1.2	4.2	7.2	80
8	8	廣福門	57.5	19	1.4	-	11	100
9	9	下之御庭	-	17	1.1	3.5	5	70
10	10	不明	-	20	1.3	2.8	7.6	90
11	11	下之御庭	58	18	1.3	4.6	8.6	90
12	-	不明	-	18	1.5	2.8	6.6	40
13	-	不明	-	18	1.2	3.7	2.8	20
14	-	用物座	-	14	1.6	1.3	5.1	70
15	-	用物座	-	16	1.4	-	7.4	40
16	-	下之御庭	41.8	16	2	3.6	4.5	10
17	-	木曳門	-	19	1.9	2.8	6.6	30

表3 小札

計測番号	図版番号	出土地	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	残存量(g)	残存度(%)	タイプ	
									孔列数	札頭
1	12	木曳門	-	20	2.5	1.7	10.7	70	2	III
2	13	木曳門	-	22	3.2	1.7	8.1	60	2	III
3	14	用物座	-	19	1.9	1	7.1	50	2	III
4	15	木曳門	31	18	2.3	2	5	50	2	III
5	16	用物座	-	22	2.3	-	9.4	60	2	III
6	17	木曳門	-	19	1.7	1.4	7.6	70	2	II
7	18	下之御庭	-	25	4~5	-	23	90	2	I
8	19	廣福門	-	20	2.5	-	12.8	90	2	II
9	20	下之御庭	-	24	2.3	-	14.6	60	2	II
10	21	下之御庭	-	25	1~3	1.5	9.1	70	2	-
11	22	下之御庭	-	23	2.6	2.6	12	50	2	II
12	23	不明	-	20	3	-	9	60	2	III
13	24	不明	-	22	2.5	3.5	19.5	80	-	-
14	25	下之御庭	-	23	1.4	3.5	9.4	50	2	I
15	26	下之御庭	-	28	3	-	12.4	60	3	III
16	27	木曳門	-	20	3	3.3	3.1	10	2	II
17	28	木曳門	-	19	2.5	2.1	7.5	60	2	II
18	-	不明	-	19	1.5	3.7	6.7	-	-	-

表4 笠鞋

計測番号	図版番号	出土地	長さ(mm)	幅(mm)	長 短	厚み(mm)	孔径(mm)	残存量(g)
1	30	木曳門	45.6	9.45	4	2.54~3.8	5.82, 5.62	7.4
2	31	下之御庭	38.5	10.16	2.4	3.78~4.8	-	6.9
3	32	木曳門	33.98	8.4	2.75	2.73	3.88, 3.76	4.3
4	33	木曳門	26.71	9.27	2.15	3.3~3.95	5.7, 5.9	3.5
5	34	木曳門	36	10.28	2.27	4.3	6.08, 5.3	7
6	35	木曳門	29	9.52	2.4	3	5.34, 4.08	3.3
7	36	下之御庭	39.58	-	-	-	5	6.9
8	37	下之御庭	31.48	9.71	4.41	3.96	5.26	4.9

表5 茄黃金具

計測番号	図版番号	出土地	長さ(mm)	直径(mm)	内径(mm)	厚み(mm)	残存量(g)	残存度(%)
1	38	木曳門	21	—	5.7	2.9	4	—
2	—	下之御庭	—	—	—	—	2.7	100
3	—	木曳門	—	—	—	1.9	2.8	—
4	—	木曳門	—	7.1	4	1.5	1.5	30
5	—	下之御庭	20	—	—	1.3	—	30

表6 貢鉢

計測番号	図版番号	出土地	長さ(mm)	幅(mm)		厚み(mm)	孔径(mm)	残存量(g)	残存度(%)
1	39	木曳門	14.58	8.7	6	—	4.9, 4.5	1.4	100
2	40	木曳門	18.93	10.53	4.05	—	6.5	2.4	100
3	41	廣福門	—	9.13	6.05	4.74, 4.25	—	2.2	99

表7 鎮

計測番号	図版番号	出土地	残存量(g)
1	42	木曳門	13
2	43	下之御庭	4.6
3	44	木曳門	19.3
4	—	用物座	40.4

表9 銅弾

計測番号	図版番号	出土地	直径(mm)	残存量(g)
1	46	用物座	21	40.5
2	47	不明	25.7	62.6
3	48	木曳門	24.35	54.5
4	49	木曳門	23	51.7
5	50	木曳門	21	36.2
6	51	廣福門	24	57.8
7	52	廣福門	23	51.1
8	53	用物座	26.8	72
9	—	用物座	22	46.8
10	—	下之御庭	29	119
11	—	用物座	24	51.6
12	—	用物座	2.8	111
13	—	不明	30.2	110.7
14	—	下之御庭	22	43.7
15	—	下之御庭	12.78	9.9
16	—	木曳門	24	55.7
17	—	木曳門	16.2	18.1
18	—	木曳門	25.4	64.2
19	—	木曳門	24	54.6
20	—	廣福門	25	71.1
21	—	廣福門	27	90.8

表8 座金具

計測番号	図版番号	出土地	幅・直径(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	残存量(g)	残存度(%)
1	45	廣福門	40	0.8	5.5×4.5	9.1	90
2	—	用物座	縦10 横8.8	0.3	2.2	0.1	100
3	—	用物座	20	1.2	5.7	1.1	70
4	—	用物座	19	—	0.9	2.1	90
5	—	不明	44	—	5.2	9.6	80
6	—	下之御庭	23	0.7	2.5	0.7	60
7	—	木曳門	13	—	2.6	0.7	100
8	—	木曳門	12	0.9	2.5	0.5	100
9	—	下之御庭	15	1.1	—	1.2	100

表10 鍔

計測番号	図版番号	出土地	幅(mm)		残存量(g)	残存度(%)
			内側	縁		
1	54	木曳門	6.9	3	16	5
2	55	下之御	6.8	3.2	20.2	10
3	—	用物座	8.6	3.3	8.2	5

表11 前立て台座

計測番号	図版番号	出土地	厚み(mm)	残存量(g)	
				縦	横
1	58	木曳門	0.5	4.7	
2	59	木曳門	1.7	11.2	

表12 切羽

計測番号	図版番号	出土地	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	中孔		残存量	残存度
						縦	横		
1	56	下之御庭	39	41	1.6	18.8	4.5	15.2	100
2	57	木曳門	42	40	3	20.9	4.4	19	100
3	—	木曳門	—	—	2.1	—	—	5.2	10

表13 前立て飾り

計測番号	図版番号	出土地	残存量(g)	
			縦	横
1	62	木曳門	4.7	
2	63	下之御庭	1.2	

表14 総角付環座

図版番号	出土地	環の径(mm)	環の長さ(mm)	留め具厚(mm)	留め具長(mm)	残存量(g)		残存度(%)
						中央	端	
60	廣福門	33	22	62	10	5.7	—	

表15 切子頭

図版番号	出土地	頭縦(mm)	頭横(mm)	厚み(mm)		芯残存長(mm)	芯断面(mm)	残存量(g)	残存度(%)
				中央	端				
61	木曳門	16	1	1.1	1	14.5	4×5	19.5	90

表16 飾り金具

計測番号	図版番号	出土地	幅(mm)	厚み(mm)	残存量(g)		残存度(%)
					縦	横	
1	64	木曳門	—	0.7	3.4	100	
2	65	用物座	1.6	0.5	5	—	

本土系瓦質土器の産地についての補論

—北部九州の瓦質土器と比較して—

Additional Study on the Production Area of Japanese Hard-tempered Pottery

瀬戸 哲也

SETO Tetsuya

ABSTRACT:The author previously named a type of hard-tempered pottery excavated in Okinawa as Japanese hard-tempered pottery. Such pottery is decorated with a series of chrysanthemum-pattern decorations, a characteristic particular to pottery from northern Kyushu. In order to clarify relations between Kyushu and Okinawa, specimens of both districts were selected and compared. Results show that a serial chrysanthemum pattern is a clear characteristic of the Kyushu products; however, few of them matched perfectly with Okinawa specimens. Considering the nature of the temper, some of the Okinawa finds must have been brought in from Kyushu. In any case, this Japanese hard-tempered pottery must have been made either in northern Kyushu or made locally under the strong influence from that region.

1. はじめに

筆者は、「沖縄出土の本土系瓦質土器」という別稿（瀬戸2004）で沖縄出土の本土産と考えられる瓦質土器を本土系瓦質土器と呼称し、その集成および若干の整理を行った。この瓦質土器の産地を考えるために、本土各地の類例と比較したところ、多くは北部九州産ではないかと推察した。しかし、その集成は十分でなく、器形や文様を表面的に比較したのみであった。

今回、沖縄出土の本土系瓦質土器の産地をより具体的に考えるため、北部九州地域の瓦質土器の中で類似するものを改めて集成し、幾つかは実見して個々に比較検討を行った。

2. 北部九州産と考えられる本土系瓦質土器

(1) 本土系瓦質土器の定義

本土系瓦質土器という概念は、筆者が沖縄で瓦質土器を整理するために使用したものである（瀬戸2004）。沖縄では那覇市湧田窯の調査により、17世紀代に瓦質土器が在地で生産されていた（金城1995・新垣2000）。一方、主に15～16世紀代を中心とするグスクや寺院跡で出土する菊花文が飾られる瓦質土器は本土産と考えられていた。筆者は、後者を主に北部九州のものに文様・器形等から類似するものが多いのではないかと推察した。しかし、胎土・色調等から沖縄産瓦質土器および瓦に類似するものもあるので、沖縄で模倣した可能性も含めて、本土系瓦質土器と呼称した。

(2) 北部九州産と考えられる本土系瓦質土器

別稿で記述したことと反復するが、沖縄出土の本土系瓦質土器の内容について該略する。今回は筆者が北部九州産ではないかと考えたものに絞って挙げることにする（第1図）。

器種としては、浅鉢が多く、他に深鉢・風炉があり、少數だが壺・甕等もある。

浅鉢（1～4） 第1の特徴としては、外面には径1.5～2.0cm前後の菊花文が横位に一周連続でスタンプされることである。これが後に具体例を挙げるが、北部九州に多く見られる特徴である。一方、大和を中心とする近畿地方では、菊花文を周囲全体に切れ間なく連続スタンプするものはない。

器形は、丸みのある体部（1～3）が多いが、直線的なもの（4）もある。また、口縁は直口するもの（1・4）もあるが、多いのは口縁端部が内側に伸び平坦面をなすもの（2・3）である。

深鉢（5・6） 5は口縁部で、6は底部であるが、首里城木曳門という同一地区から出土していること、胎土・色調が類似することから同一の個体と思われる。体部上半外面には2条の突線の間に、浅鉢と同様の菊花文が連続スタンプされる。器形の平面形は隅丸方形である。

風炉（7） 口縁部で、外面には浮き彫りにより柵状の格子文が施される。上端は部分的に突起があるタイプである。この風炉は、器形はかなり大和産に類似するが、内面調整がケズリを残すこと、胎土に砂粒が混じることから、大和産ではないと思われる。

その他（8～15） ここでは、器形が限定できない小片のものもまとめた。8は菊花文が連続スタンプされる丸みをもった体部で、小形の壺か風炉だろうか。9は線刻による斜線の幾何学的な文様が施された2条の突線を有する体部で、やはり風炉だろうか。10は菊花文が裏表にスタンプされたもので、鍋の把手と報告されている。11は同心円状の花文にスタンプされた口縁部で、浅鉢または風炉だろうか。12は2条の突線の間に菊花文が連続スタンプされた口縁部で、風炉であろうか。13は表裏に菊花文が全面に連続スタンプされた風炉等の脚基部である。14は非常に滑らかにナデ調整された玉縁状口縁をもつ甕で、外面全体には輪花型に浮き彫りされた文様が連続スタンプされる。15は風炉もしくは浅鉢・深鉢の脚部で、菊花文が間隔を開けてスタンプされる。

文様 沖縄で出土する本土系瓦質土器の文様には、格子文・雷文・花菱文・輪花文なども見られるが、今まで見てきたように圧倒的に菊花文が多い。さらに細かく見ると、菊花文の中央部の掘り残された隙間が、1・2・5・8・10・13・15のように0.5cm以内で花弁が細かく丁寧なものと、3・4・12のように0.5～1.0cmと中央部の隙間が大きく花弁もやや粗いものの2者がある。後述するが、この菊花文の細部の違いが、北部九州地域産であるかをより限定できうるものと考える。

胎土・色調・調整 外面の焼しが弱く、色調が灰色、または焼きが弱いのか橙色のものも多い。また、胎土は砂粒が混じるものが多く、金雲母片が混じるものもある。こういった特徴は、胎土は精良でほとんど砂粒が混じらない、大和産瓦質土器とは明らかに異なる。一方、4は灰色で砂礫が混じらない硬質（須恵質）のもので、肉眼では沖縄産瓦質土器や瓦と類似する胎土である。調整については、外面のミガキは5・6が丁寧であるが、多くはかなり粗雑である。内面はナデにより比較的滑らかである。ただ、5～7のようにケズリが内面に残されているなど、大和産のものに比べると調整は雑である。

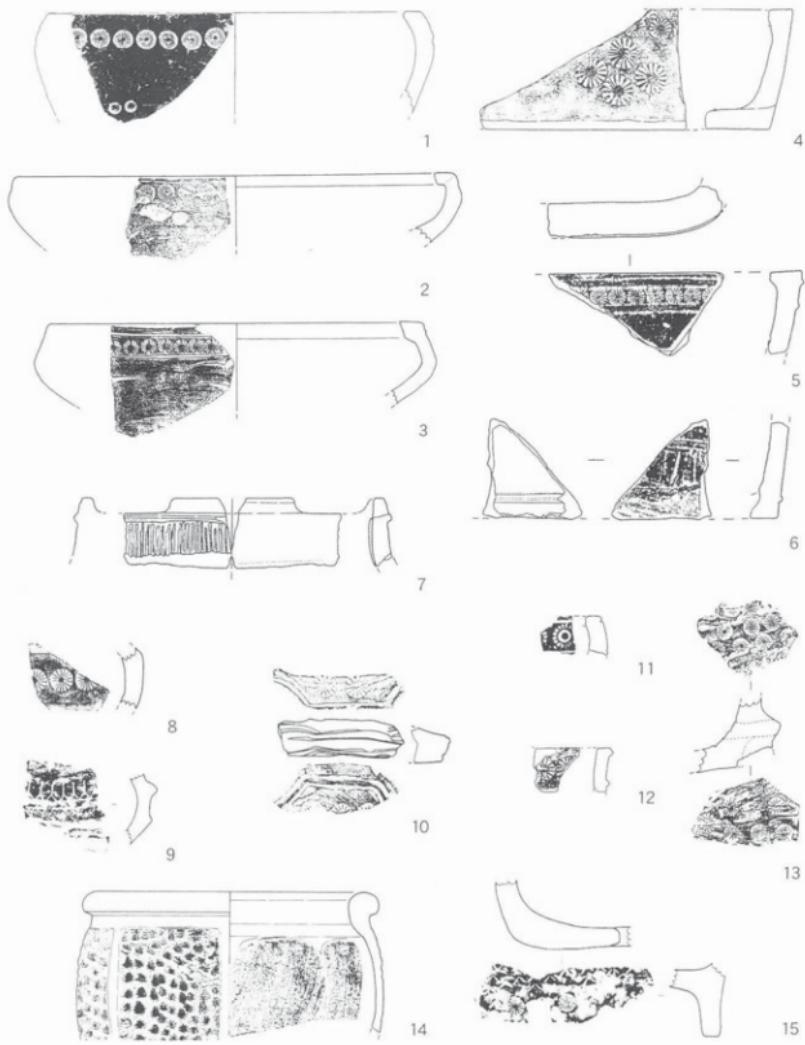
（3）小結

北部九州産と考えた瓦質土器の指標としては、菊花文が主に横位方向に連続スタンプされることである。特に浅鉢にその傾向が強いものが多い。そこで、7の風炉のように大和産に近い器形でも、胎土に砂粒が多く混じることから北部九州地域で模倣されたものと考えた。

また、今回は具体的には触れなかったが、今帰仁城跡出土の瓦質土器には、大和産瓦質土器に近い特徴のものが少数ある（瀬戸2004、今帰仁村教育委員会1983）。それは、径3cm前後の大きめの菊花文が2・3個単位で間隔を空けて飾られる浅鉢で、胎土も精良である。この大和産のものを模倣した瓦質土器は、筆者が今回実見したところ博多遺跡群・大宰府条坊跡等で多く確認した。

3. 北部九州地域の瓦質土器との比較

瓦質土器は、その器形が日本本土でも非常にバラエティーあふれるもので、特に15～16世紀代のものは、全く同一のものを探すことが難しい。このことが、沖縄出土の本土産と考えられる瓦質土器を、



首里城奉神門（1）首里城御庭（2・3・13）天界寺（4・12・14）首里城木曳門（5・6）
首里城廣福門（7）首里城北殿（8・10）勝連城二の丸北（9・15）浦添城（11）

図1 沖縄出土の本土系瓦質瓦質土器 縮尺1:4（各報告書より引用）

全て本土産と言い切るのに躊躇してしまうのである。そこで、北部九州地域の瓦質土器で、先述した本土系瓦質土器と類似するものを管見ではあるが実際に幾つか取り上げて検討する。

(1) 瓦質土器の特徴

沖縄出土の本土系瓦質土器に類似するものとして、浅鉢を中心に器形ごとに挙げてみる。

浅鉢（16～20） 16は丸みのある体部に脚付のもので、ほぼ完形であるので、その全容を窺うこと出来る。口縁は、その内側に短く伸び平坦面をなすタイプである。その外面には2条の沈線の間に連続スタンプにより菊花文が飾られるが、その大きさは径1.5cm前後である。17もこれに類似するが、菊花文の上下には沈線がなく、口縁も内側にはそれほど伸びない。18も口縁は内側に伸びない。19は体部がやや直線的なものであるが、菊花文の大きさは同様である。20は口縁が内側に長く伸び平坦面をなすものであるが、外面には雷文が連続スタンプされるもので、この点で沖縄のものとは異なる。

深鉢（21・22・37） 21は口縁部で、2条の突線間に径1.0cm前後の菊花文が連続スタンプされるものである。22は底部で、破片で全容は不明だが沈線の上に菊花文がやはり連続スタンプされるものである。37は菊花文の連続スタンプの下に突線を挟み、波状文が施される。

先にも見たように、沖縄であまり深鉢が出土しておらず、同一の器形は今のところ見つけられていない。ただ、5・6のように菊花文が連続スタンプされるものは北部九州で多く出土している。

風炉（23～28・33） その多くは小片で全容を窺うことは難しいが、窓部・脚部があるものなどをこの器形に含めた。

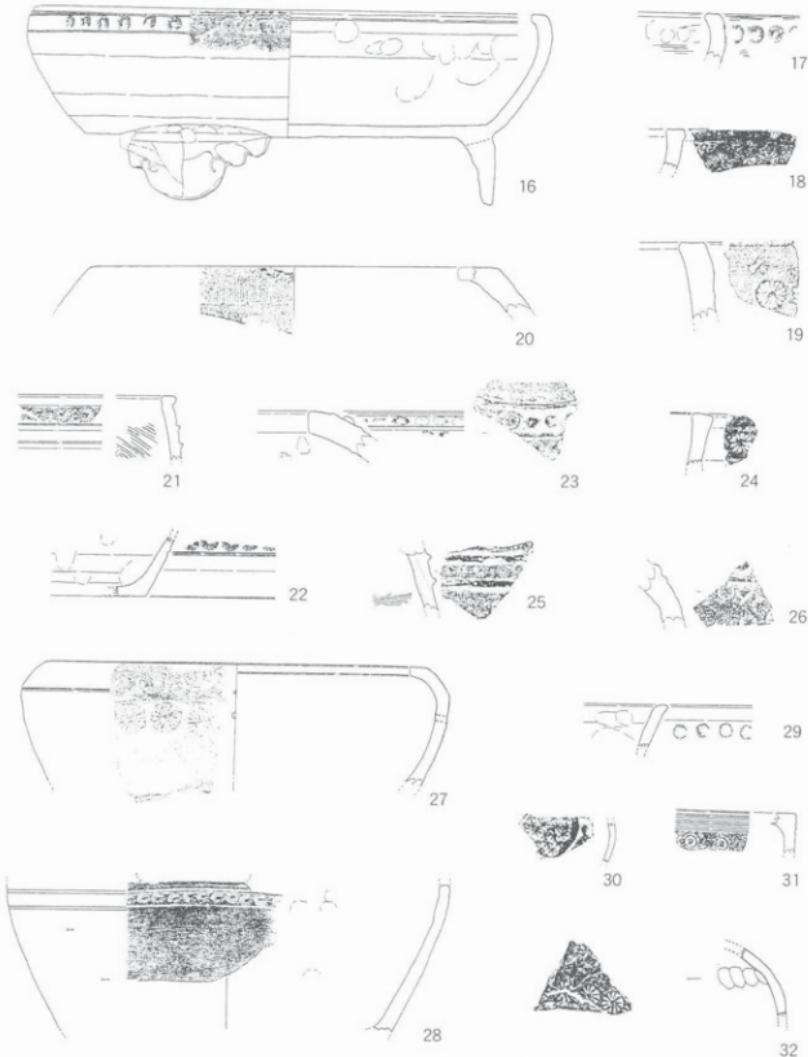
まず、菊花文を連続スタンプで飾るものとして23～28がある。23・24は口縁部、25・26は頸部であるが、どれも菊花文を連続スタンプするものである。27は浅鉢の可能性もあるが、小穴が見られること、深めであることなどから風炉と考えた。体部上半に菊花文が沈線を挟み2段に渡って横位方向に連続スタンプされている。28は体部の下半で、破片の上部に窓部があり、横位方向に1段の連続スタンプによる菊花文が施される。また、下部には脚部がつくようである。

一方、33は、口縁外面に浮き彫りによる凹凸で縱格子状の文様を施したもので、沖縄出土の7に類似するものである。このタイプは、先述したように基本的に大和産のものに器形自体は類似するが、胎土に砂粒を含むことなどから、やはりこの地域で模倣されたのものと考えられる。ただ、北部九州には博多遺跡群等で、大和産と考えられるものも出土している。

焜炉（34・35） 首里城右掖門跡でいびつであるが菊花文を飾られる焜炉があり、断定できないが本土産の可能性がある（沖縄県立埋蔵文化財センター 2003 a）。一方、17世紀代に焼かれた沖縄産瓦質土器では、口縁端部内側に数個の突起をもつ焜炉が比較的多く見つかる。34は径3.0cm前後の大きな菊花文が施され、35は径1.0cm前後の小さな菊花文がそれぞれスタンプされる。沖縄産瓦質土器で多い器形が、全く同一ではないが、この地域でも出土することが重要である。

片把手付き鍋（36） 36はいわゆる土師質焼成だが、首里城綾門大道跡で出土したものに類似するので挙げた（沖縄県立埋蔵文化財センター 2003 b）。沖縄のものは、燻しは弱いが瓦質焼成である。

その他（29～32） 29は小さめの菊花文が連続スタンプされる口縁であるが、直線的に伸びるもので、器形は断定できないが、おそらく何らかの鉢であろうか。30は薄めの器厚で体部には丸みがあり、小型の壺・甕であろうか。体部には径0.5cm前後の花文が一面に連続スタンプされ、文様は沖縄出土の14と類似するように見える。31は口縁で、端部が内側に伸び平坦面をなし、体部は直立する器形である。外面には上端に3条の凹線が見られ、その下には同心円状の花文がスタンプされ、この文様は沖縄出土の11に類似する。32は丸みのある体部で、おそらく壺等の肩部にあたるものか、これも外面上には横位方向に菊花文が連続スタンプされる。

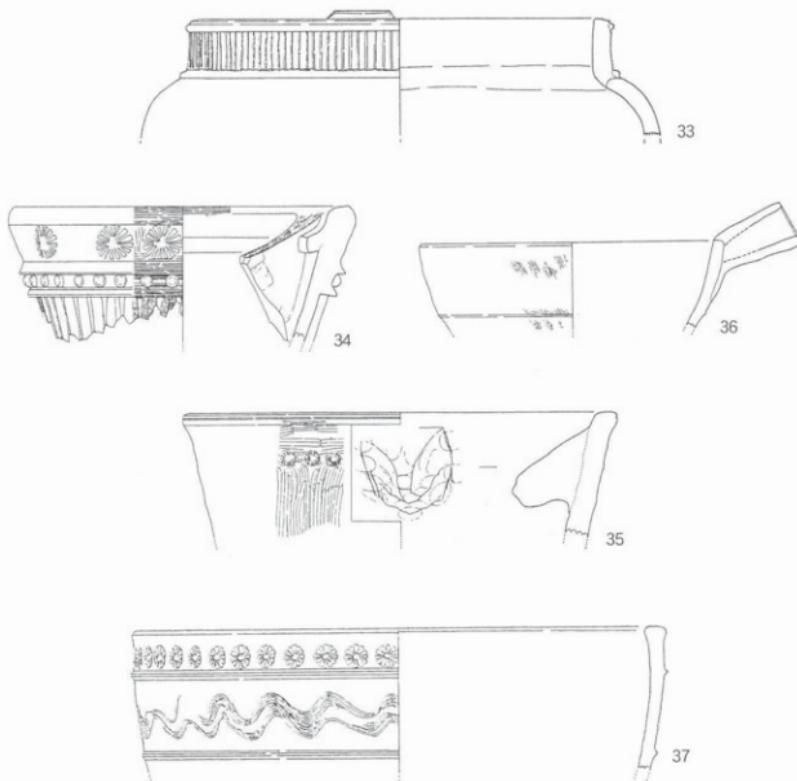


太宰府市速歌屋4次 (16) 太宰府市太宰府条坊50次 (17・18・23・25・26) 太宰府条坊111次 (22・29)

瑞穂町杉峯城 (19・24) 福岡市博多120次A区 (28) 東彼杵町小蘭城 (20・27) 北有馬町今福 (30)

小郡市福童山の上 (32) 大村市坂口館 (21・31)

図2 北部九州地域の瓦質土器1 比尺1:4 (各報告書より引用)



福岡市有田・小田部113次 (33) 太宰府条坊157次 (34) 太宰府条坊149次 (35) 福岡市野多目A 4次 (36)
諫早市沖城 (37)

図3 北部九州地域の瓦質土器2 縮尺1:4 (各報告書より引用)

文様 この地域では菊花文以外にも様々な文様が見られるが、大和など他の地域に比べると、菊花文を密に連続してスタンプすることが多いのは確かである。菊花文の細部を見ると、径は1.0～3.5cmぐらいまで様々だが、全体に共通する点として花弁が丁寧で中央の掘り残しの隙間が0.5cm以内のものが多い。先述したように、沖縄出土のものでは1・2・5・8・10・13・15が類似する。

胎土・色調・調整 胎土は基本的に砂礫が10%前後混じるもの多い。また、実見できた博多遺跡群・有田小田部遺跡群・太宰府条坊跡のものでは、次の2者が特徴的であった。まず、17や35のように0.2～0.5cmと比較的大きな石英やチャート等の砂礫が20～30%と非常に多く混じるもので、これは沖縄出土のものでは確認していない。次に、16や33のように砂礫が0.2cm以下と小さく金雲母と赤色酸化物が10～20%混じるもので、沖縄出土では5・6の他にも類似するものが数点あった。

色調は様々で、いぶしが良く黒色のものから、灰色や橙色のものまでもあった。調整は、外面はミガキ調整ではあるが、大和産のものに比べると単位も広く雑である。また、内面は丁寧なナデのものが多いが、33のようにやや雑でケズりが残されているものもあり、沖縄出土の7に類似する。

（2）瓦質土器の時期

さて、北部九州地域の瓦質土器であるが、共伴遺物から見ると大きくは14世紀代～17世紀前半に収まるものである。

その多くは、東播系須恵器・蓮弁文青磁・口禿白磁などの14～15世紀代の遺物が中心に共伴しており、連歌屋遺跡4次（16）、博多遺跡群120次A区（28）、太宰府条坊跡（17・18・22・23・25・26・29・34・35）がある。

一方、唐津初期のもの・明染付などの16世紀後半～17世紀前半の遺物と共に伴しているものとして、沖城跡出土の37、野多目遺跡群出土の36、坂口館跡の21・31がある。これらは比較的共伴遺物がまとまっている例が多く、時期が限定できるものと思われる。

いずれにせよ、細かい時期を決定するのは非常に難しいが、大和産瓦質土器では15・16世紀代に瓦質土器の器形は豊富になること（佐藤1996）、沖縄出土の本土系瓦質土器も15・16世紀の遺物が多いグスク等で出土することも、これらの傾向と合致している。

（3）小結

北部九州地域の瓦質土器においては、本土系瓦質土器に多い菊花文を連続スタンプするものは、かなりの量が見られることが再確認できた。ただ、器形等も含めて全く同一のものも確認できなかった。器形では、やや口縁が内側に伸び平坦面をなす浅鉢である16が、一番類似していると言えよう。実見したところ、胎土・色調・調整では5～7、菊花文の特徴では1・2・5・8・10・13・15が北部九州のものに類似している。しかし、4は胎土が沖縄産瓦質土器・瓦に類似すること、菊花文の中央部の隙間が大きいことなどから、沖縄で模倣した可能性も否定できない。

今回図示していないが、長崎県島原市森岳城では、沖縄出土の14の玉縁状口縁をもつ甕と、その丁寧なナデ、黒色に良く焼された点が非常に類似している。近世以降とされる脚付鉢を確認した（長崎県教育委員会2002）。また、沖縄産瓦質土器の擂鉢は備前を模倣したとされているが、胎土・色調は異なるが器形が類似するものとして長崎県壱岐観城の擂鉢を確認した（川口1999）。

いずれにせよ、沖縄出土の本土系瓦質土器は北部九州産のものが確實にあり、断定できないものでもその範疇にあると言えよう。ただ、北部九州では、文様は菊花文だけでなく、巴文や斜格子文や網目文なども多いが、これらは沖縄ではありません見られないということも注意しておく必要があろう。

4. まとめにかえて－本土系瓦質土器の産地についての課題－

本土系瓦質土器には北部九州地域のものに類似するものが多く、産地を限定できなくても、この地域の影響が強いことを再確認できた。しかしながら、全く同一の器形は確認できないこと、文様では菊花文だけが多いことなどは今後注意が必要であろう。時期については、細かく限定することは難しいが、出土遺跡の傾向からおおよそ15・16世紀代であることも再確認した。

今回も筆者の怠慢・未熟さから、表面的な比較に止まってしまったことを深く反省したい。しかし、沖縄出土の本土系瓦質土器、沖縄での瓦質土器生産を考える上で、日本本土の各地域の様相と比較することは必要と考えており、今後は沖縄産瓦質土器も考慮してより視野を広げて検討していきたい。

最後になりましたが、この小稿を執筆するにあたって、実見等において以下の方々ならびに諸機関にお世話になりました。記して感謝します。

山崎頼人（小都市教育委員会）、城戸康利・山村信榮（太宰府市教育委員会）、川口洋平（長崎県教育委員会）、瀧本正志（福岡市埋蔵文化財センター）、佐藤亜聖

（せと てつや：調査課 専門員）

参考・引用文献

- 新垣 力 2000 「モデルとコピーの視点から見た窯業開始期の沖縄」『南島考古』第20号
- 浦添市教育委員会 1985 『浦添城跡発掘調査報告書』
- 沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告一』
1998 『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告一』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 『首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書一』
2001b 『天界寺跡I』
2002 『天界寺跡II』
2003a 『首里城跡－右掖門跡及び周辺地区発掘調査報告書一』
2003b 『綾門大道跡－首里城跡守礼門地区発掘調査報告一』
- 小郡市教育委員会 2002 『福童山の上遺跡4』 小郡市埋蔵文化財調査報告書第170集
- 勝連町教育委員会 1984 『勝連城跡－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－』
- 川口洋平 1999 『長崎県における周防・豊前系雑器の流入について』『西海考古』創刊号
- 金城亜信 1995 『瓦質土器』『涌田II』沖縄県教育委員会
- 佐藤亜聖 1996 『大和における瓦質土器の展開と画期』『中近世土器の基礎研究』Ⅷ・Ⅸ 日本中世土器研究会
- 瀬戸哲也 2004 (印刷中) 『沖縄出土の本土系瓦質土器について』『グスク文化を考える』
- 太宰府市教育委員会 1999a 『太宰府条坊跡II－第50次調査－』太宰府市の文化財第42集
1999b 『太宰府条坊跡III－太宰府条坊跡第149次調査－』太宰府市の文化財第43集
2001 『太宰府条坊跡XVI－「鉢ノ浦」周辺の調査－』太宰府市の文化財第52集
2002 『太宰府条坊跡21－第156・157・158次調査－』太宰府市の文化財 第61集
2003 『速歌屋遺跡1』太宰府市の文化財 第68集
- 長崎県教育委員会 1985 『今福遺跡II－県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第二冊』長崎県文化財調査報告書第77集
1991 『坂口館跡・小蘭城跡』『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書III』長崎県文化財調査報告書第99集
1995 『Ⅲ杉峰城跡』『県内重要遺跡範囲確認調査報告書III』長崎県文化財調査報告書第121集
1998 『沖城跡』長崎県文化財調査報告書第143集
2002 『森岳城跡』長崎県文化財調査報告書第166集
- 今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城跡発掘調査報告書I』
- 福岡市教育委員会 1990 『有田・小田部』福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集
1994 『有田・小田部第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集
1996 『有田・小田部第24集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集
1997 『野多目A遺跡4－野多目A遺跡群第4次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集
2002 『博多80－御供所跡開跡地道路関係埋蔵文化財調査報告書－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集

清朝銭について

On Ch'ing Dynasty Coins

知念 隆博

CHINEN Takahiro

ABSTRACT: It is known that the Ch'ing-dynasty coins have been excavated in mainland sites of the Edo period, when the country was under the so-called edicts of seclusion. On the other hand, coins from the Ch'ing-dynasty hardly appeared in the Ryukyu Kingdom which remained open to trade. The majority of coins found in Okinawa are either of the Northern Sung dynasty or the so-called Kan-ei Tsuho of Edo period. This paper attempts to survey the Ch'ing-dynasty coins found in the Okinawa Islands and to compare the distribution of Ch'ing coins with that of the Kan-ei Tsuho. The results demonstrate that, in the Edo period, Ryukyu had closer relations to Japan than to China.

1.はじめに

沖縄県内より出土する銭貨は、北宋銭が最も多く、元朝銭、明朝銭は少ない、清朝銭はさらに少なく、1遺跡で複数枚出土するのは稀である。本土では江戸時代の鎖国体制下において清朝銭が検出されることで、注目されているが、沖縄県においては琉球王国という鎖国体制下ではなく、清朝と交易を行える状況にあったにも関わらず出土枚数は少ない。そこで今回は清朝銭を出土する遺跡を紹介し、出土枚数の少ないと同時に銭貨である寛永通寶との関わりを若干考えたい。なお、報告書等では、全ての銭貨の拓影を載せることは不可能な場合が多いので、今回の出土遺跡数および枚数は最小の数字と考えている。

2.出土遺跡

清朝銭を出土する遺跡を表1に記す。それによると10遺跡で清朝銭を出土している。清朝銭は初鑄年1662年の康熙通寶、1736年の乾隆通寶、1796年の嘉慶通寶、1821年の道光通寶の4種が確認されており、清朝銭以外には寛永通寶が目立ち、初鑄年1636年の古寛永、1668年の文銭、1697年の新寛永などが確認されている。以下に各遺跡について略述する。

(1) 漢名那ウェースアタイ遺跡（知名定順・金城利枝 編1990）

宜野座村字漢那の石灰岩丘陵に立地する、11・12世紀～17・18世紀の遺跡で、全盛期は出土する陶器より13～15世紀と考えられている。遺構は住居址、鍛冶工房跡等が確認されている。出土した清朝銭は乾隆通寶の完形品1点であり、その他の銭貨は無文銭がある。

(2) 城間古墓群（松川章 編1990）

浦添市字城間の石灰岩の丘陵斜面及び海岸低地に形成されている。確認された古墓は14基で、岩陰囲い込み墓3基、岩陰掘り込み墓5基、掘り込み墓4基、亀甲墓2基である。清朝銭は乾隆通寶が掘り込み墓より1点確認されている。その他の銭貨はない。出土陶磁器は近世のものを主体としている。

表1 清朝銭出土遺跡表

№	遺跡名	清朝銭				文献
		康熙通寶	乾隆通寶	嘉慶通寶	道光通寶	
1	漢那ウェースアタイ遺跡		○			知名定順・金城利枝 編1990
2	城間古墓群		○			松川章 編1990
3	湧田古窯跡		○	○	○	大城慧 ほか1993, 島袋洋 編1995・1999
4	識名シーマ御嶽遺跡		○			島弘 編1997
5	銘苅古墓群		○		○	金武正紀 編1998・1999, 仲宗根啓 編2001
6	ナーチューモ古墓群		○			金武正紀 編2000
7	首里城跡		○	○	○	上原靜 編1995, 大城慧 ほか1998, 新垣力 編2002, 盛本勲 編2002, 西銘章 編2001, 当真嗣一・上原靜 編1988
8	天界寺	○				島弘 編1999・2000, 島袋洋 編2001・2002
9	円覚寺		○		○	山本正昭 編2002
10	阿波根古島遺跡				○	金城亀信 ほか・編1990

(3) 湧田古窯跡（大城慧 ほか1993, 島袋洋 編1995・1999）

那覇市泉崎の丘陵線辺部に立地する琉球王府の中心的窯業地であった。17世紀初期に開窯されたとされ、1682年の壺屋へ窯場が統合されると、次第に衰退していったと考えられている。遺構は窯跡、石積、瓦列遺構、瓦敷遺構、井戸、溝状遺構、ピット等が検出されている。清朝銭は乾隆通寶1点、嘉慶通寶1点、道光通寶1点得られており、その他の銭貨は北宋銭、明朝銭、寛永通寶、無文銭等が得られている。

また、注目される資料として、無文銭が集中して出土しており、2~13枚まとまっているものが6資料確認されている。

(4) 識名シーマ御嶽遺跡（島弘 編1997）

那覇市字真地の石灰岩台地に所在するグスク時代～近世の遺跡である。検出された遺構は土留め状遺構、集石遺構、ピット等がある。清朝銭は乾隆通寶が1点確認されているが、攪乱層からの出土である。その他の銭貨として寛永通寶が1点ある。

(5) 銘苅古墓群（金武正紀 編1998・1999, 仲宗根啓 編2001）

那覇市字銘苅に所在する石灰岩に形成された古墓群である。圓込岩陰墓、掘込墓、破風墓、平葺墓、亀甲墓等が約290基確認されている。清朝銭は乾隆通寶が2点、道光通寶が1点確認されており、両銭貨とも寛永通寶と出土している。当遺跡において特徴的な傾向として、銭種が少なく、主体を成しているのは寛永通寶であることを挙げることができる。また、絵銭と考えられる資料も1点確認されている。

(6) ナーチュー毛古墓群（金武正紀 編2000）

那覇市字天久と安謝の境の石灰岩丘陵の斜面に形成された古墓群である。確認された古墓は60基で掘込み墓が54基、亀甲墓が6基である。清朝銭は乾隆通寶が1点得られている。その他銭貨として、熙寧元寶、淳熙元寶、洪武通寶が各1点検出され、寛永通寶が98点得られている。墓の覆土より検出されているものは注目される。

(7) 首里城跡（上原靜 編1995、大城慧 ほか1998、新垣力 編2002、盛本勲 編2002、西銘章 編2001、当真嗣一・上原靜 編1988、山本正昭 編2003）

那覇市首里当蔵町3丁目に所在する、琉球王府の中心となっていたグスクである。その築城年代については明確ではないが、尚巴志王代(1422~1439年)には構造が確立していたと考えられている。発掘調査は継続して行われているが、首里城より出土する清朝銭は、乾隆通寶、嘉慶通寶、道光通寶であり、他の遺跡と同様に数点確認されているだけであり、北宋銭に比べると非常に少量となっている。

(8) 天界寺跡（島弘 編1999・2000、島袋洋 編2001・2002）

那覇市首里金城町に所在し、石灰岩台地に立地する。首里城の西方に、第一尚氏の菩提寺として1450~1456年の間に創建されたと伝えられ、明治末頃廃寺となる。検出された遺構は、基壇、参道、石列、円弧状遺構、石垣、石積、石圍い遺構、ピット等がある。清朝銭は康熙通寶の1点得られている。その他の銭貨としては、首里城と同様に北宋銭の銭種が多く、寛永通寶、琉球銭、無文銭も確認されている。

(9) 円覚寺跡（山本正昭 編2002）

那覇市首里当蔵町に所在し、石灰岩台地に立地する。第二尚氏の菩提寺として、首里城の北方に隣接して1492年に創建されたと伝えられている。昭和初期には国宝に指定されたが、去る沖縄戦において焼失した。

清朝銭は乾隆通寶1点、道光通寶1点得られている。その他の銭貨は北宋銭、明朝銭、寛永通寶、無文銭等が得られている。

(10) 阿波根古島遺跡（金城亀信 ほか・編1990）

糸満市字阿波根に位置し、泥岩の風化土斜面上に立地する。東南の丘陵上に阿波根グスクが隣接している。検出された遺構は集石群、長方形状石敷、石列がある。清朝銭は道光通寶が搅乱層より1点得られている。その他の銭貨は中国銭が太平通寶、宣和通寶、洪武通寶の3点あり、寛永通寶が9点、無文銭が4点得られている。

出土遺跡より窺うことができるのは、清朝銭の大部分は首里城周辺を中心とした南部地域からの出土であり、北部地域では漢那ウェースアタイ遺跡、中部地域では城間古墓群だけである。また、首里城周辺にしても、まとまって出土することではなく、各遺跡、遺構で1~2枚が確認されるだけである。一方で、銘苅古墓群等にみえるように、寛永通寶は複数枚確認されている遺跡がほとんどである。

4. 清朝銭と寛永通寶

清朝銭は23枚確認されているが、寛永通寶は少なくとも486枚あり、両者の枚数にはかなりの開きがある。

ある。その理由の一つとしては、1609年に薩摩によって琉球が侵攻されたことをあげることができる。1609年以後は『中山伝言録』及び『琉球国志略』において、日常的に寛永通寶が使用されていたことが窺えるため、経済においても江戸のシステムに組み込まれることになり、寛永通寶が通貨としても主になったのではないか。

また、首里城周辺において清朝銭及び寛永通寶が多く出土しているという事実は、調査頻度の影響もあると考えるが、銭貨による物品の売買が行われていたのが首里を中心としていたことを表している可能性がある。

4. おわりに

清朝銭及び寛永通寶等の出土する遺跡とそれより推測されることについて若干記述したが、最後に今回の抽出作業において気付いたことと課題を記したい。

首里城跡の報告書を調べると、清朝銭が数点は記載されているので、当初は沖縄県内より出土する清朝銭は、他の都道府県に比べて、多いと考えていた。しかし、実際に集計すると、出土する遺跡及び枚数也非常に少なく、本土と大差はない。一方で寛永通寶の出土数が多く、銭貨を出土する遺跡では、大部分の遺跡において確認されている。そのようなことから、沖縄県内より出土する銭貨は北宋銭が最も多い、次いで寛永通寶、明朝銭と続くと考えられる。

沖縄本島以外の地域をみてみると、清朝銭について記載されている遺跡はなかった。しかし、沖縄本島よりも距離的に中国に近いため、何らかのかたちで導入されていたと考えられる。

今後の課題としては、無文銭、清朝銭及び寛永通寶の関係である。県内の御嶽、古墓などで確認されている無文銭は清朝銭及び寛永通寶と同時期であるため、何らかの相関関係があると考えている。

本土の中世～近世にかけての墓には副葬品として、概ね6枚の銭貨を死者に持たせる六道銭という習慣があった（鈴木公雄1999）、寛永通寶が多いということは、この六道銭というものが沖縄県内においても存在した可能性がある。1つは石川市の伊波仲門門中墓（座間味政光・大田宏好 編1987）であり、報告書によると墓室入口の寛永通寶6枚は、石の下より出土しているということである。2つめは、具志川市のジョーミーチャー墓（照屋孝 編2003）であり、ここでは墓室内的扇子甕内に銭種は不明だが、6枚の銭貨があることがわかっている。また、6枚と限定できない資料でも、銘苅古墓群等の古墓より銭貨が出土する例が増加していることから、今後、墓より出土している資料を集成する必要があると考えている。

(ちねん たかひろ：調査課 専門員)

参考・引用文献

- 新垣力（編）2002『首里城跡－繼世門周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集
沖縄県立埋蔵文化財センター
- 上原静（編）1995『首里城跡 南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第120集 沖縄県教育委員会
- 大城慧 ほか1993『湧田古窯跡（I）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第111集 沖縄県教育委員会
- 大城慧 ほか1998『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第133集 沖縄県教育委員会
- 片桐千亜紀（編）2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書

第14集 沖縄県立埋蔵文化財センター

岸本美緒1999『清代中国の経世論における貨幣と社会』『越境する貨幣』歴史学研究会（編）青木書店

金城亜信ほか1990『阿波根古島遺跡－那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第96集 沖縄県教育委員会

金武正紀（編）1998『銘炳古墓群（I）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告V－』那覇市文化財調査報告書第39集 那覇市教育委員会

金武正紀（編）1999『銘炳古墓群（II）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VI－』那覇市文化財調査報告書第40集 那覇市教育委員会

金武正紀（編）2000『ナーチュ－モ古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VII－』那覇市文化財調査報告書第44集 那覇市教育委員会

小畠弘己2003『出土清朝錢研究の地平－清錢と寛永通寶－』『出土錢貨』第18号 出土錢貨研究会

座間味政光・大田宏好（編）1987『古我地原内古墓－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（7）－』沖縄県文化財調査報告書第85集 沖縄県教育委員会

島弘（編）1997『識名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告－』『那覇市文化財調査報告書』第34集 那覇市教育委員会

島弘（編）1999『天界寺跡－首里城線街路工事に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第42集 那覇市教育委員会

島弘（編）2000『天界寺跡－首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第43集 那覇市教育委員会

島袋洋（編）1995『湧田古窯跡（II）－県庁舎建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第121集 沖縄県教育委員会

島袋洋（編）1999『湧田古窯跡（IV）－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第136集 沖縄県教育委員会

島袋洋（編）2001『天界寺跡（I）－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター

島袋洋（編）2002『天界寺跡（II）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター

鈴木公雄1999『出土錢貨の研究』東京大学出版社

知名定順・金城利枝1990『漢那ウェヌアタイ遺跡－近隣綠地公園建設に伴う発掘調査報告書－』宜野座村乃文化財9 宜野座村教育委員会

照屋孝（編）2003『具志川市の文化財第5集－ジョー（門）ミーチャー墓調査概報－』具志川市教育委員会

当真嗣一・上原静（編）1988『首里城跡 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県教育委員会

永井久美男1998『近世の出土錢貨 II－一分類図版篇－』兵庫埋蔵錢調査会

仲宗根啓（編）2001『銘炳古墓群（III）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VIII－』那覇市文化財調査報告書第50集 那覇市教育委員会

西銘章（編）2001『首里城跡－下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集 沖縄県立埋蔵文化財センター

東野治之1997『貨幣の日本史』朝日選書574 朝日新聞社

松川章（編）1990『城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書－』浦添市文化財調査報告書 浦

添市教育委員会

盛本勲（編）2001『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集
沖縄県立埋蔵文化財センター

山本正昭（編）2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集 沖縄県立
埋蔵文化財センター

山本正昭（編）2003『綾門大道跡－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報
告書第13集 沖縄県立埋蔵文化財センター



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



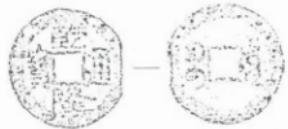
11



12

1 康熙通寶（天界寺跡）、2～12 乾隆通寶（2 漢那ウェーヌアタイ遺跡、3 城間古墓群、4 濱田古窯跡、
5 識名シーマ御嶽遺跡、6・7 銘苅古墓群、8 ナーチューモ古墓群、9～12 首里城跡）

図1 出土清朝銭 (S=1:1)



13



14



15



16



17



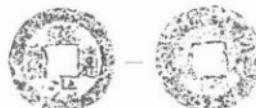
18



19



20



21



22



23



24

13乾隆通寶（天界寺跡）、14・15嘉慶通寶（14首里城跡、15湧田古窯跡）、16～23道光通寶（16天界寺跡、17湧田古窯跡、18銘莉古墓群、19～21首里城跡、22円覺寺跡、23阿波根古島遺跡）、24絵銭（銘莉古墓群）

図2 出土清朝銭2 (S=1:1)

南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査

—海洋採集遺物からみた海上交通—

Preliminary Investigation into Discovering Sunken Ships in the Southwest Islands
—Underwater Artifacts and Marine Transportation—

宮城弘樹・片桐千亜紀・新垣力・比嘉尚輝

MIYAGI Hiroki・KATAGIRI Chiaki・ARAKAKI Tsutomu・HIGA Naoki

ABSTRACT: This paper reports the results of preliminary investigations of surface artifact distributions with the aim of discovering sunken ships in the Southwest Islands. The ultimate purpose of the project was to register underwater concentrations of artifacts which may relate to shipwrecks. Coastal surface collections and the site locations are introduced here.

Many sites with artifact concentrations were found and registered as possible locations of sunken ships. Further steps must be undertaken, including the designation of such sites as cultural properties. The time span of this investigation included the medieval, pre-modern and a part of the modern period.

1. はじめに

沖縄県は唯一の離島県である、島嶼性の特性を活かした考古学研究を手がけ、陸上の遺跡についてはこれまで多くの成果が見られる。一方、當時水中に没している水中遺跡の調査事例は圧倒的に少ない。その中、海から引き揚げられた遺物が拾われ、報告者の勤め先へ持ち込まれ、採集された遺物に接する機会があった。このため筆者らは、海から拾われた遺物が散布する遺跡の取り扱い等について日常酒席をともにする交友関係も手伝いよく話し合うことがあった。

今回の海底遺跡基礎調査を行うことで、このような「遺跡がどれだけあり」、また「潜在的にどれだけある可能性があるか」を調べることからはじめよう、と話し合い、宮城を代表者とし笠川科学研究助成による研究助成を受けて、「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査—海洋採集遺物からみた海上交通—」として2003年4月から調査を行っている。

今回の報文はこの調査報告であり、先に沖縄考古学会定例研究会で口頭発表した内容を文章化させたものである。報告は、沈没船に関連する情報を整理し、採集されている遺物を分析、最終的には海上交通の復元を目標としている。

2. 調査方法

1) **調査の意義** 南西諸島は花綵列島の愛称で呼ばれ、洋上に浮かぶ大小約200の島が南北1,000kmに連なる。北から大隅諸島・吐噶喇列島・奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島と連なり与那国島で国境を境に台湾となる。その地理的位置から歴史上、日本本土の南から北上する文化流入口とし交流・交易の窓口になり、環東シナ海の要衝に位置することから東アジアの海上航路上重要な位置にある。特に奄美諸島は海上航路に連なる島の様子から「道の島」の別称をもち、洋上交通の要所として機能した。史書に登場し確認されるだけでも、古代には遣唐使の南島路として機能し、中世から近世には沖縄本島に琉球王国を育む素地をつくった。日本開国を誘引した西洋船の往来も南西諸島を足がかりにした事はよく知られている。また、当然のことながら国内交通には、島々の往来に船が利用されていた。こ

のため、その航路上には船の往来を示す遺跡や遺物が残されていると考えられ、近年各市町村教育委員会の文化財調査によりこれらの遺跡が具体的に調査される事例もある（林ほか1999・大瀬1994）。このような、海上交通にかかる海底の遺跡を集成し海上交通を復元することは、島嶼県沖縄の歴史を紐解く上で極めて重要である。

2) 調査の目的 今回の調査では、本格的な沈没船発見を第1の目的とし、洋上交通の復元を研究の終着点としている。当面の目標である沈没船発見に係る情報収集として以下の調査を実施した。

1. 海洋探集遺物の調査 すでに海岸や海底より採集された遺物の事例を調査し、分類、時代、船籍、輸送品、規模などを推定し具体的な海上交通の復元材料とする。
 2. 文献資料の整理 古文書等から通史的に南西諸島を往来した船舶を追及し、座礁、沈没記録からその地点を特定する。
 3. 分布調査・範囲確認調査・有無確認 海上交通に頻繁に利用される地域などを踏査し遺跡発見を目指す。
- 3) 情報の整理 先ず始めに、沈没船にかかる遺跡と遺物の情報収集から着手した。そもそも考古学の対象とする遺跡がいったい幾つあるのかということに、管見に及ぶ範囲で収集することを行った。また、採集された遺物が沈没船に関わる事例か、海難事故等による事例か、はたまた陸上の遺跡に関わる散布なのかは今後さらに詳細な検討を必要とする。今回は収集できた主な事例について次章で具体的に紹介したい。

遺物の採集例は地元の方の持ち込み以外にも多く耳にする。例えば今帰仁村では戦争直後、海人（ウミンチュ）が海岸から採集した壺に古銭が大量に入っていたが、フルガニヤーに引き渡したため現存しないとう話がある（註1）。このような話は特に漁師などによって伝えられることが多く、読谷村長浜でもこのような伝聞が採録されている（知念1978）。

他方、海難事故の具体的な事例が近世の文書で幾つか見られる（赤嶺1988、比嘉1990）。勿論このような文献に登場する全てが船体の沈没を証明するものではないことは明らかで、むしろ沈没した事例に関しては文献にすら現れないと考えた方がいいのも事実である。そして沈没事例の全てが遺跡として現在まで残っているとも限らない。それでも、いくつかの漂流・座礁事例について現地で遺物を確認することができた。このような文献事例の整理を行うことによって本格的沈没船発見の契機となることが期待される。また、文献で確認できる事例において悉皆調査を実施し、海難事故の傍証としての遺物散布の確認調査を実施することも望まれよう。

さて、沈没船に関する情報については上記した以外で陸上の遺跡からもこれを推定することができる。具体的には港や造船所などの船に関する陸上の拠点施設、唐人墓（ex：恩納村仲泊）やオランダ墓（ex：名護市屋我地・国頭村宜名真）、大和（人）墓（ex：今帰仁村運天・勝連町浜比嘉）などと呼ばれている船員の遺体の引き上げ事例を伝える墓などである。その他、検証は難しいものの、民話や地名、民間伝承に見られる船に関する情報なども興味深い。例えば地名として唐船小堀（ex：今帰仁村今泊地先・座間味村阿児の浦）、オランダ浜（ex：久米島町東奥武地先）、大和干瀬（ex：恩納村仲泊地先）などについても興味深い事例でありこれらの地名はかなり多いと思われる。

以上、紹介した事例はいずれも沈没船や港、船に関する間接的な情報であり、これを整理することによって遺跡の発見に繋がるものと期待される。他方、海の情報を整理し座礁した船が無いか可能性を探ることも一つ重要である。例えば海上保安庁が整理する海図からは干潮時に海上に表れるリーフの所在を確認することができる。これによって普段の航行中に座礁しやすいポイントを探すことができる。また、戦後の記録が主であるが、海上保安庁がまとめている座礁や難破・事故の記録から、事

故の集中する地域を中心に調査対象とすることもできる。この方法は広大な海で闇雲に沈没船を探すことよりも有効であると考えられる。

4) 現地調査の手法 主として考古学的な調査によって沈没船に関連すると推定される遺物を確認することからはじめた。まずは採集された遺物の確認である。遺物の多くは県内各市町村教育委員会などによって保管されているものが主であるが、一部は個人保管のものなどがあった。これらの事例で採集地点を追調査で確認できたのは、未報告のものを含め10例ほどある。採集された主な遺物は陶磁器であるが、中にはパラストや錨などもある。また採集地点は特定できないが稀な事例として碇石なども確認されている。

次に遺跡の所在地についての確認調査を行った。実際にシュノーケリング等による潜水調査を実施した。この点が今回の調査における大きな特徴でもある。調査の対象とした遺跡は遺物が採集されている地点のほか、近世の文献記録に確認され伝承される座礁地点についても数例調査することとした。この潜水を伴う調査については3つの点に注意した。

1. 安全の確保 これは水中での作業であるため、一人で潜ることは避け数人で確認しながら行った。数人で行ったのには安全確保のほか、遺物の分布する範囲を陸上もしくは、船上より確認することを行うためでもある。
2. 遺物があるのか無いのか 即ち遺物散布が認められれば遺跡として認知していく必要性が高く、今後詳細調査を行う必要があると考えられる。このため遺物の有無という点に注意した。今回の調査目的の一つである。
3. 過度の遺物採集は避けることに十分注意する 遺物の有無確認及び範囲確認が目的であるので、当然遺物を採集することを行わなければ調査の意味がないと言われそうであるが、逆に過度の採集は遺跡破壊につながると考えたため避けた。この点に注意することが日常業務として遺跡保護にあたる筆者らに与えられた責務であると考えている。

やや前置きばかり長くなつたが、今回の調査を簡単に言えば、既に引き揚げられている遺物についてはなるべく所在を確認し実測をすること、採集されたと言われている場所については採集地点を特定するとともに遺物の散布、船体の有無などの現状を確認すること、記録に登場する事例についても同じように踏査を行うことである。

3. 調査概要

今回は下記の日程で沈没船記録や遺物散布の情報が得られた地域を対象に調査を行った。また、2週間に1回程度で文献の収集や情報の整理を目的とした勉強会を適宜実施した。

第1次調査（2003年4月29日）

沖縄島国頭村宜名真地先英國商船遭難の地（p地点）調査、宜名真オランダ墓調査、パラストを石材として利用された事例の調査（国頭村奥・宇嘉、大宜味村、今帰仁村）、引き揚げ錨の調査（国頭村奥）、宜名真沖シュノーケリング調査。

体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝

海底調査 片桐千亜紀・中山晋・松永洋平（浦添市教育委員会）

シュノーケリングによる海底調査の結果、リーフ上やリーフ下の砂地で清朝染付碗等の遺物を確認。遺物の保存状態は良く、水摩はあまり受けていないものが多い。また、引き揚げられたパラスト等は国頭村、大宜味村、今帰仁村に石碑等として転用されている。（写真1・2）



写真1 宜名真のオランダ墓



写真2 奥のバラスト

第2次調査（2003年5月30日～6月1日）

久米島町オーハ島（b地点）・はての浜（a地点）地先調査、海底に散布した陶磁器の範囲確認、体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力

海底調査 片桐千亜紀・中山晋・小川光彦（金沢大学修士課程学生）・山本祐司（カメラマン）
シュノーケリングによる海底調査の結果、はての浜やオーハ島の海底において多数の遺物を確認。
はての浜海底の遺物は小破片が多く、摩滅が著しいものが多い。オーハ島海底の遺物は比較的保存状
態が良く、水摩はあまり受けていない。久米島自然文化センター収蔵のはての浜・オーハ島表採遺物
の集計や分類・実測を実施。（写真3～6）



写真3 はての浜へ向かう



写真4 はての浜海底遺物散布状況



写真5 オーハ島海底調査風景



写真6 久米島自然文化センターでの実測風景

第3次調査（2003年6月6日～6月9日）

石垣島名蔵湾（f地点）採集の八重山博物館所蔵陶磁器及び先島文化研究所所蔵陶磁器調査。
体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝
調査の結果、名蔵湾シタダルの海岸で多数の遺物を確認。八重山博物館や先島文化研究所では関連した遺物を実見。（写真7・8）



写真7 名蔵湾近景



写真8 八重山博物館での実測風景

第4次調査（2003年7月12日）

伊江島伊江村湧出海岸（j地点）調査。湧出海岸に散布した陶磁器の範囲確認
体制：陸上踏査 宮城弘樹

西銘章（嘉手納高校教諭）

海底調査 片桐千亜紀・中山晋

秋本真孝（元北谷町教育委員会）

シユノーケリングによる調査の結果、リーフ内の溝みから褐釉陶器片を確認。干潮時に陸上となる海岸付近では多量の遺物が石灰岩に取り込まれるように集中していた。（写真9～11）



写真9 湧出海岸遠景



写真10 湧出海岸海底調査風景



写真11 湧出海岸遺物散布状況

第5次調査（2003年9月25日～28日）

宮古島上野村宮国地先ロベルトソン号座礁地点（0地点）、宮古島平良市池間地先八重干瀬プロビデンス号座礁地点（1地点）、多良間島多良間村高田海岸（n地点）座礁ファン・ボッセ号引き揚げ遺物の確認。

体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝

海底調査 片桐千亜紀・中山晋

プロビデンス号座礁地及びロベルトソン号座礁地付近の海底調査を実施したが、関連するものは発見できなかった。またこれとあわせて島内にあるロベルトソン号に関連するとされるバラストや、博愛記念碑（平良市）などの調査を実施した。多良間村高田海岸において染付碗や褐釉陶器を確認。同資料館では引き揚げられたヨーロッパ製陶器瓶を確認し実測を実施。（写真12～17）



写真12 野原公民館のバラスト



写真13 平良市の博愛記念碑

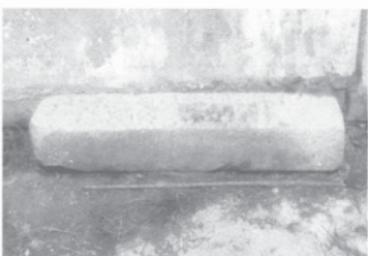


写真14 吉野集落のバラスト



写真15 高田海岸近景



写真16 高田海岸遺物散布状況



写真17 多良間村立ふるさと民俗学習館での実測風景

第6次調査（2003年10月2日～10月4日）

座間味島座間味村阿護の浦（d地点）引き揚げ遺物の確認、シュノーケリングやスクーバーダイビングによる海底調査。

体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝

海底調査 片桐千亞紀・中山晋・仲宗根瑞香
(沖縄県立埋蔵文化財センター)

スクーバーダイビングによる調査の結果、様々な器種の沖縄産陶器を確認、状態が良く破片が大型である。また、少量だが中世に比定される遺物（中国産褐釉陶器片）を確認。座間味村教育委員会所蔵の阿護の浦海底引き揚げ遺物を確認し、集計と実測を実施。慶良間海洋文化館を見学、阿護の浦表探資料を確認。（写真18～20）



写真18 阿護の浦遠景



写真19 阿護の浦海底調査風景



写真20 座間味村交流センターでの実測風景

4. 遺跡（確認地点）の紹介

本章では、既に周知の遺跡に加え、今回の調査によって確認された地点について紹介する。紹介にあたっては通常遺跡名称を用いるが、今回はアルファベット記号で地点名を示すこととした。その理由は今後、遺跡を直接的に保存管理する市町村教育委員会によって名称が決められることがよいと考えたことと、当該地点はあくまでも遺物採集地点であり追調査によって厳格に検討されるべきと考えたためである。また、今回の報告で遺跡が公にされることによって、宝探し的な調査の対象となり遺跡が滅失する恐れを避けるということも理由の一つである。既に報告書等によって遺跡名が付されているものに関しては今回も便宜上アルファベット記号で紹介するが、引用文献や文面を読んで頂ければいずれも周知の遺跡であることが理解されると思われる。

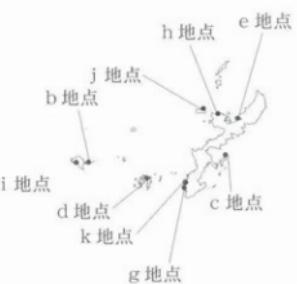
これまで沖縄諸島で採集、引き揚げの確認されている事例は多数ある。前述した様に陶磁器をはじめ、碇石や錨、バラストなどが海底採集遺物として知られている。年代については12世紀～19世紀の間の資料が断続的に確認されている。その他、沖縄戦時の沈没船と関連資料も多数知られているが、これについては今回の調査の対象としなかったため省略する。

地点名	場所	採集資料	保管場所
a 地点	はての浜	龍泉窯系青磁割文罐、同安窯系青磁罐、等	久米島町自然文化センター、沖縄県立埋蔵文化財センター、久手賀村（個人蔵）



12~13世紀

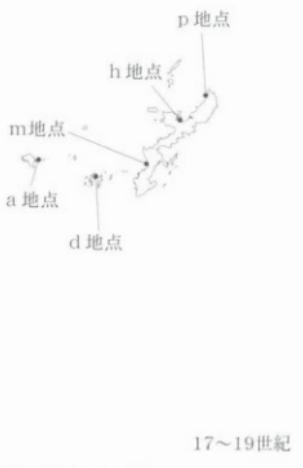
地点名	場所	採集資料	保管場所
b 地点	オーハ島地先	龍泉窯系青磁無文外反 碗・同盤・同盤・等	久米島町自然文化セン ター・久手賀村（個人蔵）
c 地点	伊計島地先	龍泉窯系青磁碗	海の文化資料館
d 地点	座間味村阿羅屋の浦	褐釉陶器	沖縄県立埋蔵文化財セン ター
e 地点	塩屋浜	青磁	保管場所未確認
f 地点	名瀬浦	龍泉窯系青磁碗・同盤・ 同盤・白磁碗・等	先島文化研究所・石垣市 教育委員会・沖縄県立博 物館・八重山博物館
g 地点	瀬長島地先	青磁碗等	沖縄県立埋蔵文化財セン ター
h 地点	今帰仁村今泊地先	青磁皿・等	今帰仁村歴史文化セン ター
i 地点	久米島白瀬川河口	青磁・白磁・天目・石 器	保管場所未確認
j 地点	伊江島北海岸	龍泉窯系青磁細薄弁文 碗・明代青花・褐釉陶 器	保管場所未確認
k 地点	那覇港	青磁破片（鳥居 1953）	東京大学の資料が該當 か？



14~16世紀

第1-1図 遺跡確認地点

地点名	場所	船名	船籍	年代	採集資料	保管場所
a 地点	はての浜	不明	不明	不明	染付	沖縄県立埋蔵文化財センター
d 地点	座間味村阿波 の浦	不明	不明	不明	沖縄産陶器	座間味村教育委員会
h 地点	今帰仁村今治 地先	不明	不明	不明	染付	今帰仁村歴史文化センター
i 地点	八重干瀬	プロビデンス 号	イギリス	1795	バラスト・等	泡瀬島(未確認)
m 地点	北谷町地先	インディア ン・オーク号	イギリス	1857	染付鏡・墨・ 褐釉瓶・ワイ ン瓶・等	北谷町教育委員会
n 地点	嘉手納海岸	ファン・ボッ セ号	オランダ	1857	染付鏡・墨・ 壺瓶・牧漆器・ ヨーロッパ陶器	多良間村立ふるさと 民俗学習館
o 地点	上野村宮園地 先	ロベルトソン 号	ドイツ	1873	バラスト(鉄)	野原公民館
p 地点	国頭村宣名真 地先	不明	イギリス	1874	染付鏡・バラ スト(石)	国頭村奥・宣名真



地点名	場所	引き揚げ資料	保管場所
不明	恩納村山田グスク	碇石	メーガー
a 地点關係?	久米島町宇江グスク	碇石	久米島自然文化センター
p 地点關係	国頭村宣名真	バラスト(石)	国頭村美交貢館
p 地点關係	国頭村宣名真	バラスト(石)	国頭村宣名真
p 地点關係	国頭村宣名真	バラスト(石)	国頭村字嘉
p 地点關係	国頭村宣名真	バラスト(石)	大宜味村役場慰靈碑
p 地点關係	国頭村宣名真	バラスト(石)	今帰仁村連火為朝上祭碑
p 地点關係	国頭村宣名真	錨	奥港
o 地点關係	上野村	バラスト(鉄)	上野村野原公民館
n 地点關係	城辺町吉野海岸採集	バラスト(石)	吉野民家
不明	多良間村嘉手納岸	錨	多良間村資料館



第1-2図 遺跡確認地点

a 地点（久米島町ナカノ浜）12世紀中～13世紀前半・16世紀後半～17世紀前半

はての浜（註2）は沖縄県久米島町東奥地先の「はての浜」と呼ばれる長大な砂丘地の北側に所在する。遺物が採集される地点は「ナカノ浜」と呼ばれる全長8kmある砂丘のほぼ中央にあり、1994年に新垣義夫氏が採集した資料を、宜野湾市の講演会で講師として訪れていた手塚直樹氏に見せたことにより注目されることとなった遺跡である。

第2図1～4・6は西銘章氏が久手賀稔氏より借用し県立埋蔵文化財センターに一時保管されていた資料である。既に同氏に返却済みである。5は久米島自然文化センターに保管されている資料である。7～11は金武正紀氏・金城亜信氏・城間肇氏が表探しした資料で県立埋蔵文化財センターに保管されている。

第2図1～4は龍泉窯系青磁碗で体部内面に劃花文を施す。1は口縁部資料で5区画した体部内面に花文を施す。2～4は底部資料で見込みに「金玉満堂」の銘款（2）や靈芝文（3・4）を施す。6は同安窯系の青磁櫛描文皿で内底に十字文とジグザグ文様を組み合わせて描く。5は久米島町自然文化センターに保管されている資料で採集地点はa地点ではなく、b地点（オーハ島奥地先）からとなっているが資料の年代観等から当該地点とした。これらの資料については既に久手賀稔氏のもとに返却済である。7は龍泉窯系青磁劃花文皿である。年代については、大宰府編年（宮崎ほか2000）によれば12世紀中頃～13世紀後半に整理されている資料である。類似する出土例として倉木崎海底遺跡（林ほか1999）が知られている。倉木崎海底遺跡は鹿児島県奄美大島の宇検村に所在しており、焼内湾の入口にある枝手久島との間にある比較的浅い海峡の海底一帯に陶磁器が散布している。1995～1998年、4次にわたり確認調査が実施され2,300点余の遺物が引き揚げられている。陶磁器が主で過半数は龍泉窯系劃花文青磁碗、同安窯系櫛描文皿などで、この点も今回調査で得られた陶磁器のバリエーションと酷似する。11は中国産陶器と考えられるが、水磨の影響を著しく受けており詳細は不明である。8は褐釉陶器の底部で、器種は小形の長胴壺と考えられる。

これら以外にも、点数こそ少ないが16世紀後半～17世紀前半頃の帰属年代を与えられる興味深い資料が含まれる。9は色絵で漳州窯系の五彩盤と考えられるが、上絵がすべて剥落しているため、文様は判然としない。10は染付で口縁こそ欠損するが輪花口縁を呈すると思われる芙蓉手の碗で、内底には花鳥文などを描く。いずれも管見の限り首里城跡のみで出土している優品である。

上述のようにa地点には2つの時期のまとまりがあると推定され、後述するb地点も本地点と近接しており仮にこれらの遺物が船舶の座礁・沈没を示す事例であるならば、この海域は海難事故の頻発した難所であったと推定される。また久米島の地名の中にオランダ浜とされる地名があるが（仲村1992）、これもやはりオランダ船の座礁に由来する地名とされる。

b 地点（久米島町オーハ島）14世紀後半～15世紀前半

久手賀稔氏によって多量の遺物が採集され、200点余が久米島自然文化センターに保管されている。他にも、当センターには仲里村教育委員会（当時）によって採集された遺物も保管されている。当該遺跡は法政大学の探検部によって遺物分布調査が実施されているが、一般に報告公開されておらず調査の詳細については不明な点が多い。また、雑誌にも取りあげられる（大竹2002）など認知度も高く、比較的容易に遺物が採集されていることも事実である。第3図に採集された主な資料を図示した。

1～4は龍泉窯系の外反口縁を呈する無文碗である。口縁部端に丸みをもち、腰が張り、底部は幅広で、見込みに印花文を施すものもある。釉薬は厚くかかる特徴がある。5～7は福建・廣東系の外反口縁を呈する無文碗である。口縁部端に丸みをもち、高台の成形は粗く施釉が徹底していない。見込

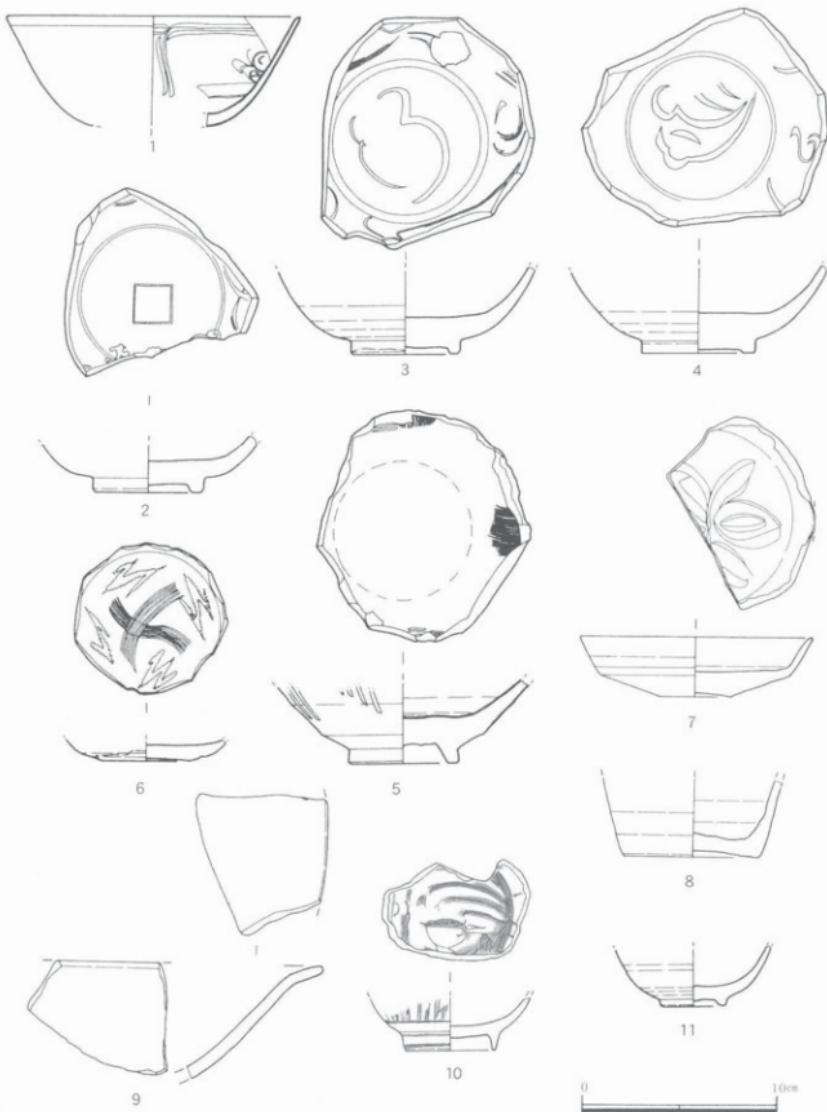


図2 a地点（久米島町ナカノ浜）表探遺物

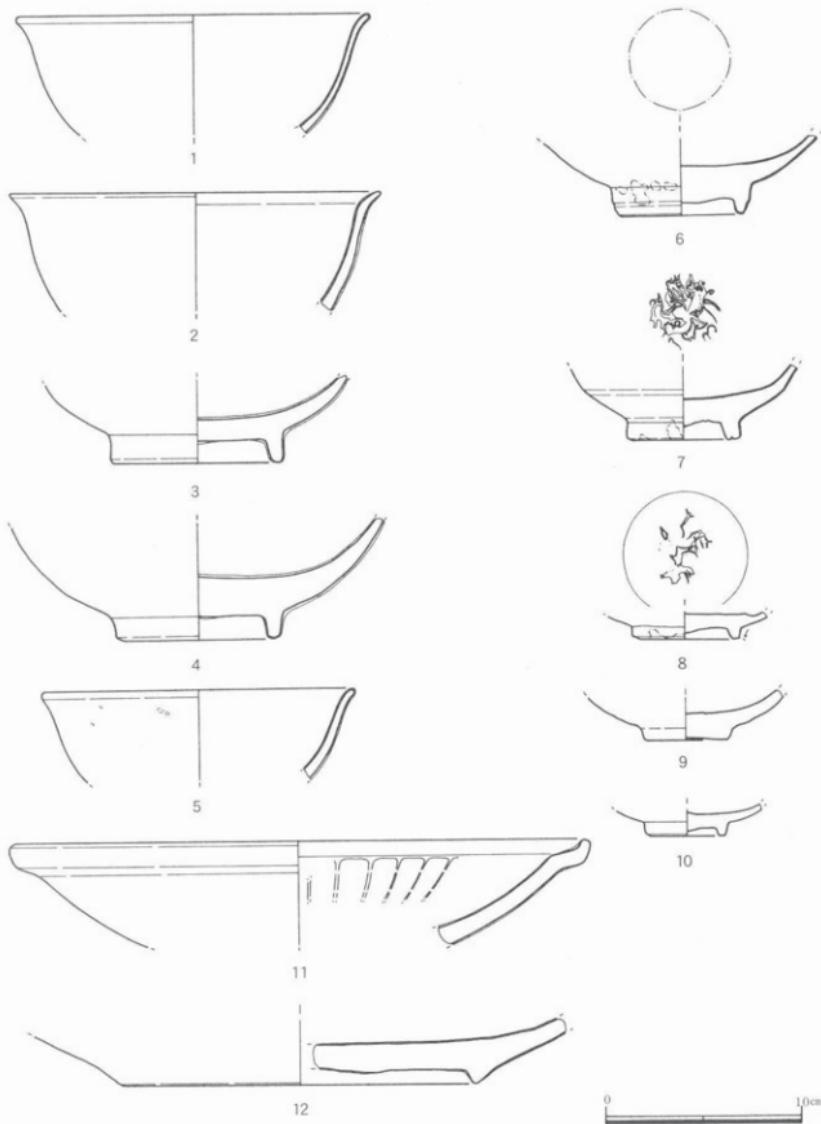


図3-1 b 地点（久米島町才一八島）表探遺物

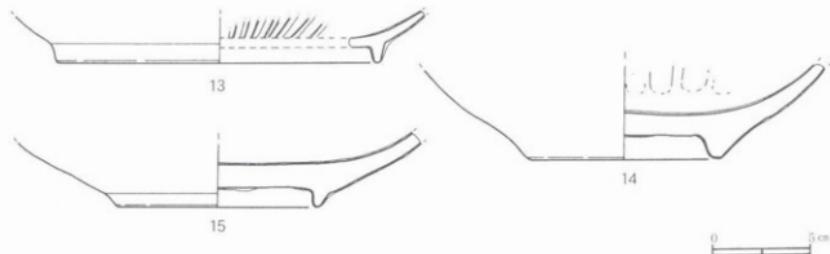


図3-2 b地点（久米島町オーハ島）表探遺物

みを釉剥ぎするもの（6）や印花文を施すもの（7）がある。8～10は皿の底部資料である。8は見込みに印花文を施す。9は上底状の底部を呈する。11～15は盤である。11は鈍縁口縁を呈し、内面に幅広の蓮弁文を描く。12・14・15は臥足と呼ばれる削り出しの高台をもつもので、外底を蛇の目状に釉剥ぎする底部資料である。13は幅広の高台を持ち、器壁が薄く内面に細い蓮弁文を描く底部資料である。

主体資料となる青磁無文碗は金武正紀氏が今帰仁城跡の出土資料から1383年～1415年を中心にして招来された資料群としているもの（金武1990）に類似しており、やや幅を持たせて14世紀後半～15世紀前半の資料群と考えられる。

c 地点（伊計グスク近く）14世紀後半～15世紀前半

ダイバーの棚原盛秀氏によって採集された資料で、沖縄産陶器などとともに青磁破片が採集され、現在与那城町海の文化資料館に数点保管されている。資料は青磁の無文碗で底部は幅広、釉は厚くかかる特徴があり、見込みには印花文を施す。これもb地点と近い年代の資料で14世紀後半～15世紀前半の資料群と考えられる。ただし、当該資料は採集点数も少なく資料の年代にばらつきがあることから、陸上の遺跡と関わる資料とも推定される。採集地点等の聞き取り調査を実施していないため、詳細については今後の追調査を待ちたい。

e 地点（カンサガニク遺跡）15世紀代

呉屋義勝氏らによって採集された資料で、青磁破片が数点採集されている（岸本ほか1984）。これもc地点と近い状況と考えられ、採集点数も少ないため、陸上の遺跡と関わる資料とも推定される。

f 地点（名蔵シタタル遺跡）15世紀中頃

沖縄県内で最も多くの資料が採集され、大濱永亘氏によって報告される著名な遺跡である（大濱1994）。当該資料の大部分は先島文化研究所に2,342点保管されている（大濱1999）。他にも、日本水中考古学会によって調査された遺物が石垣市教育委員会に保管されているとのことだが、今回は確認できなかった。また、ジョージ・H・ケアによって採集された遺物が沖縄県立博物館に保管されており、これらは既に多方面に紹介されている（沖縄県立博物館1982）。同様の資料が八重山博物館に保管され

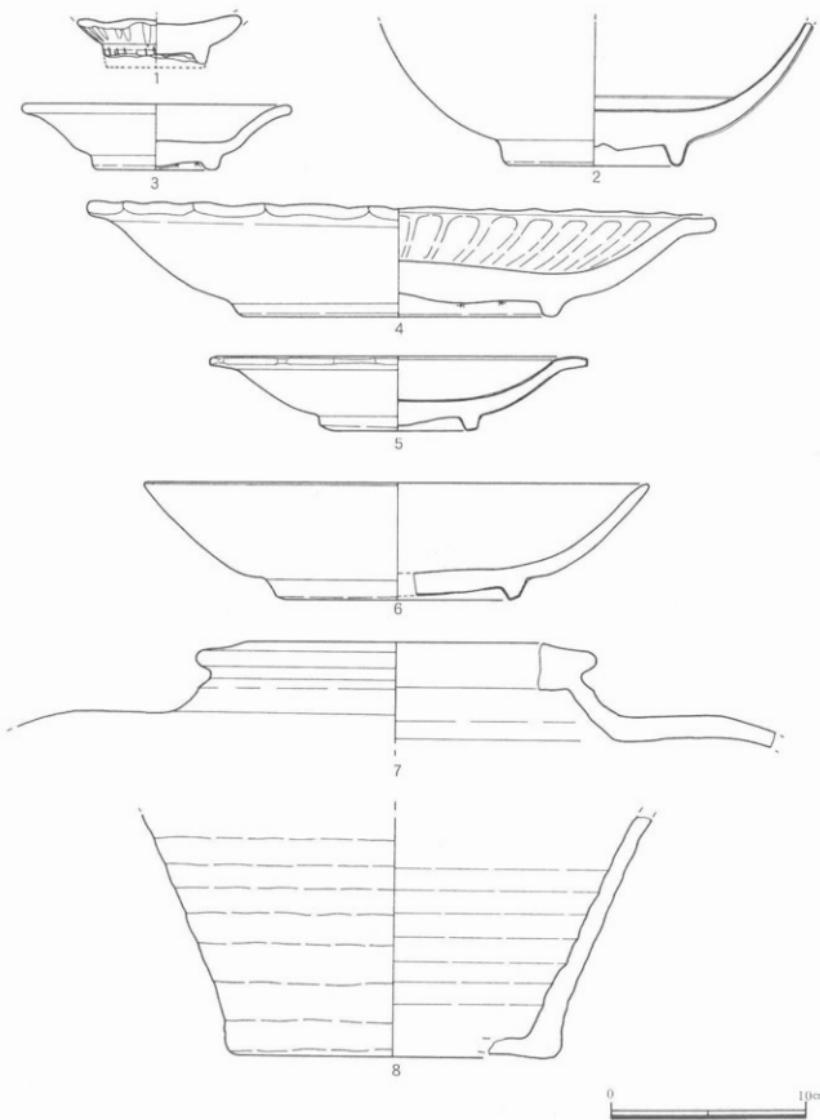


図4-1 f地点(名蔵シタダル遺跡)表採遺物

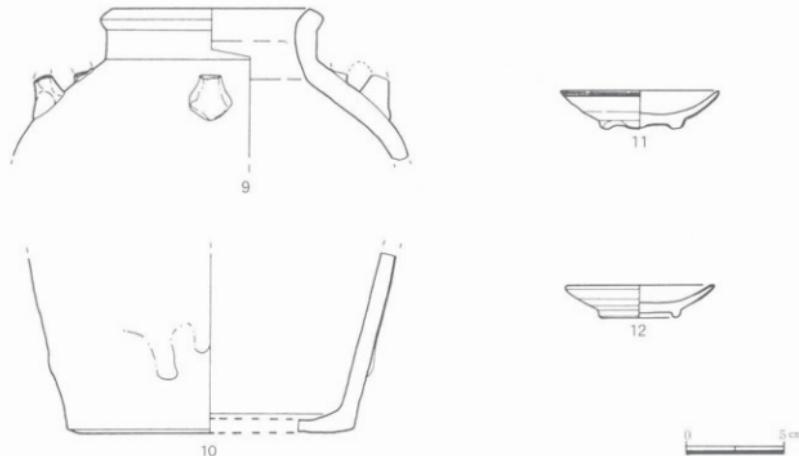


図4-2 f地点（名蔵シタダル遺跡）表探遺物

ているので、今回はこの八重山博物館の保管資料を紹介する（第4図）。

1は小形の碗で片切り掘りによる蓮弁文が施される底部資料である。2は大形の無文外反碗の底部資料で、高台の削り出しあは浅く腰が張る。3～6は盤で、大小・器形にバリエーションが認められる。3は腰が張り、外反口縁を呈する。4・5は稜花盤で、大型で内面に幅広の蓮弁文を施すもの（4）や無文のもの（5）がある。6は無文で直口口縁をもつ。7・8は中国産の褐釉陶器で首里城などによくみられるタイプのものである。9・10は褐釉陶器壺で、縦耳の付くナデ肩器形である。11・12は森田分類D群（森田1982）で抉高台のものと、切り高台にならないものがある。これらの資料群は首里城跡京の内SK01（金城ほか1998）の類品を多く含み15世紀前半から中葉頃を中心とした年代観が妥当と考えられる。

g地点（瀬長島）15世紀中～16世紀前半

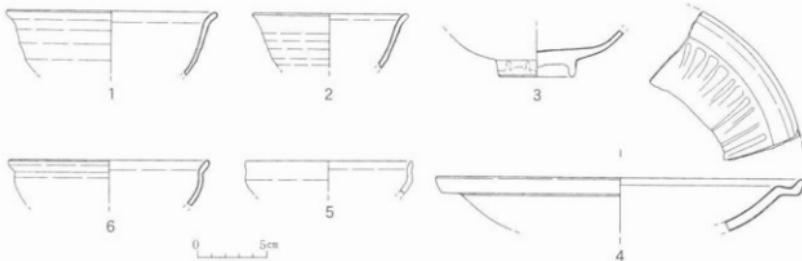
西銘章氏（嘉手納高校教諭）によって採集された資料で、青磁破片が数点採集されている。これも15世紀頃の資料を中心とするものだが、c地点と近い状況と考えられ陸上の遺跡と関わる資料とも推定される。今回現地踏査を行ったが遺物の散布を確認することはできなかった。

h地点（今帰仁村今泊海岸）15世紀中～16世紀前半・19世紀？

仲渠村智氏（文化財バトロール員）によって採集された資料で、今帰仁村歴史文化センターに持ち込まれた。青磁数点が採集されている。他にも海岸で打ち上げられた資料があるが、点数や状況からc地点と近い状況とも考えられる。最も近いと考えられる遺跡として志慶真川上流の今帰仁城跡がある。このため港と関わる遺物とも考えられる。この他にも近世の中国産陶磁器が資料として引き揚げられている。港湾の証左として遺跡近隣には唐船田（トーシンダー）、唐船小堀（トウシングムイ）、湊（ナートゥ）などの地名が点在する。今後詳細検討が期待される。

i 地点（久米島白瀬川河口）14世紀～15世紀

1998年、浚渫土砂から小川真司氏によって陶磁器が採取された。これらの陶磁器について、當眞嗣一氏は近傍にグスクが立地すること、近くに唐船池（トウシングムイ）と呼ばれる地名が残ることなどから、グスク時代に重要な港があったと推定し注意を喚起している（當眞・佐久田1999）。第5図に報告された陶磁器を図示した。青磁（1～4）、白磁（5）、天目茶碗（6）のほか石器が採集されている。



第5図 i地点（久米島町白瀬川河口）表探遺物 *原図 當眞・佐久田1999

j 地点（湧出海岸陶磁器散布地）15世紀後半～16世紀代

干潮帯岩礁に陶磁器が散布することが報告され、周知の遺跡となっている（岸本ほか1999）。遺物は岩礁のくぼみに石灰化する岩に取り込まれる形で多数付着する。採集遺物は田畠によって詳細が報告されている（田畠1999）。第6図は田畠によって青磁細蓮弁文碗（1～3）、青磁雷文帶碗（4）、青磁碗底部（6）、白磁底部（5）が国化され15世紀代として説明する。細蓮弁文碗などの年代から考えると15世紀後半～16世紀頃の中で整理できると考えられる。今回の調査では当該遺跡の現地調査を実施し、岩礁帶の外側海底に遺物散布が見られるかどうかを、シュノーケリングによって確認したが思う以上に深く遺物は褐釉陶器が1点認められたのみであった。今後スキューバダイビングによって再調査することが望まれる地点の一つである。



第6図 j地点（湧出海岸陶磁器散布地）表探遺物 *原図 田畠1999

k 地点（那覇港）

当該地点は沖縄で最も有名な港の一つで、鳥居龍藏氏によって「海底に中国宋代の青磁の破片が無数に沈没しているところがあり、私はこの陶片を著しく採集した」と報告されている。さらに当該資料の散布を「陶器を船載して来て、ここで難船したから、その陶器がかく海中に残存する」と推定するなど海底遺跡研究において学史上大きな足跡を残している（鳥居1953）。当該地点での現地調査は軍港であることもあり断念したが、今後これらの遺物散布が現在もあるのかどうかを確認する必要はあると考える。なお、鳥居の採集した遺物の所在は不明である。

l 地点（宮古島八重干瀬、プロビデンス号）1797年座礁

1797年5月17日池間島地先の八重干瀬で全長約33m、400トン級の帆船が座礁した。この船は1795年、地図上の空白部分だった北太平洋地域を調査するためにイギリスを出帆し、マカオを基地に探検したとされる。乗組員112人は別の帆船に乗り移って宮古島に寄港し、手厚いもてなしを受け、23日にマカオに引き返したとされる。この探検船プロビデンス号の船体や遺品を探し当てる海底調査が1996年、地元の青年らでつくる「プロビデンス号を語る会」（仲間章郎会長）が進めている企画で実施され、海底から金属反応が出たとされる（琉球新報1996）。この金属反応が座礁地点であるか関連については分からぬが、金属反応があったのは水深15m、すり鉢状の底部分で「岩だらけ」という。池間島の漁師らはかつて八重干瀬から大砲を引き揚げたことがあるとされ、港に置いてあったという。また、他にも銀食器なども海底から引き揚げたとされるが、いずれも現存しない。また、未確認であるが池間島改善センターにはプロビデンス号のものと思われる鉄製のバラストがありこれにはイギリス海軍のマークであるイカリが印刻されているという。いずれも聞きとりである。今回の潜水調査では遺物の散布を確認することはできなかった。

m 地点（インディアン・オーク号の座礁地）1849年座礁

1840年8月14日にイギリス東インド会社のインディアン・オーク号が北谷町沖でリーフに乗り上げ座礁した。座礁地点の調査が1984年に棚原盛秀氏とその同好会のメンバーで行われており、外洋から銅板や銅釘が検出され、海底には半径100mにわたって人頭大の黒褐色の円礫が無数に散乱しているとされる。染付碗・皿、大型褐釉陶器、彩色陶器、角柱瓶、ワイン瓶などが採集されている（中村1994）。また、散布している礫は帆船の安定を保つために利用されたバラストと推定され、以前に前田四郎によって奇岩として報告された経緯がある（前田1967）。

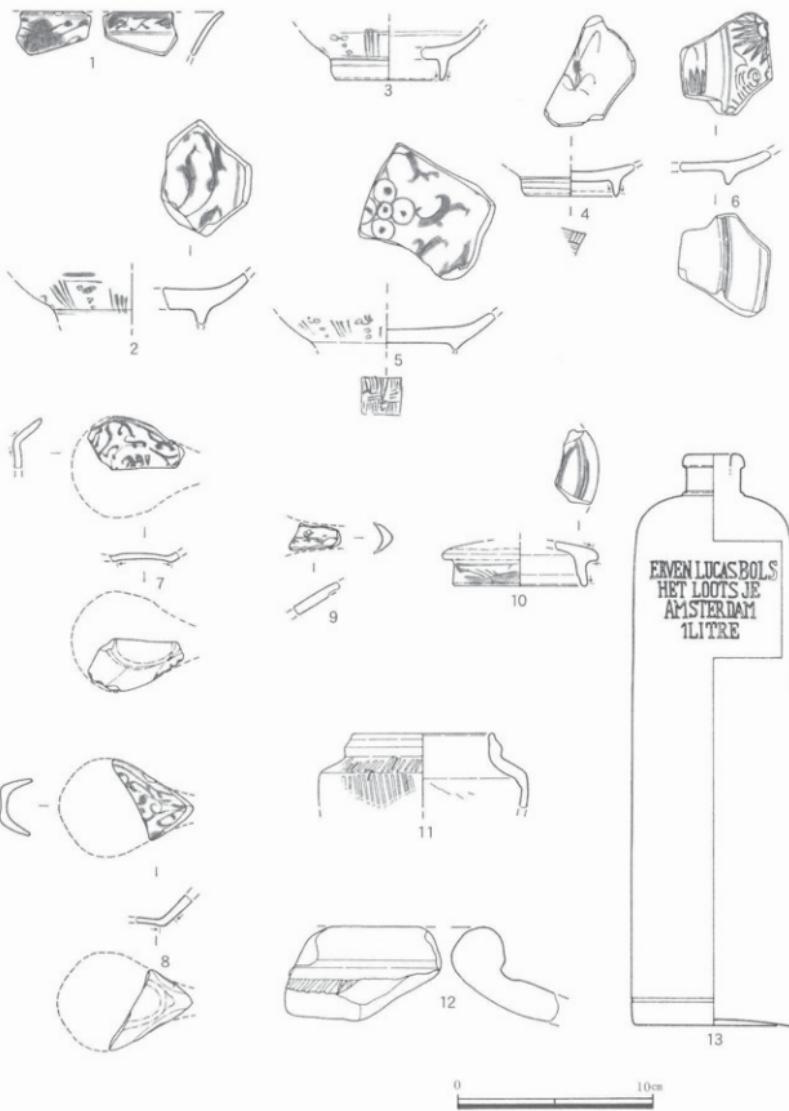
n 地点（多良間島高田海岸沖、ファン・ボッセ号）1857年座礁

多良間村高田海岸はオランダ商船遭難の地として『球陽』（球陽研究会1974）に記載されており、1983年、村の史跡指定を受けている。この船は後の研究によって、上海からシンガポールへの航海の途中に座礁・沈没したファン・ボッセ号であったことが判明している（金田2001）。沖縄県教育委員会によって2度（1997年、2000年）踏査されており、碗・皿・壺・蓋・散蓮華などの清朝染付とともに、本土産陶磁器や产地不明の陶器が表採された。これらの遺物は沖縄県立埋蔵文化財センターが保管している。第7図及び写真27・28に示したものは主な遺物であり、いずれより詳細な検討を行い報告する予定である。また、多良間村立ふるさと民俗学習館には上記の清朝染付の類似資料に加えて、完形のヨーロッパ製陶器瓶（第7図13）が展示されている。その他、個人所蔵となっている資料もあるとされるが、詳細は不明である。

o 地点（宮古島宮国沖、ドイツ商船ロベルトソン号）1873年座礁

1873年にドイツ商船R. J. ロベルトソン号が暴風により座礁難破し、地元住民の救助によって無事本国へ帰国した。この報告を受けたヴィルヘルム一世は博愛の心を称え島に博愛記念碑を建立した。

地元では海岸から表採された鉄の棒や石が引き揚げられるがこれらがロベルトソン号のものは不明である。当該座礁地点とその物語は地元によって美談として語り継がれ、現在村づくりのキーワードとして深く心に刻まれる物語となっている（エドワルド1995、新里1996）。このような村の座礁船に対する想いから、大がかりな沈没船探査がおよそ15年前に実施されている。調査はダイバー数人で期

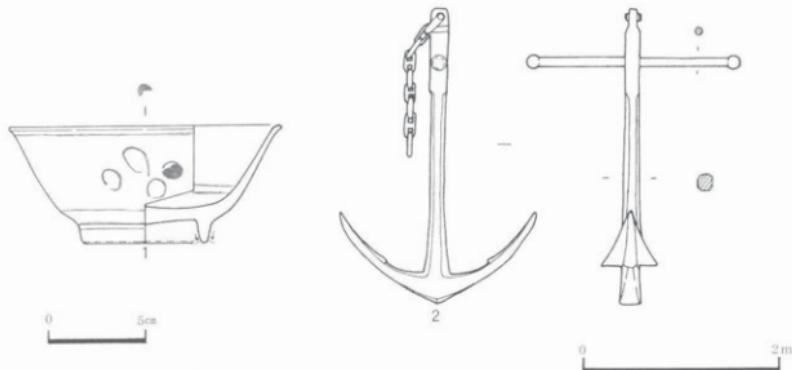


第7図 n地点（多良間島高田海岸）表探遺物

間約2週間にかけ広範囲に実施したと言うことであるが、沈没船の発見には至らなかったとされる（註3）。今回の調査では当該座礁地点と推定される場所の踏査を行ったが、遺物を確認することはできなかった。今後より詳細な踏査を実施したい。確認されている関連引き揚げ遺物として野原公民館に保管される鉄製のバラストがある。長さ72cm、幅14cm、厚さ14cmの方柱状で頭部には穴が開いている。

p 地点（国頭村宜名真沖、イギリス商船）1874年座礁

1874年にイギリスの商船が暴風により難破遭難し、船員5人が生存したが多くの方が溺死したとされる。4人の遺体が漂着し村民によって丁重に葬られ、現在オランダ墓として漂着した海岸近くに安置される。このオランダ墓に、難破船が漂着した際に船倉にあったとされるバラストが縁石として利用される。埋設されているため地表面での確認だが12個を数える。他にも同様のバラストが隣字の宇嘉で8個、奥で1個、特種な事例として大宜味村や今帰仁村では石碑の材となっている事例があり、管見に及ぶ範囲で23個である。大きさは厚みが16~21cm、幅が58~61cmとなっており規格性の高い板石を利用したバラストと考えられる。長さは確認できた最大のもので、310cmである。この他にも関連資料として錨が海底から引き揚げられており（奥のあゆみ刊行委員会1986）、現在記念碑として奥漁港で見ることができる（第8図1）。今回の調査では錨の確認と実測、引き揚げバラストの所在確認と計測などを行った。また、座礁地点と推定される場所のシノーケリング調査によって清朝染付碗や酒会壺、褐釉陶器等を確認することができた。



第8図 P地点（国頭村宜名真沖）関係遺物

q 地点（宮古島吉野集落）不明

宮古島城辺町の吉野集落内に石製（花崗岩？）のバラストが保管されていることを、下地和広氏（城辺町教育委員会）より情報をいただいた。長さ123cm、幅31cm、厚さ20cmの方柱状の資料で、p地点の資料と類似する石材であるが、形状はやや異なる。庭先に置かれていたのでお住まいの方に情報を求めたが、既に他界したおじいさんが海から拾ってきたものであるとのことで、具体的な採集地点は不明である。

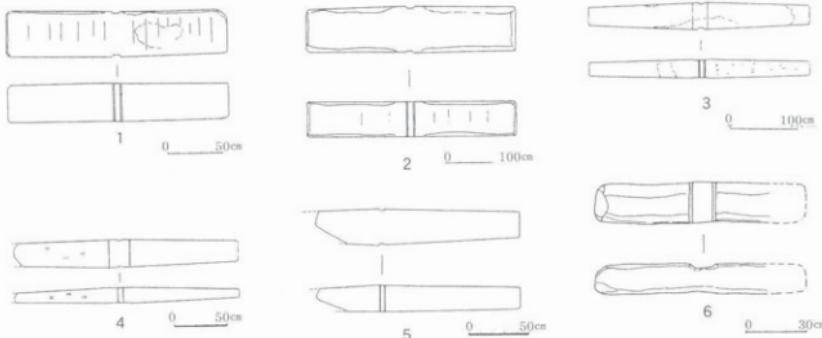
d 地点（座間味島阿護の浦）15世紀頃・19世紀頃？

座間味島阿護の浦は中国との交易船や進貢船が風待ちのため利用した場所と伝えられ、その記録も多数見られる。また、「唐船グムイ」と呼ばれる唐船を繫留したと伝えられる深場もある。地元ダイバーの宮平聖秀氏によって、多数の沖縄産陶器が阿護の浦海底より引き揚げられ、現在座間味村教育委員会によって保管されている(第9図)。資料は上焼と荒焼があり多様な器種がみられる。上焼と称される施釉陶器は鉢(1)、火入れ(2・3)・双耳瓶(4)が、荒焼は壺(5・6)・瓶(7)・鉢(8)・水甕(9)があり、特種なものとして厨子甕(10)も確認された。

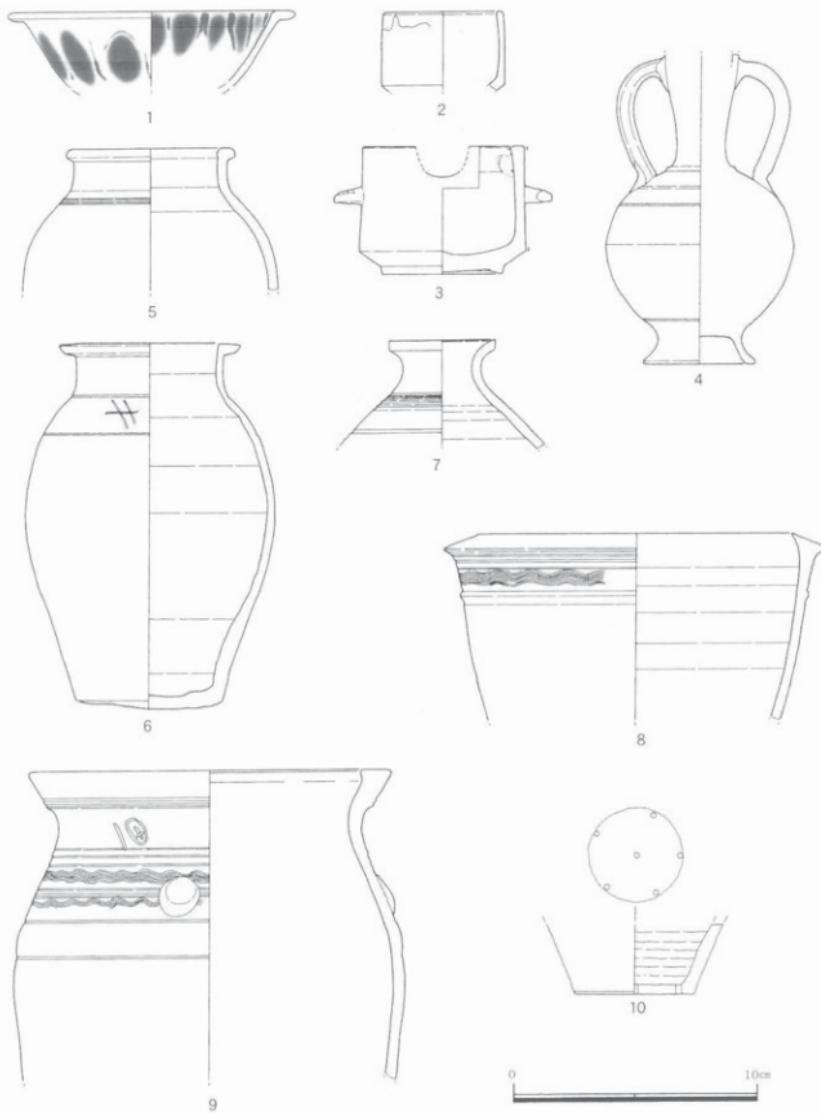
時代としてはこれまで紹介した事例のものよりも新しいが、このように様々な器種がまとまって確認されたことは興味深い。今回の海底調査ではこれらの新しい時期の遺物の他に中世に比定される褐釉陶器片も確認された。また、慶良間海洋文化館には阿護の浦海岸で表探したとされる14~15世紀頃のものと考えられる中国産青磁が展示されていることから、さらに詳細な調査を行うことで当該時期の遺物が多数発見される可能性もある。

他にも、陶器散布事例とは別に碇石が数例確認されている。「東アジアを舞台に広範な活動をしていた交易船の航跡を示すもの(柳田1994)」として近年注目される資料で、南西諸島の事例は既に當眞嗣一氏(當眞1996)によってまとめられており、第10図に示した6例が確認されている。1・2は龍郷町のイカリ浜採集品とされている事例で角柱形を呈する、3は具体的な採集地点不明だが奄美大島の龍郷町内の民家に保管されており、角柱対象形の資料である。同型の碇石は宇江城で表探された事例(4)と山田グスク麓のメーガーの井桁石に利用された事例(5)があり興味深い。もう一例は糸満市の道脇に石敢當に利用された表品(6)が知られている。當眞氏はさらに、松岡史氏の集成と分類(松岡1981)をもとに糸満市の事例(6)を考慮して分類の追加を行っている。

しかし、これらの碇石はすでに海底より引き揚げられてしまったものであり、船の場所を推定する材料とするには困難である。原位置に近い場所での碇石の発見は船が沈没した具体的な場所を推定する有効な材料となるため、今後海底で詳細な調査を行うことで、新しい碇石が発見されることを期待する。



第10図 南西諸島の碇石 *原図 當眞1999



第9図 d地点（座間味島阿護の浦）表採遺物

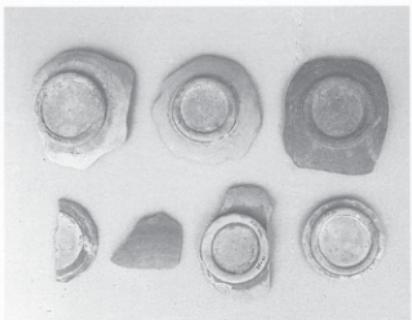


写真21 はての浜海底表探遺物①



写真22 はての浜海底表探遺物②



写真23 オーハ島海底表探遺物①



写真24 オーハ島海底表探遺物②



写真25 名蔵シタタル表探遺物①



写真26 名蔵シタタル表探遺物②

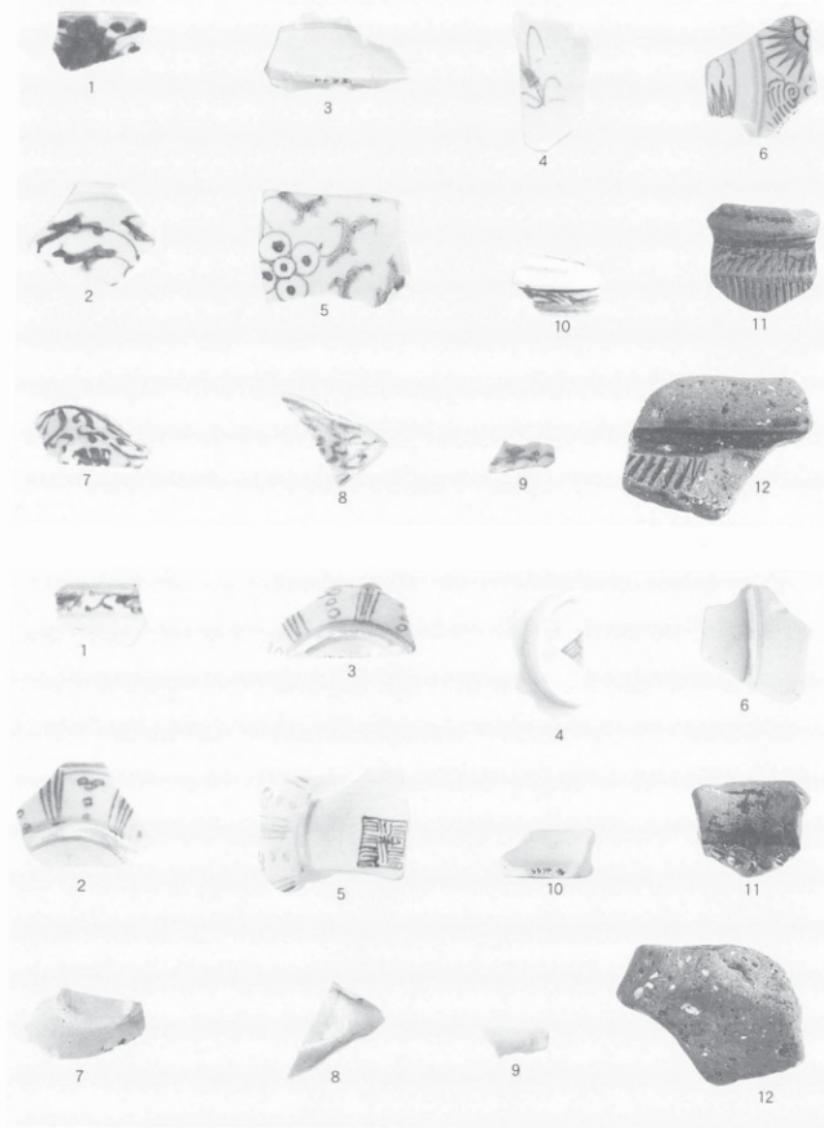


写真27 高田海岸表探遺物（第17図1～12）



写真28 高田海岸表探遺物（第17図13）

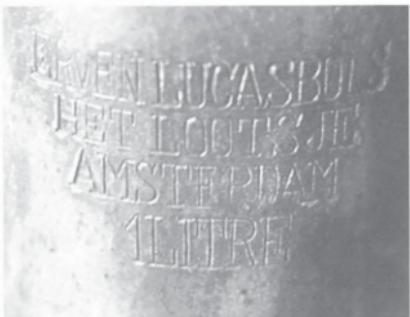


写真29 高田海岸表探遺物（同左文字部分）



写真30 宜名真沖表探遺物（第8図1）



写真31 阿護の浦海底表探遺物①（第19図1）



写真32 阿護の浦海底表探遺物②（第19図4）



写真33 阿護の浦海底表探遺物③（慶良間海洋文化館）

5. おわりに

以上今回12世紀から17世紀までは遺物の採集事例を中心に、18世紀以降については記録から沈没船と関わりのある事例について、沈没船発見の可能性がある地点の紹介を行った。約1年間の情報収集作業で17地点の散布地を確認することができた。遺物に時期的なまとまりがなく、採集散布量が比較的小ないc・e・g・h・i地点の事例を省き、12地点が海上交通の船舶に係る遺物散布事例と推定した。繰り返しになるが、私たちは沈没船関連と言うからといって、必ずしもこれらの全ての遺物採集事例を沈没したとは考へているわけではなく、座礁による積荷の捨て荷や漂到着に係る遺物散布である可能性もあり、あくまでも海難事故に係る可能性の高い遺物散布状況を示しているということを断っておきたい。勿論、沈没した船体そのものがそこにあるという可能性も無いと言ふことでは無く、いずれにしても散布地の一つ一つに関して詳細な検討を行っていくことをこれからの方々とすることが重要である。

最後に、今回採集・引き揚げを確認することのできた各地点について特に陶磁器を中心して検討してみたい。グスクや集落など遺跡調査の多くの場合、遺物は年代幅を持って出土し、一括遣構など仮に共時性をもつたものでも、消費地という観点から様々な資料が出土する。他方、共時性は高いが生産地では生活感が無くどのようなスタイルで消費者が需要したのかは推してはかれない。この点について今回紹介したような遺物散布地は陸上の遺跡と比して陶磁器の流通形態を検討するうえで重要な資料である。野上達紀氏はこれを生産地と消費地を結ぶ「流通遺跡」として提唱している(野上1999)。生産地から消費地に向かう途上、なんらかの海難に遭遇し廃棄あるいは沈没を余儀なくされた資料として「どのように流通したのか?」に答えられる遺跡として捉えることができる。この観点から見ると、今回のような海洋から採集された陶磁器については12~19世紀に沖縄島内で消費された陶磁器が、はたしてどのように流通したのかに答えられる遺跡として捉えられることが可能である。今回の採集地点について時期を大きく分けると4つの時代に分けることができる。これを仮にⅠ~Ⅳ期として紹介していく。

Ⅰ期(～13世紀) グスク時代以前の遺物である、長い先史時代南西諸島の海域における交流は島嶼間の往来を基本とした有視界航行による交流交易が主であったと考えられる。これを打開したのは南島路の開拓や中世商人による活動などがあったのである。しかし、現在段階で古代における密接な交流交易を沖縄島内の先史遺跡に見いだすのは困難である。12世紀頃になって中国商船や博多商人を介在した北からの物流が沖縄の寄港地の一つとして船舶が往来したと考える。もしかすると南海の物産をもとめ、沖縄島等を目的地として船舶が往来していたのだろう。奄美大島の倉木崎海底遺跡や今回紹介したa地点などの12世紀代の遺物を主体とした沈没船関連遺跡あるいは、海揚がりの碇石などは往時の船舶が事故等で座礁沈没した一つの証左と考える。

Ⅱ期(14世紀～16世紀) 沖縄島を中心に、浦々、島々にクニが誕生する。やがて1458年尚泰久王の命により鑄造、首里城にかけられた「万国津梁の鏡」の銘文に記される「琉球國は南海の勝地にして、三韓の秀を集め、大明をもって輔軍となし、日城をもって唇齒となすこの二中間ありて湧出する蓬萊島なり、舟楫をもって万国津梁となし、異産至宝は十方利に充満す(原文漢文)」に見られるよう、日本本土・中国・朝鮮・南方諸国との交易を行った躍動的な国家琉球が誕生する。14世紀代の陶磁器を散布する海岸としてb・f・i地点がある。b地点は久米島地先にあって那覇港より西にあり、中国への渡海あるいは中国から那覇港までの重要航路上にある。これを勘案すると中国からの貿易を想起したいが、陶磁器にバリエーションが無く確認されているのは現段階では食膳器だけである。したがって、中国を往来した商船等の積み荷の一部もしくは国内水運の座礁・捨て荷などを考えておきたい。

い。ただし、b地点はf地点とならびかなり広範囲に遺物が散布している事実から考えて今後の調査によっては様々な種類の器が採集される可能性は高い。一方、f地点は既に2,000余点の遺物が採集されており県内で最も遺物が多く散布する地域である。琉球王国は当該期には既に中継貿易で富を得ており隆盛期を迎える。ここでは陶磁器以外にも古銭なども採集されているが、今後イカリやバラストあるいは船そのものの座礁を示す船材などが発見されることを期待したい。

Ⅲ期（近世）琉球の史書『球陽』には多くの船舶座礁の記録が記されている（球陽研究会1974）。今回この全ての座礁記録の地点を実見することはできなかった。文献と現場が確認でき、遺物散布が認められるのは下記の地点である（註4）。

- l 地点（池間島地先八重干瀬）1797年 イギリス海軍 プロビデンス号
- m 地点（沖縄島北谷沖）1840年 イギリス東インド会社 インディアン・オーク号
- n 地点（多良間島高田海岸沖）1857年 オランダ商船 ファン・ポッセ号
- o 地点（宮古島宮国沖）1873年 ドイツ商船 R. J. ロベルトソン号

これらの4地点ではイカリ・バラスト・陶磁器が採集されておりいずれも外国籍の大型船で、日本、中国や東南アジア地域を往来した外国籍の船である。南西諸島海域でやがてこれらの船舶が日本に開国を迫り利益独占を目論むようになる。今後この時期についても、国内水運を担った琉球籍、あるいは当時頻繁に往来したであろう中国籍、薩摩の船などの座礁を示す遺物散布を発見することも重要である。

Ⅳ期（近代）日本・中国・東南アジア地域との中継貿易を行った琉球も450年の王国の歴史に幕を閉じ、1879年明治政府の琉球藩廃止によって沖縄県となる。沖縄島では近世から昭和はじめ頃まで馬鑑（マーラン）船と呼ばれるジャンク船が国内水運を担っていた。p地点は国内水運を担った商船の積み荷が何らかの事情によって海底に沈んだ物と考えられる。陶磁器のみが採集されているが、他にも食糧等様々な物が物資として運ばれていたと推定する。多くの器種が採集されている点は消費地遺跡で出土する事例のセットに近く、特に厨子甕は墓以外では生産地でしか出土しないことを考えると海域からの採集は厨子甕を含んだ多くの陶磁器を消費地へ運ぶ途上なんらかの事由で海底に陶磁器が散布したものと考えられる。

本稿では触れなかつたが、沖縄は国内唯一の地上戦を体験する激戦地として知られる。地上の戦跡の取扱について埋蔵文化財センターでも取り組んでいる。戦史上有名な、戦艦大和などの沈没も南西諸島海域徳之島沖とされている。地上の戦跡のみならず海域にはその歴史を伝える船舶が往来し、そして今もそこに沈んでいる。

今後の課題としてこれらの遺物散布地をどのように検討し、遺跡台帳などに登載していくのかということを考えなければいけない。こと、このような海底にある遺物散布地をそもそも遺跡として周知化するのか、行政的な保護策などは特に地元市町村によって担われている部分が大きく、これらは今後の大きな課題となる。

1970年代以降、陸上では開発によって多くの遺跡が滅失した。文化財保護法に基づいてこれを記録保存調査として緊急発掘を実施し救済している。沖縄は全国的に埋め立て面積を年々広げる海岸開発県である。現在頻繁に行われている、または今後も行われるであろう海岸の埋め立てや護岸工事、沿岸開発の拡充は、今後の海底の埋蔵文化財の滅失を危惧せざるを得ない。埋蔵文化財を保護する立場として、この問題を真剣に考える必要があると思われる。

謝辞

このような作業途中でありながら今回発表することを行ったのには幾つか理由がある。その1つは遺跡の周知化と遺跡保存のためにも、埋蔵文化財として遺跡や遺物散布地があるという情報を共有することが大切であると考えたこと、さらには、埋蔵文化財の対象として遺跡や遺物をきちんと分析することが重要であると、作業を行ったメンバー共通の見解として持ったことからである。

作業をする中で知ることのできた知見の多くは、これまで各市町村で遺跡の保存にあたってこられた担当者の方々から情報をいただくことで整理できた。また、多くの方々から指導や助言いただき本小論を完成させることができた。末文ながら記して謝意を表す。

現地調査・資料整理協力

秋本真孝（元北谷町教育委員会）、小川光彦（金沢大学）、新城英樹（タイムマリン宮古）、仲宗根瑞香・新垣利津代・上原美穂子・大村由美子・我那覇悠子・金城恵子・金城敬子・崎原美智子・比嘉貴子・又吉純子（沖縄県立埋蔵文化財センター）、西銘章（嘉手納高等学校）、松永洋平（浦添市教育委員会）、山本祐司（株式会社クレール）、玉城靖・松本綾子（今帰仁村教育委員会）

指導・助言

江上幹幸（沖縄国際大学）、安里嗣淳・盛本勲（沖縄県立埋蔵文化財センター）、池田榮史・土肥直美・豊見山和行（琉球大学）、大濱永亘（八重山商工高等学校）、大濱永寛（石垣市教育委員会）、小川真司（イーフマリンホリデー）、小曾野善行（京セラミタジャパン株式会社）、川満邦弘（下地町教育委員会）、金武正紀（今帰仁村教育委員会）、金城亜信・中山晋（沖縄県教育庁文化課）、久手賀稔（久米島町文化財保存審議委員）、佐久田勇・中島徹也（久米島町教育委員会）、城間肇（宜野湾市教育委員会）、島袋綾野（石垣市史料編集室）、下地和広（城辺町教育委員会）、砂辺和正（平良市教育委員会）、砂川智男（上野村教育委員会）、玉井敬信・知念勇（恩納村立博物館）、得能壽美（石垣市立八重山博物館）、渡久山春好（多良間村立ふるさと民俗學習館）、中村悟・宮里芳和（座間味村教育委員会）、中村愿（北谷町教育委員会）、仲村渠智（ひろみ産業）、比嘉久（名護市教育委員会）、比嘉賀盛（沖縄市文化財調査審議委員）、前田一舟（与那城町海の文化資料館）、宮里清五郎（慶良間海洋文化館）、森本朝子（福岡市教育委員会）、山里克也（久米島自然文化センター）。

(みやぎ ひろき：今帰仁村教育委員会)

(かたぎり ちあき：調査課 専門員)

(あらかき つとむ：調査課 嘴託員)

(ひが なおき：浦添市教育委員会)

註1. 今帰仁村字諸志の海人から聞き取りすることのできた情報である。戦後海岸で壺を採集した。このとき壺の中に古錢が入っていたのでこれを鉄屑として鍛冶屋に売ったとされる。

註2. 遺跡名称の久米島はての浜は、宇検村教育委員会（編）1999年『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書第2集に記載されるのが初出でありこれに従った。本来は「ナカノ浜」にするべきとも考える。

註3. 上野村教育委員会より情報をいただいた。

註4. 1地点については過去に引き揚げ事例があり、現在も保管されているバラストがあるとされる。○地点については宮国採集の方柱状の鉄塊が採集品として解釈した。

引用・参考文献

- 赤嶺誠紀 1988年『大航海時代の琉球』沖縄タイムス社
- エドワルド・ヘルツハイム 1995年『ドイツ商船RJロベルトソン号宮古漂着記』上野村役場
- 大竹昭子 2002年『矜持をもって生きる島』『Coralway』83 日本トランサオーシャン航空株式会社
- 大濱永亘 1994年『名蔵シタタル遺跡について』『南島考古』No.14 沖縄考古学会
- 大濱永亘 1999年『名蔵シタタル遺跡について』『八重山の考古学』先島文化研究所
- 沖縄県立博物館(編) 1982年『沖縄出土の中国陶磁器(上)』沖縄県立博物館
- 奥のあゆみ刊行委員会(編) 1986年『奥のあゆみ』奥のあゆみ刊行委員会
- 金田明美 2001年「多良間島沖で難破したオランダ商船ファン・ボッセ号の歴史的考証」『日蘭学会会誌』26-1 日蘭学会
- 岸本義彦ほか 1984年『大宜味村の遺跡』大宜味村文化財調査報告書第2集 大宜味村教育委員会
- 岸本義彦ほか 1999年『伊江島の遺跡』伊江村文化財調査報告書第13集 伊江村教育委員会
- 球陽研究会(編) 1974年『沖縄文化史料集成5 球陽(読み下し編)』角川書店
- 金武正紀 1990年『沖縄の中国陶磁器』『考古学ジャーナル』320 ニュー・サイエンス社
- 金城龟信ほか 1998年『首里城跡 京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)』沖縄県文化財調査報告書第132集 沖縄県教育委員会
- 新里堅進(翻案・作画) 1996年『かがり火ーロベルトソン号救助物語ー』上野村役場
- 田畠幸嗣 1999年『伊江島の貿易陶磁器』『伊江島の遺跡』伊江村文化財調査報告書第13集 伊江村教育委員会
- 知念勇 1978年『座喜味城の歴史と環境』『座喜味城跡』読谷村文化財調査報告書第4集 読谷村教育委員会
- 當眞嗣一 1996年『南西諸島発見の碇石の考察』『沖縄県立博物館紀要』第22号 沖縄県立博物館
- 當眞嗣一・佐久田勇 1999年『久米島白瀬川河口採集の遺物について』『沖縄県教育庁文化課紀要』第15号 沖縄県教育委員会
- 鳥居龍藏 1953年『私と沖縄諸島』『ある老学徒の手記』朝日新聞社
- 中村惣 1994年『インディアン・オーク号の座礁地』『北谷町の遺跡』北谷町文化財調査報告書第14集 北谷町教育委員会
- 仲村昌尚 1992年『第3章久米島各字(大字)の小地名』『久米島の地名と民俗』久米島の地名と民俗刊行委員会
- 野上建紀 1999年『肥前陶磁の流通形態』『貿易陶磁研究』No.19 日本貿易陶磁研究会
- 林克彦ほか 1999年『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書第2集 宇検村教育委員会
- 比嘉朝進 1990年『波高し漂流琉球船』風土記社
- 前田四郎(編) 1967年『沖縄産岩石氷物図説』琉球政府立理科教育センター
- 松岡史 1981年『碇石の研究』『松浦党研究』2 松浦党研究連合会
- 森田勉 1982年『14~16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 柳田純孝 1994年『碇石考』『法哈唯』第3号 博多研究会
- 宮崎亮一ほか 2000年『大宰府条坊跡XV・一陶器分類編一』太宰府市の文化財第49集
- 琉球新報 1996年7月7日『プロビデンス号の潜水調査へ』『琉球新報』朝刊(新聞記事)

※ 写真提供(遺物所蔵機関)

写真2・筆者撮影(奥交差点)

写真12筆者撮影(上野村野原公民館)

写真21~24筆者撮影(久米島町自然文化センター)

写真25~26筆者撮影(八重山博物館)

写真27~28沖縄県立埋蔵文化財センター提供(沖縄県立埋蔵文化財センター)

写真29~30筆者撮影(多良間村立ふるさと民俗学習館)

写真31~35筆者撮影(座間味村教育委員会)

写真36筆者撮影(慶良間海洋文化博物館)

東京大学総合研究博物館所蔵の鳥居龍蔵関係遺物について

—出自不明の中国陶磁に関する若干の考察—

The Artifacts Related to Torii Ryuzo, Stored in Tokyo University Museum

—A Study on the Unidentified Chinese Ceramics—

片桐千亜紀・新垣力

KATAGIRI Chiaki・ARAKAKI Tsutomu

ABSTRACT: This paper introduces the artifacts collected by Torii Ryuzo, now stored in the Tokyo University Museum. The entire group of archaeological artifacts related to Okinawa in the museum storage was fully surveyed and studied by Asato Shijun. Classification and drawing was carried out on the collection No. C-12-12 in November 25, 2003. This collection consists of Chinese ceramics (except for one Okinawa product), including bowl, plate, large dish, deep bowl and jar, dating from around the late 14th to the early 15th century. This group of material was inventoried as "surface collection in Yaeyama?", but, considering the fieldwork of Torii, it is also possible that these ceramics were collected underwater adjacent to the Omono *Gusuku*.

1. はじめに

1904年に初めて沖縄を訪れた鳥居龍蔵氏は、沖縄本島・宮古・八重山と精力的に人類学調査を行った。このときに発掘または表採した遺物は、現在東京大学総合研究博物館に収蔵されている。

これらの資料には未発表のものも多数含まれるため、安里嗣淳氏は当該資料についてコンテナの分類・集計や写真撮影を行い、今後の研究の基礎資料とした（安里1994、安里他1997）。安里氏の調査により、今日我々は簡易に同博物館が収蔵する沖縄関係考古資料の詳細を知ることが可能となっている。

今回我々が注目した資料は、整理番号がC-12-12と記されたコンテナである。このコンテナには陶磁器のみが収められているが出自が明らかではなく、安里氏によって「おそらく鳥居が明治37年に八重山諸島を探訪した際に、川平貝塚か大浜のフルスト原遺跡等で表採したものではなかろうか。」と紹介されている。

2003年11月下旬、機会を得て東京大学総合研究博物館が収蔵するコンテナ番号C-12-12の遺物を観察することができた。短い時間であったが、可能な限りの観察と分類・実測を行ったため、ここに報告しておきたい。

2. 遺物紹介

コンテナ番号C-12-12の整理方法として、まず器種による分類を行い、さらに器形による細分類と集計を行った。それぞれの細分類については、最も特徴的な遺物の実測を行い図示した（時間の制約から見込の印花文などはスケッチで行った）。分類の点数は集計表に、個々の遺物の細かい観察事項については観察表として表にまとめた。写真については安里氏らが詳細な撮影を行っている（安里他1997年）ため、それらと観察表で対応できるようにした。

資料は総数69点の陶磁器で、沖縄産陶器の1点（荒焼、外面に貼付の牡丹？がみられる厨子甕の胴部か、知花焼との所見あり）を除き、すべて中国産の青磁であった。器種は碗・皿・盤・鉢・酒会壺が確認されたが、碗が54点と全体の約8割を占めている。以下にそれぞれの分類概念を述べる。

碗（1～9）

A類：外反口縁のもの、器形や施釉方法などにより2種に細分される。

I 釉を全面に施釉した後、外底を蛇の目状に釉剥ぎするもの、内底に印花文を施す（1～4）。

II 釉を高台外縁まで施釉した後、内底を釉剥ぎするもの、内底に印花文を施す（5）。

B類：直口口縁のもの、器形や文様などにより3種に細分される。

I 外面に雷文帯を廻らせるもの、内底に印花文を施す（6）。

II 外面に鎬のない蓮弁文を描くもの、内底に印花文を施す（7, 8）。

III 外面に細蓮弁文を描くもの、内底に印花文を施す（9）。

皿（10）

10は口折皿の底部と考えられる資料である、内底にスタンプによる文様を施す。

盤（11～14）

A類：鍔縁口縁のもの、内面に蓮弁文を描く（11）。

B類：直口口縁で口縁端部を肥厚させるもの、両面に唐草文などを描く（12）。

盤底部：「臥足」と称される底部形態を呈するもの（13）と高台をもつもの（14）とがある。

鉢（15）

15は直口口縁を呈する鉢の口縁部資料である、両面に唐草文などを描く、これ以外にも底部の可能性を持つ資料があるが、今回は盤の底部として扱った。

酒会壺（16）

酒会壺は16に示した1点のみ確認された、外面に牡丹唐草文などを描く。

第1表 集計（青磁）

器種	分類	点数			計
		口	胴	底	
碗	A	I	0	0	32
		II	0	0	4
	B	I	0	1	5
		II	1	0	6
		III	0	0	3
皿	なし	0	0	2	2
盤	A	1			
	B	1			
鉢	なし	1	1	0	2
酒会壺	なし	1	0	0	1
不明	なし	0	2	0	2
総計					68

※沖縄産陶器を除く



写真1 実測風景

3. 結び

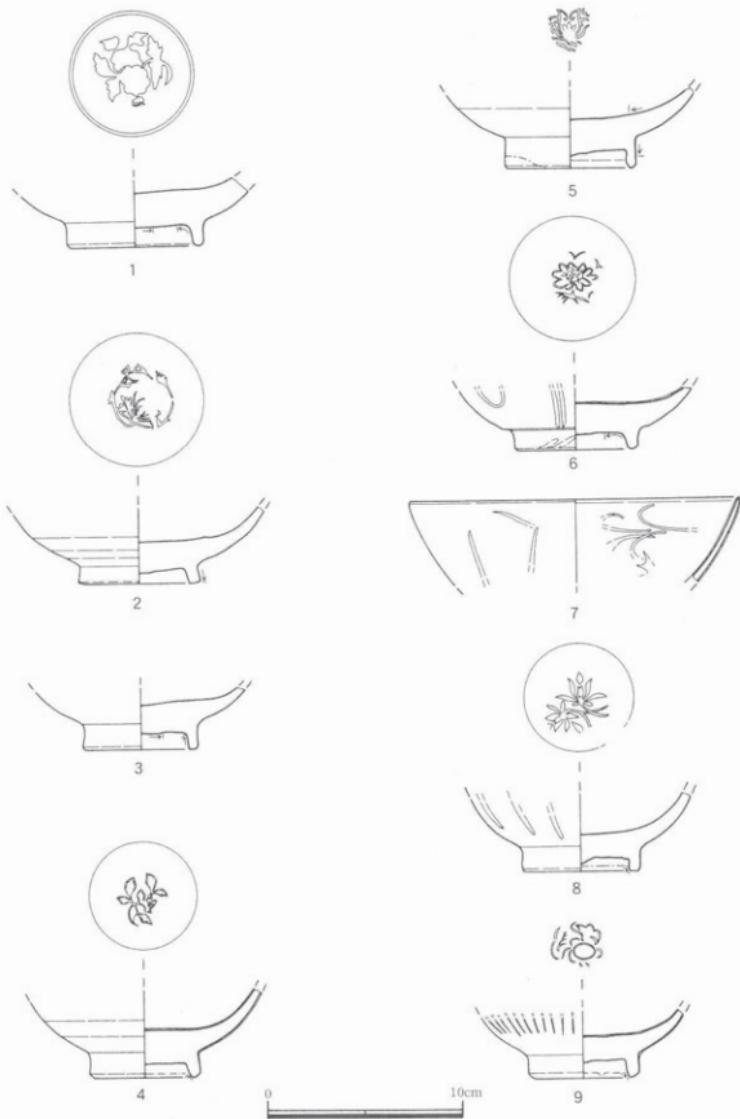
以上のように、コンテナ番号C-12-12に収納されている遺物は、沖縄産陶器の1点を除けば、14世紀後半～15世紀を中心とした青磁のみである。産地は龍泉窯系のものや福建・廣東系と思われるものなど多岐にわたる。器種も豊富で保存状態が良く、大形の破片が大半を占める。

ここで、この遺物群の出自について考えてみたい。鳥居氏はその報告「八重山の遺跡に就て」其の四の中（鳥居1926）で御物グスクについて触れている。御物グスクとは海外貿易の物貨を収めた公倉で、古くは那覇港内の海上に孤立して存在していた。創建年代は不明だが、文献記録では尚泰久6（1459）年に金丸が御物城御領側官に任せられたのが初見であり、時代は遡るが尚金福代（1450～

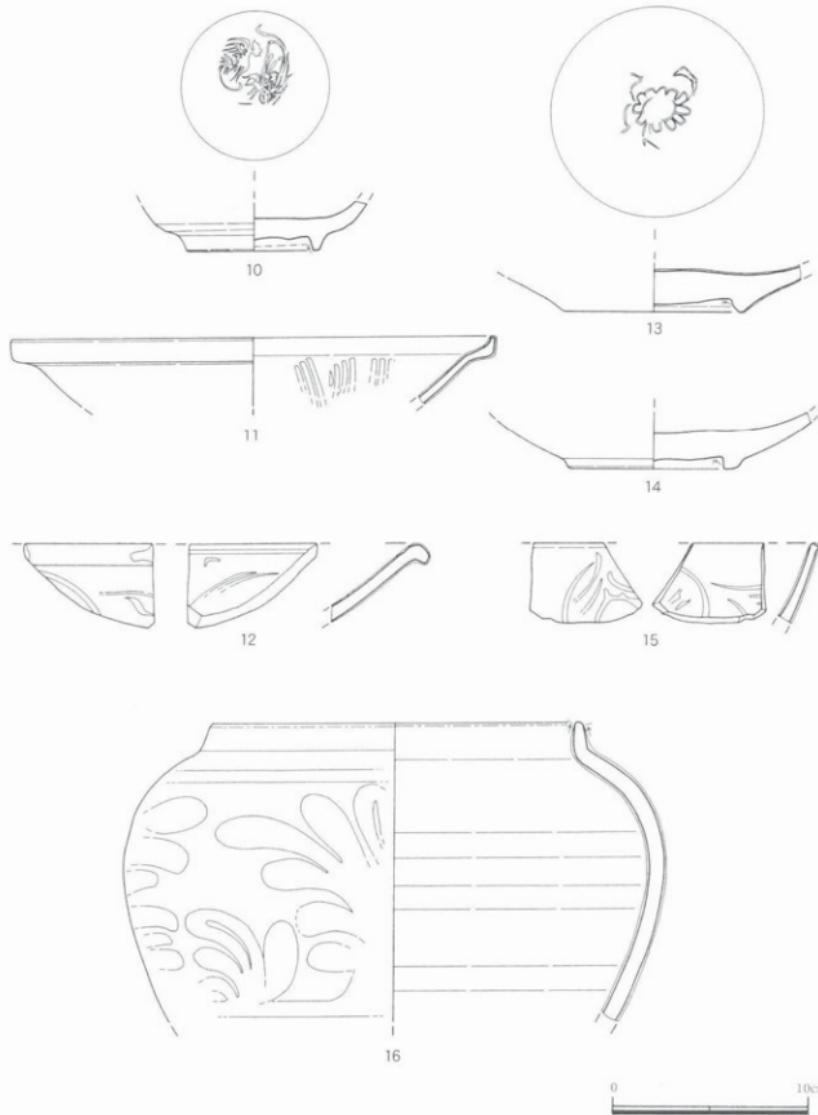
第2表 観察一覧（青磁）

番号	器種・分類	部位	口径	器高	底径	観察所見	写真対応表
1	碗／A I	底	—	—	6.6	素地は灰白色の微粒子。緑色の釉を両面に施釉後、外底を蛇の目状に釉剥ぎ、内底に圓線を廻らし、その中に印花文（牡丹？）を施す。外底に燒台が溶着。	P 185-19 右
2		底	—	—	5.5	素地は灰白色の微粒子。淡灰緑色の釉を両面に施釉後、外底を蛇の目状に釉剥ぎ、内底に陽圓線を廻らし、その中に印花文を施す。	P 186-20 左
3		底	—	—	5.6	釉薬を両面に施釉後、外底を蛇の目状に釉剥ぎ、内底に印花文を施す。外底に燒台が溶着。	P 175-9 左
4		底	—	—	5.2	淡緑灰色の釉を内底から高台内面まで施釉。内底に圓線を廻らし、その中に印花文を施す。細かい貫入あり。	P 187-21 左
5	碗／A II	底	—	—	6.3	素地は棕色の微粒子で軟質。黄緑灰色の釉を内底から高台外周まで施釉後、内底に釉剥ぎする。内底に印花文（蓮）を施す。両面に気泡がみられる。福建産。	P 197-31 左
6	碗／B I	底	—	—	5.8	素地は灰白色の微粒子。濃緑灰色の釉を両面に施釉後、外底を蛇の目状に釉剥ぎ、外面にラマ式蓮弁文を描く。内底に陰圓線を廻らし、その中に印花文（菊？）を施す。	P 181-15 左
7	碗／B II	口	17.0	—	—	素地は灰白色の微粒子。緑灰色の釉を両面に施釉。外面に蓮弁文を描く。内面に唐草文？を描く。	P 171-5 右下
8		底	—	—	5.8	素地は灰白色の微粒子。精オリーブ灰色の釉を内底から高台内面まで施釉。外面に蓮弁文を描く。内底に陰圓線を廻らし、その中に印花文（束蓮文）を施す。両面に荒い貫入あり。	P 176-10 右
9	碗／B III	底	—	—	4.7	素地は灰色の微粒子。灰緑色の釉を両面に施釉後、外底を蛇の目状に釉剥ぎ。外面に細蓮弁文を描く。内底に印花文（桔花文？）を施す。	P 178-12 右上
10	皿	底	—	—	6.7	緑色の釉を内底から登付まで施釉。内底に陰圓線を廻らし、その中にスタンプによる鳳凰文を施す。外底に燒台が溶着する。	P 192-26 左
11	盤／A	口	25.0	—	—	素地は灰白色の微粒子で緻密。緑灰色の釉を両面に施釉。内底に4本脚による蓮弁文を描く。両面に貫入がみられる。	P 171-5 右上
12	盤／B	口	—	—	—	素地は白灰色の微粒子で緻密。緑灰色の釉を両面に厚く施釉。両面に唐草文を描く。	P 171-5 左上
13	盤	底	—	—	9.0	素地は灰橙色の微粒子。淡緑色の釉を内底から高台内面まで施釉。内底に陽圓線を廻らし。その中に印花文（菊？）を施す。	P 193-13 左
14		底	—	—	8.2	緑灰色の釉を内底から高台内面まで施釉。外底に燒台が溶着する。	P 195-29 左
15	鉢	口	—	—	—	素地は白灰色の微粒子で緻密。緑灰色の釉を両面に厚く施釉。両面に唐草文を描く。	P 171-5 左下
16	酒会盃	口	19.0	—	—	素地は灰白色の微粒子で緻密。濃緑灰色の釉を両面に施釉後。口野部を釉剥ぎ。外面に圓線・牡丹唐草文を描く。内底に石灰が付着。両面に荒い貫入がみられる。	P 171-4

※写真対応表は史料編集室紀要第22号「東京大学総合研究博物館収蔵の沖縄関係考古史料写真一覧」のページとその写真番号及び位置を対応させたものである。



第1図 青磁①



第2図 青磁②

1453) の古絵図には「宝庫」と記されている(東恩納1950)。鳥居氏はこの御物グスク付近の海底から青磁を採集し、東京で寺山啓介氏とともに検討した結果15・16世紀の広東青磁と位置づけた。鳥居氏がこの中で御物グスク周辺の海底で表探した青磁について触れた理由は、八重山の川平貝塚等で発掘した遺物群との比較をするためである。

ところが、その遺物が東京大学総合研究博物館で確認されていない。鳥居氏が八重山の川平貝塚等で発掘した遺物は土器・石器・貝器・石台などで、青磁がやや上方から出土したとされている。安里氏の調べでは、これらの遺物はコンテナ番号C-12-13に収納されていると考えられており、遺物の構成も鳥居氏の報告と一致する。しかし、コンテナ番号C-12-12は前述したように沖縄産陶器を除けば青磁のみであり、かつ酒会壺というグスクで確認される器種を含むことから、鳥居氏が御物グスク周辺の海底で表探した遺物群(鳥居1926・1953)という可能性もあるのではないかろうか。

現在、御物グスクは那覇軍港敷地内にあり立ち入りが困難となっているが、御物グスク関係遺物は沖縄県立博物館に収蔵されている。これらは1960~1962年にジョージ・H・ケア氏によって採集されたもの(亀井1983)と、1970年代に琉球陶磁研究会や沖縄県教育庁文化課によって調査された際の遺物である(新田1977)。筆者らが県立博物館にて当該資料を実見した結果、文様や器種組成などに東大資料との類似点が多くみられた。今後、実際に御物グスク周辺の海底調査を行うことができれば、遺物群を比較検討することでコンテナ番号C-12-12の出自を明確にできると思われる。

今回の調査を可能にしたのは安里嗣淳所長の行った詳細な集成の賜物であり、多大な敬意を表したい。沖縄県立博物館の仲座久宜氏には御物グスク関係遺物の実見のための便宜を図っていただいた。また、現地調査が円滑に進んだのは当センターの宮平真由美氏、天久朝海氏の協力によるものである。最後に、今回の報告では東京大学総合研究博物館長 高橋進教授及び諫訪元教授のご厚意により、所定の手続きを経て遺物の実測や写真撮影ならびに当センターの紀要への紹介の許可をいただきることができた。末尾となりましたが、記して感謝申し上げます。

(かたぎり ちあき：調査課 専門員)
(あらかき つとむ：調査課嘱託員)

引用・参考文献

- 安里嗣淳 1994年 「東京大学総合研究資料館所蔵の沖縄関係考古資料」『史料編集室紀要 第19号』沖縄県立図書館
史料編集室
- 安里嗣淳・丑野毅・小田静夫・新里康 1997年 「東京大学総合研究博物館所蔵の沖縄関係考古史料」
『史料編集室紀要 第22号』沖縄県教育委員会
- 亀井明徳 1983年 「グスク採集の輸入陶磁」『沖縄出土の中国陶磁(下)－ジョージ・H・ケア氏調査収集資料－』
沖縄県立博物館
- 鳥居龍藏 1926年 「八重山の遺跡に就て」『有史以前の日本』磯辺甲陽堂(『沖縄県史料 考古関係資料1』所収)
- 新田重清 1977年 「基地内文化財調査概要—御物城の考古学的知見ー」『沖縄県立博物館紀要 第3号』沖縄県立博物館
- 東恩納寛惇 1950年 『南島風土記－沖縄・奄美大島地名辞典－』沖縄文化協会・沖縄財团(『東恩納寛惇全集 7』
所収)

八重山諸島波照間島採集の狭刃形石斧

A Narrow-Blade Stone Adze Collected on Hateruma Island in Yaeyama

安里 嗣淳・本田 昭正
ASATO Shijun・HONDA Syosei

ABSTRACT : The Shimotabaru site in Hateruma Island belongs to the Early Yaeyama prehistoric period. Around 1970, a brother of Honda Syosei found a stone adze from a footpath by a field adjacent to the site. It was a "narrow-blade stone adze," with a blade narrower than the body width that is particular to the Yaeyama prehistoric period. It has been emphasized that the blade-polished adze was the major type of stone adze in Yaeyama district; however, the narrow-blade adze is important as well, since it suggests a relationship with Southeast Asia.

1970年頃、波照間島出身の本田昭正の兄が、島の北岸下田原貝塚より約200mほど西側の畑地土手から石斧を採集した。土手には耕作の際に出てきた石灰岩礫などが堆積していたことから、この石斧も畑地から耕作で掘り出されて土手に捨てられたものと見られる。したがって、この石斧は下田原貝塚を含むこの一帯に居住活動をしていた先史人が遺したものである可能性がきわめて高い。なお、下田原貝塚は何度か発掘調査がおこなわれており、調査報告書が刊行されている。（金関丈夫ほか1964、西村正衛ほか1960、金武正紀ほか1986、木下尚子1987）。

石斧の石質と形状

この石斧の石質は、元県立博物館学芸員の神谷厚昭氏（地質学）の同定によれば緑色片岩である。タテ（長軸）の中心線が12.8cm、ヨコが頭部付近の最大幅4.4cm、中央部付近が4cmとなり、さらに刃部端付近では3.4cmとなる。つまり、頭部幅が最も広く、胴部から刃部へかけてしだいに狭くなってくる狭刃形石斧である。厚さは中央部で2.4cmであるが、頭部から三分の一ほどは段差をもつて少し厚みが小さくなっている。意図的なものか不明だが、この三分の一は剥離欠落によって生じている。製作時に意図したものであれば、柄への装着にあたって緊縛を強固にするための、または使用による衝撃を受け止めるズレ防止の段差かと考えられる。意図的製作とすると、有段石斧に類するものとなり、注目すべき形態といえる。使用時のものであれば、片岩の性質によって衝撃によりタテ方向に剥離したものであろう。

平面観は表面が中央にタテ方向に丸味を帯びた稜線をもち、両端に向かって急激に薄くなる。裏面は対照的にはほぼ全面が平坦で、刃面だけが斜め方向に研ぎ出されている。したがって、その断面形は三角形である。三角のいずれの隅も丸味をもつ。側面観は断面三角形であることから、両面とも表・裏面の接合端が縁となり、表面の片側面が同時に側面として見える。平面、側面とも全体観としては概ね左右対称形である。刃部の縁は側面観では中心軸に位置する。しかし、刃面の正面観からすると、平面の裏面から斜めに研ぎだしてあるために、表面側に向かって弧状を呈している。刃面の平面観は刃角をもたず、刃縁は正円に近い円刃状を呈する。刃面の使用条痕は明確には観察できない。

全体の表面観は比較的滑らかであるが、剥離痕跡と見られるやや大きめの窪みや、敲打痕とみられる小さな窪みが隨所に見受けられる。全体的に研磨を施し、上述のような窪みを無数に残すものの平滑な手触りである。

この石斧の素材は自然石がすでに断面三角形になっているものを選択し、片側を折って頭部とし、もう一方を研ぎだして刃部としたものと考えられる。このような断面三角形の自然石は河川や海岸など、水磨を受けやすい地域でしばしば見受けられるものである。ほとんど石斧の基本形に近い自然石を利用したわけであるが、表面研磨にあたって剥離や敲打痕を完全に潰すことなく仕上げる手法は、八重山地域によく見られる半磨製あるいは粗面整形の伝統に共通するものである。

狹刃形石斧と八重山型石斧の特質

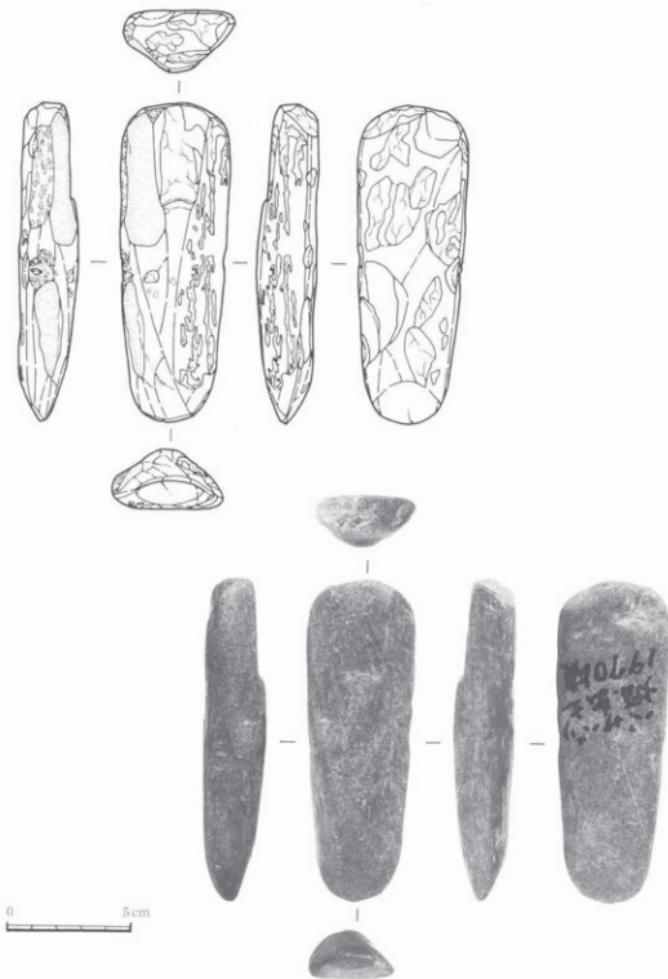
狹刃形石斧は八重山先史時代の石器文化の特徴のひとつである。この名称は高宮廣衛氏が名付けたものである。筆者はかつてこの形態の石斧に注目して「尖斧」と称したことがあるが（安里嗣淳1985）、高宮氏によれば東南アジアの尖斧beaked adze（刃先がベン先状に鋭く尖り、刃面の中央にに稜線をもつ）と誤解される恐れがあり、八重山のそれは刃部の幅が胴部より狭いという意味で「狹刃形」が適切とのことである（高宮廣衛1994）。

八重山先史時代の石斧の形態は、平面形で見ると前期・後期とも基本的には三つに大分類できる。（高宮廣衛1999）。それは頭部から刃部にかけて幅が広くなる撥型、概ね平行な幅の短冊形、胴部より刃部が狭い狹刃型（逆撥形）がある。短冊形は厚さはあまりなく、平たい薄手の石斧が目立つ、平面の両側縁から中央にかけて剥離面があることが多く、中にはその断面が部分的に三角形あるいは山形を呈するものもある。これら三つの形態は八重山型石斧の特徴的な形態であるが、前期と後期に際だった違いはみられない。

八重山先史時代の石斧は、その形態や器面の研磨状態によって分類観察しようとするとき、常にその粗雑な造形や研磨、非相称性の多さゆえに、基準の設定に戸惑うことがある。それは剥離を中心とした整形によって石斧の基本形を造り、敲打を加えるものの剥離によってできた形状をあまり修正することなく、斧身部の凸面に簡単な研磨を加えるという技法によって製作されているからである。一般にいねいに研磨を施すのは刃面のみである。中には刃面の研磨も施さない打製石斧もある。斧身の打削面は凹面をなしている部分が多く、研磨が加えにくいということもあって、胴部の全面研磨にはあまり関心を示さないようである。また、打削作業段階で成形をほぼ終了してしまうために、左右対称形を求める例がよく見られる。剥離面は一定の狙いのもとに形成されているとはいえ、ある程度の偶然性を伴うことから、左右あるいは表・裏面がうまく相称形に仕上がることはあまりない。したがって、できた石斧の形状をあまり細かく分類しても意味をなさないことも考慮しなければならないだろう。

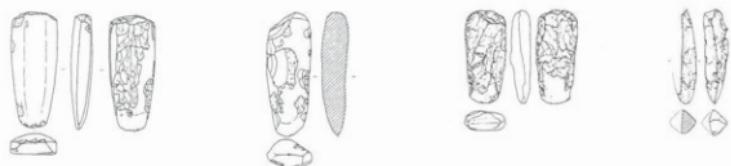
八重山型石斧の特質は局部磨製だと半磨製だとという研磨面よりも、器面のかなりの範囲が粗面整形という点にある。この場合の粗面とは凸面のみが研磨されて、その間に無数の研磨されない窪みをもつものも含まれる。というより、その方が多い。研磨という観点から見れば、それは局部磨製や半磨製であり、また磨製といえども全面が平滑な石斧はかなり少なく、ある程度は粗面整形面を残しているのである。そして、この粗面整形こそは、全体形としては撥型、短冊形、狹刃形などと分類される、殆どの型の石斧に共通るのである。しかし、粗面そのものは素材の自然形や剥離の偶然性の影響を受けて、不規則なことが多い。この「不規則な器面構成」という規則性」こそが八重山型石斧の基本的特質なのである。從来早稲田大学チームの発掘調査以来言われてきた「前期から後期へ向けて石斧は大型化する、また研磨面も拡大する」というのは、高宮廣衛氏の分析によって後期には「大型のものも現れる」ということはあるが、大型化するとはいえないことが明らかにされ、研磨面もその基準のあいまいさを前提にしつつも前期・後期とも終始磨製が優位にあるとした（高宮廣衛1995）。

1996)。言い換えれば、従来言われている「局部磨製石斧が多い」という特徴もそうとは言えないことになる。しかし、これは「不規則な粗面整形を基本とする」と表現を変えることによって、すなわち視点を変えることによって妥当性をもつと言えるのではないか。高宮氏が磨製としたもの多くは実はすべてが完全に円滑な磨製ということではなく、粗面整形をベースにしつつ全面の凸部に研磨を加えようと「意図しているもの」を基準としている。物理的な研磨面の範囲ではなく、全面を研磨し

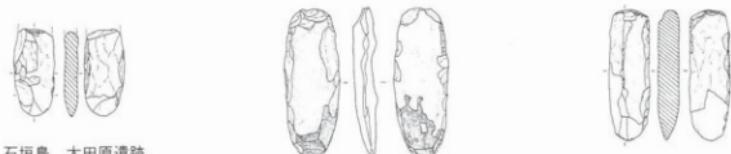


第1図 波照間島採集の狭刃形石斧

前期の狭刃形石斧



波照間島 下田原貝塚

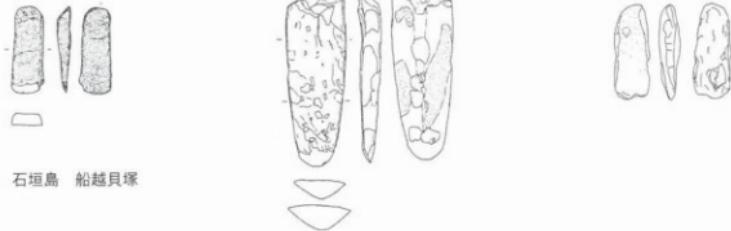


石垣島 大田原遺跡

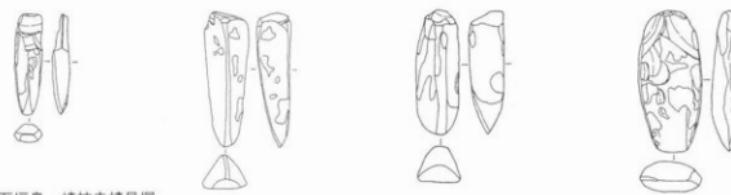


与那国島 トゥグレ浜遺跡

後期の狭刃形石斧



石垣島 船越貝塚



石垣島 崎枝赤崎貝塚

第2図 参考：八重山地域の狭刃形石斧 (縮尺不同)

ようと「意図した」ものは磨製として分類しているのである。したがって、直感的に局部磨製あるいは半磨製でも、磨製に分類されることもあり得る。しかし、これも視点を変えれば粗面整形という点では共通するのである。八重山の先史時代人たちは石斧を製作するにあたって、磨製石斧を造ろうと意図したものの中には研磨が果たせなかつたのではなく、粗面のままで仕上げるが、凸部は扱いになじみやすいように少し研磨をして済しただけのことであろう。剥離と敲打を基本とした技術であったといえる。

ところで、阿利直治氏は石垣島大田原遺跡の石斧の分析を通して八重山先史時代の石斧のほとんどは横斧すなわち手斧型だと主張している(阿利直治ほか1982)。しかし森威史氏も指摘しているように、観察結果として統計的にそれが示されているのではなく、印象として主張しているのであり、確たる根拠はない(森威史1995)。横斧を示すとみられる直交方向の使用痕が確認されているのは全体のわずかにすぎない。丸木舟造りのための横斧として、いかにも海洋民にふさわしいと考えたのかも知れないが、私の南方での民俗観察例では斧身だけではタテ・ヨコの判断は難しいよう思う。私はフィリピン南部のタウイタウイ島およびシブツ島で丸木舟を造る作業を観察する機会があったが、なんと同じ斧身がタテ斧にもヨコ斧にもなる回転式なのである。斧身を取り付ける柄のソケット部に仕掛けをしており、斧身をその都度90度回転させて、ある時はヨコに、ある時はタテに取り付けて使用するのである。タテ・ヨコを固定的に考えてはならないのである。斧身の刃の形も重要な判断要素とはなろうが、柄の形状や取り付け方によってはタテ・ヨコ両方の機能を持ち得る。もちろん「いずれか専用」はあるだろう。ただし、私の民俗観察例の斧身は金属であり、あくまでも参考にすぎない。さて、紹介した狭刃形石斧は上述のように粗面整形という点、あるいは断面三角形という点などからも八重山型石斧の特徴を備えている。そして從来あまり指摘されてこなかったが、この狭刃形という形態も八重山型石斧の三大分類のひとつを占める重要な型である。その用途は刃部の狭さからやはりノミ的な用い方、すなわち丸木舟を製作する際にカーブ面を削る作業に適した斧として製作、使用されたものと推定される。それではヨコ斧かというと、さきほどの民俗例からすると柄への取り付け方でいざれにもなり得るものであり、どちらともいえない。さきの民俗観察例からすると、丸木舟の内側底面部分を抉るときには手斧(ヨコ斧)型で、内側侧面を削るときはマサカリ(タテ斧)型で使用するのが可能であり、合理的である。この種の石斧に限らないが、とくにこの狭刃形石斧は木工の仕上げ段階の工具として、双方向の機能をもつことが考えられないだろうか。

八重山の自然石材供給地と需要圏

紹介した狭刃形石斧の石質は緑色片岩である。波照間島は周知のように隆起サンゴ礁の島であり、石灰岩がほとんどを占める。柔らかくて脆い石灰岩は石器に適しないので、先史時代の石器材料のすべては島外に求めた。石器にはほかに磨石、ドリル、石皿などがある。これらの石質は緑色片岩、ハントレイ岩、輝緑岩、花崗岩などで、自然露頭は石垣島の中・北部地域と西表島の東部の一部だけで、トゥムル層のなかに含まれるという。それ以外の八重山の島々には石器に適した石材の自然分布は見られないようである。これらの石器ははるか与那国島や宮古島の遺跡でも出土するが、南琉球先史時代には石垣島、西表島の石材がすべての島々の供給源となっていたのであろう。

日常生活の主要な道具に欠かせない石器の材料が両大島にのみ存在していたということは、すべての石器時代を通して、この両島との往来の道をもっていたということを意味する。この両島が中核となって、石器素材供給を契機としてその他の情報の拠点となった可能性がある。それは石器素材だけでなく、食糧や骨器の材料たるイノシシについても言える。イノシシの自然棲息は同じくこの両大島

だけである。イノシシの供給源も同様であったと見られる。八重山あるいは南琉球社会には石垣島、西表島を中心とするネットワークが存在していたと見られる。石垣島と西表島が石材とイノシシの供給地であることを媒体として、文化的交流の発信地、経由地としての役割を果たしていたのではないかと考えるのである。

狹刃形石斧の位置

八重山型石斧の三大形態、撥形、短冊形、狹刃形のすべてが、現在のところ北琉球の石斧群とは異なる。撥形は北琉球だけでなくあらゆる地域に見られるが、粗面整形という点からするとその多くもやはり八重山の特徴的な石斧といえる。そして、これらの類型の石斧がいくらかの傾向（後期における石斧卓越期、貝斧卓越期の存在など）が指摘できるものの（高宮廣衛1996）、前期と後期では明確な相違はないことがわかっている。

狹刃形石斧は古く位置づけられている波照間島下田原貝塚でも、新しく位置づけられている石垣島の崎枝赤崎貝塚でも出土しており、主流ではないものの八重山先史時代に一貫して製作使用されてきている。したがって、狹刃形石斧も、八重山新石器時代の開始とともにたらされたものであろう。短冊形石斧も含めて、八重山の石斧文化は前期から後期へ伝統文化として継承されているのであり、断絶はしていない。シャコガイ製貝斧文化だけが、後期に新たにもたらされたのである。それを新たな集団の渡来ととらえるのであれば、断絶ではなく両系文化の平行かも知れない。しかし、明治時代の人類学の反省を踏まえると、考古学的な資料と人間集団の相違や系統を関係づけるのは容易なことではない。

(あさと しじゅん：所長)
(ほんだ しょうせい：元県立高校教諭)

註

- 金闇丈夫ほか 1964 金闇丈夫・國分直一・多和田眞淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告・人文科学編』9号。
- 西村正衛ほか 1960 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚「八重山の考古学」、滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房
- 金武正紀ほか 1986 『下田原貝塚・大泊貝塚 第1・2・3次発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 木下尚子 1987 「八重山下田原貝塚出土石器一國分コレクション紹介」『地域文化研究』地域文化研究紀要2, P.52-66, 梅光女子学院大学
- 高宮廣衛 1994 「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』NO.14, p.7, 沖縄考古学会
- 1995 「八重山型石斧の基礎的研究（3）」『南島考古』NO.15, P.1-32 沖縄考古学会
- 1996 「八重山地方新石器無土器期出土の石斧のサイズ」『國分直一博士米寿記念論文集 ヒト・モノ・コトバの人類学』, P.457-467, 雄山閣
- 1999 「八重山型石斧の基礎的研究（4）」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第3巻 第1号, P. 51-126
- 阿利直治 1982 「V-1, 石器」『大田原遺跡』P. 7-45, 石垣市教育委員会
- 森威史 1995 「既存発掘調査報告書より探る石垣島の新石器時代の様相」『南島考古』NO.15, P.33-62, 沖縄考古学会

琉球諸島考古学文献散歩（2）

Book Review on Ryukyu Archaeology (2)

安里 嗣淳

ASATO Shijun

文献

- 鳥居龍蔵 1894 「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」
『東京人類学会雑誌』9卷94号 東京人類学会
1894 「琉球諸島女子現用ノはけだま及ビ同地方掘出ノ曲玉」
『東京人類学会雑誌』9卷96号 東京人類学会
1905 「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」『太陽』11卷1号
1905 「沖縄諸島に住居せし先住人民に就て」
『東京人類学会雑誌』20卷227号 東京人類学会
1905 「沖縄諸島の先住人民に就て」 『考古界』4卷8号
1905 「八重山の石器時代の住民に就て」『太陽』11卷5号
1926 「沖縄本島に居住せし先住民に就いて」
『有史以前の日本』改訂版 碓部甲陽堂
1926 「八重山の遺跡に就いて」『有史以前の日本』改訂版 碓部甲陽堂
1953 「私と沖縄諸島」『ある老学徒の手記』 朝日新聞社刊

注 『有史以前の日本』の初版は1918年であるが、手元になく紹介できない。

鳥居龍蔵という人一生い立ちから東大人類学教室就職まで

1904年6月、東京大学人類学教室の鳥居龍蔵は8年ぶりに沖縄諸島を訪れて2カ月にわたる長期の考古学調査をおこなった。この調査は鳥居にとってだけでなく、沖縄にとっても本格的な考古学研究が実施された初めての出来事であった。2004年は鳥居の調査から100年目にあたるが、それは沖縄考古学研究開始100周年でもあるといえる。このときの調査の成果は翌1905年に『太陽』、『東京人類学会雑誌』、『考古界』に相次いで発表された。三誌ともほとんど同じ文章である。また同年暮には『太陽』に八重山調査の成果を発表している。これは同誌の年初1号の論文中で予告されていたものである。

鳥居龍蔵は東アジアの人類学研究を、実際に自ら現地を踏査して展開した世界的なフィールドワーカーであったと評価される先駆者である。その鳥居が沖縄にも関心をもって、今から百年前の交通不便な時代に沖縄本島だけでなく宮古島、石垣島、与那国島までも踏査したのである。しかも鳥居は後述するように、限られた日程と情報のなかで、今日では定説となっている南北琉球先史時代の系譜と文化圏の相違を、すでにこのときに指摘しているのである。沖縄考古学研究の開始と進展に一つの道筋をつけたその功績は偉大である。

鳥居龍蔵は1870（明治3）年4月4日に、現在の徳島県徳島市で生まれた。もともとの呼び方は「りょうぞう」だったが、東京大学人類学教室に勤務後英文職員録に「RYUZO」と記して以来「りゅうぞう」と称するようになったという。生家は徳島市の問屋街にあった江戸時代からの商家で、裕福な家庭に育ち幼少時から自由気ままな生活を好んだ。小学校に入ると、自由気ままにできない所だと

して興味をもたず、あまり学校へ行かなかつたのでついには退学となつた。しかし現在よく見られる登校拒否や怠学ではなく、むしろその反対で、その旺盛な好奇心、向学心を發揮して自宅に居ながら実に多くの書物に接して勉学に励んでいた。裕福であったから、書籍をよく買い、東京から取り寄せるほどの読書家であった。また、多くの中学教師や知識人の所へ出入りして、独自に基礎的な学問を修めている。したがつて、鳥居は一般的の学校生徒よりも、目的意識を明確にもち自由な最前線の学問への道を歩んでいたといえる。

16歳（1886年）のとき、その読書のなかで雑誌『文』に接し、「東京人類学会」が結成されたことを知り、すぐに入会した。送られてくる『東京人類学会報告』を待ちわびて読む傍ら、自らも徳島の史跡を調べて同誌に寄稿するようになった。また同会は前回の（1）で記したように、東京大学大学院生の坪井正五郎が中心となって結成され、後に神田孝平が会長に就いたのであるが、鳥居は坪井に手紙を送って知己を得、以来文通で指導を受けるようになった。また、この頃郷里の恩師が東京へ出張する際に「坪井先生に会い、人類学の勉学に重要な本を紹介してもらい買ってきて欲しい」と頼み、神田孝平の『日本太古石器考』を手に入れている。

18歳（1888年）のとき、東大学生の坪井正五郎が九州調査の帰途徳島の鳥居家を訪問した。鳥居宅に数日滞在し、付近の史跡を案内したが、坪井は鳥居に東京で人類学を勉強することを勧めた。

20歳（1890年）の9月に、鳥居は東京遊学のため上京した。居候先が郷里の先輩の国学者宅で東京帝室博物館の職員であった。その縁で同館の陳列品を詳しく見る機会に恵まれた。また、神田孝平を訪ねて親交を深めたりした。しかし、頼りの坪井正五郎は当時欧州留学中であった。1892年夏、坪井が帰国すると東大人類学教室で勉強するように勧められた。そこで同年12月鳥居家は徳島の家財をすべて売り払い、一家で東京へ移住した。これは次第に家運が傾き、また長兄は知的障害者、龍藏はまったく商売に興味がないという状況のなかで、もはや家業の継続発展は望めないと両親が判断したのであろう。

23歳（1893年）のとき、鳥居は坪井の計らいによって東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理掛として採用された。鳥居の精力的な勉学は東大でいっそう拍車がかかる。彼は人類学教室初代教授となった坪井の講義をはじめ、各方面的教授の講義を聽講しまくり、学識を広めていった。坪井の特別の許可によるものである。そして、関東地方の遺跡遺物に関して現地調査を実施したり論考を発表したりした。

沖縄の考古学に関する初の論考

採用2年目の24歳（1894年）のとき、早くもわが沖縄の石器時代遺跡の存否に関する論考を発表している。それが「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』9卷94号 東京人類学会刊である。この論考は沖縄から西國男が上京の際に持ってきたものを実見し、「琉球ニ石器時代ノ遺跡アラントハ吾人ノ深ク信ズル所ナリ」との見通しを得、未だ確認されていない沖縄の石器時代遺跡が確かに存在することを示す証拠として論述している。西は八重山諸島で6箇所、沖縄本島で2箇所から石斧を採集し、うち八重山採集の4個を持参して鳥居に見せている。論考のなかで鳥居が片刃石斧に触れ、本邦では殆ど例がないとしたことについて、掲載誌の編集者が注を付し、北海道などにあるとして鳥居の見解を否定的に補っている。しかし、鳥居は八重山地方に顕著な局部磨製石斧にも気付き、また台湾も含めた周辺地域との関連調査の重要性を早くも説いている。

はけだまと曲玉についての論考

同じ1894年に鳥居は「琉球諸島女子現用ノはけだま及ビ同地方掘出ノ曲玉」『東京人類学会雑誌』9巻96号 東京人類学会刊を発表している。特に宮古島で現用されている竹製の管形はけだまについて論述し、はけだまは即ち掛け玉であるとした。またかつては竹玉の間に一定間隔で曲玉があったものが次第に数を減じ、竹管だけになったものと述べている。そして琉球諸島で管玉が発見されていないことに関して、これは現在も昔も竹製の管玉を使用してきたのではないか。さらには日本の古墳から出土する管玉もその起源は竹玉にあるのではないかと説いた。後半は曲玉にふれている。西常央（にし・つねのり）が持参した78個の八重山収集の曲玉について分類を試みている。しかし、その経緯や日本の曲玉との異同は今後の研究課題だとしている。西は長崎県平戸の出身で、1880年に警部兼検事補として來県、1884年に島尻役所長、翌1885年から1890年まで八重山役所長となり、次いで首里役所長兼中頭役所長を1896年まで務めた人物である。曲玉は八重山在職中に収集したものであると記している。西は沖縄の自然と文化に関心を示し、外来の研究者への便宜も図っている。また東京大学に沖縄の生物標本を寄贈したりしているが、曲玉78個を持参したのもこののような関係のひとつであろう。

鳥居が宮古のはけだまを扱った経緯が興味深い。当時、宮古島では長期にわたって島民を苦しめた過酷な税制（いわゆる人頭税）の撤廃運動が燃え上がり、1893年11月に指導者の城間正安と中村十作に連れられて島民代表の二人が上京してきた。その二人すなわち西里蒲と平良眞牛を、しばしば東大に出入りしていた田代安定が鳥居に紹介したのである。鳥居は二人から宮古の習俗を聞き取り、後で「はけだま」の实物を送ってもらい、これを題材に上記の論考を発表したわけである。鳥居の論考には末尾に「余ハ本篇ヲ草スルニ際シ坪井正五郎、田代安定二氏ノ注意ヲ得、且ツ宮古島土人平良眞牛、西里蒲二氏ニ就テ同島ノ事情ヲ聞クヲ得タルハ余ノ深ク此處ニ於テ謝スル所ナリ」と記しているだけであるが、1953年の「私と沖縄諸島」『ある老学徒の手記』朝日新聞社刊では「（田代）先生の紹介により宮古島よりわざわざ請願に上京した島人二人の方と知るところとなり、この両氏によって宮古島の土俗を知った」と記している。この二つの記述および年代から、当時の税制撤廃運動の島民代表の二人であったことは明らかである。鳥居は意外なところで宮古島の民衆運動指導者との関わりをもつていたのである。

台湾調査を田代安定と、帰途に沖縄立ち寄り

ところで、東大人類学教室に入りしていた田代安定とは鹿児島県の出身で郷里の私塾で博物学（主に植物学）などを修め、1874年に上京して内務省御雇・博物館掛となった人である。一時帰郷して県に勤めるが、1882年に農商務省に勤めキニーネ試植の目的で沖縄への出張を命ぜられた。田代は専門の植物学以外にも沖縄の土俗などに关心を示し、その見聞を「東京人類学会雑誌」に寄稿したりしている。彼は1887年に「本島旧跡古墳即チ古代人住居ノ形跡誠ニ少ク大抵中古即源為朝並島津家征討以後ノ事ノミニテ甚ダ残リ多シ古跡モ普ク実驗致シ候所只人骨ノ外何モ参考品無之候」と古代遺跡の発見には悲観的な報告をしているが、巫女などが曲玉を所持していること、計算や記録に結縄算の習俗があることなどを報告している。（「人類学上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」『東京人類学雑誌』2巻16号、東京人類学会刊）。琉球諸島としては神田孝平が奄美の赤木名採集の丸ノミ石斧の報告が初めてであるが、沖縄諸島としては田代のこの報告が最初の考古学的文献ということになる。また1889年には西表島古見村で発見されたバナリ焼を見取り図付で報告している。「琉球西表島古見村ノ土器」『東京人類学会雑誌』、東京人類学会刊。沖縄考古学初の考古学的面である。このような関わりから、田代は同学会の事務局である東大人類学教室を訪れることがあったのだろう。1896年の鳥居の第

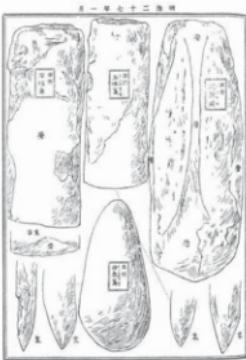
1回台湾調査の際には東部地域と一緒に旅行している。おそらく田代の薦めや影響があつてか、鳥居はこの台湾調査からの帰りに沖縄に立ち寄り、数日間沖縄師範学校博物学教諭黒岩恒宅に滞在して調査をしている。ただ、どのような調査内容かは特に報告をしていないのでよくわからない。本稿の冒頭にいう「鳥居龍藏は8年ぶりに沖縄を訪れて云々」はこの年からの経過を指している。

ところで1896年に沖縄人類学会が結成された記事が『東京人類学会雑誌』12卷132号に掲載されている。その発起人中に鳥居龍藏、黒岩恒の名が見えるが、これはおそらく鳥居が台湾からの帰途沖縄に立ち寄り、黒岩恒宅に滞在していたことと関係があるものと考えられる。黒岩は同年に沖縄学術研究会の設立も準備しているので、この沖縄人類学会の設立にも主導的役割を果たしたものとみられる。会の事務所を黒岩の勤務先である師範学校内におくと規約に定めてあることからも、それがうかがえる。鳥居が『人類学雑誌』に沖縄にも石器時代遺跡の存在する可能性があるとの論考を2年前に発表したこと、本人が沖縄に見えたことなどで、同会結成の機運ができたのであろう。



鳥居龍藏

鳥居が沖縄に石器時代遺跡が
存在することを確信した石斧
(一八九四年の論文より)



海上より川平村を望む
(遠方に飛ぶ鳥の下は遺跡也)

石垣島川平貝塚遠望スケッチ
(1905年の論文より)



自ら採集した沖縄本島の先史土器
(荻堂貝塚か?)

1904年、初の本格的沖縄考古学調査

冒頭に記したように鳥居の初めての本格的な沖縄考古学調査は、1904年6月～7月の間沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島の踏査旅行である。鳥居は台湾調査で初めてこの世界に持ち込んだ写真機を持参し、沖縄の風物も含めて貴重な記録を残している。また、本人も自賛しているように初めて蓄音機（レコーダー）を持参して民謡などを録音している。それは東大人類学教室に保管されていたが、鳥居はおそらく大震災のときに消失したのではないかという。

鳥居の沖縄行きの前に、先述したように田代安定によって情報と关心を与えられていた。鳥居は東大の理科大学人類学教室に属していたが、その学問的向上心から文科大学の上田萬年教授の言語学の

講義も聴講していた。ちょうどそこには沖縄出身の伊波普猷が学生として聴講しており、互いに話しが合い、鳥居の自宅にも来るような付き合いになった。実は鳥居は当時の東大総長渡辺洪基から、沖縄の考古学調査もすべきことを数年前に言われていた。ちょうど学生伊波からの勧めもあり、しかも琉球王国時代の国王の木裔尚家の持ち船に無貨で乗れるということで、1904年6月に伊波の帰省とともに沖縄に渡ったのである。

那覇到着後、まずは首里の伊波の家に滞在し、伊波の案内で本島一帯の調査をおこなった。市内では首里城見学や那覇港の御物城（おものぐすく）での陶磁器調査をしたり、夜は沖縄芝居をよく鑑賞したようである。本島では現在の那覇市で城嶽貝塚、北中城村（当時中城間切）で荻堂貝塚を、石川市（当時美里間切）で伊波貝塚、具志川市（同名間切）で散布地を発見した。伊波貝塚では小発掘をおこなったようであるが、これが沖縄における最初の考古学的発掘である。また、荻堂貝塚の調査の際には貝塚の崖上に住んでいた安里徳仁という当時15歳の少年に現地を案内してもらっている。この少年はその2年後にアメリカへ渡航し、戦後数十年後にこの地に帰った。私が1975年頃お会いした際に「少年の頃、小学校の先生からの指示で東京から見えた鳥居先生を自分が案内した」と誇らしげに語っていた。ところで鳥居は戦後の回想記ではすべて「那覇で貝塚を発見した」とし、（）を付して「後にこの貝塚は松村瞭氏、大山公爵も発掘された」と記している。松村は荻堂貝塚を、大山は伊波貝塚を発掘しているので、鳥居がいずれも那覇市としているのは誤記で、1905年の一連の文献の記載が正しい。

さらに鳥居は伊波と別れて宮古島に船で渡り、数日間滞在して御嶽や民謡などを調べて、さらに石垣島に渡った。『鳥居龍藏伝』を著した中蘭英助は八重山調査で伊波との語らいを想像して書いているが、伊波は宮古・八重山には同行していない。そして川平村の獅子森（岡）と四力村西端においての遺跡を発見した。獅子森の遺跡（現川平貝塚）では小発掘を実施しているが、これが八重山で実施された最初の考古学的発掘である。

鳥居はさらに西表島と与那国島に渡った。与那国島ではわずか1泊だけであったため精力的に各集落を巡り、家屋衣服等を写真に納め、夜は宿泊所で言語や話を聞き、あるいは曲玉などを観察した。翌日は船で那覇に向かい、再び伊波宅に数日滞在した後に東京へ帰っている。

鳥居の琉球先史文化系統論

沖縄調査の翌1905年、本稿の冒頭に記したように鳥居は連続して同じ内容の論考を異なる三つの学会誌に掲載した。内容は沖縄本島における調査成果とその系譜をめぐる論考である。さらに同年の暮れに八重山の石器時代について発表している。

本島での調査成果については、発見された四箇所の遺跡、遺物を紹介し、その系譜が台湾とはまったくつながらないこと、日本の石器時代土器と同一系統に属するとの見解を示している。さらに当時の主流である人種論を展開し、考古資料の類似、非類似を根拠とし、あるいは現代琉球人の多毛性などをとらえて、アイヌとの強い関係を説いている。

一方、八重山の調査成果については石垣島川平貝塚の小発掘の結果から、その系統や時代を考察している。土器については無文様であることを指摘した上で、注目すべきこととして土器の両端に「耳」の付着していることを挙げ。これに「外耳（そとみみ）土器」の名を与えている。鳥居はこの遺跡を評価して「この遺跡を残したる人民は、石器時代の人民にして、石器、貝器を日用の利器とせしものたるや明らかなり」と述べている。鳥居は八重山に渡る直前に沖縄本島で荻堂貝塚や伊波貝塚などを調査して有文土器を実見しており、その情報に基づいて「・・この遺跡は、沖縄以東の遺跡と全く性

質を異にするものにして、今先づこれを別種類のものとして見るを最も適當なりと信ず。遺跡の同一ならざる事は、即ち其種族の不同なることを示すものにして、余はこの点に於て、有文土器を残したる者と、外耳土器を残したる者と、全く人種を異なる者と考ふるなり」としている。

鳥居はさらに結論でも繰り返して「石垣島にこの遺跡を残したるものは、学問上、沖縄本島以東の其れと全く性質を異にするものにして、從て、其住民も又別派の種族たると推測せらるゝなり。果たして然ならばこの住民は毫も本邦内地の石器時代住民と関係を有せざるものにして、本邦的の遺跡は實に沖縄本島附近にて跡を絶てりと云ふ可し、この事実は決して輕々に看過すべきものにあらず」と強調している。

八重山の石器時代の年代については「何つの世のものなる乎・・・(中略)・・・いともいとも知らまほしき事なり」であり、川平村、四ヶ村両遺跡とも中国青磁を伴っていることを年代解明の手がかりとして挙げている。青磁が確かに包含層中に共存することを確信して、「余はこの石器時代の遺物と、青磁とは全く同一人民の手に由て造られたるものにあらざることを信ず、されどこの二者はともに正しく包含層に、将た、貝塚中に存在するを堅く信ず。さればこの二者はよし程度の大に相異なるものなりと云へども、同一時に使用せられ、後ともに此処に包含せられたりと考ふるものなり。而して、其青磁は他より此処に輸せられたるものにして、石器時代の人民はこの輸入品の青磁を得、其当時にこれを使用せし者ならん」と述べて、青磁の示す年代がこの遺跡の年代であると主張している。そしてその年代推定の手がかりを沖縄本島那覇市の御物城（おものぐすく）出土の青磁に求めた。鳥居は伊波普猷とともに採集した御物城の陶磁器を寺山啓介に見せ、これは広東の青磁で15・16世紀に属するものであるとの見解を得た。加えて、伊波から当時は琉球が海外交易を盛んに展開した時代であったことを教えられ、御物城のつそれはこのような活動を示すものとして理解した。そして、八重山の青磁も類似していることから、同様にその年代は15・16世紀であるとした。鳥居はこの年代を踏まえて、八重山の石器時代を次のように理解した。

- ① 石器時代の住民は現今の八重山島民である。
- ② 今日の八重山島民は15・16世紀の頃、未だ石器時代の段階にあった。

そして鳥居は今後の研究の方向性を示して、「この石器時代遺跡は本邦のものと更に關係なけれども、今後研究すべきは台湾の石器時代の遺跡なりと云ふべし、未だ輕々に断言なし能はざれども、八重山の其れと、台湾の其れとは、今後に比較研究すべき、一大宿題ならん」と結んでいる。石器時代文化は沖縄本島までは日本的なものすなわち現在でいえば縄文文化の系統に含まれるが、八重山のそれは全く別の系統で、台湾などさらに南方の文化との比較研究が重要だとする鳥居の見解は、現在も通用するものであり、すでに沖縄考古学の開始期から指摘されていたことに大きな意義がある。

鳥居の南北琉球文化の比較資料の問題点

しかし、その後の沖縄考古学の研究の進展によって、実は鳥居が信じた川平貝塚や四ヶ村西端遺跡は、現在の八重山編年では「スク時代」にあたり、鐵器や陶磁器をともない、農耕が行われている点などからも沖縄諸島のグスク時代にほぼ相当する。「外耳土器」と名付けられた八重山式土器も、その系譜は南方ではなく、滑石製石鍋の影響を受けた沖縄グスク土器と同様に、北の系譜につながる可能性が指摘されてきている。したがって、鳥居が比較した遺跡や遺物は、八重山の石器時代以来のものではないのである。鳥居が川平貝塚を15・16世紀としたのは概ね正しい。本人も「年代の余りに新しきこと」という認識はもっていたが、むしろこの点を現代の八重山島民につながることの根拠として用い、この時代は未だ石器時代であったという見解を示しているのである。確かに、この時代は實際

に石斧も貝器も出土し、貝塚も残しているので、石器時代の生活スタイルも継承していた。

いずれにせよ、鳥居が比較したのは相互に時代と文化段階の異なるものであり、比較すべき八重山の新石器時代遺跡は戦後になってから初めて発見されたのである。それにもかかわらず、鳥居が指摘した北琉球と南琉球の文化内容と系統の相異は、石器時代については有効である。先史（石器）時代には北琉球と南琉球に、それぞれ系統の異なる文化が存在したことを明らかにした鳥居の説は、今日までの琉球考古学研究の方向を示した貴重な道標であった。私は、南北両先史文化の境界線である沖縄島と宮古島間を、あたかも生物学における渡瀬線のごとく「鳥居線」と名付けてはどうかと思っている。

伊波普猷の日琉同祖論への影響

鳥居の沖縄調査には伊波普猷の協力が大きかった。両者は東大においても親密な交流をしており、沖縄本島の調査には伊波が案内役を務めている。当時の人類学・考古学は石器や土器の類似・非類似ですぐりに人種論を展開する風潮にあり、鳥居もこれを得意とした。1905年に発表された沖縄本島調査に関する論考で展開されているよう、日本と沖縄とのヒトの形質や考古資料などのさまざまな類似を伊波も直接聞かされたことであろう。鳥居の見解が伊波の日琉同祖論に確信を与えたことは、すでに先学が明らかにしていることである。なお、東大人類学教室の戦前の考古資料が、現在同大の総合博物館に保管されているが、そのなかに「伊波普猷」の名が付された土器がある。おそらく伊波が寄贈したもので、人類学教室との交流関係を示すものともいえる。

『有史以前の日本』における鳥居の見解の変化

鳥居の人類学研究の中間に總括ともいべき『有史以前の日本』が1918年に刊行されたが、ここでは1926年の改訂版に基づくこととする。この本はこれまでの論考を収録したもので、沖縄調査の二論考も含まれている。ここで注目されるのは、よく指摘されるように八重山の石器時代住民の系統について、台湾など南との比較研究の重要性を正しく指摘していたにもかかわらず、「・・この相異はあたかも日本内地に於けるアイヌの石器時代遺跡と吾人祖先の先駆者（固有日本人）の弥生式土器使用石器時代遺跡と相異して居ると全く同一である。而して八重山の遺跡は我が先駆者の遺跡と同一であつて、しかもその土器の形式はまさしく弥生系のものである。この事実からすれば、八重山の石器時代民衆は吾人の祖先と同一であつて九州あたりから古く此処に移住して來たものであろう」として、南方への視点を撤回していることである。

これは、弥生時代の研究が進み、八重山の年代値により近い時代の文化と比較するという方法に伴って、必然的に弥生時代文化に結びついたということではないようだ。おそらく、沖縄が次第に日本の近代国家の枠組みの一部として同化されている過程のなかで、鳥居もまた「日本国民としての神縛人」を意識し、学問的にそれを裏付けるという心情をもつに至ったのではないかだろうか。鳥居は日本国家が侵略していったアジアの近隣地域をよく調査したが、多くは現地統治機関の協力を得る立場にあったことから、国家にとって沖縄は人種的にも文化的にも「異域」であつてはならないという同化政策を理解しようとする立場にあったといえる。

晩年の回顧 『ある老学徒の手記』

鳥居は東大人類学教室標本整理掛の職から、沖縄調査の論考を発表した1905年には東大理科大学の講師となり、1922年には助教授となって坪井正五郎の跡を継いで人類学教室の主任となって研究を推

進していく。しかし有名な1924年の「松村瞭学位審査事件」をきっかけに東大を辞職した、國學院大學や上智大学の教授を務めながら海外調査を精力的にこなしていたが、1939年に中国の私立燕京大学の客座教授に招かれ、戦中、戦後も滞在した。中国革命の後もしばらく残っていたが、1951年81歳の時に日本に帰国した。そしてNHKのラジオ番組で研究の回想を語ったりしていたが、同時に自伝ともいべき『ある老学徒の手記』をまとめ1952年11月には校正を終えた。その後風邪から肺炎を併発し、翌年の1月には悪化したため、出版社では急いで試し刷りの本を造り病床へ届けた。鳥居は出来上がったばかりの自伝を手にして間もなく、1月14日に生涯を閉じた。この伝記は日本時代の記録で、統編として中国燕京時代のことも計画されていたが、逝去により実現しなかった。

鳥居の宮古・八重山調査以後約50年間、同地域における考古学調査は途絶えた。次に調査が行われたのは金闇丈夫、國分直一らによる波照間島下田原貝塚の発掘で、戦後の1954年のことである。鳥居の回想では先に指摘したように荻堂貝塚や伊波貝塚を那霸市とするような勘違いもみられる。しかし、『有史以前の日本』で急に日本の弥生文化と強引に結びつけた見解は消え、今度は当初の説の通り台湾との比較研究の重要なことを説いている。また、陶磁器の出土するレベルは貝塚の上層として扱い、その下層は宋代以前のものであることは明らかだとしている。

鳥居龍藏の顕彰

鳥居の全著作は没後に『鳥居龍藏全集』全12巻、別巻1巻として1975~77年に朝日新聞社によって刊行された。また、出身地の徳島市には1964年に「県立鳥居記念博物館」が開館し、鳥居の業績や収集した資料の一部が展示されている。また、翌1965年に同館内の鳥居博士顕彰会によって『図説鳥居龍藏伝』が刊行された。同館では1970年に『鳥居龍藏博士の思い出』も出版している。次男の龍次郎氏が同館を運営する鳥居記念振興財団の事務局長を務めておられたが、数年前他界された。なお、鳥居龍藏夫妻の遺骨は、この記念博物館構内のドルメン型墓碑に納められている。

東大人類学教室に保管されていた蒐集資料は、すべて国立民族学博物館に移管されている。また、鳥居がアジア各地で撮影して残した写真乾板は膨大な数にのぼるが、東京大学総合研究資料館（現博物館）は文部省科学研究費助成で「鳥居龍藏写真資料研究会」を組織して整理し、1990年に『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍藏博士撮影写真資料カタログ』4部作を刊行した。さらに同資料館では特別展示「乾板に刻まれた世界—鳥居龍藏の見たアジア」を翌1991年に開催し、同名の図録も同時に刊行した。

さらに国立民族学博物館では共同研究「鳥居龍藏の見たアジアの研究—写真と標本分析を中心に」を実施し、その成果を所蔵標本とともに1993年3月に企画展「民族学の先覚者 鳥居龍藏の見たアジア」を開催するとともに、同名の図録を刊行した。

そして同年の10月には出身地徳島県の県立博物館において「徳島の生んだ先覚者鳥居龍藏の見たアジア」展が催され、同時にその解説書（図録）も刊行された。

これら一連の資料のなかから台湾関係の写真資料を抜粋して、台湾・台北市の順益台湾原住民博物館において1994年に「跨越世紀的影像・鳥居龍藏眼中的台湾原住民」展が開催され、同名の図録が刊行された。

中蘭英助は『鳥居龍藏伝：アジアを走破した人類学者』を1995年に岩波書店から刊行している。また、鳥居の自伝『ある老学徒の手記』は親戚筋の鳥居貞義氏により、同氏の取材記録や中国時代に親交のあった人たちの横書きの追想記の付録を新たに付けて、2003年に復刻版が刊行された。

（あさと しじゅん：所長）

糸満市字兼城在樋川腹門中墓内発見の礫石経

The Pebble with Ink-drawings Found in the Hikawabara Family Grave in Kanegusuku, Itoman City

長嶺 均

NAGAMINE Hitoshi

ABSTRACT: The material introduced here is a coral pebble bearing ink-drawings, found in the Hikawabara family grave in Kanegusuku, Itoman city in November, 2001, and entrusted to the Okinawa Prefectural Center of Underground Cultural Property in February, 2003. An interview was carried out regarding this material and infrared photography was employed to decipher the characters. This paper reports the result of the investigation and future problems related to the material.

1. はじめに

ここに紹介する資料は、沖縄県糸満市字兼城にある樋川腹門中墓内より2001（平成13）年12月16日に発見され、2003（平成15）年2月1日付けをもって、沖縄県立埋蔵文化財センターへ寄託された、墨書のあるサンゴ礫である（以後、礫石経と呼称）。

私の知る限りにおいて、沖縄県内初出の資料であり、非常に貴重なものである。樋川腹門中では、当礫石経の寄託の趣旨について、門中の歴史を解明するための情報開示ということだけに留まらず、貴重な学術的資料としての観点から、墓室内で保管するのではなく、公的機関において広く公開することによって、多くの県民や研究者の利用に資することを希望している。しかし、サンゴ礫自体は沖縄の至る所に転がっている石でもあり、礫石経として利用されていても、見落とされる可能性がある。そこで、類例発見への期待から、注意を促すことを目的として紹介をおこなうとともに、関連する諸課題について、私見を述べておきたい。

2. 樋川腹門中墓の位置と由来

樋川腹門中墓は、沖縄県糸満市字兼城小字樋川原24番地の1に所在する。同市内字賀数に端を発し、南西方向に延びる琉球石灰岩丘陵上に位置し、標高は約40メートルを測る。隣接する丘陵頂上部には奥間グスクがあり、その北側崖下に同墓はある。さらに、直線距離にして約100メートル北側には、字兼城が信仰の対象としている井泉であるヒージャー（樋川）が位置する。

門中墓の形状はヒラブチバー（平葺墓）といわれるもので、屋根は平板、眉は一直線を呈している。その隣りには岩陰を利用したアジー墓が鎮座する。両墓とも昭和11年11月の墓の改修時までは内部で連結していたが、改修の際、石積みによって仕切られた。

樋川腹門中墓は、四門中により構成される。伝承によると、その初源は現在の大里村字真境名の屋号が前（メー）という家生まれの三兄弟に由来する。字兼城在の赤嶺（アカンミ）門中が長男、字潮平在の茂屋小（ムヤーグヮー）門中が二男、上真銘（ウィーマーミ）門中が三男の子孫である。そして、四つ目の門中は樋川腹門中構成員の大半を占める玉江（タマイ）門中である。玉江門中の始まりはこうである。茂屋小の夫婦に子供がいなかったことから、隣りの現糸満市字阿波根の屋号「神谷（カナ）」家の非嫡出子を貰い受け養育した。その子供が成人後独立し、屋号「玉江」を名乗った。そして、妻を娶り四人の子供に恵まれた。その子孫が玉江門中である（金城昭守氏作成の家系図より抜粋）。

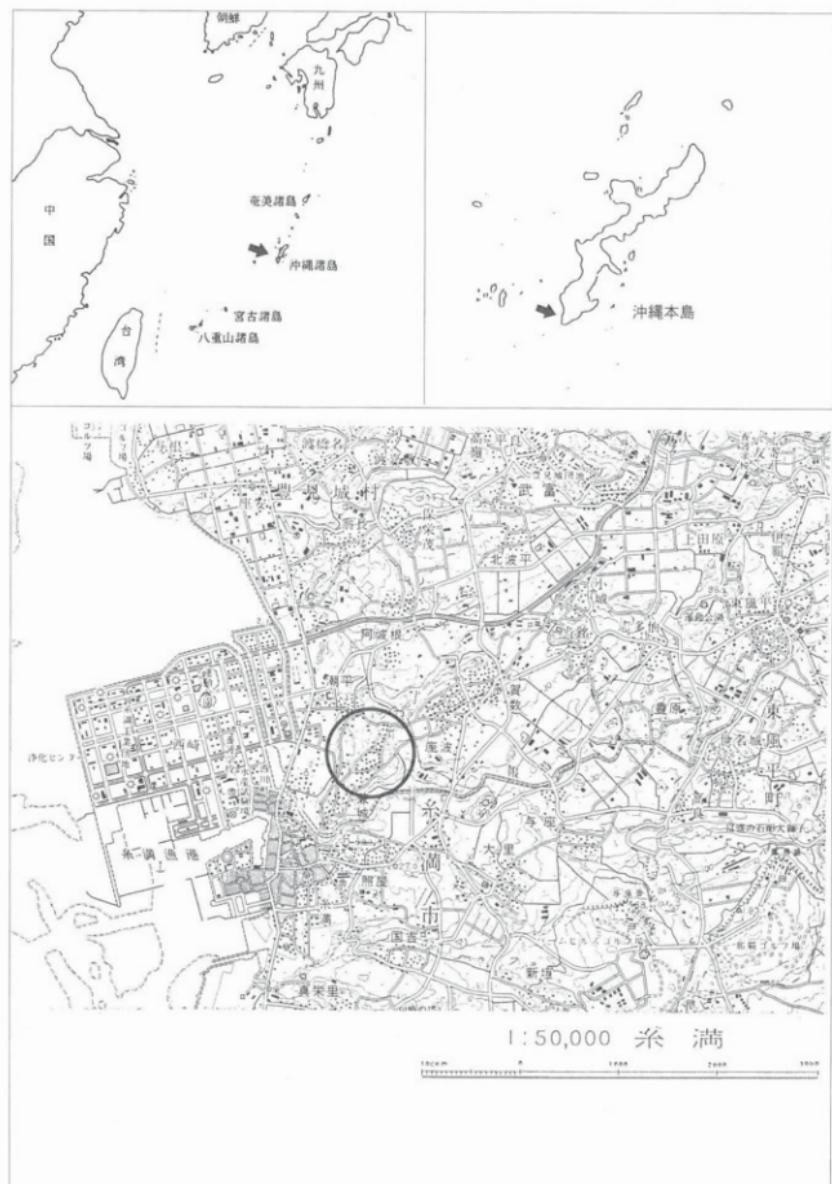


図1 楠川腹門中墓の位置

3. 聞き取り調査の概要

調査は、2004（平成16）年2月15日、糸満市字潮平の公民館において樋川腹門中代表の赤嶺勉氏を始めとする門中有志の方々5名に集まっていたとき、一問一答形式で録音テープに記録しながら行つた。調査に際しては予め質問項目をまとめた調査表を作成し、それに沿つて進めた。また聞き取り調査開始直前には、同調査が円滑に進められるように、樋川腹門中墓の現況を把握することを目的として墓の視察を行つた。

4. これまでの経緯

①発見に至る経緯

樋川腹門中では2001（平成13）年頃より、下門律光氏を中心に門中の沿革をまとめた門中誌を製作する計画がスタートした。その聞き取り調査の過程で門中構成員の一老人から得られた情報を基に、2002（平成14）年12月16日、墓の改築の際、墓内部の確認調査を行つた。礫石経はこの調査で確認されたものである。最初の発見は1936（昭和11）年11月に遡る。

以下は、当時の第一発見者である金城誠吉氏への聞き取り調査を要約したものである。

1936（昭和11）年11月のコープンの際、改修工事を行うことになり、墓室内の人骨を一時的に墓外に運び出すこととなつた。門中の構成員は各家庭ごとにカマス（クーグエーブル）を3袋ずつ持ち寄り、各人当たり3～4袋分ずつ人骨をスコップで入れるように指示された。しかし、皆が気味悪がつたので、酒の勢いで作業を行つた。人骨を入れることが出来た者から順に帰宅してもよいとのことだったので、頭部を主に入れ、早々と3袋分に達したので帰宅しようとすると、「おまえは残れ」と言われた。生だった人骨を袋詰めにすると、イキ（合葬池）には骨の細片だけが残つた。最後に残つた骨の細片をスコップで袋詰めする作業にあつた。作業は二人で行い、一人がカマスの口を持って、私がスコップで骨片を袋に入れる作業を担当した。下方の骨を拾おうとすると、スコップの刃先が硬い物にあつたので、見ると小石があつた。明かりも無い墓内部で合計25個の小石を拾い集めた。しかし、今になって考えるともっとあったかも知れない気もするので、25個だけとは言えない。

拾い集めた石には文字のようなものが書かれているので、25個全部を現糸満市字潮平の有志である金城仁栄氏のもとに持つて行つたが、何が書かれているのかわからなかつた。次に、現糸満市字照屋の東江長太郎氏（通称「アガリーボージ」）のもとに持つて行つた。しかし、何が書かれているのかわからなかつたので、一旦、墓に持ち帰つた。何かわからないので捨てようという話も出たが、こういうものは、他所の墓にも無い筈だ、残したほうがいい、後で何かわかるだろうと考え、元々約2m四方のイキ（合葬池）内奥の骨の最下部にあつたものを墓の改修後、最奥部の棚に25個の小石を置いた。

②寄託に至る経緯

2001（平成13）年12月16日、金城弘和氏（「糸満市史」村落資料調査員）より、金城善氏（糸満市立中央図書館副館長）あてに礫石経出土の報告あり。松本好郎氏（「糸満市史」編集委員）、金城正篤氏（樋川腹門中墓改修実行委員・「糸満市史」編集委員・沖縄大学教授）らが樋川腹門中墓の現地調査を行う。

2001（平成13）年12月17日、糸満市教育委員会総務部文化課文化財担当者、糸満市史編集担当者に山里純一氏（琉球大学教授）らを混じえて、樋川腹門中墓の現地調査を行う。

2002（平成14）年1月22日、金城善氏より、知念勇氏（沖縄県立埋蔵文化財センター所長）あてに「糸満市字兼城の門中墓改修工事に伴う出土遺物の記録保存について」依頼。この中で赤外線フィルムによる写真撮影と文字の解説を依頼。梵字については判読困難なことから未解説に終わる。

2002（平成14）年1月23日、知念勇氏より、金城善氏あてに「出土遺物の記録保存について」回答。



写真1 碓石経（上段：オモテ面、下段：ウラ面）

2002（平成14）年3月25日、金城善氏より、梵字に詳しい多田孝正氏（大正大学総合佛教研究所教授）あてに、「一石経（全25個中3個）の梵字調査を依頼。

2002（平成14）年6月13日、池田晃隆氏（大正大学総合佛教研究所非常勤講師）より、金城善氏あてに、「糸満市字兼城の樋川腹門中墓収蔵一石経の梵字調査報告」にて調査結果を報告。

2002（平成14）年5月、金城善氏より、樋川腹門中墓改修工事実行委員会あてに、「糸満市字兼城の樋川腹門中墓収蔵の梵字で書かれた一石経について」報告。

2002（平成14）年5月28日、金城善氏より、安里嗣淳氏（沖縄県立埋蔵文化財センター所長）あてに、「糸満市字兼城の門中墓改修工事に伴う出土遺物の記録保存について」お礼の文書あり。その中で、梵字解説についての調査結果報告あり。

2003（平成15）年1月15日、糸満市字兼城の赤嶺勉氏（樋川腹門中代表）より、金城政安氏（糸満市教育委員会教育長）あてに、「資料の寄託について」依頼。

2003（平成15）年1月20日、金城政安氏より、安里嗣淳氏あてに、「資料の寄託について」依頼。

2003（平成15）年1月27日、安里嗣淳氏より、金城政安氏あてに、「資料の寄託について」回答。

2003（平成15）年1月28日、糸満市字兼城の赤嶺勉氏より、安里嗣淳氏へ、「資料寄託申請書」を提出。

2003（平成15）年1月28日、安里嗣淳氏より、糸満市字兼城の赤嶺勉氏あてに、「資料受託承認書」を送付。当文書中で、受託期間を2003（平成15）年2月1日から2006（平成18）年1月31日と明記。

2003（平成15）年2月1日、沖縄県立埋蔵文化財センター内遺物収蔵庫に全25個の礫石経を収蔵。

5. 赤外線カメラ撮影による墨書の鮮明化

今回の資料紹介における最大の成果は、赤外線TVカメラシステムを使用し、肉眼では判読困難な文字等を鮮明な画像として浮かび上がらせたことにある。

赤外線とは電磁波の一種であり、特に可視光より少し波長の長い近赤外線は墨の素材である炭素に吸収され易い特性を持つ。赤外線検知センサーを備えた赤外線リフレクトグラム（赤外線反射（吸収）画像解析）の手法を用いることで、肉眼では判読困難な墨書文字をテレビモニター上に映し出すことが可能となる。可視光は表面で反射されるが、近赤外線は墨書部分で吸収され、文字がより鮮明な白黒映像として視認される仕組みである。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、「赤外線TVカメラシステム」によって肉眼で判読困難な考古資料を視認可能なものとするために、平成12年4月1日の開所と同時に導入した。

以下に、当センター所蔵の「赤外線TVカメラシステム」の機器構成と礫石経撮影の手法について述べる。当センターでは、浜松ホトニクス株式会社の「IRRS-100（赤外線リフレクトグラフィ用カメラシステム）」を導入している。次の機器から構成される。①赤外ビジコンカメラ（一式）、②赤外線投光器（1点）、③ビデオモニター〔白黒、12型〕（1点）、④レンズ〔Micro NIKKOR f55mm F2.8〕（1点）、⑤F-Cコンバータ（1点）、⑥赤外線フィルター（1点）、⑦三脚（2点）などである。

礫石経は、ビデオモニター画面を①Nikon FE10（ボディー）、②NIKKOR f50mm F1.4（レンズ）、③ACROS NEOPAN 100（フィルム）を使用し、三脚にセットした上で、④シャッタースピードを1/8に固定して撮影した。その成果については、後述する礫石経観察一覧表（第1～3表）と赤外線写真（写真2～4）のとおりである。なお、写真2～4は文字のより鮮明な面を撮影した。また、筆者の勉強不足から文字の上下が逆転している可能性がある。

6. 磯石経の特徴について

今回紹介した磯石経は、25個全てが原生のサンゴ塊が水磨を受けて形成されたサンゴ礫を利用したものであり、陸上（いわゆる琉球石灰岩）に起因するものではない。大きさも掌に収まるような小ぶりのものを利用している。これらの磯石経は、有孔・無孔のものがある。有孔のものは、自然のものと人工的なものに大別される。さらに、自然のものには多孔質なサンゴ特有の性状に起因するものと、センコウガイに起因するものに細分される。センコウガイは比較的軟質なサンゴ礫や細粒砂岩（通称：ニービヌフニ）に穿孔する性質を持っている。そして、穿孔の際、穿孔した内壁面に自分の貝と同じ成分の炭酸カルシウムを沈着させ膜を形成する。センコウガイに起因する孔か否かについては、孔内壁面に沈着した炭酸カルシウム膜の有無を判断材料とした。但し、微細な孔の数量はかなりの数にのぼるため、観察表中では0.1cm以下のものは計測の対象から除外した。筆者は墨書文字が漢字なのか、梵字なのかについての明確な基準は持ち合わせていない。大雑把に画数が多いものを漢字らしきものとし、比較的画数の少ないものを梵字らしきものとして捉えた。どちらとも言えないものを不明とした。またオモテ・ウラの区別については、文字のある部分を便宜上オモテとし、その反対側をウラとした。孔数は貫通孔を1個として数えた。孔径では、貫通孔の場合オモテ・ウラ面を合計して2個と数えた。数個の磯石経には擦過状の痕跡が視認されたが、これは聞き取り調査で証言のあった、スコップの刃先がぶつかることによって形成されたものが含まれていると考えられる。個々の詳細な特徴については第1～3表の磯石経観察一覧表に記述する。

7. 磯石経からわかったこと

磯石経に関して解明された部分と未解明の部分についてまとめた。

【解明された部分】

先述した大正大学佛教綜合研究所の調査により、解明された主要な点を箇条書きにしてまとめた。

- ①糸満市字兼城在の樋川腹門中墓内から出土した磯石経を書いた者は僧侶であるらしい。
- ②石に書かれたものは、梵字による「仏頂尊勝陀羅尼」（総文字数352文字）の一部である。
- ③全25個中、内容が確認出来たものは、No.2、No.18、No.24の3個である。
- ④No.2は「金剛藏金剛」という意味で、「仏頂尊勝陀羅尼」経にのみ見られるもので、曹洞宗系の「仏頂尊勝陀羅尼經」と思われる。
- ⑤No.18は「一切如來」という意味である。
- ⑥「仏頂尊勝陀羅尼」の功德は、「一切の地獄の悪業が消滅する」、あるいは「極楽世界に往生する」ということである。
- ⑦日本本土では平安時代から埋經という風習があり、それがこの陀羅尼と一緒に琉球に伝えられたと考えられる。
- ⑧以上のことから、報告文では「門中墓に死者の追善のために納めたのではないかと考えられる」と結んでいる。

【未解明の部分】

- ①磯石経の埋納に関するこ。

いつの時代に磯石経を樋川腹門中墓内に埋納したのか不明。積み上げられた人骨の最下部から出土したことから、墓の創建年代に近い時期に埋納された可能性が大であると考えられる。

- ②墨書文字の解読に関するこ

25個中22個については未解読である。いかなる経典に由来するものかについて、大正大学の調査報

告書中の記述では、「仏頂尊勝陀羅尼經」の一節としている。

3個（No.2、No.18、No.24）については、梵字であることが判明しており、解読が試みられている。25個の文字種には、梵字だけでなく漢字や平仮名らしきものも含まれていることから、漢字表記のものは礫石經埋納に関する事柄で、梵字表記のものは經文に関する事柄というように、二種類の内容に分けられるのではないか。このことから、墨書を解読することによって、礫石經を埋納したいきさつが見えてくるのではないかと推察される。ちなみに、25個の文字種内訳は梵字らしきものが13個、漢字らしきものが7個、漢字らしきもの+平仮名らしきものの混在タイプが1個、不明が4個である。

また、礫石經それぞれが個別に完結する意味・内容を持つものなのか。あるいは、25個の資料を並べ替えることによって、1つの意味・内容を構成するのかについても、明らかにする必要がある。

③未発見の礫石經の存在について

聞き取り調査によると、墓室内には未発見の墨書石が存在している可能性があり、今後検証する必要がある。追加発見があれば、墨書石の持つ意味や内容がさらに補完されるものと考えられる。

④孔の有無とその成因について

資料には有孔・無孔のものがあるが、その成因は何か。人為的に孔を開けて使用したものか、あるいは、たまたま孔の開いた石を利用したに過ぎないのか。検証する余地がある。

8. 保存処理について

今回25個の礫石經を詳細に観察して気づいたことは、劣化がかなり進行しているということである。数十年間にわたって、墓室内でほぼ一定の温湿度に保たれた状態の中で保存されてきたものが、墓の外に出すことでの急激な温度変化と乾燥にさらされた結果であると推測される。

従って早急に保存処理を講ずる必要がある。保存処理にはまず以下の手順を踏まえることが肝要である。

- ①礫石經表面のクリーニング。表面に付着した粉状の埃は礫石經表面の劣化に伴って、発生していると推測される。これによって、表面の剥離が進行し、墨書文字の減失・磨滅を加速させている。
- ②石材内部の水分を抜き取った上で、合成樹脂注入による含浸処理による石材の強化。幸いにして、当礫石經は多孔質のサンゴ礫であることから、保存のための乾燥と含浸処理に伴う樹脂の注入が比較的容易に出来るものと推察される。

- ③礫石經表面塗膜による墨書文字の減失・磨滅の防止。

また、①～③までの保存処理が講じられるまでの次善の策として、空調設備のある一定の温湿度下で保存することが望まれる。温湿度差が大きいと礫石經表面にカビなどが発生して、劣化を加速させる恐れがある。これらの適切な保存処理は専門機関に依頼することが望ましい。

但し、いずれの措置を取るにしても、寄託者である樋川腹門中代表の赤嶺勉氏に同意を求めるか、門中側からの要望等によらなければならぬ。

さらに、劣化防止に関連して、取り扱い上の注意点についてもふれておきたい。礫石經の取り扱いについては、細心の注意が必要である。

- ①手袋を着用して資料を扱うこと。礫石經に素手で直接触れることによって、人間の皮脂を起因としてカビなどが発生し、礫石經表面の劣化を促進する恐れがある。
- ②礫石經に衝撃を与えないこと。サンゴ礫は比較的軟質な材料であることから、衝撃を加えることによって剥離や崩壊が一挙に進行する恐れがある。

9. まとめにかえて

梵字のある礫石経の発見は、沖縄における信仰・宗教史研究において、非常に貴重な発見であり資料の提供である。その歴史的・宗教史的意義については類例の増加に伴って、他の仏教関係石碑や經塚などの仏教遺跡を含めた総合的な比較検討が必要となるであろう。今後、特に墓の改修の際、類例が見つかる可能性は大である。注意を喚起したい。

礫石経の研究は、単に一つの学問領域に限定するのではなく、多角的なアプローチによる学際的研究（宗教学・民俗学・保存科学・考古学・文献学など）の必要性が求められているといえよう。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、収蔵庫に一時的に保管するだけでなく、樋川腹門中の意向を受け、県民や研究者に礫石経を公開している。資料の利用にあたっては、当埋文センター所長あてに「資料利用許可申請書」、あるいは「資料貸出許可申請書」を提出し、許可を受けることによって可能である。なお、申請書の様式は沖縄県立埋蔵文化財センターのホームページで公開されているので、それを利用することも出来る。

本稿において、筆者の力量では多くの課題を解決するに至らなかったが、礫石経について今後より多くの県民や研究者が同資料を活用・研究するようになることを祈念しながら、稿を閉じることにしたい。

(ながみね ひとし：調査課 主任)

謝辞

本稿をまとめるにあたって、聞き取り調査の労をとっていただいた樋川腹門中代表の赤嶺勉氏、同門中有志の金城誠吉氏、金城正篤氏、下門律和氏、下門律光氏、糸満市立中央図書館の金城善氏、また石質に詳しい理学博士の大城逸朗氏、神谷厚昭氏には貴重な御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

参考・引用文献

- 沖縄大百科事典刊行事務局編 1983 『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社
渡名喜明 1986 「沖縄の経塚・経塚碑覚書」紀要 第3号 沖縄県教育委員会
田中琢、佐原真 1995 「全面改訂 新しい研究法は考古学に何をもたらしたか」クバプロ
金城善 2002 「糸満市字兼城の樋川腹門中墓収蔵の梵字で書かれた一石経について」(報告)
沢田正昭 2002 『文化財保存科学ノート』近未来社

第1表 碳石経観察一覧表

写真番号	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	文 字 有無	種類	孔数	孔径(cm)	石 質
写真 2	1	8.4	6.0	3.4	120.5	有	漢字?	0		サンゴ
	2	梢円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ・ウラ面に直径0.1cm以下の孔が複数箇所認されるが、サンゴ特有の空洞に起因するものか判然としない。オモテ面に鮮明な漢字様の墨書き文字あり。ウラ面の文字の有無は不明。側面及びウラ面に剥離が進行中。								【内眼観察】
		オモテ面に鮮明な漢字様の文字が4行あり。ウラ面に不鮮明な文字様のものがあるが、判然としない。								【赤外線観察】
	2	9.2	5.5	3.0	122.0	有	梵字	2	①0.21cm, ②0.25cm, ③不明	サンゴ
		長方形形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ・ウラ・側面に直径0.1cm以下の微細な孔があるが、サンゴ特有の空洞に起因するもののか判然としない。側面に2つの孔あり、①は内壁面が凸凹しており、人工的なものか。貫通孔ではない。②は内壁面に炭酸カルシウム膜があり、センコウガイ起因の自然孔か。貫通孔ではない。孔の長さは約2.8cmを測る。③はウラ面に、内壁面に炭酸カルシウム膜をもつセンコウガイ起因の自然孔か。溝状の痕跡で、長さは約2.9cmを測る。オモテ面に不鮮明な梵字様の墨書き文字あり。ウラ面の墨書き文字は判然としない。オモテ・ウラ面とも剥離が進行中。								【内眼観察】
		オモテ面に鮮明な梵字様の文字あり。ウラ面の文字の有無は不明。								【赤外線観察】
	3	10.2	7.8	3.9	247.9	有	漢字? + 半仮名?	0		サンゴ
		梢円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。側面からウラ面にかけて微細な孔が2箇所あるが、孔の軸線がほぼ同一方向であり、中で直結する可能性あり。直角は約0.14cmを測る。自然・人工のいずれか判然としない。オモテ面に不鮮明な墨書きがあるが、判読は不可。ウラ面の文字の有無は不明。側面の一部に剥離が見られる。								【内眼観察】
		オモテ面に不鮮明ながら、一部判読可能な文字が3行あり。漢字様の文字と半仮名が混在か? ウラ面には不鮮明な文字らしきものがある。								【赤外線観察】
	4	8.3	4.9	3.7	110.9	有	漢字?	3	①0.018cm, ②0.24cm, ③0.21cm, ④0.17cm	サンゴ
		梢円形が「く」の字形に折れ曲がった形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面に1個、側面部に3個の孔が確認される。オモテ面の①は自然・人工のいずれか判然としない。側面部の孔②・③・④は内壁面に炭酸カルシウムの沈着が見られないことから、人工的なものか。①・②は貫通孔ではない。③・④は内部で連結している。オモテ面・ウラ面・側面部に墨書き様のが混在されるが、判読は困難である。オモテ面・ウラ面ともに剥離が見られる。								【内眼観察】
		オモテ面に不鮮明な文字様のものがあるが判読は困難。漢字様の文字がウラ面に2行、側面部に1行あるが、判読は困難。								【赤外線観察】
	5	9.1	6.0	3.2	170.6	有	梵字?	1	①0.23cm, ②0.25cm	サンゴ
		梢円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①とウラ面の孔②は、ともに中で連結している。孔は自然・人工のいずれか判然としない。オモテ面には透吸状の付着物がある。オモテ面に不鮮明な梵字様の墨書きが認されるが、判読は困難である。ウラ面の文字の有無は不明。ウラ面・側面部に剥離が見られる。								【内眼観察】
		オモテ面に不鮮明な梵字様の墨書きが2行あり。一部判読可能か。ウラ面の文字の有無は不明。								【赤外線観察】
	6	8.9	7.1	3.2	111.7	有	梵字?	4	①0.18cm, ②0.15cm, ③0.15cm, ④0.15cm	サンゴ
		台形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面に複数の0.15cm以上の孔径を有するものが4個、ウラ面には3個あり、その内の3個が貫通している。全て自然・人工のいずれか判然としない。オモテ面には長さ約1.0cm、幅約0.1cmを測る溝状の剥離痕あり。ウラ面には長さ約2.6cm、幅約0.4cmを測る断面が半円状の溝があり。また、長さ約2.1cm、幅約0.9cmを測る剥離痕があり。①・②・③は⑤・⑥・⑦との貫通孔だが、⑤・⑥・⑦は孔径が0.1cmのため、計測対象から除外した。ウラ面には透吸状の付着物あり。オモテ面には文字らしきものが混在されるが、判読は困難。ウラ面には梵字らしき文字が混在されるが、判読は困難。							【内眼観察】	
		オモテ面には不鮮明な梵字様墨書きが3行あるが、判読は困難。ウラ面には不鮮明ながら文字様のもののが2行あるが判読は困難。								【赤外線観察】
	7	9.0	6.3	3.6	143.1	有	梵字?	0		サンゴ
		梢円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。ウラ面・側面に直径1mm以下の微細な孔が複数個あるが、自然・人工のいずれかに起因するものか判然としない。ウラ面には長さ約1.6cm、幅約0.1cmを測る溝状の痕跡あり。オモテ面に墨書き様のものが混在されるが、判読は困難。ウラ面の文字の有無は不明。オモテ・ウラ面ともに剥離が進行中。								【内眼観察】
		オモテ面に不鮮明な墨書き文字が3行あり。ウラ面にも不鮮明な墨書き文字があるが、ともに判読は困難。								【赤外線観察】
	8	7.7	6.7	3.8	136.2	有	漢字?	0		サンゴ
		梢円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ・側面部に微細な孔が2箇所確認されるが、自然・人工のいずれか判然としない。ウラ面には透吸状の付着物あり。オモテ面に不鮮明ながら墨書き様のものあり。判読は困難。ウラ面から側面部にかけて墨書き様のものあり。判読は困難。ウラ面に剥離が見られる。ウラ面の文字の有無は不明。								【内眼観察】
		オモテ面に不鮮明な漢字様墨書きが3行あり。ウラ面にも墨書きあり。ともに判読は困難。ウラ面は未観察。								【赤外線観察】
	9	9.7	6.0	3.8	134.9	有	梵字?	0		サンゴ
		梢円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ・ウラ・側面部に微細な孔が複数あるが、サンゴ特有の空洞に起因するものか判然としない。オモテ・ウラ・側面部に不鮮明な墨書き様のものあり。判読は困難。側面部の一角に剥離がある。								【内眼観察】
		オモテ面に不鮮明な梵字様墨書きが2行あり。判読は困難。ウラ面は未観察。								【赤外線観察】
写真 3	10	7.8	4.7	3.8	71.1	有	漢字?	2	①0.34cm, ②0.36cm, ③0.32cm, ④0.40cm	サンゴ
		梢円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面に2個、ウラ面に2個の孔あり。①と②が貫通孔。③と④が貫通孔である。各孔の内壁面にはセンコウガイ起因の炭酸カルシウム膜が形成されていないことから、人工的なものと推測される。オモテ・ウラ面にあまり剥離は見られない。側面部に今後欠損の恐れのある箇所あり。オモテ面に墨書き様のものあり。								【内眼観察】
		オモテ面に漢字様墨書きが1行あり。ウラ面は未観察。								【赤外線観察】

第2表 碳石經観察一覧表

写真番号	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	文 字		孔数	孔径(cm)	石質
						有無	種類			
写真3	11	8.2	6.4	2.7	105.2	有	梵字?	1	①0.25	サンゴ
台形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①は内壁面にセンコウガイ起因の炭酸カルシウム膜が形成されており、人工的なものではなく、自然のものと思われる。ウラ面には2つの擦過痕あり。一つめは長さ約2.5cm、幅約0.1cmを測り、浅い。二つ目は長さ約1.9cm、幅約0.3cmで比較的深めである。オモテ面には漆喰状の付着物あり。オモテ面には墨書きがあるが、判読は困難。ウラ面から側面部にかけて剥離あり。 【内眼観察】										
オモテ面に不鮮明な梵字様の墨書きが2行あるが、判読は困難。ウラ面にも不鮮明な墨書きがあるが、判読困難。【赤外線観察】										
12	10.1	6.3	2.8	118.3	有	梵字?	4	①0.22cm、②0.32cm、③0.17cm、④0.19cm	サンゴ	
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面に微細な孔が複数あるが、0.15cm以下は計測対象から除外。オモテ面の孔①・②・③・④はともに内壁面にセンコウガイ起因の炭酸カルシウム膜が形成されていないことから、人工的な可能性があるが、ウラ面に直径0.15cm以上の孔は無い。側面部に長さ約1.85cmの擦過痕状の溝があり。自然か人工か判断しない。①・②・③は貫通孔ではないが、④は貫通孔である。ウラ面から側面部にかけて剥離あり。オモテ面に不鮮明な梵字様の墨書きあり。ウラ面の文字の有無は不明。 【内眼観察】										
オモテ面に2行の梵字様文字あり。一部判読可能。ウラ面の文字の有無は不明。 【赤外線観察】										
13	12.8	6.5	3.9	241.4	有	梵字?	5	①0.25cm、②0.36cm、③0.47cm、④0.27cm、⑤0.47cm、⑥0.39cm	サンゴ	
長楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①は深さが非常に浅い。孔②はウラ面まで貫通している。他に貫通していると推測される孔が2箇所あるが、微細なため計測の対象から除外した。ウラ面の孔③は孔②と連結。孔④は貫通せず。孔⑤・⑥は貫通。側面部にある孔⑦は貫通せず。①～⑦全ての孔は内壁面にセンコウガイ起因の炭酸カルシウム膜がないことから、人工的なものか。オモテ・ウラ面のとも墨書き様のものがあるが、判読は困難。 【内眼観察】										
オモテ・ウラ面ともそれぞれ梵字様の文字が2行ずつあるが判読は困難。 【赤外線観察】										
14	10.4	6.3	1.8	87.7	有	梵字?	1	①0.48cm、②0.44cm	サンゴ	
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①とウラ面の孔②は連結。内壁面に炭酸カルシウム膜がないことから、人工的なものか。ウラ面に漆喰状の付着物あり。オモテ面に梵字様の文字あり。判読困難。ウラ面に墨書き様のものあり。判読困難。オモテ・ウラ面とも剥離は殆ど見られない。 【内眼観察】										
オモテ・ウラ面ともそれぞれ梵字様の文字が2行ずつあります。オモテ面は一部判読可能。ウラ面は判読困難。 【赤外線観察】										
15	7.2	5.3	2.5	59.7	有	漢字?	1	①0.48cm	サンゴ	
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。孔①は側面部にあり、貫通孔ではない。側面部に長さ約1.4cmの擦過痕状の溝あり。ウラ面に剥離あり。オモテ・ウラ面とも文字の有無は不明。 【内眼観察】										
オモテ面に漢字様の墨書きがあるが、判読は困難。ウラ面にも墨書き様のものがあるが、判読は困難。 【赤外線観察】										
16	7.2	5.4	3.4	97.2	有	漢字?	0		サンゴ	
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ・ウラ面に墨書き様のものあり。判読は困難。ウラ面から側面にかけて剥離あり。 【内眼観察】										
オモテ面に漢字様の墨書きがあり、一部判読可能。ウラ面に墨書き様のものあり。 【赤外線観察】										
17	6.7	4.5	3.2	69.2	有	梵字?	0		サンゴ	
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①とウラ面の孔②は連結。内壁面に炭酸カルシウム膜がないことから、人工的なものか。孔①・②は貫通孔ではない。側面部に長さ約1.4cmの擦過痕状の溝あり。オモテ・ウラ面とも剥離は殆ど見られない。 【内眼観察】										
オモテ・ウラ・側面部に梵字様のものあり。ともに判読は困難。 【赤外線観察】										
18	6.6	5.4	3.5	92.9	有	梵字?	2	①0.30cm、②0.22cm	サンゴ	
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。孔①・②とも内壁面に炭酸カルシウム膜がないことから、人工的なものか。孔①・②は貫通孔である。オモテ・側面部に梵字様墨書きあり。一部判読可能。ウラ面の文字の有無は不明。オモテ・ウラ面とも剥離は殆ど見られない。 【内眼観察】										
オモテ・側面部に梵字様の文字あり。一部判読可能。ウラ面に墨書き様のものあり。判読は困難。 【赤外線観察】										
写真4	19	9.1	5.8	2.9	135.1	有	不明	1	①0.54cm、②0.24cm	サンゴ
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。孔①は側面部に墨書き様のものがあるが、その一部は漆喰状の付着物で覆われている。判読は困難。ウラ面の文字の有無は不明。ウラ面から側面部にかけて剥離が見られる。 【内眼観察】										
オモテ面に墨書きあり。判読は困難。ウラ面の文字の有無は不明。 【赤外線観察】										
20	10.1	4.5	2.9	103.3	有	不明	0		サンゴ	
二等辺三角形状の扁平なサンゴ礁を利用している。0.1cm以下の微細な孔が複数あるが、計測対象から除外した。ウラ面に擦過痕状の溝あり。溝①は長さ約1.3cm、溝②は長さ約2.1cmを測る。オモテ面に墨書き様のものあり。判読は困難。ウラ面の文字の有無は不明。ウラ面に漆喰状の付着物あり。ウラ面から側面部に剥離あり。 【内眼観察】										
オモテ・ウラ面とも文字の有無は不明。側面部に墨書き様のものあり。 【赤外線観察】										
21	8.7	6.8	2.9	136.1	有	梵字?	2	①0.48cm、②0.48cm、③0.37cm、④0.36cm	サンゴ	
楕円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①はウラ面の③に貫通、オモテ面の孔②はウラ面の④に貫通している。それぞの孔の内壁面には炭酸カルシウム膜が見られないとから、人工的なものか。オモテ面に墨書き様のものあり。ウラ面の文字の有無は不明。オモテ・ウラ面とも剥離は殆ど見られない。 【内眼観察】										
オモテ面に梵字様文字が2行あり。ウラ面の文字の有無は不明。 【赤外線観察】										

第3表 碳石経観察一覧表

写真番号	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	文 字		孔数	孔径(cm)	石 質										
						有無	種類													
写真4	22	8.3	5.0	2.7	86.4	有	漢字?	4	①0.20cm, ②0.16cm, ③0.26cm, ④0.29cm, ⑤0.20cm	サンゴ										
精円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①は貫通孔ではない。オモテ面の孔②はウラ面の孔⑤と連結している。孔③は貫通孔ではない。ウラ面の孔④は長さ約5.6cm、幅約0.2cmの「く」の字を呈する溝状痕跡の端部にある。貫通孔ではない。孔①～⑤とも内壁面に炭酸カルシウム膜がないことから、人工的なものか。オモテ面には不鮮明な墨書きのものがある。判読は困難。ウラ面の文字の有無は不明。ウラ面から側面部にかけて剥離あり。																				
オモテ面に漢字様文字あり。ウラ面には不鮮明な墨書きのものあり。																				
【赤外線観察】																				
23	10.5	6.1	4.2	150.8	有	不明	0	①0.20cm, ②0.16cm, ③0.26cm, ④0.29cm, ⑤0.20cm	サンゴ											
精円形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ・ウラ面とも文字の有無は不明。ウラ面に剥離が見られる。また漆喰状の付着物が見られる。文字の有無は不明。																				
【肉眼観察】																				
24	9.6	8.0	2.4	157.2	有	梵字	1	①0.48cm	サンゴ											
台形状の扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面の孔①は浅く、彫り鉢状を呈する。②は貫通孔ではない。オモテ面には漆喰状の付着物あり。ウラ面から側面部にかけて剥離が見られる。オモテ・ウラ面には不鮮明な墨書きのものがあり。判読は困難。																				
オモテ面には梵字様の文字あり。一部判読可能。ウラ面に墨書きのものが見られるが、判読は困難。																				
【赤外線観察】																				
25	12.7	7.7	5.6	408.1	有	不明	0	①0.20cm, ②0.16cm, ③0.26cm, ④0.29cm, ⑤0.20cm	サンゴ											
精円形状の比較的扁平なサンゴ礁を利用している。オモテ面には墨書きのものが見られるが判読は困難。ウラ面の文字の有無は不明。オモテ面からウラ面にかけて大きな範囲で剥離が進行中。特にオモテ面は墨書きのある部分に剥離が跟着となっている。																				
【肉眼観察】																				
オモテ・ウラ面には文字種不明の墨書きあり。判読は困難。																				
【赤外線観察】																				



1



2



3



4



5



6



7



8



9

写真2 碓石経（1～9）



10



11



12



13



14



15



16



17



18

写真3 碓石経（10～18）



19



20



21



22



23

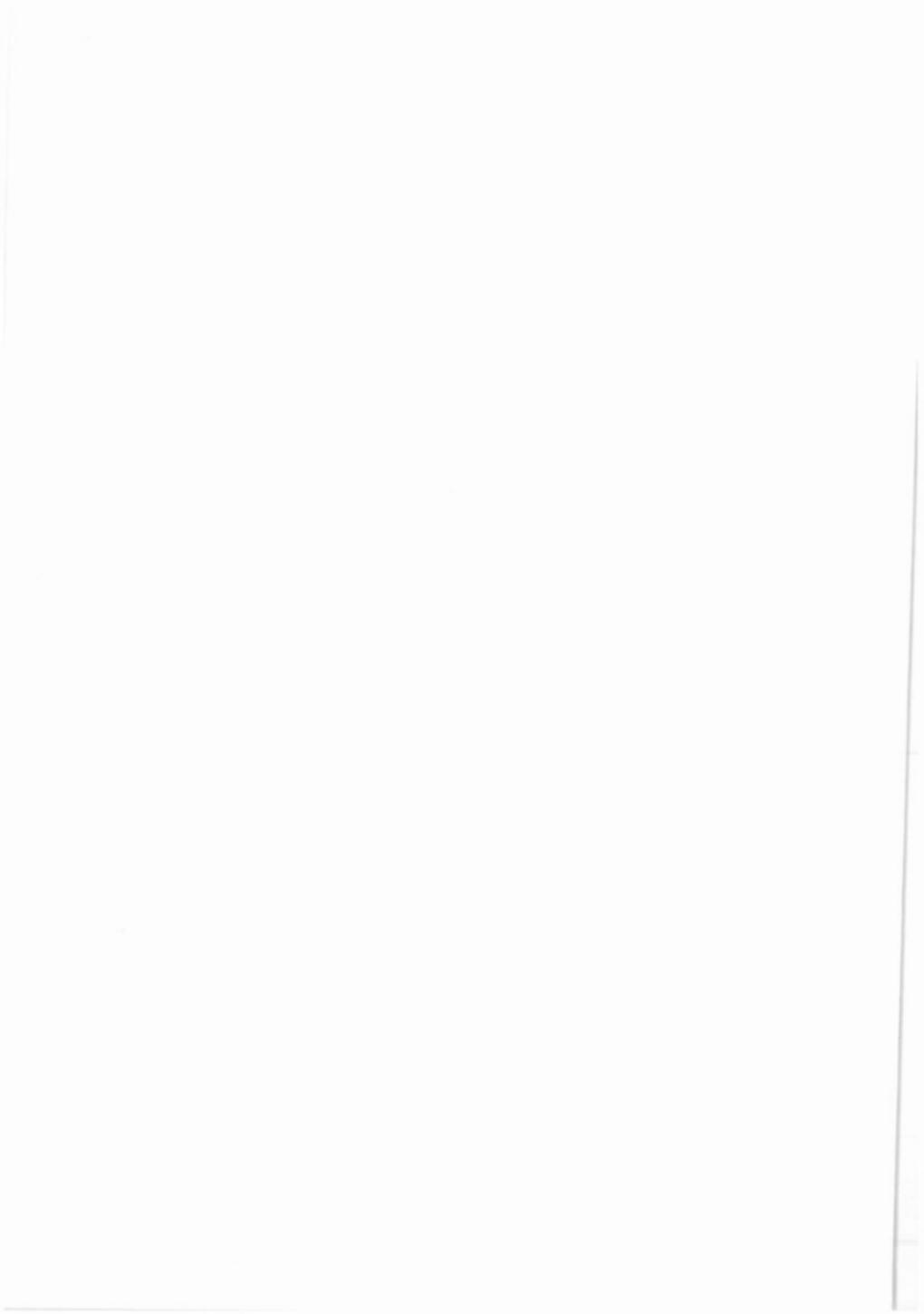


24



25

写真4 碓石経 (19~25)



紀要

沖縄埋文研究 2

発行年 2004年(平成16)3月30日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

印 刷 合同印刷
〒903-0807 沖縄県那覇市首里久場川町1丁目117番地の5
TEL 098-887-1066



BULLETIN
OF
THE ARCHAEOLOGICAL STUDY OF OKINAWA
No.2

Original Articles

- New Classification and Chronology of Shimotabaru Type Pottery Kishimoto,Yoshihiko (1)
Springs and Streams : Criteria for Selecting Habitation Sites in the Prehistoric Okinawa Island Asato,Shijun (13)
Preliminary Survey of Excavated Dugong Bones Morimoto,Isoo (23)
Arms and Armor Excavated in shuri *Gusuku* Yamamoto,Masaaki • Uezato,Takashi (43)

Reports

- Additional Study on the Production Area of Japan Hard-tempered Pottery Seto,Tetsuya (65)
On Ch'ing Dynasty Coins Chinen,Takahiro (73)
Preliminary Investigation into Discovering Sunken Ships in the Southwest Islands : Underwater Artifacts and
marine Transportation Miyagi,Hirotki/Katagiri,Chiaki/Aarakaki/Tsutomo/Higa,Naoki (81)
The Artifacts Related to Torii Ryuzo Stored in Tokyo University Museum : A Study on the Unidentified Ceramics Katagiri,Chiaki/Aarakaki/Tsutomo (109)
A Narrow-Blade Stone Adze Collected on Hateruma Island in Yaeyama Asato,Shijun/Honda,Syosei (115)
Book Review on Ryukyu Archaeology (2) Asato,Shijun (121)
The Pebble with Ink-drawings Found in the Hikawabara Family Grave in Kanegusuku,Itoman City Nagamine,Hitoshi (129)

2004

OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER